

公開資料

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
研究開発実施終了報告書

「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」

研究開発領域

「都市部コミュニティを含めた自助による防災力と
復興力を高めるためのLODE手法の開発」

研究開発期間 平成26年10月～平成29年9月

倉原宗孝

(岩手県立大学総合政策学部、教授)

目次

1. プロジェクトの達成目標.....	2
2. 研究開発の実施内容.....	2
2-1. 研究開発実施体制の構成図.....	3
2-2. 実施項目・3年間の研究開発の流れ.....	4
2-3. 実施内容.....	5
3. 研究開発結果・成果.....	98
3-1. プロジェクト全体としての成果.....	98
3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細.....	113
3-3. 今後の成果の活用・展開に向けた状況.....	144
4. 研究開発の実施体制.....	145
4-1. 研究開発実施者.....	145
4-2. 研究開発の協力者・関与者.....	146
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	147
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	147
5-2. 論文発表.....	153
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	153
5-4. 新聞報道・投稿、受賞など.....	153
5-5. 特許出願.....	154
6. その他（任意）.....	154

1. プロジェクトの達成目標

我が国の地域コミュニティは、とりわけ都市部のコミュニティは、バラバラになった。しかし、大規模災害はその脆弱な地域コミュニティに手加減なしに容赦なく襲いかかる。そして地域に暮らす人々は、機能しなくなったライフラインの中で「地域」という空間・環境にただ放り出される。

その時、頼るべきは、自分で自分の身を守るという自助の力と決意、そして周りの住民たちと助け合おうという互助のための人の縁しかない。

LODE（ロード）は、大規模災害発生以前から、地域住民たちが自らの意思と行動によって、住民同士の顔と顔を合わせて地域に暮らす多様な住民層の存在（地域には自分一人では避難できない、助けを必要とする人も様々に存在する）を認識し、お互いに助かろう・助け合おうという意思と思いやりを繋いでいくための、広義のまちづくり行為そのものである。

LODEの目的は、「地域住民自らによる、多様性の理解と、その中での互助の喚起」である。

本プロジェクトは、自助による防災力・復興力を高めるために、「要援護者の災害時救援と平時の見守り」という防災・福祉両面からの視点を通して、現場住民や福祉関係者等の防災意識醸成と連携体制づくりを促進するためのツールとして利用する、住民主体・参加型手法『LODE』の普及モデルを開発することを目的とする。

具体的には、複数のモデルコミュニティにおいて住民組織や地区社協等の普及の担い手となる関連団体と協働しながら、手法の体系化を実施し、実効性が高くかつ広く普及力のある標準的な手法の開発を目指す。

その達成すべき成果目標は次のとおりである。

- (1) コミュニティタイプ別標準的実施手法の開発
- (2) LODE実施・普及人材の育成方法とその検証
- (3) 各タイプ別実施方法を含めたLODE手法の体系化
- (4) 自助・互助力の向上を測るための、或いは自助・互助力の向上に有効と思われる指標等の開発
- (5) 個人情報収集と管理方法に関する研究

本プロジェクトは、以下の観点において従来の類似手法とは全く異なる新しい手法・体系としてとりまとめることを目指す。

- 災害時のハザード等ハード面中心の検討ではなく、コミュニティにおける脆弱性ともいうべき要援護者の発見・認識・支援対応に焦点を当てた手法。
- 都市規模やコミュニティの形態に関わらず取り組むことのできる汎用性の高い手法であり、かつコミュニティ別のニーズにもあわせた細やかな対応が可能な手法。
- 住民組織、社協等福祉団体等が実施者、協働者となり、関連機関等の協力を得ることで、高度な専門家の手を借りずとも自力で推進・普及していくことのできる手法。

2. 研究開発の実施内容

2-1. 研究開発実施体制の構成図

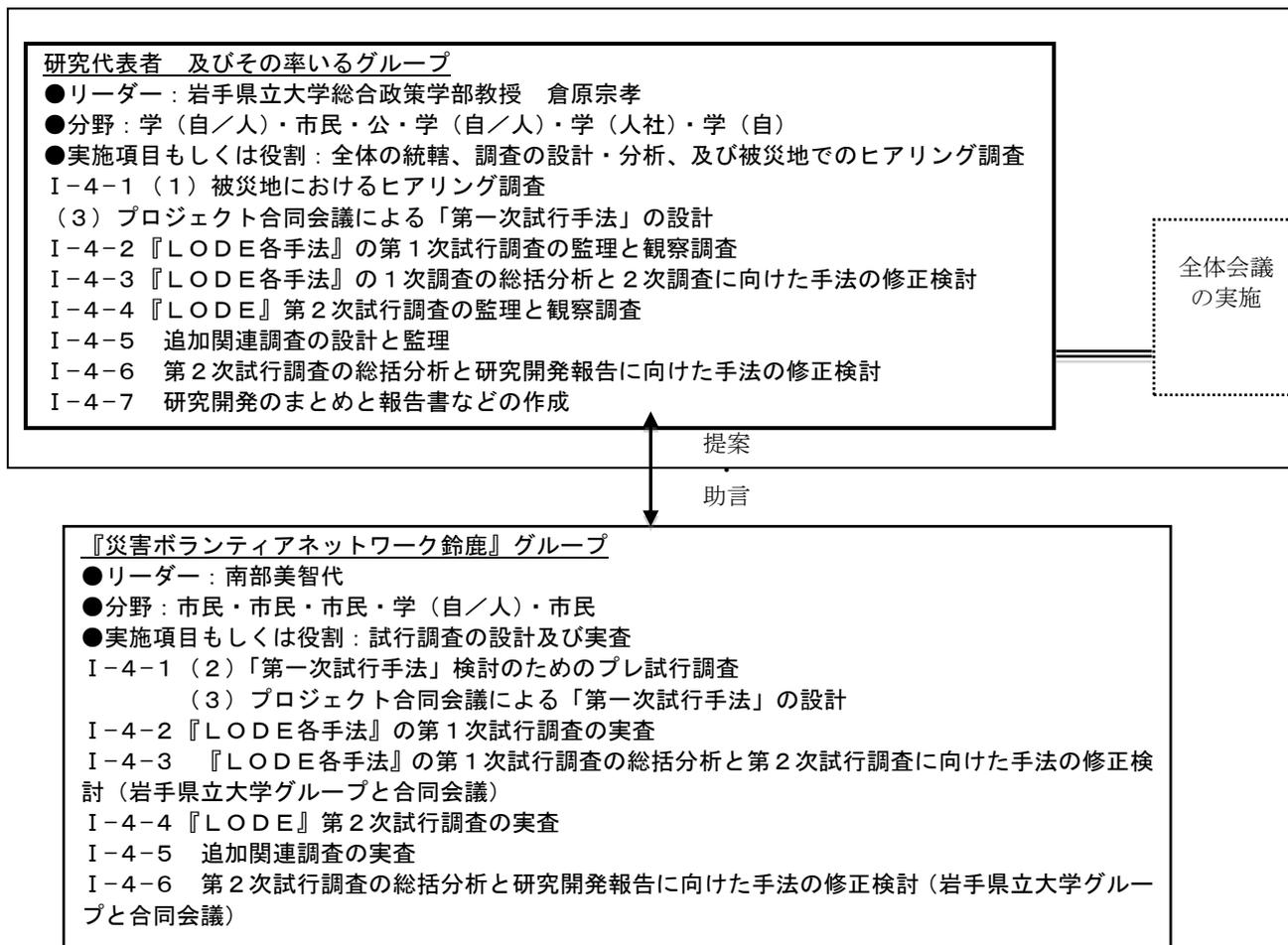


図1：研究開発実施体制の構成図

表1：研究開発に協力した主な関与者（協力者）

氏名	フリガナ	所属	役職	協力内容
窪田 新一	クボタシンイチ	大阪市福祉・まちづくり市民団体	代表	大阪市内でのLODE試行調査実施を推進
橋倉 加世子	ハシクラカヨコ	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
滑川 勝	ナメカワマサル	伊丹市Eマンション自治会	会長	伊丹市内のEマンション自治会でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
中川 義文	ナカガワヨシフミ	鈴鹿市療育センター	所長	障害者の避難に関するアドバイスや協力

2-2. 実施項目・3年間の研究開発の流れ



図2：3年間の研究開発の流れ

2-3. 実施内容

2-3-1. 平成26年度：プレ試行調査

(1) 被災地におけるヒアリング調査

被災地ヒアリング調査の最大の目的は、LODEの研究開発調査において、抜け落ちてはならない視点の有無をチェックすることにある。

平成26年度は、次の表に示すように、宮城県女川町、同気仙沼市、岩手県大槌町の3箇所の仮設住宅団地を訪問し、仮設住宅住民の方の声をうかがう機会を得たが、当プロジェクトチーム側のLODEの研究開発状況はまだ緒に就いたばかりで、深く切り込んだヒアリング調査の実施には至らなかった。

しかしながら、複数の方から「震災から3年以上経過して、少しずつ人に話したいと思うようになってきた」とか、「震災直後から復興まちづくり計画に対して様々な意見を出してきたが、3年以上経つと自分の意見が時間の経過とともに変わってきていることに気がつく。短期間で住民意向を集約するまちづくり計画は本当に正しかったのだろうか」などの本音の一部を拝聴することはできた。

住民の方々の本音は、南部が震災後数何度も訪問を重ねてきたことで信頼を得ていたことによって引き出せたものであると思われる。

研究開発に際して留意すべきは、行政組織や営利組織ではなく住民を相手に取組む当プロジェクトの場合、プロジェクト側の都合・スケジュールを押しつけるやり方だけでは、本当に必要な住民の声を引き出すことができない恐れがあるという点である。

したがって当プロジェクトのLODE研究開発に資するヒアリング調査に関しても、26年度だけではなく、それ以降も時間をかけ機会を重ねて行うべきであると判断した。

表2：26年度被災地ヒアリング調査先一覧

訪問日	訪問先	内容
2014.12.21	宮城県女川町Q地区仮設住宅	仮設住宅の集会室でお餅つきをして、住民の方々のお話をうかがう会を開催した。
2014.12.21	宮城県気仙沼市R地区仮設住宅	仮設住宅の集会室でお茶会をして住民の方々のお話をうかがう会を開催した。
2014.12.21 ～ 2014.12.22	岩手県大槌町S地区仮設住宅	仮設住宅の各戸を訪問し、お餅を配布するとともに、集会室でのお茶会への案内をして、その後集会室でお話をうかがうお茶会を開催した。

(2) 「第一次試行手法」検討のためのプレ試行調査

26年度の半年間では、27年度に実施する「第一次試行調査」の実施方法を検討するために、その事前情報を得るためのプレ試行調査を行った。

プレ試行調査は、8箇所の現場において10月～3月まで計8回実施したが、以下にその狙いや実施概要、経緯や準備の状況などを整理する。

① プレ試行調査対象地区のタイプや狙い

表2では対象地区のタイプや狙いを整理した。

主として要援護者の中で「子ども」をクローズアップした対象地区が4カ所、高齢者が中心の地区が4カ所であった。

また、マンション単独での地区は1カ所で、その他は戸建住宅中心地区か戸建てとマンションとの混在地区であった。

表3：平成26年度実施LODEワークショッププレ試行調査実施状況（その1）

ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	実施日	所要時間 分	参加者数 人	対象エリア：◆				LODEのタイプや狙い：●							キーパーソンや参画者：※							自力度：■					
						マンション自治会	その他の単位自治会	連合自治会	学校区または学校	市区町村域あるいは府県域	基本LODE	子どもLODE	親子LODE	障害者や障害者家族LODE・障害者家族調査	防災訓練・避難訓練	導入LODE	つなぎLODE	ファシリテータ・コディネーター育成	啓発・広報イベント	自治会長または自治防災組織の長	子ども会役員、PTA役員	学校、教員	民生委員	社協職員	行政関係者	議会関係者	企業や産業団体等	その他NPO理事や防災ボランティア	自主的に開催を決定し、広報をした
26-1	兵庫県伊丹市	A地区 連合自治会	2014/10/7	165	45		◆			●					●	●	●		※			※					■		
26-2	三重県鈴鹿市	B小学校 4年生クラス	2014/10/23	90	46			◆			●										※								
26-3	愛知県知多市	学校教員 研修会	2014/11/20	90	15				◆						●						※						■		
26-4	三重県伊勢市	C地区 連合町内会	2015/1/12	100	35		◆			●					●	●			※								■		
26-5	大阪府箕面市	D地区 まちづくりNPO	2015/2/7	180	子ども15 大人5		◆				●	●				●			※						※		■		
26-6	兵庫県伊丹市	Eマンション 自治会	2015/2/22	150	25	◆				●						●			※		※	※					■		
26-7	京都府精華町	社協	2015/3/14	120	50				◆						●							※	※				■		
26-8	兵庫県伊丹市	F地区 子ども団体	2015/3/28	120	子ども45 大人45			◆			●	●							※		※	※					■		

表4：平成26年度実施LODEワークショッププレ試行調査実施状況（その2）

	ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	WS等試行調査における実施メニュー：★																								
				1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	13)	14)	15)	16)	17)	18)	19)	20)	21)	22)	23)	24)	25)
				地域図での図面WS	立面戸割図のテーブル上でのWS	仮想立面戸割図のテーブル上でのWS	立面戸割図の壁掛け式でのWS	五年後LODE図作業	発災時避難行動図上シミュレーション	住戸の表札名を記入してもらう	要援護者数のカウント・確認作業	避難支援マツチングシートの検討・記入	育成支援ツールとしてのチャート図利用WS	導入質問：今日は何人の方と会話したか	導入：班分け：●の順に並んでみる	導入映像・特に子ども向けの画像学習等	プレゼン：LODEとは	プレゼン：要援護者について説明	プレゼン：要援護者の自助支援グッズ	プレゼン：防災紙芝居	ポスイット等に避難所マークを描く	ポスイット等に、自助とは？を記述	ポスイット等に何を持って逃げるかを記述	ポスイット等に避難所で困ることを記述	ポスイット等に避難所で助けを求めの人を記述	ポスイット等に避難所で生かせる得技を記述	ポスイット等に平時から決めておくことを記述	
26-1	兵庫県伊丹市	A地区 連合自治会	★	★		★										★	★	★		★	★							
26-2	三重県鈴鹿市	B小学校 4年生クラス																★				★						
26-3	愛知県知多市	学校教員 研修会	★											★		★		★		★	★							
26-4	三重県伊勢市	C地区 連合町内会	★				★									★		★				★						
26-5	大阪府箕面市	D地区 まちづくりNPO	★				★									★			★	★		★						
26-6	兵庫県伊丹市	Eマンション 自治会		★			★	★								★	★	★				★						
26-7	京都府精華町	社協	★				★							★		★	★	★		★	★							
26-8	兵庫県伊丹市	F地区 子ども団体	★											★				★		★								

- ・地区の地図ワークショップ（自宅、避難所、公衆電話、要援護者）
- ・「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・仮想マンションの立面図ワークショップ
設定：仮想の自宅、各要援護者、頼れそうな人や役員、非協力者等
マンション館内避難放送シミュレーション

【考察（評価・反省点他）】

- ・地区自治会関係役員・世話役メンバー90名のうち半数が出席。
- ・地元社協（司会を担当した兼田さん、他）との信頼関係によってスムーズな展開となった。
- ・ワークショップ終了後、数名の役員と社協職員、そして当プロジェクトチームスタッフで反省会を兼ねたミーティングを行った。
- ・役員のうち2名は社協の仕事を経験しているからか、取り組みの意義についての理解が深かった。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・平成25年度より活動連携している伊丹市社協地域福祉担当課兼田氏より、担当するA地区で、地域福祉活動の世話役住民層を対象としたLODEワークショップの依頼があった。
- ・開催案内や会場準備は社協側が社協側が担当した。
- ・市行政からの協力は特段無い。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ・図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・筆記用具他
- ・高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ホワイトボード



写真1・2・3：プレ試行調査現場写真a)（伊丹市A地区連合自治会）

b) 鈴鹿市B小学校4年生【ワークショップ・調査整理番号26-2】

【所要時間】：90分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・鈴鹿市職員3名（進行補助）、大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・班別に整列させる。
- ・子ども達に南部の思い、姿勢の話をする。
- ・ゲストの紹介（市役所の3名）
- ・子ども達に質問「あなたにとって一番大事なものは？」（各自付箋に記入）
- ・ストローハウスづくりワークショップ（準備から子ども達にやらせる）

- ・ 各ストローハウス作品の発表と評価
- ・ 高齢者三種の神器の話と、「高齢者三種の神器箱」のプレゼント
- ・ 子ども達に「家に帰ったら家族に今日の取り組みのことを報告すること」と、宿題を伝える。

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 大人が真剣なことを子どもに伝えることは大事。
- ・ 市役所の人や他都市からのスタッフが来ていることを子ども達に伝えることで、子ども達も場の大切さを感じたようである。
- ・ 子ども達が大事だとしたのは「家族」であった。食料や水やお金よりも「家族が大事」と答えた子どもが多かった。
- ・ ストローハウスづくりワークショップは、子どもにとって楽しかったようだが、図上ワークショップと比べると地域防災学習としての意味は希薄であるかもしれない。
- ・ 学校という「教師によって押さえられる場」ゆえか、子ども達は元気で素直だった。
- ・ 子ども達からは事後に感想・感謝文が寄せられたが、着目すべきは、46名中29名（63%）の子どもが「帰宅してから家族に学んだことを教えた」と書いていたことだ。子どもを対象としたLODEの効果の一つは、ここにあるのかもしれない。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 南部は三重県内で非常に著名な防災ボランティアである。小学校側から4年生（2学級）対象の特別講座の依頼が入った。
- ・ LODEが主な対象とするL（子ども）対象の研究の場になると考え、補助者、記録者を従えて臨むこととした。
- ・ 南部の地元鈴鹿市では市行政からの協力度も高く、今回のように学校のようなステージで調査活動を行うことも可能となった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★ストローハウスワークショップ用材料

- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
- ・ 「高齢者三種の神器箱」完成品×人数分

★子ども達から南部への手紙用紙（事後、学校側で用意）



写真4・5：プレ試行調査現場写真 b)（鈴鹿市B小学校）

c) 知多市学校教員研修会【ワークショップ・調査整理番号 26-3】

【所要時間】：90分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・大西（進行補助、観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 班分け（手話を使って誕生順に並ぶ）
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 参加者への質問「避難所のマークは？」各自付箋に記入）

- ・ 参加者への質問「避難所であなただが貢献できる得意技は？」
- ・ 図上ワークショップ（知多の方々のため、鈴鹿の地図を使用して各自が鈴鹿市民となって進めた）。
- ・ 津波が来る想定で、図上避難のシミュレーションを行った。

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 子どもを対象としたLODEの実施に際して、「学校」が使えるのかどうかの手応えを得るための場として位置付けたが、学校教員の防災教育に関する意識の低さを目の当たりにすることとなった。子どもを対象としたLODEの実施において、学校教員はあまり役に立たないかもしれない。
- ・ 質問事項をポストイットに記入する際に、周囲の人の回答を覗き見て（カンニング）同じような回答を記入しようとする教員が少なかった。平面図ワークショップにおいても、自分自身の考え方を自信を持って発表するような参加者は少なかった。おそらく「他人と横並びでいたい」、「間違っではいけない」という意識が強いのではないかと想像される。
- ・ 宮城県大川小学校の悲劇の原因のひとつがここにあるのではないかと感じた。

【WS 実施に至る経緯及びWS 実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 知多市の学校教員（過去に南部の防災講座に参加した経験あり）から、三重県への教員研修旅行の行程の中で防災ワークショップを体験させて欲しいと依頼が入った。
- ・ LODEが主な対象とするL（子ども）対象の研究の場になると考え、補助者、記録者を従えて臨むこととした。
- ・ 会場は先方で準備することとなった。

【WS のための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★地域図（A全版）×テーブルの枚数

- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他



写真6・7・8：プレ試行調査現場写真 c)（知多市学校教員）

d) 伊勢市C地区連合町内会【ワークショップ・調査整理番号 26-4】

【所要時間】：100分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・大西（進行補助）、倉原（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 南部から挨拶
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 「高齢者三種の神器（入歯、眼鏡、補聴器）箱」の説明。赤ちゃんを泣き止ます保冷剤入れやI DDM（I型糖尿病）処方箋入れにも役立つことを説明。

- かつての伊勢湾台風、13号台風の話
- 図上ワークショップ（自宅、避難所）
- 「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- LODEの説明
- 再び図上ワークショップ（公衆電話、一人暮らしお年寄り、寝たきりお年寄り、赤ちゃん、障がい者）
- 参加者からの「空き家が多い」の声に対応して空き家の図示も指示
- 地震・津波情報の仮想に基づく避難ルート図示
- 過去の大地震・大津波の記録の話（伊勢に関連する話題として）
- 高齢者三種の神器箱のプレゼント

【考察（評価・反省点他）】

- コーディネーターが当該地区のことを褒める話術は大切。
- 図上ワークショップの最中に、参加者から「空き家が多い。夜電気が付いていなくて分かる」と、この地区課題の指摘があった。今回の空き家記入は有効だと思われる。現代社会を反映しており地区状況がよく分かる。当該地区では空き家が多くて白シールが足りなくなる場面もあった。
- 参加者はほとんど高齢者であったが、外宮至近の位置にある非常に歴史のある地区にふさわしく、住民たちは過去の歴史的災害や地区の課題にも明るく、図上ワークショップに取り組む際も浮ついた雰囲気は皆無であった。
- ワークショップ終了後は、連合町内会長、防災担当役員たちと反省会を行ったが、南部を筆頭とする当プロジェクトチームへの信頼は厚くなったようで、次年度再度実施の要請があった。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- 南部は三重県内で非常に著名な防災ボランティアである。伊勢市中心部の連合町内会から防災講座の依頼が入った。
- 当ワークショップ実施にあたって伊勢市や三重県行政からの協力などは無かった。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★地域図（A全版）×テーブルの枚数

- マイクとホワイトボード
- 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- カラーマジックペンセット×テーブル分
- 筆記用具他
- 高齢者三種の神器箱完成品×人数分



写真9・10・11：プレ試行調査現場写真 d)（伊勢市C地区連合町内会）

e) 箕面市D地区まちづくりNPO【ワークショップ・調査整理番号 26-5】

【所要時間】：180分

【当日スタッフ】

南部（進行）、橘・森本・藤本・大西（進行補助）、倉原・大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 高齢者三種の神器の説明。1型糖尿病の子どもの話。
- ・ 「あなたの大事なものを入れる箱」の工作ワークショップ
- ・ 「ほのぼの灯」の工作ワークショップ
- ・ 「ほのぼの灯」の消火の仕方の質問
- ・ 「近所の高齢者に神器箱プレゼントして」の話。
- ・ 「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ 図上ワークショップ（自宅、避難所、おじいさん、おばあさん、公衆電話）
- ・ 参加者への質問「この地区の危険って？」→危険箇所の図示（水、塀）
- ・ 犬、猫の図示
- ・ 避難所での物資分配シミュレーション
- ・ 「鈴鹿子ども防災サミット」での細街路実地調査の話。
- ・ 実際の防火水槽や消火栓の場所を確認するために屋外に調査に出かける。
- ・ 再び図上作業で避難ルートを図示
- ・ 新聞スリッパづくり
- ・ 防災紙芝居実演
- ・ 感想と質疑応答

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 一人の女の子が、大切な宝物はこの箱（神器箱）には入らない。抱き人形からと。でも、この箱に入らないもっと大事な一番の宝ものがある、それは「かぞく」と彼女は書いていた。
- ・ 「大切な宝物」を一つ考える時間、経験は重要、有効だろう。また、子どもたちは大人では思いつかないものを記してくれる。
- ・ 「ほのぼの灯」の消火の仕方の質問は学校で学んだことを生かす質問として有効。
- ・ この地域は住民同士のコミュニケーションが豊かなようで、子ども達もお年寄りと一緒に作業に取り組んでいた。
- ・ 避難ルートを考えるとき、防災だけでなく防犯課題を付加することも有効だった（変な人が居そうなところは避けて逃げて等の指示を出した）。
- ・ 現地探索に出かけることは有効。
- ・ 子ども達からの感想の声からは非常に好評だったことがわかる。お世辞ではなく、真剣な声だった。
- ・ 普段から地域NPOや自治会の大人達とコミュニケーションをしている子供達ならではの意識の高さだろうと感じた。

【WS 実施に至る経緯及びWS 実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ b) のB小学校とc) の教員対象調査だけでは子どもを対象としたLODEの調査研究に不足であると判断し、子ども対象現場を探すこととした。
- ・ 研究メンバー藤本の関係先のNPO（箕面市）から、指定管理する施設があるD地区で子ども対象の防災講座を開催したいという要望が上がり、当該地区での実施を企画することとなった。
- ・ 今回のワークショップ調査では地元行政との関係は特段発生していない。

【WS のための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ★地域図（A全版）×テーブルの枚数
- ・ マイクとホワイトボード
- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）

- ・ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
- ・カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・筆記用具他
- ・高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・「ほのぼの灯」実験セット×人数

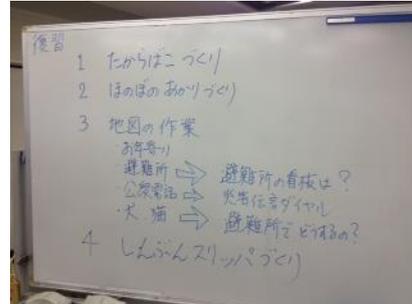


写真12・13：プレ試行調査現場写真 e)（箕面市D地区まちづくりNPO）

f) 伊丹市Eマンション自治会 【ワークショップ・調査整理番号 26-6】

【所要時間】：150分

【当日スタッフ】

南部・橘・社協：小林（進行）、森本・藤本・大西（進行補助）、倉原・延藤・大西（観察、記録）、延藤（まとめ）

【実施内容・手順】

- ・ 開始時間までの集合状況が芳しくなかったため、急遽「お餅とぜんざいの振る舞い」をワークショップの冒頭にもってきた。
- ・ 挨拶（自治会長）
- ・ 伊丹市Eマンションでの活動がここまで来るに至った来し方の説明（社協小林さんより）
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 高齢者三種の神器、赤ちゃんのための保冷剤の話
- ・ LODEの説明
- ・ 要援護者についての説明（パワポ）
- ・ A棟2班、B棟3班に別れての図上ワークショップ（先ずは世帯名の記入のない図で）
- ・ 世帯名を記入するよう指示したが、全住戸の半分も埋めることができなかつたため、次に世帯名の入った図に変更して図上ワークショップ（シール貼り）。
- ・ 5年後LODEのシール貼り（心配な人、頼れる人）
- ・ さらに班同士で図面を交換しての作業。
- ・ 障害の方の避難についての質問
- ・ 乳幼児アタッチメントを活用した防災頭巾づくりの説明と提案
- ・ アドバイザーよりコメント
- ・ 研究協力者延藤安弘氏によるワークショップのまとめの言葉と板書「ほっとかへんで」【考察（評価・反省点他）】
- ・ まず「食」から始めたことで、参加者がリラックスできる効果があったようだ。
- ・ 今回、社協の小林さんがスタッフの一人としてWSに至った経緯の説明役を担った効果は大きいと思われる。小林さん自身が育成された人材のモデルでもある。
- ・ 同じ棟（対象）なのに女性が多いグループは情報量が多い。男性グループは少ない。
- ・ 5年後LODEでのピンク凡例（危ない人）のシールの枚数から、「危ない＝亡くなる人」と受

け取ったグループもあるほど高齢化の危機感があるようだ。

- ・ 同じ棟でも班によって情報が異なる。
- ・ 各グループとも回覧板が回る範囲（自分たちの班）の情報には一定のものがあるが、それ以外は知らないとの声が多い。
- ・ 互いの情報の評価作業は有効だと思われる。
- ・ 低層階からの参加者が多く、高層階からの参加者が少ないようだ。
- ・ 参加者からは「こうした情報をどう残していくか、蓄積していくかが課題」として指摘された。

【WS 実施に至る経緯及びWS 実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 平成26年2月と3月にマンション用LODEを開催した伊丹市Eマンション（171戸）の自治会長滑川氏より橘のところに、1年経過後のLODE実施の依頼が入った。
- ・ 滑川氏、伊丹市社協小林氏と連絡を取りながら、当日のプログラムや企画の検討を行った。
- ・ 参加者がリラックスするようにと、「ぜんざいコーナー」を設けることとした。
- ・ 25年度の伊丹市H地区全体での取組みから始まってEマンションの取組みがあること、社協などが一体的となった活動であることを理解してもらうために、当日小林氏から参加者に説明してもらうこととした。
- ・ 伊丹市行政からの関与、協力などは特別無かった。

【WS のための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ★ ぜんざい・焼き餅の材料とコンロ、簡易食器など
- ★ この地区の取組み経過を説明するためのパワーポイント資料とプロジェクター（社協が準備）
- ★ 「要援護者」の説明のためのパワーポイント資料
- ★ マンション立面戸割図（A全版）×各棟別×表札有無タイプ別×テーブルの枚数
 - ・ マイクとホワイトボード
 - ・ 図上ワークショップの凡例表（各テーブル分）
 - ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
 - ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
 - ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
 - ・ 筆記用具他
 - ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
 - ・ 乳幼児アタッチメントを材料とした障害者向け防災頭巾の見本

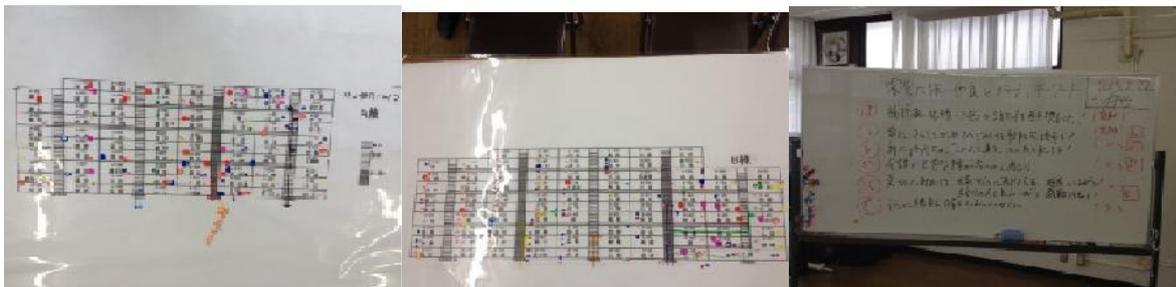


写真14・15・16・17：プレ試行調査現場写真 f)
（伊丹市Eマンション自治会）



g) 京都府精華町社会福祉協議会【ワークショップ・調査整理番号 26-7】

【所要時間】：120 分

【当日スタッフ】

南部（進行）、社協：H・南部雅幸・橘（進行補助）、橘（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 地区エリアが全町エリアとあまりにも広がったことから図面を利用したLODE実施は見送り、参加者たちのモチベーションを高めるための「プレLODE」を実施した。
- ・ 参加者への質問「自助とは？」（各自付箋に記入）
- ・ 「高齢者三種の神器（入歯、眼鏡、補聴器）箱」の説明と工作
- ・ 要援護者に関する説明（避難者千人のうち、要援護高齢者50人、要援護子ども50人、要援護障害者50人）
- ・ 避難所で活躍する「新聞スリッパ」工作

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 中高年の男性参加者たちが文句も言わず「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」づくりなどの作業に取り組んだ。
- ・ これは講師を務めた南部の言葉に共感、感動したことによると思われる。
- ・ 質疑応答で南部のモチベーションの原点を尋ねる質問が出たが、それに対する回答を聞いて、参加者たちの感動、満足は一層強くなったと思われる（アンケート調査でも確認できた）。
- ・ 人を動かすには「感動」が肝腎だということを改めて確認する機会となった。

【WS 実施に至る経緯及びWS 実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 関西地区の福祉関係行事で、南部の講演や伊丹市社協の発表（平成25年度に南部たちと取り組んだ防災と福祉ワークショップ等）を聴いた精華町社協地域福祉担当のH氏から防災講座の依頼が入った。
- ・ 12月に事前企画会議を実施し、3月に講座を開催することとなった。
- ・ 全町域を対象として募集したいとのことで、地域の地図を使った図上ワークショップではなく、防災に関するモチベーションを上げる目的の講座とすることとした。
- ・ 社協が事務局を務める「精華町災害ボランティアセンター」が主催者となったが、町行政からの特段の関与は無かった。

【WS のための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

- ・ マイクとホワイトボード
- ・ LODE の説明用簡易パンフレット（人数分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚/人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分
- ・ 筆記用具他
- ・ 高齢者三種の神器箱材料×人数分
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ 新聞スリッパ製作用古新聞（一人あたり新聞紙2枚または4枚）
- ・ 乳幼児アタッチメントを材料とした障害者向け防災頭巾の見本
- ・ 参加者感想・アンケート（社協で用意）



写真18・19・20・21・22：プレ試行調査現場写真 g) (精華町社会福祉協議会)

h) 伊丹市F地区子ども団体【ワークショップ・調査整理番号 26-8】

【所要時間】：120分

【当日スタッフ】

南部・橘（進行）、森本・藤本・社協・実施団体3名（進行補助）、倉原・大西（観察、記録）

【実施内容・手順】

- ・ 班分け（5つの小地区別に子ども班、大人班に分ける）
- ・ グループリーダー指名（誕生月で）
- ・ 質問「避難所のマークは？」（各自付箋に記入）
- ・ LODEの紹介と説明
- ・ 図上ワークショップ（避難所、公衆電話、障がい者、外国人、赤ちゃん、妊婦さん、寝たきりの人、犬、猫、自分の家）
- ・ 自宅から学校までの通学所要時間の質問
- ・ 避難ルート記入
- ・ 机の下に身を隠す訓練（ダンゴムシのポーズ）
- ・ 新聞スリッパづくり
- ・ 「高齢者三種の神器箱」の説明とプレゼント

【考察（評価・反省点他）】

- ・ 子どもだけの班と大人だけの班とに分けたが、各班の中に子どもと大人の両方が居る構成の方が適していたかもしれない（eの箕面市との比較で）。
- ・ スポーツクラブのユニフォームを着た子どもが大半であったが、私服による参加の方がワークショップとしては集中度が高まったかもしれない。
- ・ 自宅の住所、電話番号を知らない子が少なくない（これは伊丹市だけの傾向ではないようだ）。
- ・ 「高齢者三種の神器箱」という関連グッズは、子どもにはもうひとつインパクトを与えられない。子ども向けLODEに使える小道具類を開発する必要がある。

【WS実施に至る経緯及びWS実施までの計画・準備で特筆すべきこと】

- ・ 子供を対象としたLODEの研究に不足であると判断し、子供対象現場を探すこととした。
- ・ 橘から活動連携先の伊丹市社協地域福祉担当小林氏にお願いし、伊丹市内で最も活動力がある子ども団体「F地区スポーツクラブ21」の紹介を受けた。

- ・ 同団体との協議を経て、小学校の体育館を借切り防災ワークショップを開催することとなった。
- ・ 実施当日、社協からの出席要請を受けた伊丹市危機管理室職員も出席した。

【WSのための準備物（★はその地区のために用意したもの）】

★地域図（A全版）×テーブルの枚数

- ・ マイクとホワイトボード
- ・ 図上ワークショップの各種シール（各テーブル分）
- ・ ポストイット（大・数色）×人数分（数枚／人）
- ・ カラーマジックペンセット×テーブル分、その他筆記具
- ・ 高齢者三種の神器箱完成品×人数分
- ・ 新聞スリッパ製作用古新聞（一人あたり新聞紙2枚または4枚）



写真23・24・25：プレ試行調査現場写真 h)（伊丹市F地区子ども団体）

（3）「第一次試行手法」検討のための追加調査

「第一次試行手法」検討のためには、（2）で報告した8回のプレ試行調査だけでは不足する部分を補う調査を実施する必要が生じた。

そこで、次の表に示すように3つの追加調査を実施した。

まず、8回のプレ試行調査で一度も実施する機会が無かった「障害者を対象としたLODE」の研究を進めるために、重度障害者のデイサービス施設や発達障害児などが利用する療育施設の責任者を対象としたヒアリング調査を行った。

さらに、個人情報の取り扱い問題に関しては、国内でも先進地の一つである札幌市社会福祉協議会の事例を学ぶべくヒアリング調査を行った。

また、平成26年度の8回のプレ試行調査現場では、社協がコーディネートした伊丹市での取り組みを除くと「防災」に主眼が置かれた現場であったが、今後は、「福祉目的からLODEを実施しその成果として防災力も高めようという福祉課題先行地区」でのLODE採用についても働きかけていく必要がある。このため、地域見守り体勢づくりのために平成25年度からLODEの取組みにチャレンジしている札幌の団地自治会の状況についても観察調査を行った。

表6：平成26年度追加調査実施概要

追加調査の目的	調査対象 調査方法 調査時期	調査結果 と 今後の研究開発への活用
①障害者を対象としたLODE検討のため	・ 鈴鹿市の療育施設・障害者通所施設の責任者へのヒアリング	●重度の障害者は震災時の停電や薬剤入手困難等によって生命の危機に瀕する。親の中には震災が発生したら諦めなければならぬと途方にくれている人も少なくない。行政の支援には限界が

	<p>・2015年1月28日、3月27日</p>	<p>ある。よって、こうした障害者を抱える親たちと避難行動や「施設の緊急福祉避難所づくり」等を計画するための取組みが求められる。</p> <p>●一方、発達障害児の中には、「火災に向かって飛び込んでいく可能性を持つADHD児」や、「避難行動時に座りこんで動かなくなるASD児」などもいる。こうした子供たちを抱える親とは、親子一緒での避難訓練や、上記でも述べた「施設の緊急福祉避難所づくり」等を計画するための取組みが求められる。</p> <p>●次年度は、試行調査の中で、これら課題にも取り組んでいく必要がある。</p>
<p>②個人情報の取り扱いについて</p>	<p>・札幌市厚別区社会福祉協議会 ・事務局長及び事務局次長へのヒアリング ・2015年2月20日</p>	<p>●地域福祉現場における個人情報の取り扱いに関して、札幌市及び札幌市社協は、全国の先進地のひとつともいうべき取組みを行っている。</p> <p>●『福まち活動の手引き(個人情報の取り扱い編、地域福祉マップ編)』という2冊のマニュアルを作成した上で、社協が自治会等の地域福祉活動団体に対して個人情報の取り扱い方等に関する講習を行っている。</p> <p>●加えて札幌市社会福祉協議会の顧問弁護士によって、地域福祉活動における個人情報取り扱いに関する講習も開催されている。その弁護士作成資料で整理されている内容は、『災害時における高齢者・障害者支援に関する課題(日本弁護士連合会編)』で著述されている内容とほぼ同じ向きのものであり、国民のみならず多くの自治体、公的機関までもが個人情報保護に関する理解不足からか過剰反応状態に陥っていると指摘している。</p> <p>●27年度は、第一次試行調査の中で、LODEとしての個人情報取り扱いマニュアルの作成に着手するが、引き続き札幌市以外の事例も調査し、より充実した内容のものを目指す必要がある。</p>
<p>③地域福祉課題からアプローチしている地区に関して</p>	<p>・札幌市厚別区社会福祉協議会及び札幌もみじ台団地第二もみじ自治会 ・活動の観察調査 ・2014年10月18日、11月15日、12月20日、2015年1月17日、2月21日</p>	<p>●札幌もみじ台団地第二もみじ自治会は、厚別区社協の支援を受けながら、団地の見守り活動を組織化しているが、その活動の強化に貢献していると思われるのが、平成25年度に実施された原初版のLODEである。</p> <p>●その後同自治会では、「札幌市民は防災意識が高くないので、防災テーマだけで活動は続けていけない。楽しみながらコミュニティづくりに役立つ手立てが必要だ」と考え、南部のアドバイスの</p>

		<p>下、『縁側サミット』という主婦の創作活動を取り入れたが、これが功を奏し活況の様相を呈している。この『縁側サミット』では、作品のひとつとして LODE ワークショップでも使用される『高齢者三種の神器箱』の製作も行っている。</p> <p>●「声高に叫ぶ防災」だけでなく、「ゆるやかに防災に関わる手立て」として、こうした手法の有効性があると思われる。これは3-3や3-4でふれている『赤福もち型手法』に相当するものであると考えられる。</p> <p>●今後、中高年齢女性層が多い現場で活用・提案できる可能性を有している。</p>
--	--	---

2-3-2. 平成27年度：第一次試行調査

平成27年度は、前年度の取り組みの成果を受け、「マンションで実施するLODEワークショップ」や「子ども対象から地域コミュニティにアプローチするためのLODEワークショップ」、さらには「障害者へのアプローチするためのLODE調査」や「学校区における“つなぎ”のワークショップ」「普及者を養成するためのLODEワークショップ」等の実施方法に関する第一次試行調査等を実施した。

27年度の施行調査は、平成26年度研究開発の取り組みにおいて、地域のコミュニティが自治会だけの一枚岩ではなく、町内会・自治会、子ども会、PTA、障害者家族等の異なるコミュニティが希薄なつながりの中でバラバラに存在しているのではないかという認識（図3参照）の下、調査を進めた。

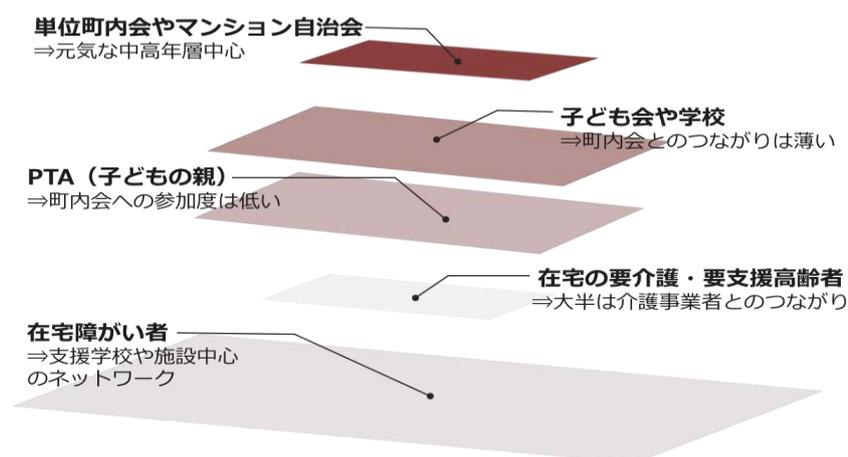


図3：バラバラな地域コミュニティ

(1) 被災地等におけるヒアリング調査

①東日本大震災被災者ヒアリング

26年度は、宮城県女川町、同気仙沼市、岩手県大槌町の各仮設住宅団地において、主に中高年層からの声を拝聴したが、27年度は「釜石の奇跡」として有名な釜石東中学校の生徒（震災当時中学3年生）2名からの声に学ぶ機会を持った（2016年2月6日・7日）。

1名は、被災者であると同時に、炊き出しボランティアなどの支援者としての立場も同時に経

験し、震災後は全国各地で講演をする等の経験を有していた。「中学生の頃は訳も分からないまま、何度も何度も逃げる訓練をさせられていた。ただ結果からみるとその『何度も』というのが大事だった。1度や2度の訓練ではあまり役に立たなかったと思うし、何度も行うことで近隣の人たちとも顔見知りになれたと思う」というように繰り返し訓練することの重要性を強調した。

またもう1名は、震災時津波で親を失い、そのトラウマと戦う現状を吐露してくれた。

そして両名から異口同音に出たのが「避難所に行ったら、顔見知りの住民たちが大勢いてホッとした。知り合いたちの顔に囲まれて避難所生活を送るのと、そうでないのでは雲泥の差がある。地域コミュニティにおける防災活動で一番大切なのは、ホッとする人間関係づくりだ」という言葉であった。

②コミュニティにおける防災活動実践家等に対するヒアリング

LODEを普及力ある手法とするためには、担い手(普及者)に支持されることが肝心である。そこでコミュニティにおける防災活動指導者や防災計画指導者としての立場にある実践家・専門家数名(当プロジェクトの研究協力者を含む)から意見を聴く機会を設けた。

なお両名には、LODEワークショップの場に同席してもらった上で、意見を聴くこととした(既に2015年度に現場体験してもらっていた)。

その概要を次に報告する。

●市民参加型コミュニティづくり研究者(2016年1月30日実施:研究協力者 元千葉大学教授延藤安弘氏)

- ・ 手法の標準化をワークショップ実施手順の標準化としてのみ捉えてしまうと、手法の硬直化を招きかねないし、そうすると普及力を期待できなくなるのではないか。手順の標準化ではなく、「効果の標準化」という視点を持つべきである。
- ・ 長く生きる手法は、変化しながら成長するものではないか。そうなるためには手順の標準化ではなく「効果の標準化」という目標を掲げておくべきだ。

●地域福祉活動実務者(2016年2月7日実施:研究協力者 伊丹市社協小林氏、松下氏)

- ・ LODEワークショップでは、地域の要援護者情報を浮き上がらせることに重点を置いているようだが、それでは効果は全く十分ではないと思う。“支援される側(要援護者)”が自らの意思でワークショップに参加するようにならないと、この図面情報は十分に機能しないと思う。
- ・ “支援される側(要援護者)”が参加しやすくなるような工夫をどう講じられるかが、LODEを一步進んだ手法にできるかどうかのポイントだと思う。
- ・ 図面ワークショップの方法を固定化するのはあまり好ましくない。たとえば凡例を固定化することもあまり意味がないと思われる。この情報は地域で集め地域が使うものなのだから、地域が使いやすい凡例を決めたほうがいい(ただ、事例としての考え方を示すのは必要だろう)。
- ・ 昨年度プレ試行調査を実施したA地区では、地区事情もあってLODE第一次試行調査の実施を希望しなかったが、その理由としては「学ぶべき手法であることは理解できるが、それをそっくりそのまま押し付けられたくない。自分たち独自で創意工夫しながら実施したい」という声があった。ちなみに同地区では、要支援と目される高齢者の存在を示す凡例の一つとして、「詐欺や消費者被害に遭ったことのある人」という凡例を考案した。これはA地区の特徴を捉えた秀逸な工夫例だと思う。

●地域における防災活動指導者(2016年2月25日実施:札幌市富丘少年消防クラブ指導者 小林氏)

- ・ 現在市民が活用できる防災学習手法としては、DIGやHUG、さらにはクロスロード等があるが、地図を使う手法としてはDIGが代表的だと認識している。
- ・ LODEの方がより要援護者対応の視点に厚いことはわかるが、図面ワークショップだけ

の手法になってしまうのでは、DIGのアレンジ版としてでしか認知されないと思う。

- ・ 加えて要援護者情報を収集するだけでは意味がない。情報を生かすことのできる人材や体制があるのかが、肝心ではないかと思われる。
- ・ 現在の地域コミュニティ（特に都市部）はバラバラである。その中で、情報を生かす人、使える人を育てることを意識するべきではないか。

●地域防災計画策定に係る専門家（2016年2月25日実施：株式会社ドーコン総合計画部 技術士H氏）

- ・ LODEワークショップを観察した上で感想を述べるならば、確かに要援護者への視点、あるいは中高層住宅への対応など、現在普及しているDIG以上の質のものであると認識できるが、『福祉DIG』、『マンションDIG』という呼称を用いても違和感がない。
- ・ DIGを超えるLODEとして普及を図るならば、地域にとってDIGを超える特長（たとえば、要援護者への理解促進力があるとか、地域の防災活動に関してもっと“総合力・俯瞰力”のある手法とか）を打ち出していくことがベターなのではないか。

（2）第一次試行調査

平成27年度は第一次試行調査として、12カ所の地区で計18回のLODEワークショップ・調査を実施したが、表7～表9にこれを整理した。表7は調査現場別に所在地、対象コミュニティ、実施日、所要時間、参加者数、対象エリア、タイプや狙い、キーパーソンや参画者、自力度などを、また表8及び表9ではワークショップ等調査時に用いた（導入した）メニューを整理した。

また、26頁以降では、個々のワークショップ・調査に関して報告するが、ここでは基本的に、26年度に整理したLODEの体系化の考え方等に基づき、「基本LODE（自治会やマンション自治会単位）」、「子どもLODE（子ども対象）」、「障害者LODE（障害者や家族対象）」等の対象者別のLODEワークショップと、これ等を繋ぐための「つなぎLODE」、さらには普及者の養成を目指した「育成LODE」等に分け、報告する（ただし、神戸市灘区大規模マンションの「子どもLODE」は、同マンションで実施した「基本LODE」と一緒に報告する）。

なお、鈴鹿市の小学校で実施したワークショップ（【ワークショップ・調査整理番号27-1】）については、平成26年度にも鈴鹿市の小学校でワークショップを実施していることから、ここでの報告は割愛する。

表7：平成27年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その1）

ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	実施日	所要時間 分	参加者数 人	対象エリア：◆		LODEのタイプや狙い：●										キーパーソンや参画者：※							自力度：■			
						マンション自治会	その他の単位自治会	連合自治会	市区町村域あるいは府県域	学校区または学校	基本LODE	子どもLODE	親子LODE	障害者や障害者家族LODE・障害者家族調査	防災訓練・避難訓練	導入LODE	つなぎLODE	住民・コミュニティ同士	ファシリテーター・コーディネーター育成	啓発・広報イベント	自治会長または自治防災組織の長	子ども会役員、PTA役員	学校、教員	民生委員	社協職員	行政関係者	議会関係者	企業や産業団体等
27-1	三重県鈴鹿市	G小学校5年生クラス	2015/6/5	90	50		◆		●										※								■	
27-2	神戸市灘区	大規模マンション	2015/6/14 2015/7/5	136 60	33 33	◆			●					●	●	●		※		※	※				※	■		
27-3	大阪市西成区	社協	2016/6/29	60	200				◆						●						※					■		
27-4	兵庫県伊丹市	F地区子ども団体	2015/8/22	240	子ども71 大人46		◆		●	●					●	●		※		※						■		
27-5	神戸市灘区	大規模マンション	2015/8/23	240	子ども16 大人18	◆			●						●	●		※		※	※			※	■			
27-6	神戸市灘区	大規模マンション	2015/10/18	210	200	◆								●	●	●		※		※				※	■	■	■	
27-7	三重県鈴鹿市	療育センター	2015/12/17	20×3	家族83				◆					●							※					■		
27-8	神戸市灘区	大規模マンション	2016/1/17	330	子ども27 大人19	◆			●	●					●	●		※		※	※			※	■	■		
27-9	三重県鈴鹿市	療育センター	2016/1/25	30	職員20				◆					●							※					■		
27-10	三重県鈴鹿市	療育センター	2016/1/26	20×4	家族73				◆					●							※					■	■	
27-11	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット	2016/1/30	150	109				◆		●				●	●		※		※	※	※	※			■	■	■
27-12	兵庫県伊丹市	Eマンション自治会	2016/2/7	140	29	◆			●						●	●		※		※	※					■	■	
27-13	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット	2016/2/7	150	89				◆		●				●	●		※		※	※	※	※			■	■	■
27-14	兵庫県伊丹市	Jマンション自主防災会	2016/2/13	90	17	◆			●						●			※		※						■	■	■
27-15	名古屋市千種区	愛知県公明党本部	2016/3/5	120	40				◆						●	●	●					※				■		
27-16	京都府精華町	社協(子ども)	2016/3/12	30×6	子ども68 親39				◆		●	●			●						※					■	■	
27-17	三重県鈴鹿市	災害ボランティア	2016/3/18	120	災害ボラ14				◆							●		※		※	※			※	■			
27-18	大阪市東淀川区	福祉・まちづくり市民団体	2016/3/27	240	10				◆							●				※	※			※				

表8：平成27年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その2）

	ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	WS等試行調査における実施メニュー：★																								
				1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	13)	14)	15)	16)	17)	18)	19)	20)	21)	22)	23)	24)	25)
				地域図での図面WS	立面戸割図のテーブル上でのWS	仮想立面戸割図のテーブル上でのWS	立面戸割図の壁掛け式でのWS	五年後LODE図作業	発災時避難行動図上シミュレーション	住戸の表札名を記入してもらう	要援護者数のカウント・確認作業	避難支援マツチングシートの検討・記入	育成支援ツールとしてのチャート図利用WS	導入質問：今日は何人の方と会話したか	導入：班分け：●の順に並んでみる	導入映像・特に子ども向けの画像学習等	プレゼン：LODEとは	プレゼン：要援護者について説明	プレゼン：要援護者の自助支援グッズ	プレゼン：防災紙芝居	ポスイット等に避難所マークを描く	ポスイット等に、自助とは？を記述	ポスイット等に何を記述するかを記述	ポスイット等に避難所で困ることを記述	ポスイット等に避難所で助けを求めた人を記述	ポスイット等に避難所で生かせる得技を記述	ポスイット等にどんなまちにしたいかを記述	ポスイット等に平時から決めておくことを記述
27-1	三重県鈴鹿市	G小学校5年生クラス	★				★											★	★	★								
27-2	神戸市灘区	大規模マンション			★												★	★	★		★							
27-3	大阪市西成区	社協															★	★										
27-4	兵庫県伊丹市	F地区子ども団体	★																									
27-5	神戸市灘区	大規模マンション			★																							
27-6	神戸市灘区	大規模マンション																										
27-7	三重県鈴鹿市	療育センター																									★	
27-8	神戸市灘区	大規模マンション			★																							
27-9	三重県鈴鹿市	療育センター																									★	
27-10	三重県鈴鹿市	療育センター																									★	
27-11	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット	★	★			★						★				★				★					★	★	
27-12	兵庫県伊丹市	Eマンション自治会		★					★																			
27-13	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット	★	★			★						★				★				★					★	★	
27-14	兵庫県伊丹市	Jマンション自主防災会	★	★													★											
27-15	名古屋市千種区	愛知県公明党本部	★		★			★									★	★	★		★	★						
27-16	京都府精華町	社協(子ども)	★																	★								
27-17	三重県鈴鹿市	災害ボランティア	★		★			★										★	★								★	
27-18	大阪市東淀川区	福祉・まちづくり市民団体			★			★										★	★	★								

表9：平成27年度実施LODEワークショップ試行調査の状況（その3）

ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	WS等試行調査における実施メニュー：★																											
			26)	27)	28)	29)	30)	31)	32)	33)	34)	35)	36)	37)	38)	39)	40)	41)	42)	43)	44)	45)	46)	47)	48)	49)	50)			
			ポストイット等に各障害者の避難支援方法を記述	災害伝言ダイヤル説明	子どもの自助力テスト	手話体験	灯り、三種神器箱、スリッパなどの制作体験	ストローハウス等の制作体験	要援護者の名乗り出、紹介	要援護者を訪問・調査	まち歩き・団地歩き、観察	避難行動体験	避難住民数カウント・整理	機器操作体験	備蓄物資などの確認や体験・物資分配課題	防災クイズやスタンブラリーなどのゲーム	会食・飲食	講演や特別な内容の研修	防災映像などによる学習	研究会・企画会議	体験談	班の代表などが全体に向かって発表	参加者全員が発言する機会	感想ヒアリング又はアンケート	まとめファシリテーションングラフィックス	完成した作品等を利用した地域イベント化	事後報告会や完成マップの事後掲示			
27-1	三重県鈴鹿市	G小学校5年生クラス		★	★																									
27-2	神戸市灘区	大規模マンション							★																	★	★	★		
27-3	大阪市西成区	社協																★									★			
27-4	兵庫県伊丹市	F地区子ども団体			★			★	★		★		★			★											△	役員		
27-5	神戸市灘区	大規模マンション					★				★		★			★										★				
27-6	神戸市灘区	大規模マンション								★	★	★	★	★	★	★	★									★				
27-7	三重県鈴鹿市	療育センター																									△	職員		
27-8	神戸市灘区	大規模マンション					★									★										△	役員	★		
27-9	三重県鈴鹿市	療育センター																									△	職員		
27-10	三重県鈴鹿市	療育センター																									△	職員		
27-11	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット		★									★	★												★				
27-12	兵庫県伊丹市	Eマンション自治会											★			★										★	△	役員		
27-13	兵庫県伊丹市	H小学校区福祉ネット		★		★			★				★	★							★					★				
27-14	兵庫県伊丹市	Jマンション自主防災会																								△	役員	★		
27-15	名古屋市千種区	愛知県公明党本部		★																	★						△	役員		
27-16	京都府精華町	社協(子ども)			★		★									★											△	職員		
27-17	三重県鈴鹿市	災害ボランティア	★																											
27-18	大阪市東淀川区	福祉・まちづくり市民団体														★			★							★				

①神戸市灘区大規模マンション（基本・マンションLODEワークショップ）

a) 対象コミュニティ

- ・ 大規模分譲マンション（計5棟603戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合理事会の下に「防災減災委員会」を設置。
- ・ これまでLODEをはじめ、防災ワークショップに取り組んだ経験は無い。

c) 実施の経緯

- ・ プロジェクトアドバイザー及び研究協力者からの紹介。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 防災減災委員会委員長（管理組合理事長経験者）以下、委員会の中に数名の熱心なメンバー（大半は防災士である）。
- ・ メンバー中1名は、このマンションを担当する民生委員。
- ・ 管理組合理事会の他メンバーは、防災活動に対してさほど協力的ではない（防災減災委員会メンバー談による）。

e) LODE実施の狙い

- ・ 要援護者の把握をしたい。
- ・ 防災やコミュニティ活動に関し無関心層が多い住民の意識を喚起したい。

f) LODEワークショップ実施前の計画

表10：神戸市灘区大規模マンションにおけるLODE実施事前計画

想定される開催・取組みの内容	
第1回目WS実施	<p>【LODEのLOD(脆弱性)を評価してみる】</p> <p>住棟の模式図と凡例シールをつかって「いざとなれば支援が必要な人」について情報共有を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <input type="checkbox"/> Little : 乳幼児や子ども ・ <input type="checkbox"/> Old : 高齢者 ・ <input type="checkbox"/> Disabled : その他特別に配慮が必要な人たち ・ <input type="checkbox"/> その他 (ペットなど)
第1回目WS成果報告	<p>第1回目WSの情報を整理してご報告します。</p> <p>そのもとに第2回目WSの実施内容についての検討を行います。</p>
第2回目WS実施	<p>【LODEのEを体験してみよう】</p> <p>「〇〇までみんなで避難してみよう」：具体的な課題をとおして対策を考えてみます。とりわけ要援護者の避難行動で問題となる点なども確認していきます。この他、周辺地域との協力や対応が必要な課題も見えてくるかもしれません。</p>
第2回目WS成果報告	<p>第2回目WSの結果を整理してご報告します。</p> <p>そのもとに第3回目WSの実施内容についての検討を行います。</p>
第3回目WS実施	<p>【5年後LODEにトライしてみよう】</p> <p>第1回目WSで作成したLODEマップをもとに、“5年後を想定したLODEマップ”の作成にトライしてみます。<input type="checkbox"/> この狙いは、“潜在している脆弱性”、と“今後に向けて内在する可能性”を発見、認識することにあります。<input type="checkbox"/></p>
第3回目WS成果報告	<p>第3回目WSの結果を整理してご報告します。</p> <p>そのもとに成果報告会開催内容についての検討を行います。</p>
成果報告会(公開)	<p>マンションの全住戸に案内をして、今年度一連の取り組みの成果報告会を開催します。</p>

g) 実際の実施内容と実施体制

【第1回目ワークショップ：6月14日実施 ワークショップ・調査整理番号 27-2】

- 参加者数と参加者層：33名（うち1名が中学生、他は中高年齢層が大半）
- 実際手順と凡例表

表11：神戸市灘区大規模マンションでの第1回目ワークショップの実施手順（その1）

作業順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
所要時間	5	8	3	5	17		7	
時刻	13:34~13:39	13:39~13:47	13:47~13:50	13:50~13:55	13:55~14:12		14:12~14:19	
カテ	導入			LODEの成り立ち	自助について		共助について	
タイトル	27年度LODEの取り組みにあたって	今回のRISTEXの研究開発プロジェクトについて	プロジェクトメンバー紹介	プレゼン：阪神大震災からDIGへ、そして今LODEへ	作業：あなたにとって「自助」とは？	プレゼン：「高齢者三種の神器」他	プレゼン：なぜ「共助」は必要か？	プレゼン：主な「支援を必要とする方々」
達成すべき目標	27年度取り組みに関する参加住民のやる気を喚起する	当研究開発事業に対する参加住民の理解・認識を促す	プロジェクトメンバーを知り、作業へのウォーミングアップを行う	防災のための図上WSの意義・意味を理解していただく	参加者にまず「自助とは」を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を学んでいただく。要援護者の生命の危険やQOL低下につながりかねない事態の一例を学ぶ	共助の必要性に関する参加住民の理解促進	要支援者に関する参加住民の理解促進
生成物	参加住民のやる気	RISTEX研究開発事業及びLODEに対する参加住民の理解・認識（背景理解）	作業しやすい雰囲気	参加住民のやる気と理解	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	要援護者支援の考え方にに関する参加住民の理解・認識	共助の必要性に関する参加住民の理解	要支援者に関する参加住民の理解
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	プレゼン	プレゼン	プレゼン	プレゼン	作業：「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を	プレゼン	プレゼン	プレゼン
		RISTEX古屋様にお任せする	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ②プロジェクト代表 倉原先生 ③鈴鹿代表者南部 ④協力者松山先生 ⑤鈴鹿チーム森本 ⑥鈴鹿チーム大西 ⑦外部協力者：神戸市K様	南部美智代から次のような内容の説明 ①阪神大震災後DIGを発売した経緯 ②さらにLODEを発売した経緯 ③LODEはLOVEをもって行うこと	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を3分以内にポストイットに書く（ポストイットは個別に色分け配布） ②ポストイットを回収員に渡す 2. 回収されたポストイットを森本、橋によって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。 3. 模造紙に整理されるポストイットの意見は、ポストイットの色（5色）によって個別にも整理・把握できる	南部美智代から、「高齢者三種の神器入れ」や「乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾」などのグッズを披露・説明する	橋から、①パワポグラフで共助の必要性を説明する。	橋から、①パワポで主な要援護者のタイプについて説明する。 L：赤ちゃん、未就学児、小学生の中でとりわけ発達障害児 O：在宅の要介護・要支援及び予備軍の方々 D：在宅の身体（内部含む）・知的・精神の方々 その他外国人、虐待懸念家庭他
役割	●プレゼンター：マンション理事長	●プレゼンター：RISTEX古屋様	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 南部	●コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：災害VN鈴鹿 橋 ●補助者：災害VN鈴鹿 森本	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 南部	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール			●スタッフ名札 ●参加者名札	●LODEロゴ拡大印刷模造紙 またはPPT	●色別ポストイット 大、ボールペン、模造紙	高齢者三種の神器入れ実物 乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾実物	★PPT:「阪神大震災時の調査結果」	★PPT:「L、O、Dの説明」

表 1 2 : 神戸市灘区大規模マンションでの第 1 回目ワークショップの実施手順 (その 2)

作業順番	作業9	作業10	作業11	計画外作業 12-1	計画外作業 12-2	作業13	作業14
所要時間	4	22	22	6	27	7	3
時刻	14:19~14:23	14:23~14:45	14:45~15:07	15:07~15:13	15:13~15:40	15:40~15:47	15:47~15:50
カテ	LODE WSの手順説明	LODEワークショップ「わがマンションの脆弱性を知る」			結び		
タイトル	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：棟別に要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	作業：「お助けタイム」：参加者が居住棟以外の図面に対して知っている情報を提供	作業：本日のワークショップに関する感想をお聞かせください？	発表：本日のワークショップに関する感想	まとめと講評	締めのことば
達成すべき目標	LODEワークショップの手順に関して理解を促す	参加住民に「自分の棟に居る要援護者」を認識してもらう	他棟からの参加住民の力をかりて「自分の棟に居る要援護者」情報を充実させる	参加者各自に「本日の感想」を考へてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	参加者各自に記入してもらった「本日の感想」を、各自が全体で整理し、全員で共有する。	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼する
生成物	LODEワークショップの基本的手順に関する参加住民の理解	各棟参加住民が認識する要援護者情報(立面戸割図)	今回参加者総力による要援護者情報(立面戸割図)	参加者たちの「本日の感想」を記したポストイットとその整理シート	参加住民の今回参加意識の共有、及び今後の参加への意欲。	参加住民の次回への意識	今後の参加への意欲
作業単位	全体	棟別グループ	全体(棟別グループに対し、他棟住民が意見を述べる)	全体	全体	全体	全体
進め方	プレゼン	作業：班員同士話し合いながら、凡例に従って要援護者シールを貼っていく	作業：他棟住民がポストイットによってお助け情報を提供する	作業：本日のワークショップに参加した感想や意見を各自ポストイットに記入する。	作業：参加者一人一人が全員に対して発表。	プレゼン	プレゼン
	橋から、 ①要援護者発見作業について説明する。 ・棟別に作業する ・立面模式図 ・その上にフィルムシート ・四隅を明記 ・凡例別シールを貼る ・途中で棟別発表と棟同士「お助けタイム」をとる	①要援護者の居ない住戸：斜め線 ②自宅：銀の★ ③乳幼児：オレンジ丸 ④未就学児：黄色丸 ⑤小学生：水色丸 ⑥中学生：青色丸 ⑦前期高齢者：紫色丸 ⑧後期高齢者：赤色丸 ⑨特に配慮や支援が必要な人：金色ハート	①各棟代表から作業状況を簡単に報告する(各1分)。 ②それに対して他棟からの参加者が追加情報(お助け情報)を色別ポストイットで提供(各3分)：「○番館●●●号室にこんな方が住んでいる」 この作業を5棟全てに関して行う(計4分×5棟)	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「本日の感想」を3分以内にポストイットに書く(ポストイットは棟別に色分け配布) ②ポストイットを回収員に渡す 2. 回収されたポストイットを森本、橋によって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。 3. 模造紙に整理されるポストイットの意見は、ポストイットの色(5色)によって棟別にも整理・把握できる。	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「本日の感想」を3分以内にポストイットに書く(ポストイットは棟別に色分け配布) ②ポストイットを回収員に渡す 2. 回収されたポストイットを森本、橋によって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。 3. 模造紙に整理されるポストイットの意見は、ポストイットの色(5色)によって棟別にも整理・把握できる。	プロジェクトリーダー、プロジェクト協力者、領域アドバイザーの3先生から簡単な講評を発表	南部美智代からお礼の挨拶。 参加者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼント。
役割	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋	●全体コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(森本、さらに松山先生サポート)	●全体コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(不在の場合は、森本、さらに松山先生にもお願い)	●コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：災害VN鈴鹿 橋 ●補助者：災害VN鈴鹿 森本	●コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：災害VN鈴鹿 橋 ●補助者：災害VN鈴鹿 森本	●講評者：倉原先生 ●講評者：松山先生 ●講評者：田村先生	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 南部
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	★PPT:「LODEワークショップ作業と凡例の説明」 ●凡例表シート(各棟班に複数枚)	●棟別立面戸割図(5棟分)と上掛けフィルムシート ●凡例シール各種	●お助けポストイット(小):お助け意見を出さず参加者には棟別に色を決めたポストイットを渡す ●ボールペン	●色別ポストイット 大、ボールペン、模造紙	●色別ポストイット 大、ボールペン、模造紙		●高齢者三種の神器入れ(人数分)

- ①みなさんの自宅に、銀色の★シールを貼ってください。
- ②特別に支援が必要な人が居ないお家には、斜線をひいてください。
- ③各住戸に下の凡例に従ってシールを貼っていきます。
この時、下記枠内にあてはまる人1名につき1枚ずつ貼ってください。(1戸に下記該当者が3名いる場合、枠の中に3枚のシールが貼られている事になります)

●オレンジ	色：赤ちゃん（0歳児・乳幼児）
●黄	色：1歳以上の幼児（未就学児）
●水	色：小学生
●青	色：中・高校生
●紫	色：前期高齢者（65歳～74歳）
●赤	色：後期高齢者（75歳以上）
●金	色：特別に支援や配慮が必要な人

- シールを貼った人で、特別な支援が必要な人は、●と♥の2種類のシールを少し重ねて貼ってください。

- シールの年齢に当てはまらない人で、特別な支援が必要な人は、♥の1種類だけで貼ってください。



この他に、共有した方が良い事項があれば、ポストイットに記入し、住戸の枠内に貼ってください。

図4：神戸市灘区大規模マンション第1回目ワークショップで使用した凡例表

●観察調査によるポイント

- ・ 民生委員とその下で要援護者見守り活動に従事する友愛ボランティアメンバー数名が参加していたことによって、ワークショップの参加者数が少ないにもかかわらず、要援護者情報数は26人に上った（神戸市が把握する要援護者数は82名存在）。
- ・ しかし、参加者の大半は中高年齢層であり、子どもの情報に関してはあまり表示することができなかった。そのよう中で、たった1名の中学生参加者と、もう1名小中生を持つ親の2名によって、子ども情報シールの半分以上が貼られた。
- ・ この回の図面ワークショップでは、マンション各棟の立面戸割図を壁掛け式で掲示し作業したが、作業中の住民同士の会話は「テーブル式ワーク」の現場と比較して少なかったようである。シールを貼る作業が中心になり、同じ住棟同士の住民が会話によってコミュニケーションを図るといった場面が少なかったように見うけられた。
- ・ 6月管理組合総会において新理事長が選任されたが、前理事長は参加しなかった（防災活動には協力的ではないという防災減災委員会メンバーたちの声を裏付ける形となった）。

●現場写真



写真26・27：神戸市灘区大規模マンションワークショップでのポストイット作業の様子



写真28・29：神戸市灘区大規模マンションワークショップでの図面作業の様子



写真30・31：神戸市灘区大規模マンションワークショップでの「本日の感想」の記入及び各人による発表作業の様子



写真32・33：神戸市灘区大規模マンションワークショップで作成された要援護者等情報を含む住棟別のLODEマップの一部

【第1回目ワークショップの報告会：7月5日実施　ワークショップ・調査整理番号27-2】

●参加者数と参加者層：33名（ほとんどが中高年齢層、新規参加者は33名中9名）

● 実際手順（約60分）

- 1) コミュニティ側主催者あいさつ
- 2) プロジェクト説明と RISTEX 側メンバー紹介
- 3) LODE についての説明
- 4) 第1回（6月14日）WS の報告
 - ・ 番館毎の作業成果図
 - ・ 要援護者などシール情報をデータ化した結果を表・グラフで説明
- 5) ポストイット作業結果（「自助とは」）のまとめのデータ報告
- 6) ポストイット作業結果（「感想について」）のまとめのデータ報告
- 7) 質疑応答
- 8) 終わりの挨拶

● 報告内容

【全体】LOD別の認識状況（人数）□

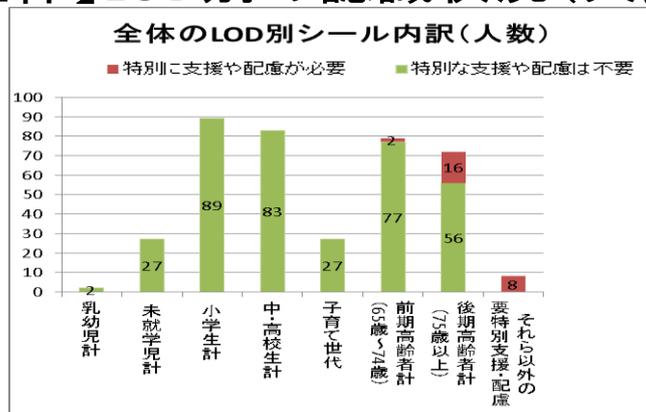


図5：神戸市灘区大規模マンション第1回目ワークショップ結果グラフ（その1）

【全体】LOD別の認識状況（人数）□

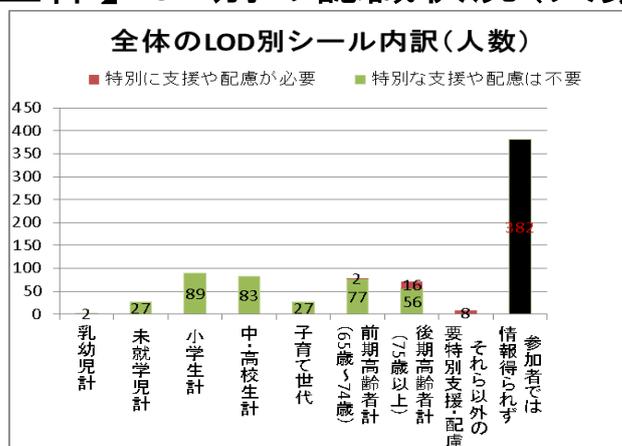


図6：神戸市灘区大規模マンション第1回目ワークショップ結果グラフ（その2）

【第1回目特別ワークショップ「子どもLODE」：8月23日実施

ワークショップ・調査整理番号 27-5】

- 参加者数と参加者層：34名（新規参加26名中子ども16名、大人リピーター8名）
- 実際手順（10時～15時の4時間）
 - 1) 10:00～：マンション主催者側からの挨拶と倉原PJからのあいさつとスタッフ紹介（南部）
 - 2) 09:40～：子どもたちの相互自己紹介と握手会（自分の名前と住所、好きな科目を言う）
 - 3) 09:50～：調査携帯品の説明とトランシーバーの扱い方の説明と班分け
 - 4) 10:30～：班別に各住棟（自分の住棟）へ調査に出かける（トランシーバーと簡易メジャー、筆記具、カメラ、記録パネルを携帯して）。
 - 5) 11:30～：大人の協力者にありがとうの手紙を書く
 - 6) 12:00～：みんなで昼食（カレーライス）
 - 7) 13:00～：調査結果を各棟別図面上に整理する作業
 - 8) 13:30～：班別に作業結果報告
 - 9) 14:00～：棟別図面の上に子ども（中高生、小学生、幼児）のシールを貼る作業その後講師等から講評・感想。
 - 10) 14:30～15:00：防災紙芝居

●現場写真



写真34・35

・36・37

：神戸市灘区大規模マンションでの「子どもLODEワークショップ」での作業の様子

【第2回目ワークショップ（防災訓練）：10月18日実施 ワークショップ・調査整理番号 27-6】

●防災訓練実施の狙い

- ・参加者が少ないままデータ収集を目的としたワークショップを継続するには限界があり、そのため沈滞気味の住民参加度を上げたい（参加者200名を目標）。
- ・住民同士のコミュニケーション増進を図りたい（狙いは垂直避難を促しやすい上下関係の構築、そのための出会いの場の提供）。
- ・住民にマンションの防災環境・能力を知ってもらい、関心をもってもらいたい。

●参加者数

表13：神戸市灘区大規模マンションでの防災訓練参加者数

	1番館	2番館	3番館	4番館	5番館	他	計
男 (大人～子供)	21名	15名	25名	14名	14名		89名
女 (大人～子供)	16名	24名	33名	9名	8名		90名
別参加小学生			3名		2名	2名	7名
計	37名	39名	61名	23名	24名	2名	186名

この他捕捉できなかった参加者が20～30名いたと想定されるため、目標に掲げた参加者数は達成できたと考えられる。

●実施内容・手順

08:30 準備開始

09:00 全スタッフ本部前ピロティ（三番館前ピロティ）に集合、
委員長及び役員（本部スタッフ：消防署勤務の住民）より役割分担の確認

09:30 火災発災警報を全館で鳴らす

10:00 避難者全員で本部前ピロティに集合、出席シールを貼る
各番館リーダーは番館の居住者同士が互いに自己紹介と握手するよう促す
各番館リーダーは参加者人数を本部に報告する
理事長から挨拶、役員より本日の説明
リーダーの引率により、番館ごとに5箇所のポイントを巡ってもらい
各ポイントでシールを貼ってもらい、スタンプラリー式にする。

①ポンプ室見学とはしご車想定ロープ 15分

ポンプ室見学と、浸水時・停電時にポンプが稼働しなくなったときの説明を聞く。
はしご車の侵入経路、活動場所、大きさをロープで表現して実感してもらう。

②水消火器による放水訓練 20分

スタッフの説明に従って放水訓練を実施する。事前に練習の必要。

③担架訓練 20分

担架で人形を運ぶ（60kgの重さの体験）。救助用担架の体験。

④防災機器説明と保管場所の確認 15分

⑤居住している番館の案内と説明 30分

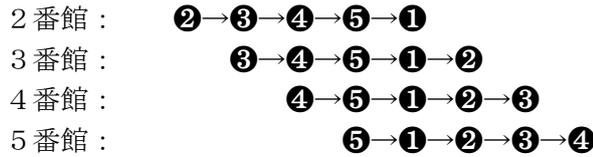
停電時エレベーターやエントランス扉はどうなるか

消火器の場所の確認

安否確認シートの貼り出し状況の確認調査（全戸調査→本部に報告）

【番館毎の巡回順】

1番館：①→②→③→④→⑤



- 10:30 民生委員と友愛ボランティアによる要援護者宅訪問
- 12:00 ポイント巡り終了後各参加者に記念品贈呈
- 11:30 炊き出しコーナー（パスタコーナー、ぜんざいコーナー）で各自食事
- 11:30 ぜんざいコーナー前で簡易アンケート調査実施
- 13:00 片付け開始（14 時まで完全に完了）
- 後日 全館全戸向けにアンケート調査実施

●主な結果

- ・ 要援護者宅の訪問では、神戸市の要援護者名簿に掲載されている 82 名を戸別訪問したが、応答のない家も多く、全員の実態確認はできなかった。
- ・ 5 番館の 19 戸の中に「40 代で健康そうな方」、「70 歳で健康そうな方」が名簿に入っていたが、これらが名簿に掲載される事情を抱えた方なのか否かを再度確認する必要がある。名簿自体が全て信頼に足るものとは言い切れない。

表 14：神戸市灘区大規模マンション防災訓練における要援護者確認状況

	神戸市の名簿掲載者	「介助求む」のステッカーを貼り出した方	訪問できたが「介助求む」或いは「無事です」のステッカーを貼り出してなかった方	訪問できたが要援護者か否かの確認が必要と思われた方	留守などで確認ができなかった方
1 番館	17 名	3 名	10 名		4 名
2 番館	18 名	6 名	3 名		9 名
3 番館	23 名	1 名	2 名		20 名
4 番館	5 名	1 名	0 名		4 名
5 番館	19 名	3 名	10 名	2 名	4 名
計	82 名	14 名	25 名	2 名	41 名

●住民の反応（アンケート結果より）

参加者の約 3 割強に当たる 65 名（50 名近くに及ぶ役員やボランティアは含まれていないため、回答協力率は実質 4 割相当と考えられる）の住民からアンケート調査により評価や感想の声を集めた。その主な結果を示すと次のとおりである。

【今回の防災訓練イベントの総合評価】

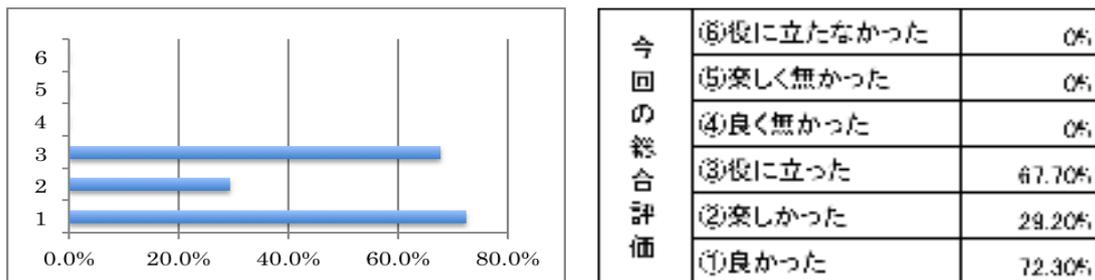


図 7：神戸市灘区大規模マンションでの防災訓練におけるアンケート調査結果（その 1）

- ・ 否定的な評価は皆無であった。

【今回のメニューの中で良かった点】

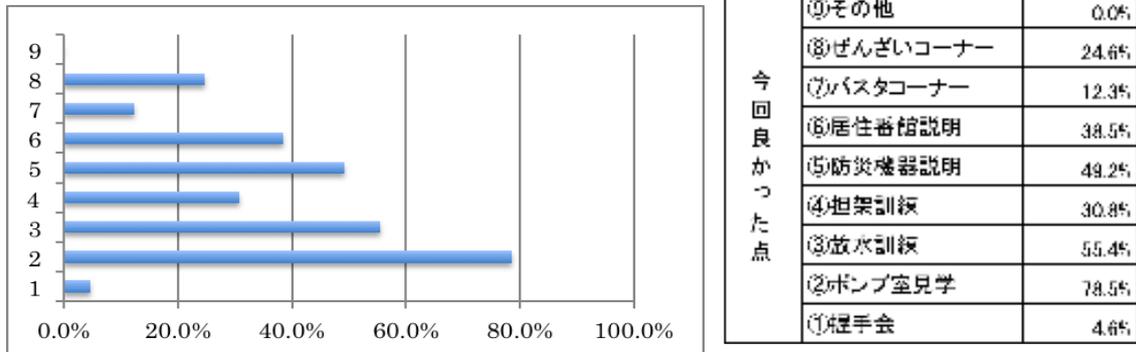


図8：神戸市灘区大規模マンションでの防災訓練におけるアンケート調査結果（その2）

- ・ 巡回ポイントの各メニューは評価が高かった。
- ・ バスタコーナーの評価の低さは“長蛇の列”が原因のひとつかもしれない。

【今回のメニューの中で改善・工夫すべき点】

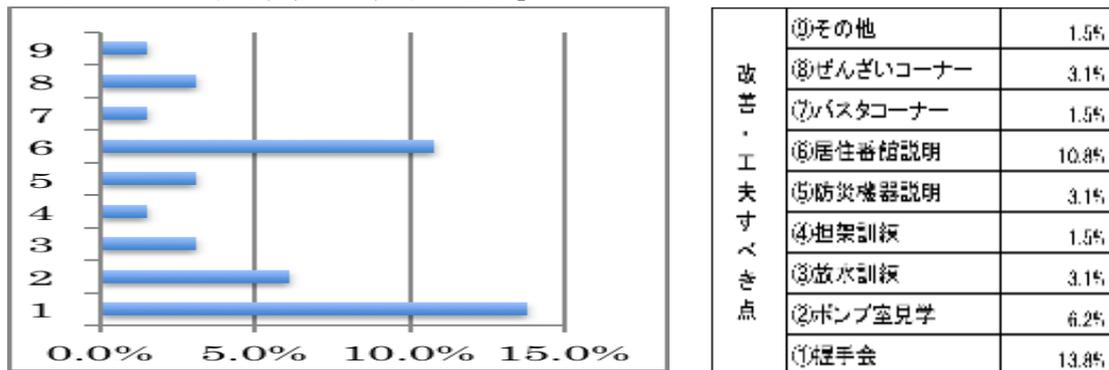


図9：神戸市灘区大規模マンションでの防災訓練におけるアンケート調査結果（その3）

- ・ 握手会が曖昧になってしまったことがここで数字となって表れている。
- ・ 今後は居住番館説明にさらなる工夫が求められる。

【自由意見の中で好意的な意見について】

- ・ 「よかった」や「知らないことがわかった」などの総体的な評価もあるが、「毎年継続希望」というさらに前向きな評価も少なくない。
- ・ また「ポンプ室見学等」や「同じ番館の人との交流」、「安否確認シートのわかりやすさ」等、具体的な評価ポイントをあげる意見も見られた。

【自由意見の中で課題を指摘した意見について】

- ・ 安全確認シートが全戸に配布されていないのではないかとの指摘が上がった。
- ・ 「警報音が聞こえにくかった（聞こえなかった）」という指摘もあった。
- ・ 握手会を楽しみにしていた方は少なくなかったようだ。次回こそはその期待に応えるようにすべきである。コミュニケーションを大切と考える住民は決して少なくないと思われる。
- ・ 参加者の少なさや住民の無関心さを嘆く意見も数名から上げられている。

●現場写真



写真38・39：防災訓練での消火器訓練、担架訓練



写真40・41：防災機器説明とスタンプラリーカード



写真42・43：支援を求める要援護者宅のステッカーと
見守りボランティアによる要援護者宅の訪問

【第2回目特別ワークショップ（震災祈念イベントの実施）：1月17日実施

ワークショップ・調査整理番号27-8】

●震災記念イベント実施の経緯（コミュニティ側の考え方）

・当初RISTXから提示されたスケジュールでは、1月17日に地域住民に呼びかけて「5年後LODEワークショップ」を開催する予定となっている。

・しかし1月17日は小中学生は学校行事で駆り出され、午後～夕方であれば集まらない。また、大人も全紙各地で震災記念イベントが行われるため、地元（我々の地区）での取り組みにどれだけ参加してくれるか非常に心もとない。

・一方、1月17日震災記念イベントの数々は、公的機関がリードする形でこれまで継続されてきたが、それも今年で一区切り、次年度からは縮小されていく公算が大と言われている。対して我々のマンション団地の防災減災委員会では、世間の縮小気運にかかわらず、今後の震災記念を担ってきたいという気概を持っている。

・そこで、人は集まりにくい日程ではあるが、住民たちの心に残る、子供達も参加してくれる震災イベントの企画・実施したい。

●震災記念イベント実施の狙い

・震災記念日の行事として今後も継続できる行事を創りたい

- ・ 子どもの心に残る震災イベントを実施したい
- ・ 子どもと大人が共同作業することで、マンション内のコミュニケーション増進を図りたい
- ・ LODEの締めくくりのワークショップの前に、防災関連事業やLODE事業への参加者の裾野をさらに広げたい

●参加者数

- ・ 捕捉できた人数（マンション住民44名、外部2名）
- ・ 捕捉できなかった人数（10～20名程度）

表 15：1月17日震災祈念イベントへの参加者数

参加者の別		1番館	2番館	3番館	4番館	5番館	外部	計
大人の参加者	初めて		3名	1名		1名		5名
	リピーター	1名	4名	5名	2名	2名		14名
子どもの参加者	初めて	3名	2名	7名	5名	4名	2名	23名
	リピーター			3名		1名		4名
合計		4名	9名	16名	7名	8名	2名	46名

●実施内容

- 12:00：準備開始、サークルルーム内の作業テーブル設営
- 13:30：参加者、スタッフ全員がサークルルームに集合、マンション委員長より挨拶
ワークショップ講師役の南部より挨拶と説明
- 13:35～16:00：「空き瓶を灯りとして利用するための装飾・制作ワークショップ」
- 15:00～17:00：甘酒コーナー、ぜんざいコーナー設置
- 17:00～19:00：空き瓶灯りを地域の方々に楽しんでもらうための灯りイベント

●観察調査によるポイント整理

- ・ 大人との共同作業が進む中、大人と言葉を交わす場面が多く見られた。
- ・ 初めてLODE関連イベントに参加した大人は19名中5名いたが、「子どもの親」であった。また、これまでは参加者が少なかった四番館、五番館からも、それぞれ7名と8名の参加者を得た。
- ・ 灯り瓶400個をマンションの屋外階段部に並べ、17時に点火したが、ワークショップに参加した老若男女だけでなく周辺の住民や子ども達も灯りに魅入っていた。
- ・ 当日は強風で瓶の中のロウソクが消えがちになったが、数人の子どもたちが“火の守り役”を務めた。小学生にとって火を取り扱う機会が新鮮だったようだ。
- ・ 19時に消灯・片付けを行ったが、「自分が制作した灯り瓶を記念として持って帰りたい」という子どもたちが多かった。

●現場写真



写真44・45：灯りづくりワークショップと点灯後の様子

【第3回目ワークショップ「5年後LODE」の実施延期】

当初スケジュールでは1月に予定していた第3回目のワークショップ「5年後LODE」に関しては、3月26日に実施の予定で調整を進めていた。

しかしながらマンション側のリーダー（防災減災委員会委員長）に病気療養の必要性が発生したために、27年度における実施を断念、次年度以降、適切なタイミングでワークショップを実施することとした。

②伊丹市Eマンション自治会

【基本・マンションLODEワークショップ：2月27日実施

ワークショップ・調査整理番号 27-12】

a) 対象コミュニティ

- ・ 分譲マンション（計2棟170戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合（所有者組織）と自治会（住民組織）の二輪体制。
- ・ LODE図上ワークショップは平成26年2月、平成27年2月と、過去2年、毎年一度取り組んできた。

c) 実施の経緯

- ・ 自治会長からの要請。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ マンション自治会長。
- ・ このマンションを担当する民生委員1名（マンション居住者）。
- ・ 当該マンションの立地する地区を担当する伊丹市社協の地域福祉担当。

e) LODE実施の狙い

- ・ これまで培ってきたマンション住民間のつながりを維持・増進したい。
- ・ 高齢者がますます多くなるマンションの見守り力を増強したい。

f) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数と参加者層：29名（うち当該マンション居住者27名）

●実施内容と結果

- 09:30～09:35 挨拶と班分け
- 09:35～09:40 全員で体操
- 09:40～09:45 全員で集合写真撮影
- 09:45～10:00 4テーブルで作業分担して全戸の居住者苗字を記入作業
- 10:00～10:30 4テーブルで作業分担して要援護者や支援者候補にシールを貼る。
- 10:30～10:40 各テーブルから作業結果を発表、それを集計。
- 10:40～10:45 倉原PJ側からの講評・感想（南部）
- 10:45～10:50 ガスカセットによる簡易発電機の体験
- 10:50～11:05 参加者一人一人による感想の発表
- 11:05～11:45 世話役の方々で会食会
- 11:45～11:50 倉原PJからの総括挨拶（倉原）

●観察調査等から

- ・ 入居者全戸の苗字を記入する作業では、「誰が住んでいるか知らない住戸」・「住んでいる人を間違えて認識していた住戸」の合計が19戸（全体の11.2%）に過ぎなかった。27名（27戸から1名ずつ参加として全体の15.9%）の居住者が88.8%の住戸の情報を掴んでいるということがいえる。
- ・ 4つのテーブルにおける作業中に住民同士で交わされる会話は、①で報告した大規模マン

ション（図上作業では壁掛け式を採用）と比較すると活発であった。

●現場写真



	赤	幼	小	中	前期	後期	心	録
A 1階20戸	0	0	2	1	18	8	0	2
A 3階4階	1	1	1	0	2	8	3	2
B 5階(新設)	0	3	4	4	34	10	2	2
B 8階	0	4	3	5	25	3	1	1
合計	1	8	10	10	79	29	6	7

写真46・47：伊丹市Eマンション自治会ワークショップでの図面作業の結果

③伊丹市Jマンション自主防災会

【基本・マンションLODEワークショップ：2月13日実施

ワークショップ・調査整理番号27-14】

a) 対象コミュニティ

- ・ 分譲マンション（計3棟198戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合（所有者組織）と自治会（住民組織）に加え、自治防災会を組織している。
- ・ 図上ワークショップは平成25年12月に有岡地区で実施した災害図上訓練の研修会に参加、また平成28年2月7日に同地区が実施したLODE研修会に参加。

c) 実施の経緯

- ・ 自治防災会長主導で開催。
- ・ 倉原PJ側は観察調査で出席。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ マンション自主防災会長（管理組合理事長経験者）。
- ・ このマンションを担当する民生委員1名（マンション居住者）。

e) LODE実施の狙い

- ・ 現時点におけるマンションの要援護者情報図を完成させたい。

f) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数と参加者層：17名（マンション自主防災会の班長のみ参加）

●実際手順

- 09:00～09:05：挨拶と本日の目的の説明（自主防災会会長）
- 09:05～09:10：LODEマップづくりの全体説明（民生委員）
- 09:10～10:10：一つ一つ凡例の説明と、凡例シール貼り作業を進める。
- 10:10～10:20：棟別完成図面の相互チェック・確認作業
- 10:20～10:30：締めくくりの言葉と完成図面の掲示（集会所に1週間掲示）

④他の「子どもLODE」現場（伊丹市F地区、京都府精華町など）

a) 子どもLODEの狙い

- ・ 自助力に懸念のある現代の子ども達の自助力向上のための防災学習機会とする。
- ・ 自治会活動にはあまり参加しない30代～40代（子どもの親世代）に対し、子どもの防災学習への機会を利用し、防災活動への参加の重要性や、自治会コミュニティ活動への

参加必要性を感じてもらおう契機とする。

b) 伊丹市F地区【子どもLODE：8月23日実施 ワークショップ・調査整理番号27-5】

●対象

- ・ 小学校区の子供会活動に参加する小学生達

●実施の経緯

- ・ 昨年度に引き続き実施。
- ・ 毎年恒例の子供会の夏期キャンプ事業の中に、新たに防災メニューを導入する。

●対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 子供会活動の役員たち
- ・ 子供会活動をサポートする社協職員

●参加者

- ・ 子ども : 71名
- ・ 子どもの親等の大人 : 46名

●実際手順（会場は小学校体育館）

10:00～：班分け（登下校の地区別）

10:10～：子ども達の自助力テスト（住所と電話番号を知っているかどうか）

10:30～：まちかどオリエンテーリングにむけて無線機やカメラなどの取り扱い方説明

11:00～：地区別の班単位でまちかどオリエンテーリングに出かける

12:00～：昼食

13:00～：まちかどオリエンテーリングでメモしたり写したポイントを地図上に整理

14:00～14:30：班毎に全体に向けて発表

翌08:30～10:30：班単位でストローハウス制作ワークショップ（子どもと大人の共同）

●「子ども達の自助力テスト」の結果

- ・ 「子ども達の自助力テスト」では、小学4年生～6年生27名中、自宅住所、自宅か親の電話番号、親の名前、この3項目を全て正確に書けたのは4名だった。
- ・ 27名中7名は住所を全く書けず、7名は正確に覚えていなかった。
- ・ 27名中14名は電話番号を覚えていなかった。
- ・ 27名中20名は親の名前を漢字で書けなかった。

● 観察調査等からのポイント

- ・ まちかどオリエンテーリングでは、子ども達が通行する地域の人々（知り合いではない人）と会話するシーンが生まれた。
- ・ ストローハウス制作ワークショップでは、最初「子ども達だけが個人個人でパーツを作っている」シーンから、「子どもと親のペアでパーツを作る」シーンへと移行し、さらに「班の中の子ども同士がパーツ作りで情報交換や共同作業に取り組む」シーンが出始め、最後には「班の中の親子が全員でパーツを組み合わせて共同作品を作る」シーンへと移行していく様が観察できた。ストローハウス制作ワークショップには子どもと大人の壁を取り払い、共同作業環境をつくり出していく効果があると思われる。

●現場写真



写真48・49：親子で熱中するストローハウスづくりワークショップの様子

c) 京都府精華町【子どもLODE：3月12日実施 ワークショップ・調査整理番号27-16】

●対象

- ・ 町内の全小学生対象

●実施の経緯

- ・ 昨年度に引き続き精華町社協がLODEイベントを実施。
- ・ 今年度は子どもを対象としたメニューにすることを決定。
- ・ 精華町の全町的イベント『子ども祭り』の中に、新たに防災メニューを導入する。

●対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 社協職員

●参加者

- ・ 子ども : 68名
- ・ 子どもの親等の大人 : 39名

●実際手順（会場は精華町体育館）

- ・ 9時半～12時半の3時間、防災学習会場をオープンする。
- ・ 会場内には「防災紙芝居コーナー」、「ほのぼの灯りづくり体験コーナー」、「ストローハウスづくりコーナー」、「防災クイズ・テストコーナー」を設置して、来場する子どもたちに体験させるという形式をとった。
- ・ 4つのコーナーを全て体験するには40分～50分程度要するものと思われる。

●「子ども達の自助力テスト」の結果

- ・ 「子ども達の自助力テスト」では、小学4年生～6年生35名中、32名が自宅住所を正確に書けた。これは伊丹市昆陽里の状況とはかなり異なる。
- ・ また、この地域の子どもたちには、地図上で自宅を見つけることがさほど難しいことではないようだった。
- ・ 学研都市に住む親ならではの熱心さによるものではないかと思われる。

●観察調査等からのポイント

- ・ 親が子どもを連れてくる、或いは親が子どもに付き添うというスタイルが多かった。この地域の親の子育てや教育への関心の高さをうかがうことができた。

●現場写真



写真50：親子で防災紙芝居を鑑賞



写真51：地図上で自宅や通学路を探す作業

⑤「障害者LODE」現場（鈴鹿市療育施設）

【障害者LODE：ワークショップ・調査整理番号27-7、27-9、27-10】

a) 対象コミュニティ

- ・ 障害児を持つ家族及び療育施設職員。

b) 実施前の状況

- ・ 鈴鹿市全域から発達障害を抱える約200名の未就学児とその親が週に2～3回通う施設である。抱える症状や年齢に応じてクラス分けをしている。
- ・ 発達障害は学説上遺伝ではないと言われているが、実際は親も発達障害傾向を抱えているケースが少ない。
- ・ またこうした親の中には、自分の子どもの障害を認めたくない親、地域コミュニティとの関係が希薄な親も存在する。

c) 実施の経緯

- ・ 障害を抱える者とその家族は、自治会などのコミュニティとの関わりが希薄であることから通常のLODEワークショップでは障害者対応の研究を実施することが困難である。そこで、鈴鹿市の療育施設にLODE調査への協力を依頼した。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 療育施設所長（社会福祉協議会）

e) LODE実施の狙い

- ・ LODEにおける障害者対応（Dの部分）の調査研究。

f) LODEワークショップ実施前の準備・計画

- ・ 障害児を対象とした調査においては、親に信用してもらえないと調査そのものが不可能になるケースもあり得る。“土足で家に上がる”類の姿勢は厳禁であることは当然であり、親子に負担をかけないペースや環境で接することが重要である。12月17日の訪問調査でこの課題を痛感したことから、2回目の1月26日には職員一人一人にファシリテーターまたは調査員になってもらうという間接的調査のスタイルをとった。
- ・ このため事前に時間をかけて職員と話し合うこととした。

g) 実際の実施内容

●参加者数（調査対象者数）

- ・ 【1回目直接調査】12月17日～：家族83組
- ・ 2回目調査のために職員に対する研修 1月25日：職員20名
- ・ 【2回目間接調査】1月26日～：家族73組

●実施内容

- ・ 1回目は、親子に「三種の神器箱」と「避難所で使用できる歯ブラシ」をプレゼントしながら、簡単な会話の機会を持った。その上で「災害に備えて、家で用意しているもの・こと」、「災害に備えて、子どものために用意しているもの・こと」についてポストイットで回答してもらった。
- ・ 2回目は、「もし地震で避難する場合に何を持って、何処に避難するか」と「避難時で想定されるトラブル」や「トラブルが発生した場合の相談先」等について簡単なアンケート調査を行ったが、まずその調査内容や留意点を20名の職員に教え、次に職員が親に対して調査するという方式をとった。

●調査結果から

- ・ 災害発生及び避難時には相当のトラブルが懸念される結果であった。
- ・ 極度の偏食を抱える子、薬剤やオムツを必要とする子が少ない。
- ・ ADHDを抱える子の親は「動き回って他人に迷惑をかけるのではないかと」、またASDを抱える子の親は「環境に落ち着けずにパニックを起こすのではないかと」不安を感じている。
- ・ しかし、平時から対応策を講じられている親は皆無で、ほとんどが「毎日が大変で何も考えられない。特別な対策は講じられていない」と答えた。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
質問: 子どもの為に 準備しているもの	家具倒壊 防止	避難場所の 確保点検	子供への指 示 子供との約 束	子供の服	オムツ	タオル	おやつ 子供の食べ 物	飲み物・水	ミルク	玩具など	持ち出し袋 非常用カバ ン	防災頭巾 ヘルメット	聖 お薬手帳 母子手帳	救命胴衣	車からの 脱出道具	写真	なし	調べている	その他	無回答
回答者総数83人	1 1.2%	5 6.0%	6 7.2%	9 10.8%	20 24.1%	1 1.2%	22 26.5%	6 7.2%	4 4.8%	4 4.8%	4 4.8%	4 4.8%	4 4.8%	1 1.2%	1 1.2%	1 1.2%	21 25.3%	1 1.2%	4 4.8%	8 9.6%

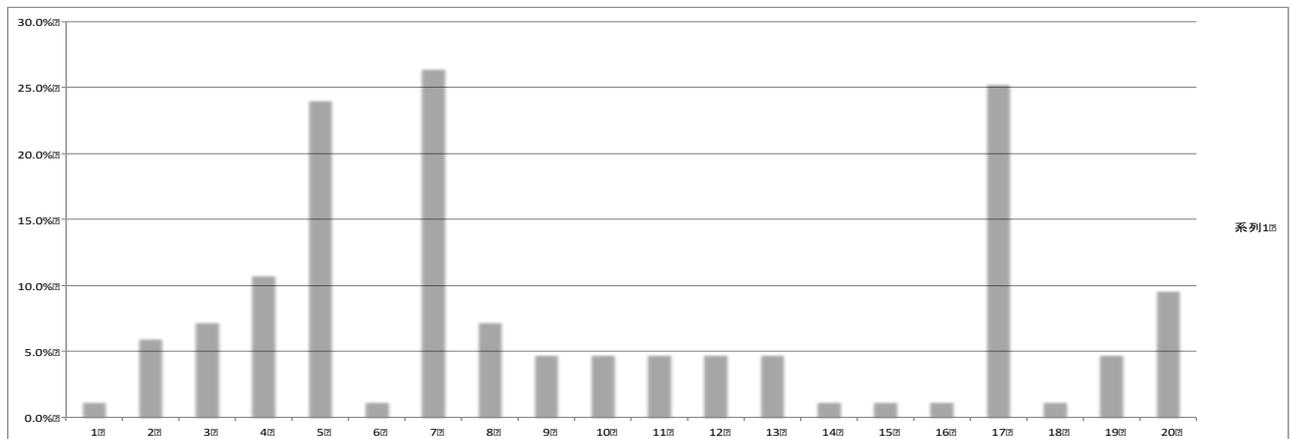


図 10：災害時に備えて子どものために準備しているもの

- ・ また、職員に調査員を務めてもらうという方法がスムーズであった。これは実際のコミュニティ現場でも使える方法である。障害者の中には他者に心を開きづらい人もいるため、「家族以外に、その障害者が心を開くのは誰か」を平時から気をつけておくことがいざという時に障害者を守ることにつながるであろう。

⑥「導入LODE」現場（大阪市西成区）

【6月29日実施：ワークショップ・調査整理番号27-3】

a) 導入LODEの狙い

- ・ より多くのコミュニティリーダーたちにLODEを知って実践してもらうために、市区町村単位などの広いエリアで予備的に行う「導入LODE（予備LODE）」とする。
- ・ 講演会というスタイルの他に、また仮想のマンション立面図などを用いた「図上ワークショップのやり方を学ぶ研修会」というスタイルもある。今回は大人数であり、講演会となった。

b) 対象及び参加者

- ・ 西成区全区の民生委員や地域見守りボランティア約200名

c) 実施の経緯

- ・ 西成区社会福祉協議会職員から南部への講演会講師依頼（当該職員には、講演会によってその後の地域活動活発化のための契機としたい狙いがあった）。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 社会福祉協議会職員

e) 実施手順

- ・ 約1時間の講演というスタイルで、阪神大震災後のDIGの発案、DIGからLODEへ進むこととなった経緯、さらには災害時に弱者となる要援護者のこと、その対応の考え方などについて述べた。

f) 参加者アンケート

- ・ 概ね好評な結果となった。

表 16 : 西成区におけるLODE講演会（導入LODE）に対する参加者の感想

1)講演会の時間配分(1時間)は適切であったでしょうか？

5(長い)	4	3(適切)	2	1(短い)	無回答	
7	20	110	1	0	5	143

2)講師の話し方は、分かりやすかったですでしょうか？

5(わかりやすい)	4	3	2	1(分かりにくい)	無回答	
93	29	16	14	0	1	153

3)講演の内容は、理解できたでしょうか？

5(理解できた)	4	3	2	1(理解できなかった)	無回答	
87	35	17	3	1	2	145

4)講演の内容は今後ネットワーク委員会の活動に活かせるでしょうか？

5(活かせる)	4	3	2	1(活かさない)	無回答	
71	35	26	2	1	3	138

5)1～4までの項目を踏まえて講演会に対する具体的な満足度をお答えください。

5(満足した)	4	3	2	1(満足しなかった)	無回答	
78	38	29	2	2	4	153

⑦伊丹市H小学校区福祉ネット（普及者育成LODE・小学校区つなぎLODE）

【1月30日及び2月7日実施：ワークショップ・調査整理番号 27-11、27-13】

a) 対象コミュニティ

- ・ H小学校区（約5,000戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 平成25年度より、小学校区内を対象エリアとする「H小学校地区福祉ネット会議」を設置（まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、市代表などから構成）。
- ・ 平成25年12月に学校区単位で図上防災ワークショップの講習を開催した（講師役は災害ボランティアネットワーク鈴鹿チーム）。
- ・ 平成26年度は「まち歩きイベント」を実施し、その調査結果を『地区防災マップ』としてまとめた。
- ・ また②のEマンションで実施した平成26年度LODEにも参加した。
- ・ 平成27年度は『地区防災マップ』の印刷を行ったが、そのために地区内の企業を訪問、協賛金の依頼やヒアリング調査を実施した。

c) 実施の経緯

- ・ コミュニティ側のメンバーが講師役を担うことから、倉原PJ側にアドバイス・チェック役の要請があった。
- ・ 1月30日と2月7日の2回、ほぼ同内容の研修会を開催することとし、1月18日に事前準備会を開催した。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、

市代表から成る「H小学校地区福祉ネット会議」組織を構成している。

- ・ その中でリーダーは、中心役を担う民生委員と、それを補佐する民生委員・災害ボランティア数名である。

e) LODE実施の狙い

- ・ これまで2年間学んだLODEを、学校区内の民生委員やコミュニティリーダーたちを対象とした研修会を実施し、学校区内の各单位自治会にLODEの取り組み方を普及させたい（つながりのLODE）。
- ・ コミュニティ側のメンバーに講師役を担ってもらうことで、LODEのファシリテーター・普及者となってもらうための訓練とする（育成LODE）。

f) LODEワークショップ実施前の計画

- ・ 十分な時間をかけて実施前準備を行った。その計画内容は、実際の実施内容とほぼ変わらない。
- ・ 凡例は、地元側検討の結果、独自のものを採用することとなった。企画からファシリテーター役までを務めた地域の民生委員たちが、「100円ショップで用意できる材料でやるのが望ましい」と考えたからである。

表 17：H小学校区において独自に検討し使用した凡例表

NO.	シルシ		項目
1		赤大	65歳以上女性
2		水色大	65歳以上男性
3		ピンク大	障がいのある方
4		黄色大	お助けマン（スケッチ）
5		水色小	中学生・高校生
6		青小	小学生
7		ピンク小	幼児
8		赤小	赤ちゃん
9		赤大+小さい黄色	手助けが必要な高齢女性の方
10		水色大+小さい黄色	手助けが必要な高齢男性の方
11		小さい黄色に「い」	ペット（犬）
12		小さい黄色に「ね」	ペット（猫）

g) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数

- ・ 1月30日：109名
- ・ 2月7日：89名

●実施内容

- ・ 次の表に1月30日研修の内容を整理する。
- ・ 2月7日実施分についても基本的に大差はない。

表18：伊丹市H小学校区での普及者養成LODE・つなぎLODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7
所要時間	5	5	5	10	10	10	10
時刻	13:30～13:35	13:35～13:40	13:40～13:45	13:45～13:55	13:55～14:05	14:05～14:15	14:15～14:25
カテ	導入		導入	LODEとは	自助・助け合い・ふれあいのまちづくり		
タイトル	挨拶	プロジェクトメンバー紹介	ウォーミングアップ	プレゼン： 阪神大震災からDIGへ、 そして今LODEへ	作業：あなたは避難所のマークが書けますか？	作業：あなたが避難所へ行ったとき活かせる特技は何ですか？	作業：あなたはH地区がどんな地域になって欲しいですか？
達成すべき目標	27年度取り組みに関する参加住民のやる気を喚起する	挙手することで、作業へのウォーミングアップを行う	プロジェクトメンバーを知り、作業へのウォーミングアップを行う	防災のための図上WSの意義・意味を理解していただく	参加者にまず「避難所」の存在を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	次に、避難所でできるような自分の役割について想像してもらう。	参加者にLODEの目的が狭義の防災にあるのではなく、まちづくりにつながるものであることを意識してもらう。
生成物	参加住民のやる気	作業しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	参加住民のやる気と理解	参加者たちの「避難所標識」を記したポストイット	参加者たちの「避難所で貢献できそうな特技」を記したポストイット	参加者たちの「まちづくりの目標」を記したポストイット
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	1. 挨拶	スタッフ紹介	作業：「起きてからここに来るまで何人の方と会話をしましたか？」他	プレゼン	作業：「あなたは避難所のマークが書けますか？」を	作業：「避難所でいかにすることができそうなあなたの特技は？」を	作業：「あなたはH地区にどんな街になって欲しいか？」を
	2. 事前説明・研修上の注意・記録撮影の事前告知	今回の研修会を企画・運営する「H小学校地区福祉ネット会議」メンバーを紹介する	1. あてはまるところで挙手願います。 ・10人以上の方は？ ・5人以上の方は？ ・4人の方は？ ・3人の方は？ ・2人の方は？ ・1人の方は？ ・誰も会話していない方は？	次のような内容の説明 ①南部美智代等が阪神大震災後DIGを発売し、さらにそれをLODEへと改良発案した経緯 ②LODE各4文字にこめられた意味 ③LODEはLOVEをもって行うこと	作業指示 ①「あなたは避難所のマークが書けますか？」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「避難所でいかにすることができそうなあなたの特技は？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「あなたはH地区にどんな街になって欲しいか？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す
			2. 結果に対して簡単な評価を述べる		2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。
役割	●司会： ネット会議事務局（伊丹市社協職員庄治） ●挨拶： H地区まちづくり協議会会長 ・ネット会議委員長	●司会： ネット会議事務局（伊丹市社協職員庄治）	●プレゼンター： ネット会議委員Fさん（民生委員）	●プレゼンター： ネット会議委員Fさん（民生委員） ●補助者：LODE四枚のプラカードを持つ4人のネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議委員Fさん（民生委員） ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議委員Fさん（民生委員） ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター： ネット会議委員Fさん（民生委員） ●補助者：各テーブルからポストイット回答を回収するネット会議メンバー
	観察	倉原、延藤、南部	倉原、延藤、南部	倉原、延藤、南部	倉原、延藤、南部	倉原、延藤、南部	倉原、延藤、南部
記録	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本
ツール				●LODEの4文字の意味を説明する4枚を大判用紙に説明書きしたもの（絵入り）。	●ポストイット大、マジックペン（人数分） ●正解となる「避難所のマーク」を大判用紙に説明書きしたもの	●ポストイット大、マジックペン（人数分） ●回答を促すためのイメージイラスト3枚（料理する、掃除する、子供の世話をする）の大判説明書き	●ポストイット大、マジックペン（人数分） ●回答を促すための解答例3つ（笑顔いっぱい地域に、挨拶が行き交う地域に、助け合う地域に）のを大判用紙に説明書き。
場所	H小学校体育館						

表19：伊丹市H小学校区での普及者養成LODE・つなぎLODEの実実施手順（その2）

順番	作業8	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14
所要時間	5	35	10	20	15	5	5
時刻	14:25～14:30	14:30～15:05	15:05～15:15	15:15～15:35	15:35～15:50	15:50～15:55	15:55～16:00
カテ	図上WS			避難所で役に立つ知識の紹介		結び	
タイトル	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：棟別に要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	図上避難訓練作業	避難所段ボールベッドや段ボール簡易トイレの紹介	災害伝言ダイヤルの使い方	まとめと講師	アンケート
達成すべき目標	LODE図上作業のシールの凡例に関して理解を促す	参加住民に「自分の地区や住棟に居る要援護者」を認識してもらう	参加住民に「火災発生時の避難行動、避難ルート」をイメージしてもらう	参加者住民に「防災用品」に対する意識のハードルを下げる（面倒くさいという思いを払拭する）	参加者住民に被災後の変替との連絡方法を理解してもらう	参加者に、外例の目による講師を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の簡易なアンケート調査を行う
生成物	LODEワークショップの基本的手順に関する参加住民の理解	各棟参加住民が認識する要援護者情報（住宅地図または立寄り割図）	各棟参加住民が認識する避難ルートの記された地区防災マップ	参加者住民の物資準備・備蓄等意識の向上	参加者住民の災害伝言ダイヤルに対する認知度や理解の向上	参加住民の次回への意識	今後の参加への意欲とアンケート結果
作業単位	全体	班別グループ（自治会別またはマンション別グループ）	班別グループ（自治会別またはマンション別グループ）	全体	全体で説明及び班別に体験	全体	全体
進め方	各凡例シールの意味を説明する	作業：班員同士話し合いながら、凡例に従って、自宅や要援護者シールを貼っていく	与件：突然笛が鳴り、この会場で火災が発生して自宅まで避難しに備るルートを問う。風向・風速も指示する。	実演プレゼンと体験：段ボールベッドと段ボールトイレの組み立てと説明	実演プレゼンと体験：災害伝言ダイヤルの使い方説明と体験	プレゼン	プレゼン
	凡例シール説明 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	順々に作業指示 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	作業：班員同士話し合いながら、各人が地区防災マップ上にルートを記入する。 2. 一旦風上に回ってから逃げるルートを説明	1. 地元にある段ボール企業の担当者が組み立て実演（段ボールベッドと段ボールトイレ） 2. 参加者住民が思い思いに作る体験、座る体験 3. その他地元の協力・協賛企業の紹介	1. 伊丹市危機管理事務局担当者が117の使用をステップバイステップで全体説明 2. 全体説明に合わせて、各テーブルで1～2名ずつ操作体験	LODEの掲揚者であり、これまで有明地区のアドバイスを担当してきた南郡から簡単な講師を発表	Fさんからお礼と、庄治由美子からアンケートのお願い。 協力者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼント
役割	●プレゼンター：ネット会議委員Fさん（民生委員）	●プレゼンター：ネット会議委員Fさん（民生委員） ●テーブルファシリテータ 各班1名（ネット会議メンバーが担当）	●プレゼンター：ネット会議委員A氏（災害ボランティア） ●テーブルファシリテータ 各班1名（ネット会議メンバーが担当）	●全体コーディネーター ネット会議委員Fさん（民生委員） ●プレゼンター：那理カーテン社員	●全体コーディネーター：ネット会議委員Fさん（民生委員） ●プレゼンター：伊丹市危機管理職員	●講師：南郡	●プレゼンター：ネット会議委員Fさん（民生委員） ●司会：ネット会議事務局（伊丹市社協職員庄治）
観察	倉原、延藤、南郡	倉原、延藤、南郡	倉原、延藤、南郡	倉原、延藤、南郡	倉原、延藤、南郡	倉原、延藤	倉原、延藤
記録	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本	大西、橋、森本
ツール	●凡例表シート（参加者各人に1枚）	●H地区全体防災マップ、及び地区別住宅地図またはマンション棟別立寄り割図、並びに上掲けフィルムシート ●凡例シール各種	●H地区全体防災マップ、並びに上掲けフィルムシート ●マジックペン	●段ボールベッド、段ボールトイレ	●117体験用電話器（各テーブル分）		●アンケート用紙 ●高齢者三種の神器入れ（人数分）
場所	H小学校体育館						

●参加者アンケート

- ・ 1月30日及び2月7日の参加者のうち56名がアンケートに協力してくれたが、参加者の反応は好評であった。

表20：伊丹市H小学校区での普及者養成LODE・つなぎLODE参加者の感想

	大変 よかった	よかった	ふつう	あまり よくなかった	よくなかった
1月30日	7名	13名	1名	0名	0名
2月7日	21名	13名	1名	0名	0名
計56名	28名	26名	2名	0名	0名

●現場写真



写真52：地域のコミュニティリーダーたちが集まった会場（小学校体育館）



写真53：ポストイット作業「避難所のマークを描いてみてください」の集計作業



写真54・55：

H地区の民生委員がファシリテーターとして、事前に準備した説明書きを使って、LODEの意味や、避難時での役割分担について説明している様子



写真56：火災発生時の避難の考え方も、選択肢カードを用意して説明している



写真57：地元企業の協力を得て段ボールベッドの体験



写真 5 8 ・ 5 9 : 地区の地図と中高層住宅の模式図を使いながら図上ワークショップの実施。地図の上にはビニールシートを被せてあり、ワークショップ終了後は下図と別々に保管できる（個人情報管理を考えた対応）。

⑧普及者育成LODE（3月5日名古屋市、3月18日鈴鹿市、3月27日大阪市）

a) 対象コミュニティと実施の狙い

前の⑦で報告した伊丹市H地区の事例は、小学校区等の小さな地域単位現場に根ざした普及者・ファシリテーターの育成LODEワークショップといえるが、一方、より広いエリアで活動・活躍する災害ボランティアや社協職員、さらには議会議員等を普及者へと育成するための試みも重要である。

こうした育成のために、仮想の地域やマンションをモデルとして利用したLODEワークショップを3カ所で実施した。

- ・ 名古屋市（3月5日実施）：愛知県内公明党議会議員【ワークショップ・調査整理番号27-15】
- ・ 鈴鹿市（3月18日実施）：鈴鹿市災害ボランティア【ワークショップ・調査整理番号27-17】
- ・ 大阪市（3月27日実施）：大阪市内の市民団体等【ワークショップ・調査整理番号27-18】

b) 実施内容

●事前準備

マンションの戸割立面図を作成し、その上に仮想コミュニティモデルを設定しておいた。

ELV・階段3カ所タイプモデルケース

701号 80歳女	1・2号のエレベーター・階段	702号 54歳男、52歳女 19歳女	703号 52歳男、50歳女 19歳男、16歳男	3・4号のエレベーター・階段	704号	705号 74歳男、73歳女	5・6号のエレベーター・階段	706号 43歳男、41歳女、 12歳女、10歳男
601号 72歳女、 ★41歳男(知的)		602号 72歳女、★74歳男	603号 ★86歳男、81歳女		604号 57歳女、35歳女	605号 67歳男、63歳女		606号
501号 80歳女、★83歳男 53歳女		502号 60歳男、53歳女 27歳女	503号		504号 ★82歳女、72歳男	505号 81歳女		506号 70歳女、55歳女、 52歳男
401号 68歳男、64歳女		402号	403号 73歳男、★98歳女		404号 63歳女 ●25歳男	405号 64歳男、60歳女 30歳女		406号 71歳男、67歳女、 36歳女、★3歳男
301号		302号 ★84歳女、 ●50歳女、 45歳女	303号 74歳男、72歳女		304号 24歳男、20歳女、 ★2歳男、★0歳女	305号 61歳女、34歳女		306号 65歳女
201号 86歳女 19歳女		202号 87歳男、82歳女	203号 52歳女、20歳男		204号 65歳男、60歳女、 25歳男	205号		206号 45歳男、40歳女、 ●14歳男、 11歳男、9歳男
101号 32歳男、35歳女、 10歳女、8歳男		102号 空き家	103号 ★86歳男、 ★83歳女、 57歳男		104号 70歳男、 ★64歳女(精神)	105号 85歳女、★60歳男 (身体・内部)、35 歳女		106号 72歳男、69歳女

★は要介護・要支援高齢者或いは障がいを持つ方や幼児などの要支援者 ●は引きこもりの方

図 1 1 : モデルコミュニティ（マンション）の設定図事例

●ワークショップの実施

- ・ 通常の地域に根ざしたワークショップでは、要援護者情報を寄せ集めるところに力点が置かれるが、仮想コミュニティモデルを使用する場合には、まずこのモデル設定に従って凡例を貼ってもらい、加えて図中の網掛け部分に作業テーブル各メンバーの仮住居を設定してもらう。
- ・ その後に発災後避難行動シミュレーションを時間をかけて行った。
- ・ また、大阪市の現場では、ワークショップの後に、当PJが現在試案中の「普及者育成支援ツール（仮）」の説明を行った。

●現場観察調査によるポイント

- ・ 名古屋市（議会議員）、鈴鹿市（災害ボランティア）、大阪市（市民団体メンバー・社協職員等）いずれの現場においても、各班テーブルでは、質の高い議論が行われていた。
- ・ ⑦の伊丹市H地区の現場がファシリテーター育成の初級レベルとするならば、前記3カ所の現場はファシリテーター育成の中級レベルと目された。
- ・ 大阪では、ワークショップの後に、当PJが現在試案中の「普及者育成支援ツール（仮）」の説明を行ったが、社協職員やボランティアリーダーたちからは賛同・評価の声が上がった。

●現場写真



写真60：名古屋での育成LODE



写真61：鈴鹿での育成LODE



写真62：大阪での育成LODE

2-3-3. 平成28年度：第二次試行調査

(1) 第二次試行調査の概括的整理

平成28年度は第二次試行調査として、9カ所の地区で計14回のLODEワークショップ・研修会等を実施したが、表22～表24にこれを整理した。表2は調査現場別に所在地、対象コミュニティ、実施日、所要時間、参加者数、対象エリア、タイプや狙い、キーパーソンや参画者、自力度などを、また表3及び表4ではワークショップ等調査時に用いた（導入した）メニューを整理した。

また、(2)～(4)では、本年度実施した個々のワークショップ・調査の中から、「モデル候補」になると考えられる6地区9対象について報告する。ここでは26年度・27年度報告書にて整理したLODEの体系化の考え方等に基づき、次の表1に示すように、「基本LODE（自治会やマンション自治会単位）」、「子どもLODE（子ども対象）」等の対象者別のLODEワークショップと、これ等を繋ぐための「つなぎLODE」、さらには普及者の養成を目指した「育成LODE」に分け、報告する。なお大阪市西成区で実施した地域リーダー対象の研修会（WS・調査整理番号28-10）は、鈴鹿市での同様な研修会（WS・調査整理番号28-1）と内容が似ていることから、ここでの報告は割愛する。

表21：平成28年度に実施したタイプ別の主なLODEワークショップ

LODEのタイプ	基本LODE	子どもLODE	育成LODE
本報告書で報告する現場	伊丹市H地区 K自治会 【都市・混在地区】 WS・調査整理番号 ・ 28- 3	広島市安佐北区 L寺学童教室 【短時間モデル】 WS・調査整理番号 ・ 28- 6 ・ 28-11	鈴鹿市 災害ボランティア 【地域リーダー】 WS・調査整理番号 28- 1 28- 2 28- 4
	伊丹市Eマンション 【都市・マンション】 WS・調査整理番号 28- 9	伊丹市H地区 H小学校 【短時間モデル】 WS・調査整理番号 ・ 28- 7	
	鳥羽市M地区 離島集落全体 【郡部モデル】 WS・調査整理番号 28- 14	鳥羽市M地区 離島集落全体 【長時間モデル】 WS・調査整理番号 28- 13	大阪市 福祉・まちづくり市民団体 社協職員 民生委員 【福祉コーディネーター】 WS・調査整理番号 28- 12
	神戸市灘区 大規模マンション 【大都市・マンション】 WS・調査整理番号 28- 5、28- 8		

表 23 : 平成 28 年度実施 LODE ワークショップ 試行調査の状況 (その 2)

	ワークショップ・調査管理番号	現場所在地	対象コミュニティ	WS等試行調査における実施メニュー:★																								
				1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)	11)	12)	13)	14)	15)	16)	17)	18)	19)	20)	21)	22)	23)	24)	25)
				地域図での図面WS	立面戸割図のテーブル上でのWS	仮想立面戸割図のテーブル上でのWS	立面戸割図の壁掛け式でのWS	五年後LODE図作業	発災時避難行動図上シミュレーション	住戸の表札名を記入してもらう	要援護者数のカウント・確認作業	避難支援マッチングシートの検討・記入	育成支援ツールとしてのチャート図利用WS	導入質問：今日は何人の方と会話したか	導入：班分け：●●の順に並んでみる	導入映像・特に子ども向けの画像学習等	プレゼン：LODEとは	プレゼン：要援護者について説明	プレゼン：要援護者の自助支援グッズ	プレゼン：防災紙芝居	ポスィット等に避難所マークを描く	ポスィット等に、自助とは？を記述	ポスィット等に何を持って逃げるかを記述	ポスィット等に避難所で困ることを記述	ポスィット等に避難所で助けを求めの人を記述	ポスィット等に避難所で生かせる得技を記述	ポスィット等にどんなまちにしたいかを記述	ポスィット等に平時から決めておくことを記述
28-1	三重県 鈴鹿市	災害ボランティア	★	★	★	★										★	★	★		★								
28-2	三重県 鈴鹿市	災害ボランティア															★											
28-3	兵庫県 伊丹市	H小学校区 K自治会	★	★													★			★		★			★			
28-4	三重県 鈴鹿市	災害ボランティア																★										
28-5	神戸市 灘区	大規模マンション																										
28-6	広島市 安佐北区	L寺 学童教室														★			★	★								
28-7	兵庫県 伊丹市	H小学校4年生クラス	★						★							★	★			★					★			
28-8	神戸市 灘区	大規模マンション																										
28-9	兵庫県 伊丹市	Eマンション自治会		★						★		★																
28-10	大阪市 西成区	社協	★		★				★								★	★	★		★							
28-11	広島市 安佐北区	L寺 学童教室	★													★												
28-12	大阪市 中央区	福祉・まちづくり市民団体			★				★				★				★		★		★							
28-13	三重県 鳥羽市	鳥羽市 M地区 (子ども)	★								★								★				★	★	★			★
28-14	三重県 鳥羽市	鳥羽市 M地区 (大人)	★						★		★							★	★				★	★	★			

(2) 基本LODE

①神戸市灘区大規模マンション

a) 対象コミュニティ

- ・ 大規模分譲マンション（計5棟603戸）。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合理事会の下に「防災減災委員会」を設置。
- ・ 平成27年度にプロジェクトアドバイザー及び研究協力者からの紹介を受け、LODEの取組みを開始、LODE図面ワークショップ、第1回防災訓練等を実施した。

c) 今年度実施の経緯と実施の狙い

- ・ 地元防災活動リーダーたちが、住民の参加率がまだまだ低調であると考え、住民意識を喚起する目的で、住民の参加をさらに促し、防災活動への関心を持ってもらうための取組みを行うこととした。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 防災減災委員会委員長（管理組合理事長経験者）以下、委員会の中に数名の熱心なメンバー（大半は防災士である）。
- ・ メンバー中1名は、このマンションを担当する民生委員。
- ・ 管理組合理事会の他メンバーは、防災活動に対してさほど協力的ではない（防災減災委員会メンバー談による）。

e) LODE実施の狙い

- ・ 要援護者の把握をしたい。
- ・ 防災やコミュニティ活動に関し無関心層が多い住民の意識を喚起したい。

f) 実際の実施内容と実施体制

【防災訓練：11月23日実施 ワークショップ・調査整理番号28-5】

●防災訓練実施の狙い

- ・ 参加者が少ないままデータ収集を目的としたワークショップを継続するには限界があり、そのため沈滞気味の住民参加度を上げたい（参加者300名を目標）。
- ・ 住民同士のコミュニケーション増進を図りたい（狙いは垂直避難を促しやすい上下関係の構築、そのための出会いの場の提供）。
- ・ 住民にマンションの防災環境・能力を知ってもらい、関心をもってもらいたい。

●参加者数・協力住戸数

表25：神戸市灘区大規模マンションでの28年度防災訓練参加者数（受付数）

	1番館	2番館	3番館	4番館	5番館	他	計
参加者人数	40名	48名	97名	21名	28名		234名
(参考：前年度参加者数)	(37名)	(39名)	(61名)	(23名)	(24名)	(2名)	(186名)
参加住戸数	26戸	26戸	45戸	13戸	19戸		129戸
安否確認シート貼出し 協力住戸数	87戸	75戸	145戸	32戸	83戸		422戸
全住戸数	131戸	112戸	188戸	58戸	114戸		603戸

●実施内容・手順

08:30 準備開始

09:00 全スタッフ本部前ピロティ（三番館前ピロティ）に集合、

委員長及び役員（本部スタッフ：消防署勤務の住民）より役割分担の確認

09:30 火災発災警報を全館で鳴らす

各住戸は「安全」または「助けが必要」のいずれかの安否確認シートを住戸玄関ドアに貼り出す。

世話人は安否確認シートの貼出し状況の確認調査（全戸調査→本部に報告）。

10:00 避難者は本部前ピロティに集合、各自番館別受付テーブルで受付を済ませます。

各番館リーダーは番館の居住者同士が互いに自己紹介と握手するよう促す

各番館リーダーは参加者人数を本部に報告する

理事長から挨拶、役員より本日の説明

リーダーの引率により、番館ごとに5箇所のポイントを巡ってもらう

①救急法の体験 10分

人形を相手に人工呼吸や心臓マッサージなどの救急法を体験する。

AEDの使い方説明も受ける。

②水消火器による放水訓練 10分

スタッフの説明に従って放水訓練を実施する。事前に練習の必要。

③担架訓練 10分

担架で「60kgの重さ（ペットボトル）」を運ぶ体験。救助用担架の体験。

④携帯型発電機の体験と水リュック運搬体験 10分

カセットボンベ式ガス発電機での充電体験や、6リットル飲料水リュックを背負って歩く体験を行う。

⑤ポンプ室見学と防災倉庫の説明 10分

ポンプ室を見学し、浸水・停電時にポンプが稼働しなくなったときの説明を聞く。

防災倉庫で、保管機器・備蓄用品等について説明を受ける。

⑥防災学習映像の鑑賞コーナー 10分

映像による防災研修を受けて知識を得る。

【番館毎の巡回順】

1番館：①→②→③→④→⑤→⑥

2番館：②→③→④→⑤→⑥→①

3番館：③→④→⑤→⑥→①→②

4番館：④→⑤→⑥→①→②→③

5番館：⑤→⑥→①→②→③→④

10:30 「助けが必要」の安否確認シートを貼出した住戸を友愛ボランティア訪問。

11:00 ポイント巡り終了

11:00 炊き出しコーナー（イカ焼きコーナー、ぜんざいコーナー）で各自食事

13:00 世話役・ボランティアメンバーによる反省会

14:00 片付け開始（14時までに完全終了）

●主な結果

【世話役・ボランティアメンバーによる反省会における意見（24名出席）】

- ・ 昨年と比べ開催時期が1ヶ月以上遅く、寒さも厳しかったが、昨年を超える参加者があったことは評価に値する。
- ・ 400戸以上（全体の7割）の住戸が「安否確認シート」の掲示に協力してくれた。HAT地域全体の訓練の時の協力者は50戸程度だったので、比べものにならないほどであった。少しずつ防災減災委員会の活動が浸透してきているように感じる。
- ・ 1枚だけ「救助してください」という手書きの安否確認シールがあったので訪問した。女性の方が「車椅子に玄関横になかったらデイに行ってるので無事だと思ってください。でも車椅子があったら、中に本人はいるので安否確認してほしい」ということであった。こ

- のような細かなやり取りを重ねていくことが住民からの信頼を得ることに繋がると思う。
- ・ 4～5年前、理事長をやっていた当時は、ここまで活動が発展するとは想像ができなかった。
 - ・ シートに「寒い中ありがとうございます」という手書きのメッセージがあった。確実に、防災減災活動が認知されてきていると思う。
 - ・ 加古川Fマンションのモノマネ活動の部分もあるが、現時点ではそれでも構わないと思う。
 - ・ 参加者から質問が多かったのは、トイレの凝固剤について。少しずつ「我が事意識」が高まってきていると思われる。
 - ・ 災害時トイレが2口だけしかないのかという意見も多かった。
 - ・ 昨年度は、「私一人が踏ん張ってもどうしようもない」と嘆いたのに、今年度は役員、ボランティアの協力人数・協力度合いが全く違う。

●現場写真



写真63・64・65：防災訓練の準備（子どももお手伝い）



写真66・67・68・69・70

左から（受付、担架訓練、簡易発電機、水リュック体験、救急法体験）

【震災祈念灯りイベント：1月14日実施： ワークショップ・調査整理番号 28-8】

●震災記念イベント実施の経緯と狙い（コミュニティ側の考え方）

- ・ 1月17日震災記念イベントの数々は、昨年度までは公的機関がリードする形でこれまで継続されてきたが、今年度からは縮小されていくと言われている。対して当該マンションの防災減災委員会では、世間の縮小気運にかかわらず、将来にわたって震災祈念を担っていきたいという気概を持っている。
- ・ そこで、昨年度に引き続き、住民たちの心に残る、子ども達も参加してくれる震災祈念灯りイベントの継続実施を企画した。

●参加者数

- ・ 子ども18名

- ・ 大人 15名

●実施内容

- 13:00 : 準備開始、サークルルーム内の作業テーブル設営
- 14:00 : 参加者、スタッフ全員がサークルルームに集合、
マンション委員長より挨拶
- 14:10 ~16:00 : 「空き瓶を灯りとして利用するための装飾・制作ワークショップ」
空き瓶の表面に思い思いの絵を描いた布を貼り付ける
- 15:00 ~17:00 : ぜんざいコーナー設置
- 17:00 ~19:00 : 空き瓶灯りを地域の方々に楽しんでもらうための灯りイベント
屋外階段に並べた300個の瓶の中に入れた蝋燭に点灯していく

●観察調査によるポイント整理

- ・ 参加人数は昨年度に比べやや少なかった。今後継続を考えるならば、次年度(3回目)は、さらに居住者たちの参加を得られるように工夫しなければならないと思われる。
- ・ 子どもたちが大人との共同作業に取り組みながら、大人と言葉を交わす場面が多く見られた。
- ・ 隣接するマンション団地からも1名の参加があった。

●現場写真



写真71・72・73：震災祈念灯りイベントの様子

②伊丹市Eマンション【マンション：1月22日実施 ワークショップ・調査整理番号28-9】

a) 対象コミュニティ

- ・ 分譲マンション(計2棟170戸)。

b) 実施前の状況

- ・ 管理組合(所有者組織)と自治会(住民組織)の二輪体制によるコミュニティ。
- ・ LODE図上ワークショップは、自治会主催により、平成26年2月、平成27年2月、平成28年2月と、過去3ヵ年、毎年取り組んできた。

c) 実施の経緯

- ・ 自治会長からの要請。

d) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ マンション自治会長。
- ・ このマンションを担当する民生委員1名(マンション居住者)。

e) LODE実施の狙い

- ・ これまで培ってきたマンション住民間のつながりを維持・増進したい。
- ・ 高齢者がますます多くなるマンションの見守り力を増強したい。
- ・ 図上のワークショップから、実際の防災訓練に繋がられるような内容に取り組みたい。

f) 実際の実施内容と実施体制

- 参加者数と参加者層：35名(うち当該マンション居住者35名)

●実施内容と結果

表 27 及び表 28 に示す。

●観察調査等からの考察

- ・当日は伊丹市社協の防災イベントと日程のバッティングが起こったが、当該マンション住民だけで前年度の 27 名を上回る 35 名の参加者を得た。
- ・入居者全戸の苗字を記入する作業では、「誰が住んでいるか知らない住戸」・「住んでいる人を間違っ認識していた住戸」の合計が 1 戸（全体の 0.6%）に過ぎなかった。35 名（35 戸から 1 名ずつ参加として全体の 20.6%）の居住者が 99.4% の住戸の情報を掴んでいるということがいえる。この数値は、27 年度の数値を 1 割以上上回るものであった。
- ・今回、初めて「要援護者の個別避難支援計画」の検討を班別に行ったが、支援が必要な状況、必要な支援の内容、必要な支援者の人数、支援者候補の特定などを問題なく行うことができた。「要援護者の個別避難支援計画」の検討では、各班の住民たちが、要援護者の状況や世帯事情、さらには当該要援護者とコミュニケーションを取りやすい住民の情報などをきめ細かく把握できていることが判明した。また、当日「認知症予備軍の高齢者」が 2 名参加していたが、周りの参加者たちが、当該高齢者を無視することなく、集団の中で安心して参加できるように対応していたことなど（例えば「●●さん、困ったことがあったら必ず私が駆けつけるから安心してね」という言葉かけなど）は、住民の成長を感じさせるものであった。
- ・取組み開始から 3 年間を経過し、参加住民層（自治会役員や班の中での世話役または世話役経験者が多数）の意識は確実に高まり成長を遂げていると思われる（自治会長、自治会副会長、民生委員、伊丹市社協担当者等へのヒアリングでも確認）。
- ・リーダーの育成面でも、今回初めて自治会長がワークショップの司会を部分的に勤めたり、防災機器の説明役を担ったりと、確実な進歩を遂げている。

表 26：要援護者避難行動支援計画の検討結果（15 名中 4 名分の事例）

2017 年 1 月 22 日伊丹市 E マンション LODE ワークショップ：1・2 班

避難行動支援計画検討結果（発災の想定【災害の内容：震度 6 強の地震。物資の確保等の面から避難所に向かう。】）

住戸 No	要援護のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなれる人は？
掲示しない	その他 (□ダウン症□)	垂直避難(下の階へ) 外部への避難 (避難所)	コミュニケーションをとりながら避難してもらうためのサポートが必要。	2～3 人	・□家族 ・□A-000 の N さんがよくコミュニケーションが取れる。
掲示しない	身体の不自由 (心臓にペースメーカー)	垂直避難(下の階へ) 外部への避難 (避難所)	ペースメーカーが正常に作動していれば大きな問題はないが、誰かが注意してあげた方がいい。	1～2 人	・□仲が良くて鍵も預かっている B 棟 K さん
掲示しない	身体の不自由 (後期高齢者夫婦だが、奥さんの方が退院したばかりで、しかも重病である。移動するのが難しい。)	自宅避難	自力移動は困難なため、自宅避難がベターだと考える。 必要物資の分配や、病状確認、さらには医療機関との連絡のためにサポートが必要。	2～3 人	・□同じ階段の住民たち (WS に参加している)
WS に参加している F さんご自身からの申告	病気や障害を特定はできないが、最近体調等に自信がなくなってきた。万一の時にはサポートしてほしい。	垂直避難(下の階へ) 外部への避難 (避難所)			・□娘家族で足りない場合、WS の皆さんにも支援願いたい。

表 27：伊丹市Eマクションでの基本LODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8
所要時間	30	3	12	2	3	5	20	10
時刻	9:00～9:30	9:30～9:33	9:33～9:45	9:45～9:47	9:47～10:00	10:00～10:05	10:05:00～10:25	10:25～10:35
実際時刻	9:00～9:37	9:37～9:41	9:41～9:53	9:53～9:54	9:54～10:03	10:03～10:05	10:05～10:23	10:23～10:42
カテ	準備	導入			マンションタイプの図上ワークショップ			
タイトル	会場作り・雰囲気作り	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	集合写真撮影	LODEワークショップ 開始	昨年度までのLODE ワークショップのおさ らいと本日作業の意 味の説明	プレゼン：マシ ンLODE図上WS作業手 順の説明	作業：表札を書き込 み要援護者の所在を 凡例シールによって 示す作業	お助けタイム
達成すべ き目標	会場セッティングを行 いながら参加者の緊 張をほぐすために参 加しやすい雰囲気を 創出する。	プロジェクトメン バーや参加者を知 り、作業へのウォー ミングアップを行う	参加者全員で集合写 真を撮影し、作業し やすい雰囲気を創出 する。	和やかな雰囲気に加 え、これからワーク ショップに取り組むた めの意識の転換を促 す。	今回の作業の前段と なる昨年度までの ワークショップの達成 段階を思い出してもら うとともに、本日の作 業の意味も理解して もらう。	一昨年度、昨年度に 続く、マンション LODEワークショップ の手順に関して理解 を促す。	参加者各自に「自分 の近所の住民の顔」 や「要援護者」を思 い出すとともに改め て認識してもらう。	班内のメンバーだけ では思い出せない 「自分の近所の住民 の顔」や「要援護 者」を他班メンバ ーの力を借りて思い 出すとともに改めて 認識してもらう。
生成物	テーブルなどがセッテ ィングされた会場と和 やかで参加しやすい 雰囲気	作業しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	ワークショップに取り 組むための真剣な雰 囲気	今回の作業のスター ト時点認識となる「昨 年度作業までの到達 レベル」と「今回の LODEワークショップ の意味」の理解	マンション立面戸割 図を用いたLODEワー クショップの手順に関 する参加者の理解	各住戸の表札名が書 き込まれ、かつ要援 護者等の情報シール が貼られた立面戸割 図	全参加者の総力によ り、各住戸の表札名 が書き込まれ、かつ 要援護者等の情報 シールが貼られた立 面戸割図
作業単位	各人（末場順）	全体	全体	全体	全体	全体	テーブル別グループ （1～4班）	テーブル別グループ （1～4班）
進め方	参加者の受付時に、 講師側が挨拶し、一 声ずつ声かけし、和 やかな雰囲気を創 る。 あらかじめテーブルを 指定して着席してもら う(4班を予定)	プレゼン 1. 挨拶 2. LODEプロジェク トメンバーを紹介 ①南部 ②橋 ③倉原先生 ④森本、藤本、大西 3. 参加者に4つの 班別テーブルへ移動 してもらう ・1・2班 ・3・4班 ・5・6・7班 ・8・9班 4. テーブル内自己 紹介と班長決定	集合写真撮影 1. 撮影 2. 撮影後、参加者 同士で握手	ワークショップ の開始を宣言 2. 司会役をバトン タッチする橋を紹介	橋から平成27 年度作業の到達点を 示して評価する（平 成26年度と比較す る）。 2. 自主防災の最大 の目的は「顔の見え る関係づくりによる 安心感の獲得」であ ること、それは集合 写真撮影や握手から 始まっていることを 説明。	橋から、まずは 全住戸の「表札名」 を記入する作業を指 示。 2. 続いて、凡例表 に従って要援護者等 の住民シールを貼る 作業を指示。 ①自宅：銀の★ ②乳幼児：オレンジ 丸 ③未就学児：黄色丸 ④小学生：水色丸 ⑤中学生：青色丸 ⑥前期高齢者：紫丸 ⑦後期高齢者：赤丸 ⑧特に配慮や支援が 必要な人：ハート	全住戸の「表札 名」を記入する作 業 2. 凡例表に従っ て要援護者等の住 民シールを貼る作 業 ①自宅：銀の★ ②乳幼児：オレンジ 丸 ③未就学児：黄色丸 ④小学生：水色丸 ⑤中学生：青色丸 ⑥前期高齢者：紫丸 ⑦後期高齢者：赤丸 ⑧特に配慮や支援が 必要な人：ハート	全員の他のテー ブルを回り、自分 が知らなかった 住民情報を得たり、 自分が知る他 班情報を提供し たりという 情報交換作業を 行う。
		5. 最後に参加者に 配布予定の防災・防 災ベルの使用法を説 明する。 6. 集合写真撮影の ために前方への移動 と整列を促す。			3. 南部にマイクを渡 し、南部からもコミュ ニティ関係(住民 同士のコミュニケー ション)が徐々に改 善・構築されてきて いることを評価した。		実際には表札書き 込み作業とシール 貼り作業を並行し て行った。	
役割	マンション側が主に 対応	●プレゼンター：N 自治会長	●コーディネー ター、N自治会長 ●撮影者：O副会長 ほか	●プレゼンター：N 自治会長	●プレゼンター： 橋、南部	●プレゼンター： 橋	●全体コーディネ ーター：橋 ●テーブルファシリ テーター：住民の民生 委員や自治会役員	●全体コーディネ ーター：橋 ●テーブルファシリ テーター：住民の民生 委員や自治会役員
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●受付名簿	●防犯・防災ベル	●集合写真撮影用カ メラ			●凡例表シート(各班 に複数枚) ●A様立面戸割図 (第1・第2テーブル) ●B様立面戸割図 (第3・第4テーブル) ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●凡例表シート(各班 に複数枚) ●A様立面戸割図 (第1・第2テーブル) ●B様立面戸割図 (第3・第4テーブル) ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●凡例表シート(各班 に複数枚) ●A様立面戸割図 (第1・第2テーブル) ●B様立面戸割図 (第3・第4テーブル) ●凡例シール各種 ●マジックペンセット
場所	伊丹市Eマクション共同集會室							

表28：伊丹市Eマンションでの基本LODEの実施手順（その2）

順番	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	作業16
実際順番	9	10	11	12	13	14	15	16
所要時間	10	5	20	10	5	15	5	40
時刻	10:35~10:45	10:45~10:50	10:50~11:10	11:10~11:20	11:20~11:25	11:25~11:40	11:45~11:50	11:50~12:30
実際時刻	10:42~10:49	10:49~10:57	10:57~11:15	11:15~11:23	11:23~11:35	11:35~11:51	11:51~11:54	12:00~12:30
カテ	マンションタイプの図上ワークショップ	要援護者避難支援計画検討作業			結び	結び	結び	会食での意見聴取
タイトル	集計・発表	プレゼン：要援護者避難支援計画検討作業内容の説明	作業：要援護者避難支援計画検討作業	検討結果発表	まとめと講評（その1）	防災関連機器の紹介と体験	まとめと講評（その2）	ヒアリング
達成すべき目標	作業で図示できた表札名や各凡例別の要援護者等について、班別にその人数を集計・全体発表し、マンション全体での表を作成する。	図面作業でハート印がついた方に関して、発災時避難支援計画の検討を行うための方法を示し、シール貼りの作業から一歩「実際の発災時における行動」をイメージ、認識してもらおう。	図面作業でハート印がついた方に関して、発災時避難支援計画の検討を行い、マンションのコミュニティリーダー層である参加者に要援護者避難支援の実際行動へのイメージと認識を持ってもらう。	作業結果としての検討シートの内容を班長から全体発表し、マンション全体での要援護者の避難環境に関する認識を共有する。	参加者住民に、外側の目（講師）による講評を聞いてもらい、次の活動のための意識づくりをおこなう。	自治会で購入した防災機器を披露・説明し、体験してもらうことで、今後の避難訓練に移行して行くための意識づくりを行う。	参加者住民に、外側の目（講師）による講評を聞いてもらい、次の活動のための意識づくりをおこなう。	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の簡易なヒアリング調査を行う。
生成物	「表札書き込み戸数」と「要援護者数」のマンション全体での集計表。加えてそれによってより促進される参加住民のコミュニティや要援護者支援に対する意識。	シール貼りの作業から一歩「実際の発災時における行動」に踏み出した「要援護者避難支援計画」を検討・作成するための意識や認識。	書き込まれた要援護者避難支援計画検討シートと、その検討過程で生成される参加者の意識。	参加住民の、マンション全体での要援護者の避難環境に関する認識と意識。	参加者の今回研修会の意義確認と次回への意識。	今後の避難訓練に移行して行くための参加者の意識や関心。	参加者の今回研修会の意義確認と次回への意識。	今後の参加への意欲とヒアリング結果。
作業単位	テーブル別グループ及び全体	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ及び全体	全体	全体	全体	全体
進め方	集計・発表作業	プレゼン	計画検討作業	発表作業	プレゼン	プレゼンと体験	プレゼン	ヒアリング
役割	●全体コーディネーター：橋 ●発表者：各班班長	●プレゼンター：橋、南部	●全体コーディネーター：橋 ●テーブルファシリテーター：住民の民生委員や自治会役員	●全体コーディネーター：橋 ●発表者：各班班長	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：N会長、O副会長、K民生委員	●プレゼンター：倉原	●コーディネーター：南部 ●補助：橋
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●凡例表シート(各班に複数枚) ●A棟立面戸割図(第1・第2テーブル) ●B棟立面戸割図(第3・第4テーブル) ●凡例シール各種 ●マジックペンセット	●各班で作業結果として残った立面戸割図 ●要援護者避難支援計画シート(A3) ●筆記具(ボールペンなど)	●各班で作業結果として残った立面戸割図 ●要援護者避難支援計画シート(A3) ●筆記具(ボールペンなど)	●各班で作業結果として残った立面戸割図 ●要援護者避難支援計画シート(A3) ●筆記具(ボールペンなど)	●各班で作業結果として残った立面戸割図 ●要援護者避難支援計画シート(A3) ●筆記具(ボールペンなど)	●軽量リヤカー ●折りたたみ式担架 ●非常ライト		
場所	伊丹市Eマンション共同集會室							

●現場写真等



写真74 (: 図上作業の様子)

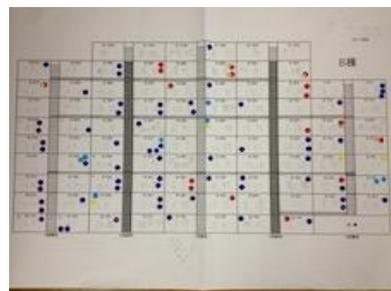
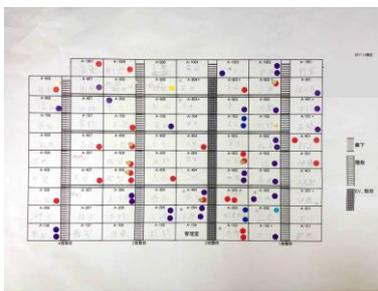


写真75・76 (作業の結果できあがった情報図)

A	0	0	4	20	14	2	39分
A-2	0	10	0	6	12	5	39分
B	0	2	4	3	23	8	43分
B-2	0	1	4	5	35	6	48分
計	0	4	9	12	84	40	167分



写真77・78・79

(左 : 要援護者数等の集計、中 : 防災関連機器の体験、右 : 会食ヒアリング)

③伊丹市H小学校区K自治会

【中高層住宅混在地区 : 9月17日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-9】

a) 対象コミュニティ

- ・ H地区 (小学校区) の中の単位自治会 (戸建住宅とマンションとの混在地区)

b) 実施前の状況と実施の経緯

- ・ 平成25年度より、H小学校区内を対象エリアとする「H小学校地区地域福祉ネット会議」を設置 (まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、市代表などから構成)。
- ・ 平成25年12月に学校区単位で図上防災ワークショップの講習を開催した (講師役は災害ボランティアネットワーク鈴鹿チーム)。
- ・ 平成26年度は「まち歩きイベント」を実施し、その調査結果を『地区防災マップ』としてまとめた。
- ・ 平成27年度は『地区防災マップ』の印刷を行ったが、そのために地区内の企業を訪問、協賛金の依頼やヒアリング調査を実施した。
- ・ 6月から「H小学校地区地域福祉ネット会議」を毎月開催し、当該ワークショップの企画も検討してきた。
- ・ コミュニティ側のメンバーが講師・ファシリテーター役を担うことから、倉原PJ側にアドバイス・チェック役の要請があった。

c) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ まちづくり組織役員、民生委員、災害ボランティア、社協職員、包括支援センター職員、

市代表から成る「H小学校地区福祉ネット会議」組織を構成している。

- ・ その中で当該自治会の会長もネット会議メンバーの一人である。

d) LODE実施の狙い

- ・ これまでH地区で3年間学んだLODEを、Eマンションに続き、学校区内自治会での実
際現場において研修会を実施する（基本LODE）。
- ・ ネット会議側のメンバーに講師役を担ってもらうことで、LODEのファシリテーター・
普及者となってもらうための訓練とする（育成LODEとしての性格）。

e) 実際の実施内容

●参加者数 約30名

●実施内容

- ・ 次頁の表29に9月17日研修の内容を整理する。

●現場写真



写真80・81

(左：凡例表、右：シールで情報の貼られた地図)



写真82

(伊丹市H小学校区K自治会
のワークショップの様子)

表 29 : 伊丹市H小学校区K自治会での基本LODEの実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8	作業9	
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
所要時間	3	5	10	10	10	10	50	7	15	
時刻	14:00~14:03	14:03~14:08	14:08~14:18	14:18~14:28	14:28~14:38	14:38~14:48	14:48~15:38	15:38~15:45	15:45~16:00	
実際時刻	14:10~14:13	14:13~14:22	14:22~14:32	14:32~14:40	14:40~14:48	14:48~15:25		15:25~15:43	15:31~15:58	
カテ	導入	導入	ウォーミングアップ ポストイットワーク	ウォーミングアップ ポストイットワーク	ウォーミングアップ ポストイットワーク	図上WS	図上WS	結び		
タイトル	挨拶	ネット会議メンバー紹介とLODEマップ研修の目的	作業：あなたは避難所のマークが書けますか？	作業：あなたが避難所へ行ったとき活かせる特技は何ですか？	作業：災害が起こった時、あなたに必要なものは？	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：地区や棟別に要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	有岡地区の防災・福祉マップの説明	まとめと講評	
達成すべき目標	参加住民のやる気を喚起する	講師世話役のメンバーとLODEの目的を伝える	参加者にまず「避難所」の存在を考えてもらおう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	次に、避難所でできそうな自分の役割について想像してもらおう。	参加者にLODEの目的のひとつが「自助」であることを意識してもらおう。	LODE図上作業のシールの凡例に関して理解を促す	参加住民に「自分の地区や住棟に居る要援護者」を認識してもらおう	有岡地区の防災・福祉マップについて認識を高めてもらう	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう	
生成物	参加住民のやる気	作業しやすい雰囲気とLODEの目的に対する住民の理解	参加者たちの「避難所標識」を記したポストイット	参加者たちの「避難所で貢献できそうな特技」を記したポストイット	参加者たちの「災害時必要なもの」を記したポストイット	LODEワークショップの基本的手順に関する参加住民の理解	各棟参加住民が認識する要援護者情報(住宅地図または立面戸割図)	参加住民の防災・福祉マップへの認識	参加住民の今後に向けた意識	
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	班別グループ(自治班別またはマンション別グループ)	全体	全体	
進め方	1. 挨拶	1. スタッフ紹介 今回の研修会を企画・運営する「有岡小学校地区福祉ネット会議」メンバーを紹介する	作業：「あなたは避難所のマークが書けますか？」を	作業：「避難所でいかにできそうなあなたの特技は？」を	作業：「災害が起こった時、あなたに必要なものは？」を	各凡例シールの意味を説明する	作業：班員同士話し合いながら、凡例に従って、自宅や要援護者シールを貼っていく	1. プレゼン	プレゼン	
		2. LODEの目的の説明 福田氏は「顔と顔をつなぐことによる安心感」を訴えた。	作業指示 ①「あなたは避難所のマークが書けますか？」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「避難所でいかにできそうなあなたの特技は？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	作業指示 ①「災害が起こった時、あなたに必要なものは？」を2分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	凡例シール説明 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	順々に作業指示 ①自宅 ②65歳以上女性 ③65歳以上男性 ④障がいのある方 ⑤中高生 ⑥小学生 ⑦幼児 ⑧赤ちゃん ⑨手助けが必要な高齢女性 ⑩手助けが必要な高齢男性 ⑪ペット犬 ⑫ペット猫 ⑬お助けマン	防災・福祉マップのできるまで、協力者の方々などについて説明 (15:25~15:31) (15:36~15:39)	LODEの提唱者であり、これまで有岡地区のアドバイスを担当してきた南部やLODEの原初企画者の一人橋、チームの代表者倉原教授からそれぞれ簡単な講評を発表 南部 (15:31~15:36) (15:53~15:58)、橋 (15:43~15:48)、倉原 (15:49~15:53)	
		3. LODE各4文字にこめられた意味の説明	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。	2. 回収されたポストイットを正面ホワイトボード上に分類、整理。全体に傾向を報告。		途中で他の班の作業状況を観察するための時間を確保 (15:12~15:22)	2. 協力組織である包括支援センターのメンバーを紹介 (15:39~15:43)		
		4. 各テーブル上の地図や文具等の確認					2つの作業に分けず、「ひとつひとつ凡例を説明しながらシールを貼る」というように一体的に行われた。			
役割	●挨拶：M町自治会 M会長	●プレゼンター：ネット会議F委員(民生委員) ●補佐：ネット会議民生委員4名	●プレゼンター：ネット会議F委員(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回収を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター：ネット会議委員F(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回収を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター：ネット会議委員F(民生委員) ●補助者：各テーブルからポストイット回収を回収するネット会議メンバー	●プレゼンター：ネット会議委員F(民生委員)	●プレゼンター：ネット会議委員F(民生委員) ●テーブルファシリテータ各班1名(ネット会議メンバーが担当)	●プレゼンター：ネット会議委員F(民生委員)	●講評者：南部、橋、倉原	
観察	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	倉原、南部、橋	
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	
ツール		●LODEの4文字の意味を説明する4枚を大判用紙に説明書きしたもの(絵入り) ●各テーブルにH小学校区防災福祉マップ、マンション戸割図または住宅地図、凡例表、凡例シール、ポストイット、マジックペン等筆記用具	●ポストイット大、マジックペン(人数分) ●正解となる「避難所のマーク」を大判用紙に説明書きしたもの	●ポストイット大、マジックペン(人数分) ●回答を促すためのイメージイラスト3枚(料理する、掃除する、子供の世話をする)の大判説明書き	●ポストイット大、マジックペン(人数分)	●凡例表シート(参加者各人に1枚)	●H全体防災マップ、及び地区別住宅地図またはマンション等別立面割図、並びに上掛けフィルムシート ●凡例シール各種	●H小学校区防災・福祉マップ		
場所	伊丹市くすき会館									

④鳥羽市M地区集落全体【郡部離島地区：3月11日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-9】

a) 対象コミュニティ

- ・ 鳥羽市M地区（離島集落、人口630人、高齢化率45%）の集落全体が対象。
- ・ 平日の日中は、集落の中に児童や学生、通勤者等が不在となり、高齢化率が著しく高くなる特徴をもつ。
- ・ コミュニティは非常に密であり、防災課題も「地震による津波」であることが住民間で共通認識となっている。

b) 実施前の状況と実施の経緯

- ・ 約10年前、南部等が講演で訪問して以来、夏期には「鈴鹿子ども防災サミット」に子どもを派遣する等、災害ボランティアネットワーク鈴鹿とは繋がりがあった。
- ・ しかし、当時以上に高齢化が進み、加えて小学校が廃校になるなど、自主防災組織もこのままでは弱体化を免れ得ないという危機感があった。
- ・ そこで、3月11日の東日本大震災の発災6年後の日に、集落の大人と子供を対象とした防災研修を開催し、それを契機に自主防災組織の強化を図るとともに、再度『要援護者台帳』の作成・更新をするべく、今回の企画を行うこととなった。

c) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 鳥羽市職員であり、自主防災組織の役員でもある居住者S氏が取りまとめ役、連絡調整役を担っている。
- ・ 下村氏の周りには、自主防災組織の仲間が数名いて、非常に連携も上手くとれている。

d) 今回のLODE実施の狙い

- ・ 3月11日の日中に子ども対象の研修会を、またその日の夜にそれを引き継ぐ形で大人対象の研修会を実施して、集落ぐるみで防災活動の再活性化の契機とする。
- ・ 住民には、とりわけ昼間と夜間の防災体制が大きく異なるという課題を認識してもらう。

e) 実際の実施内容

●参加者数 約100名（夜の部の大人の参加者だけの数字）

●実施内容

- ・ 次頁以降の表30・表31に3月11日研修の内容を整理する。

●現場写真



写真83・84（夜間は100名を超える住民が参加）



写真85（更新したい世古別カラー分類の要援護者台帳）

f) 参加者の反応

- ・ 終了時に感想をポストイットに書いてもらったが、ほとんどすべてが好評であり、再度の開催や継続的開催を要望する意見も多かった。

表30：鳥羽市M地区（離島地区）での基本LODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	
実際順番	1	2	分散	5	3	4	省略	省略
所要時間	10		3	3	2	5	12	1
時刻	19:00~19:10		19:10~19:13	19:13~19:16	19:16~19:18	19:18~19:33	19:33~19:45	19:45~19:46
実際時刻	~19:00	19:00~19:31		19:38~19:42	19:31~19:33	19:33~19:38		
カテ	受付		導入			自助について		共助と要援護者について
タイトル	受付・雰囲気作り	雰囲気作り	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	LODEとは	今回のRISTEXの研究開発プロジェクトについて	プレゼン：「高齢者三種の神器」他	作業：「あなたにとっての三種の神器」とは？	プレゼン：なぜ「共助」は必要か？
達成すべき目標	参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を創出する。	子供達の活動を知らせることで、「集落ぐるみ」であることを意識させる。三重県防災ヘリの活動を知らせることで、「防災」への意識を高めさせる。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う	・LODEが重視する「要援護者の情報と支援」の重要性を理解してもらう。 ・普及者育成LODEの意義を理解してもらう。	当研究開発事業に対する参加者の理解・認識を促す。	自助の考え方の一例を学んでもらう。要援護者の生命の危険やQOL低下につながるりかねない事態の一例を学ぶ。	南部からの「東北の高齢者の入れ歯」の話聞いた後、参加者に「あなたにとっての三種の神器とは？」を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	共助の必要に関する参加者の理解を促す。
生成物	和やかに参加しやすい雰囲気	和やかに参加しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	・要援護者対応を重視したLODEに対する参加者の初期的理解 ・普及者育成プログラムに対する参加者の理解	RISTEX研究開発事業及びLODEに対する参加者の理解・認識（背景理解）	要援護者支援の考え方に関する参加住民の理解・認識	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	共助の必要に関する参加住民の理解
作業単位	各人（来場順）	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声かけし、和やかな雰囲気を創る。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。
役割	●挨拶：南部 ●受付：鳥羽市S氏、自主防のS氏外1名	●プレゼンター：南部 ●プレゼンター：U氏	●プレゼンター：南部、M地区S氏	●プレゼンター：南部 ●秘書：橘	●プレゼンター：南部、RISTEX古屋様	●プレゼンター：南部 ●補助者：橘、森本	●プレゼンター：橘	
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本
ツール	●M地区の地図10班分 8班であった		●スタッフ名札	※高齢者が多いのでパワーポイントなどは使わないで、南部からの口頭説明とする。		●高齢者三種の神器入れ実物 ●ポストイット大、ラッシュンペン、ボールペン、 ●模造紙	※高齢者が多いのでパワーポイントなどは使わないで、南部からの口頭説明とする。	
場所	鳥羽市M地区コミュニティセンター大広間							

表31：鳥羽市M地区（離島地区）での基本LODEの実施手順（その2）

順番	作業8	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	
実際順番	作業10で説明	6	7	8	9	省略	11	10	
所要時間	4	5	25	10	10	10	4	12	
時刻	19:46～19:50	19:50～19:55	19:55～20:20	20:20～20:30	20:30～20:40	20:40～20:50	20:50～20:55	20:55～21:00	
実際時刻	作業10で説明	19:42～19:50	19:50～20:08	20:08～20:37	20:37～20:58		21:01～21:03	20:58～21:01	
カテ	共助と要援護者について	桃取地区の図上ワークショップ					結び		
タイトル	プレゼン：主な「支援を必要とする方々」	プレゼン：LODE図上WS作業手順	作業：要援護者や全住民の所在を凡例シールによって示す作業	作業：要援護者各人の状況に関する情報収集作業	作業：「図上避難シミュレーション」夜	作業：「図上避難シミュレーション」昼	本日の評価と課題	まとめと講評	
達成すべき目標	要支援者に関する参加者の理解を促す。	図上作業の手順に関して理解を促す。	参加者各自に「自分の近所にいる要援護者」を認識してもらい、全住民が「夜だけ住民」か「昼も夜もいる住民」かを区別してもらう。	住民同士の密な結びつきをいかして、要援護者のより詳細な情報を提供してもらい、地区自主防組織の要援護者名帳更新に役立てる。	夜間発災時の避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮）のあり方を認識してもらう。	平日日中発災時の避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮）のあり方を認識してもらう。	本日の評価と課題について、ポストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。	
生成物	要支援者に関する参加者の理解	LODEワークショップの基本的手順に関する参加者の理解	要援護者だけでなく全地区の住民情報、及び参加者の要援護者情報表示方法の習熟	各要援護者の状況を記したポストイット（その後、自主防が要援護者名帳を更新する際の参考資料に利用）	夜間の避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	平日昼間の避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	参加者の本日本日成果と課題の共有	参加者の今後への意識	
作業単位	全体	全体	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班） 1～8班	世古（集落）別の班（1～10班）	全体	全体	
進め方	プレゼン	プレゼン 作業	作業：凡例に従って年代シール・要援護者シールを貼っていく	作業：各班作業でリストアップされた要援護者一人一人の状況（援護を必要とする状況や寝ている場所など）をポストイット（1人1枚）に記入してもらう。	作業：地震発生、その後津波発災の与件発表の下、図上で各自行動及び班単位での役割分担シミュレーションを行う。	作業：地震発生、その後津波発災の与件発表の下、図上で各自行動及び班単位での役割分担シミュレーションを行う。	ポストイット作業：「本日の感想（良かったところや反省点）」について	プレゼン	
進め方	橋からシール凡例表に従って説明 ①子ども：Lについて説明 ・ADHDタイプやASDタイプも ②高齢者 ・認知症について ③障害者：Dについて説明 ・身体（内部や重度含む） ・知的（重度心身含む）や精神（てんかん含む）	橋から、 ①図上作業手順について説明する。 ②再度要援護者等の凡例を説明する。 橋からではなく、まず南部から「図上に自宅シールを貼る」という作業指示から開始となった。	【年代】 ①乳幼児：オレンジ丸 ②未就学児：黄色丸 ③小学生：水色丸 ④中学生：青色丸 ⑤後期高齢者：赤丸 ⑥超後期高齢者：ピンク丸 ⑦屋間いる大人（19～74）：緑 ⑧夜しかいない大人（19～74）：星 【要援護】 a身体的支援：銀色丸 bコミュニケーション支援：金色丸	全場が演習で賑やかであったため、個別支援計画検討では高齢者・要援護者数を把握するための集計作業を行った。	①コーディネーターから発災時の与件を発表する（日時、地震規模、天候、火災や津波の発生など）。 ②それに対してグループ単位で、各自行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。	①コーディネーターから発災時の与件を発表する（日時、地震規模、天候、火災や津波の発生など）。 ②それに対してグループ単位で、各自行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。 時間の関係上、今回は「夜の避難」の検討だけにした。	1.南部美智代から次のような作業指示 ①「本日の感想は？」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	南部及び倉原先生、さらに自主防の代表から簡単な講評を発表してもらう	
		凡例表と凡例シールを各班に配った。			③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう	③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう		M地区がステージとなった絵本『津波が来るぞ逃げやなあかん』も紹介された。自主防災組織に寄贈された。	
役割	●プレゼンター：橋	●プレゼンター：橋 ●プレゼンター：南部	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役をお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役をお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役をお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役をお願い）	●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター 各班1名（自主防メンバー、各自治会世話役をお願い）	●講評者：南部さん ●講評者：自主防代表	
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	
記録	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	大西、森本	
ツール	●全員に凡例表（200枚）	●凡例表シート（各人1枚） ●M地区地図（各班分の枚数） ●凡例シール各種（各1枚）	●凡例表シート（各人1枚） ●M地区地図（各班分の枚数） ●凡例シール各種（各1枚）	●M地区地図（各班分の枚数） ●ポストイット（各班、要援護者の人数分以上の枚数） ●ラジックペン	●作業10を経た地域図（10班分）→8班 ●上掛けフィルムシート（10班分）→8班 ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各人1枚） ●マジックペン	●作業10、11を経た地域図（10班分）→8班 ●上掛けフィルムシート（10班分）→8班 ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各人1枚） ●マジックペン	●ラジックペン ●ポストイット（高齢者が多いため細かい作業が負担になる。良かったところと反省点に分けず、感想を書いてもらう）	●防災絵本『津波が来るぞ逃げやなあかん』	
場所	鳥羽市M地区コミュニティセンター大広間								

(3) 子どもLODE

①兵庫県伊丹市H小学校（小学校授業でのLODE研修）

【小学校：1月12日実施 ワークショップ・調査整理番号28-7】

a) 対象コミュニティ

- ・ 小学校児童（4年生学年全員120人）。

b) 実施前の状況と経緯

- ・ 小学校区の民生委員や自治会リーダー、まちづくり協議会役員等に加え、社会福祉協議会、市役所担当課が参画して組織する団体「地域福祉ネット会議」では、平成27年度1月・2月に開催した校区全域対象のLODE研修会（合計200名以上参加）に引き続き、LODEを子どもに普及させるために、学校を巻き込んだ取り組みを企図していた。
- ・ かねてよりネット会議の防災福祉活動に大きな理解を示していた小学校校長から、「4年生で1時限のコマであれば防災授業に使うことが可能」という提案を受け、平成28年7月から毎月「小学校子どもLODE」実施企画会議を重ねてきた。

c) 子どもLODE実施の狙い

- ・ 子どもを徐々に引き込んでいくためには、毎年小学校の授業で取り入れられれば理想的である。
- ・ その後子どもから親世代（PTAなど）へと波及していくことができれば、自治会のLODEに参加しない世代を引き込むことができる可能性がある。

d) 小学校での子どもLODE実施企画のポイント

- ・ 45分間という短い時間であるが、今の子どもの集中力は長時間持続しないので、この程度の短い時間でプログラムを作る方がベターではないかという考えのもと企画検討を重ねた。
- ・ 集中力持続のためには、子どもの関心を引きつける工夫が不可欠であるため、クイズ形式を取り入れることとする。
- ・ 同様に、今の子どもは会話によるコミュニケーション力が昔の子どもと比べて劣っているのではないかと思われる（兵庫県小学校教師からのアドバイス）。そこで、プログラムの初期に映像を取り入れることで理解を促す工夫を施すこととした。
- ・ 子どもたちの関心を引きつけることができた場合は、1対1のインタビューや質問形式を導入して、子どもたちに大人と会話（生のやりとり）させる。これによって会話によるコミュニケーションの大切さを少しでも感じてもらう。
- ・ 対象が小学校4年生であることから、複雑な地図読みを求められる難易度の高い図上作業は難しい。そこで、「地図に関心を持ってもらう」や「自宅や学校などの位置を図上でわかるようになる」というところに図上作業の目標を置いた（下げた）。

e) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数：子ども120名

●実施内容と結果

24頁の表12に示す。

●観察調査等からの考察

- ・ 45分（若干オーバーして50分）という短い時間の中で効率的に進めることができた。
- ・ つまらなさそうにしている子どもや手持ち無沙汰な子どもの姿はほとんど目に入らなかったことから、映像メニューやクイズを導入したことは正解といえるだろう。
- ・ これらのことは、後に報告する広島市安佐北区の事例でも同様な傾向がうかがえることから、「子どもLODE短時間プログラム」として有効な進め方になると考えられる。
- ・ 子どもたちの事後アンケートでは、「これから、このような地域の行事があれば参加したいですか?」という質問に対し120名中80名（約66%）が「はい」と答えているこ

とから、子どもたちにも概ね好評であったと思われる。

- 当日の総合ファシリテーターを務めた民生委員のF T氏は、平成25年9月に初めて南部美智代がコーディネートする防災ワークショップに参加して学んだが、以来2年半、南部のワークショップに数回参加し、その後28年1月・2月に有岡地区の「つなぎLODE」の総合ファシリテーターを務めた。今回は、他のネット会議メンバーや社協職員も絶賛するほどの絶妙な仕事ぶりであった。
- F T氏が学び始めてから初めてLODEファシリテーターを務めるまでに2年間、今回の小学校でのファシリテーターを務めるまでには3年間要している。したがって、ファシリテーターや普及者の育成には2～3年は必要になると思われる。

●現場写真



写真86・87・88（災害の映像や、絵パネルなどの利用でわかりやすく工夫）



写真89・90・91（クイズ形式、絵パネルのヒントで活発な回答を引き出す）



写真92・93・94（地図ワークは、4年生でもわかるように易しい内容で実施）

表32：伊丹市H小学校授業での子どもLODE（短時間モデル）の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8
所要時間	5	5	5	3	5	7	7	8
時刻	11:40～11:45	11:45～11:50	11:50～11:55	11:55～11:58	11:58～12:03	12:03～12:10	12:10～12:17	12:17～12:25
実際時刻	11:40～11:45	11:45～11:49	11:49～11:55	11:55～11:57	11:57～12:02	12:02～12:15	12:15～12:20	12:20～12:30
カテ	導入		LODEとは	避難所についての学習	避難所についての学習	避難所についての学習	避難所についての学習	地図ワークとアンケート依頼
タイトル	開始合図 講師・世話役メンバー紹介	災害関係映像学習	LODEについて	質問「避難所マーク知ってる？」	クイズ「身近な避難所にはマークはどこにありますか？」	避難所映像学習	質問「小学校4年生でも避難所ができることは？」	地図作業とアンケート依頼
達成すべき目標	講師や世話役を知り、作業へのウォーミングアップを行う。	子供達を防災の内容に引き付けるために、防災映像による学習を行う。	LODEの文字に込められた意味（弱者もみんな逃げられるコミュニティの関係作りが大事だということ）を理解してもらう	LODEの意味の学習の後、集中力を切らすことのないように、内容を変えた質問を出して関心を引きつける。加えて、避難所マークを学習させ、日本のどこでも適用するものであることを教える。	作業4で知った避難所マークが、わがまちでも各所（公共施設中心）に掲示されていることを、クイズ形式で確認させて、避難所マークの定着を図る。クイズ形式導入によって、子供達の集中力を途切れさせない。	避難所の映像を使用して、作業3・4で学んだ避難所について、その内実・内容を知るための学習をさせる。	子供達に、「もし今災害があった避難所生活をする場合、自分はどう役に立っているのか？」を考えてもらい、万に備えた意識を持ってもらう。	小学校4年生として、最低限「自宅の場所」、「避難所になると思われる学校の場所」を覚えてもらう。
生成物	作業しやすい雰囲気	子供達の災害や防災に対する関心の高まり。	なぜ顔の見えるコミュニティが大事なのかということに関する子供達の理解	子供達の集中力と、避難所マークに対する関心、そして避難所マークの知識	子供達の集中力と、避難所マークに対する関心、そして避難所マークの知識	子供達の集中力の持続と、避難所に対する関心と知識を高める。	ホワイトボードに書き込んだ子どもたちからの回答。避難所生活における子供達の貢献意識。	児童各人（全員）が自宅の場所と学校の場所をシールを貼って示した「H小学校区防災福祉マップ」。地図上における自宅と学校の位置に関する子供達の理解。事後、アンケートの結果。
作業単位	全体	全体	全体	全体	グループ別（1～12班）	全体	全体	グループ別（1～12班）
進め方	プレゼン	映像によるプレゼンと質問	プレゼンと質問	プレゼンと質問	プレゼンと質問	映像によるプレゼンと質問	プレゼンと質問	図上作業
役割	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員）	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員）	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員） ●プレゼン補助：ネット会議所属民生委員・地域包括職員4名	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員） ●プレゼン補助：ネット会議所属民生委員1名	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員） ●各班指導者：ネット会議の大人たち12名	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員）	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員） ●書記役：ネット会議メンバー1名	●プレゼンター：ネット会議F副委員長（民生委員） ●各班指導者：ネット会議の大人たち12名
観察	橋	橋	橋	橋	橋	橋	橋	橋
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●各班に人数分の「H小学校区防災・福祉マップ」	●ノートパソコン、プロジェクターとスピーカーシステム ●阪神大震災時の映像資料	●LODEの4文字の意味を説明する4枚を大判用紙に説明書きしたものを（絵入り）。	●正解となる「避難所」のマークを大判用紙に説明書きしたもの	●各班に、3枚ずつ「公共施設に避難所マークが掲示されている写真（A3版でラミネット加工済み）」を裏返して配置。	●ノートパソコン、プロジェクターとスピーカーシステム ●阪神大震災時、中越地震時等の避難所画像・映像資料	●回答を促すためのイメージイラスト4枚（食事配布、掃除、肩たたき、歌を歌う）の大判説明書き ●大型ホワイトボード	●各班に「H小学校区防災福祉マップ」 ●各班に人数分の「赤いシール」と青いシール
場所	伊丹市H小学校ホール							

②広島市安佐北区L寺学童教室（小学生子育て支援の場）

a) 対象コミュニティ

- ・ 私立のL寺が毎月一度開催する「土曜学校」に参加する小学校児童（低学年～高学年まで約20名）。

b) 実施前の状況と経緯、及び子どもLODE実施の狙い

- ・ 安佐北区は平成26年の広島豪雨災害の被災地のひとつである。研修会の会場となった寺は、やや高台に位置するものの、昔から境内に洪水時避難用の船を置いていた歴史をもつ。
- ・ この地域で育つ子どもたちに、防災教育が必要と考えた住職から相談を受け、子どもLODEを開催することとした。

c) 子どもLODE実施企画のポイント

- ・ 土曜学校が60分間という短い時間での定期開催であることから、1回あたり60分を厳守し、12月と2月の2回実施することとした。
- ・ 12月は南部の「高齢者三種の神器箱」づくりメニィーを中心として実施することとした。
- ・ 2回目の2月は、地図ワークに中心とすることとした。低学年の児童が少なくないことから、高度な地図ワークではなく、必要最低限の内容のものとした。
- ・ 今の子どもの集中力は長時間持続しないので、集中力持続のためには、子どもの関心を引きつける工夫が不可欠であるため、クイズ形式を取り入れることとする。
- ・ 同様に、今の子どもは会話によるコミュニケーション力が昔の子どもと比べて劣っているのではないかと思われることから、プログラムの初期に映像を取り入れることで理解を促す工夫を施すこととした。

d) 実際の実施内容

【1回目：12月10日午前9時～10時実施 ワークショップ・調査整理番号28-6】

●参加者数：子ども15名

●体制：倉原、南部、橘、森本、大西の他、広島の協力者による体制。

●実施内容と結果

- ・ 変わる画像の防災クイズで導入（約12分間）
- ・ 南部から東日本大震災と「貝殻雛」のお話（約10分間）
- ・ 南部から「一番大事にしているものは」の質問と「高齢者三種の神器」の講話（約13分間）
- ・ 南部の指導による「三種の神器入れを高齢者にプレゼントするときのメッセージカードづくり」（約10分間）
- ・ 南部による防災絵本『津波が来るぞ、逃げやなあかん』の読み聞かせと絵本贈呈（約12分間）

●観察調査等からの考察

- ・ 画像を使ったクイズの時間は、子供達は活発であった。
- ・ その後の南部のお話タイムでは、低学年が多いことからか、なかなか集中力が持続しない様子をうかがうことができた。飽きさせないように工夫しないと、大人の話の数分以上継続して聴くことは難しいようであった。

●現場写真



写真95・96 (寺の本堂での開催)

写真97・98 (高齢者にプレゼントする三種の神器箱にメッセージを貼付け)

【2回目：2月11日午前9時～10時実施 ワークショップ・調査整理番号28-11】

●参加者数：子ども15名

●体制：倉原、橘、森本、大西の他、広島の協力者による体制（南部不在）。

●前回と異なる工夫

・クイズ形式、質問形式以外で、長い時間（数分以上）話を聞かせるのは難しいと考え、短時間で目先が変わるメニューとした。

●実施内容と結果

表33に示す。

●観察調査等からの考察（倉原、橘、森本、大西、住職による反省会での意見）

- ・ 前回より、子どもたちを引きつけることができたと思われる。
- ・ 小学生の場合、1回2時間以上の長時間プログラムよりも、短時間の取り組みを継続して重ねる方が、取り組みやすのではないかと考えられる。
- ・ 今回のやり方であれば、南部でなくともコーディネートができるのではないか。

●現場写真



写真99・100 (新聞スリッパづくり)

写真101 (茂木健一郎博士のアハクイズ形式に防災クイズを加えた新しいクイズは子供達に好評)



写真102・103 (シールを貼る面白さからか、図上作業にも夢中になる)

表33：広島市安佐北区L寺学童教室での子どもLODE（短時間モデル）の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6
実際順番	1	3	2	4	5	6
所要時間	10	10	5	3	5	7
時刻	9:00～9:10	9:10～9:20	9:20～9:30	11:55～11:58	11:58～12:03	12:03～12:10
実際時刻	09:00～09:09	9:20～9:36	9:09～9:20	9:36～9:42	9:42～9:46	09:46～10:00
カテ	導入		防災グッズづくり	地図ワーク	地図ワーク	地図ワーク
タイトル	開始合図 講師・世話役メンバー紹介	災害画像利用学習	新聞スリッパづくり	地図で自分の家を探す	クイズ「どうしてL寺は安全なのか」	いざという時に立つ場所・機能
達成すべき目標	講師や世話役を知るとともに災害に対して関心を持たせることで、作業へのウォーミングアップを行う。	子供達を防災の内容に引き付けるために、災害画像を利用した防災クイズによる学習を行う。	手を動かす工作・制作ワークショップで、子供の集中力を持続させる。	小学校低学年の子供たちにも最低限地図上で「自宅の場所」を探せるようにする。	会場であるL寺は、昔から河川氾濫、土砂災害両面において安全な場所と言われる。その安全性を地図上からも理解させる。	地域の中で、医療機関や公衆電話、水や土砂に強い避難場所（指定にこだわらない）の場所を意識させる、覚えさせる。
生成物	防災の取組みに向けて作業しやすい雰囲気	子供達の災害や防災に対する関心の高まり。	新聞スリッパ、子供達の避難所の生活に対する想像や意識。	子供たちが「地図上で自宅の場所がわかる」ようになること。及びシールを貼った地図。	子供達の「当該地域における安全な土地とは？」の認識。及びシールを貼った地図。	子供達の「当該地域における安全な土地とは？」や「万一の時に身を守れそうな場所」に対する意識。及びシールを貼った地図。
作業単位	全体	全体	全体	グループ別（1班・2班）	グループ別（1班・2班）	グループ別（1班・2班）
進め方	プレゼンと質問	パワポ画像による防災クイズ	作業	図上作業と質問	図上作業と質問	図上作業と質問
役割	●プレゼンター：橘	●プレゼンター：橘 ●画像操作：谷口	●プレゼンター：森本 ●プレゼン補助：倉原	●プレゼンター：橘 ●テーブル補助：森本、谷口	●プレゼンター：橘 ●テーブル補助：森本、谷口	●プレゼンター：橘 ●テーブル補助：森本、谷口
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●ノートパソコン、プロジェクター ●変化する画像（パワポ）	●人数分の古新聞	●安佐北区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール	●安佐北区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール	●安佐北区深川のうちZ寺周辺部分の住宅地図（各班分） ●凡例シール
場所	広島市安佐北区L寺本堂					

③鳥羽市M地区集落全体の子ども

【郡部離島地区：3月11日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-13】

a) 対象コミュニティ

- ・ (2)の④で「基本LODE」を実施した鳥羽市M地区（離島集落、人口630人、高齢化率45%）の子どもが対象。
- ・ 昨年度小学校が閉校になるなど、少子化が顕著で、小中学生全員でも20名に足りない。
- ・ このように超高齢化が進む島にあって、小中学生はもはや「守られる対象」ではなく、「高齢者を支援するための貢献」を求められるか、そうではなくとも「自分の身は自分で守れる子ども」であることが求められている。

b) 今回の子どもLODE実施の狙い

- ・ 3月11日の夜間に大人対象の大規模研修会を実施する予定である。この大研修会に先駆け、かつ成果を引き継げる形で、同日昼間に子どもLODEを開催し、「集落ぐるみで防災活動の再活性化」の契機とする。

d) 実際の実施内容

●参加者数 子ども14名（中学生3名を含む）

●実施内容

- ・ 表34に3月11日研修の内容を整理する。
- ・ 伊丹市や広島市のような1時間程度の短時間の取組みではなく、長時間モデルともいうべき3時間以上のものとなった。これはフィールドワークを実施したからである。

●現場写真



写真104（コミセンに集合）



写真105・106（2人1組の班で高齢者宅訪問インタビュー調査）



写真107（フィールドワークから戻って整理作業をします）



写真108（整理した結果を地図上にシールを貼って図示する作業）



写真109（調査結果図）

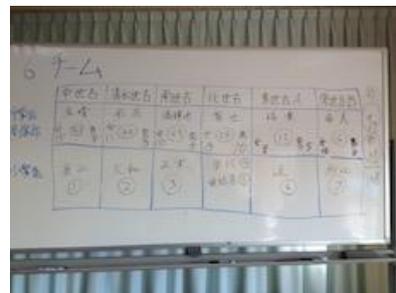


写真110（調査結果集計作業）

表34：鳥羽市M地区での子どもLODE（長時間モデル）の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7
実際順番	1	2	3	4	5	6	7
所要時間	5	10	25	80	15	20	10
時刻	13:00～13:05	13:05～13:15	13:15～13:40	13:40～15:00	15:00～15:15	15:15～15:35	15:35～15:45
実際時刻	13:03～13:08	13:08～13:23	13:23～13:45	13:45～15:00	15:00～15:48	15:48～16:00	16:05～16:41
カテ	導入	本日のミッション説明と作業班分け	出発準備	フィールドワーク調査	休憩	整理・集計作業	まとめ
タイトル	開始合図 講師・世話役メンバー紹介	本日のミッション説明と作業班分け	トランシーバー取扱い説明	高齢者宅を訪問してヒアリング調査	休憩	整理・集計作業	まとめ
達成すべき目標	講師や世話役を知るとともに災害に対して関心を持たせることで、作業へのウォーミングアップを行う。	子供達に本日の仕事の内容を伝え、意識させる。その実施体制を決める。	フィールドワークに使用するトランシーバーの使い方をおぼえさせる。	子供達にお年寄りを戸別訪問させて、聞き取り調査をさせる。子供達のお年寄りに対するコミュニケーション能力を高める。	後半の整理作業に向けて休憩をとり、集中力を回復させる。	フィールド調査の結果を整理集計し、その状況を子供達に定着させる。	まとめることによって、子供達の頭の中に、本日の記憶を残し、定着へと繋げる。
生成物	防災の取組みに向けて作業しやすい雰囲気	子供達のミッション遂行意識	子供達のトランシーバー取扱い技術	子供達が調査したお年寄りに関する調査結果。	子供達の集中力の回復。	シールを貼って高齢者状況を整理した地図と、全体の集計表。	子供達の中に残る本日の記憶。
作業単位	全体	全体	全体	グループ別（1班～6班）	全体	全体	全体
進め方	プレゼンと質問	プレゼン	プレゼン作業	フィールドワーク調査	<p>おやつが終了後、小学校グラウンドで、三重県U氏による「ドローンの操作・飛行」が行われた。</p> <p>ドローンと一緒に集合写真を撮影した。</p>	図上整理作業と集計作業	プレゼン
	<p>1. 南部挨拶</p> <p>2. メンバーを紹介</p> <p>①災害VNW鈴鹿（I、K）</p> <p>②県外（倉原、橋、森本、大西）</p> <p>③学識者（古屋氏）</p> <p>④その他（市役所Y氏）</p> <p>⑤特別（三重県U氏）</p>	<p>1. 本日の仕事はフィールドワーク調査</p> <p>①高齢者三種の神器箱をお年寄り宅に訪問して渡す</p> <p>②家族構成や災害時避難行動の質問調査を行う（家族人数、どこへ逃げるか、なぜ逃げないか等）</p> <p>③訪問先をバインダーの地図に記録</p> <p>2. 班分け作業</p> <p>・中学生（または小学校高学年）+小学生の2人体制に大人が付き添う。</p> <p>・北世古、中世古、南世古、清水世古、東世古A、東世古Bの6班</p>	<p>1. 災害VNW鈴鹿の伊藤さんからトランシーバーの使い方を説明</p> <p>トランシーバーという道具は子供達の関心をすぐに引きつけることができた。</p>	<p>1. 1班あたり20軒程度の訪問調査（高齢者宅）を行った。それぞれの戸口で次の内容を高齢者に聞き取り調査する。</p> <p>①今日訪問した理由（調査）</p> <p>②三種の神器箱の説明と手渡しプレゼン</p> <p>③質問・家族構成・地震・津波の際の避難行動や避難先・行動の理由</p> <p>中学生や上級生が会話をリードしながらも、小学生にもできるところを分担させていた。6班合計で108人の高齢者宅を調査した（集落の高齢者の4割）。</p>		<p>1. 次のように進める。</p> <p>①自分の家には地図上に星印シールを貼る。</p> <p>②訪問先（おばあさん）には地図上に紫色シールを貼る。</p> <p>③訪問先（おじいさん）には地図上に紫色シールを貼る。</p> <p>2. 赤いシール、紫色シールの数をカウントして、その数値を全体に向けて発表・報告する。</p> <p>3. 全体集計シートをホワイトボードに整理する。</p>	<p>倉原、南部、古屋さんからの講評</p> <p>子供達から郷土芸能の太鼓披露があった。</p> <p>三重県U氏からヘリコプターによる救助活動やドローンの災害時利用などについて講演があった。</p>
役割	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部 ●補助：橋	●プレゼンター：I ●補助者：K、南部	●調査同行・安全確保：大人が一人ずつ	●プレゼンター：U氏	●プレゼンター：南部 ●補助：橋	●プレゼンター：南部、倉原、U氏
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●高齢者に配布する「高齢者三種の神器箱」	●人数分のトランシーバー	●人数分のトランシーバー ●班に1部ずつバインダー ●高齢者三種の神器箱（1班あたり20箱まで）	●ドローン	●集落の地図 ●シール（赤、紫） ●ホワイトボード	
場所	鳥羽市M地区コミュニティセンター						

(4) 育成LODE

①鈴鹿市（災害ボランティア対象）

a) 対象コミュニティ

- ・ 主として鈴鹿市内の災害ボランティア。

b) 実施前の状況とLODE実施の狙い

- ・ これまで十数年間にわたって、南部等が育成してきた災害ボランティア人材が存在するが、この人材をより福祉的な認識・意識を備えたLODE普及者へと成長を促す目的で「育成LODE」を実施することとなった。

c) 実施の経緯

- ・ 特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿からの呼びかけ・募集。

d) 実際の実施内容と実施体制

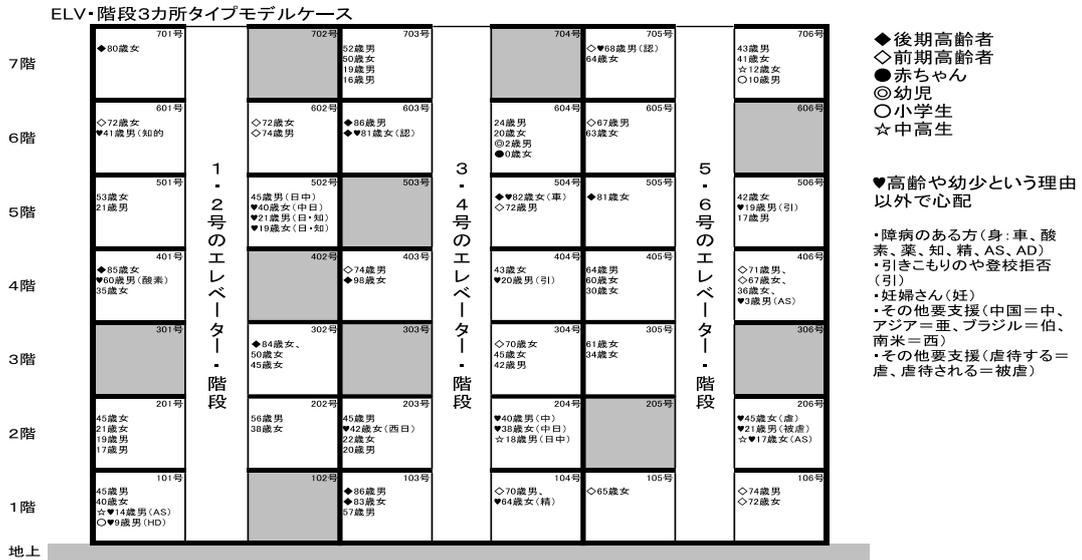
【育成LODEワークショップ：6月3日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-1】

- 参加者数と参加者層：43名（うち行政2名、市議4名、メディア2名を含む）

●実施内容と結果

- ・ 表35・36に示す。
- ・ なお、今回の育成LODEでは、様々な地域からの参加者のため、特定の地域やマンションをステージにした図上ワークショップを行うことはさほど意味を持たないと判断し、「仮想のマンションコミュニティ（図12参照）」を作成し、使用した。この仮想コミュニティは、全国平均から見て高齢者の比率や要援護者の比率などをやや高めに設定したが、「ヘルパー初任者研修レベルの福祉知識」を目安に設定・作成した。

図12：育成LODEで使用した仮想コミュニティ図



●参加者意見による考察

- ・ 「良かったところ」と「課題点」の参加者アンケート結果を表37に示す。
- ・ とりわけマンションでの防災問題と障害者など要援護者に関してより知りたいという関心の高さをうかがうことができる。

表35：鈴鹿市での育成LODEの実施手順（その1）

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8	作業9
実際順番	1	3	2, 4, 15	2, 4	5	6	7	8	9
所要時間	30	3	3	3	2	12	3	1	5
時刻	18:30～19:00	19:00～19:03	19:03～19:06	19:06～19:09	19:09～19:11	19:11～19:23	19:23～19:26	19:26～19:27	19:27～19:32
実際時刻	18:00～18:40	18:40～18:44	18:35～20:57	18:40～19:00	18:53～18:56	19:00～19:08	19:08～19:17	19:17～19:21	19:21～19:29
カテ	受付	導入			自助について			共助と要援護者について	
タイトル	受付・雰囲気作り	挨拶 阪神大震災からDIGへ そして今、LODEへ	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	LODEとは 育成LODEとは	今回のRISTEXの研究開発プロジェクトについて	作業：あなたにとって「自助」とは？ 19:03	プレゼン：「高齢者三種の神器」他 19:11～	プレゼン：なぜ「共助」は必要か？	プレゼン：主な「支援を必要とする方々」
達成すべき目標	参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を出す。	防災のためのDIGからLODEへの流れの意義・意味を理解してもらう。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う	・LODEが重視する「要援護者の情報と支援」の重要性を理解してもらう。 ・普及者育成LODEの意義を理解してもらう。	当研究開発事業に対する参加者の理解・認識を促す。	参加者にまず「自助」とは？を覚えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を学んでもらう。要援護者の生命の危険やQOL低下につながるかねない事態の一例を学ぶ。	共助の必要に関する参加者の理解を促す。	要支援者に関する参加者の理解を促す。
生成物	和やかで参加しやすい雰囲気	参加者のやる気とLODEに対する理解	作業しやすい雰囲気	・要援護者対応を重視したLODEに対する参加者の初期的理解 ・普及者育成プログラムに対する参加者の理解(18:57～19:00)	RISTEX研究開発事業及びLODEに対する参加者の理解・認識(背景理解)	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	要援護者支援の考え方に関する参加住民の理解・認識	共助の必要に関する参加住民の理解	要支援者に関する参加者の理解
作業単位	各人(末場順)	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声かけし、和やかな雰囲気を創る。 その後、ワークショップのスタートまでにお茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	ブレゼン	ブレゼン	ブレゼン	ブレゼン	作業：「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を	ブレゼン	ブレゼン	ブレゼン
		南部美智代から次のような内容の説明 ①阪神大震災後DIGを発売した経緯 ②さらにLODEを発売した経緯 ③LODEはLOVEをもって行うこと	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ②プロジェクト代表 倉原先生 ③研究メンバー：延藤先生 ④研究メンバー：橋、大西、藤本 ⑤RISTEX：岩瀬センター長様、古屋様 参加者を紹介する ⑥DVN幹事メンバー ⑦鈴鹿市協関係者 ⑧縁側や美園の方々 ⑨名古屋の方々 ⑩その他の方々		古屋様に口頭でご説明いただく	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を3分以内のポストイットに書く(ポストイットは個別に色分け配布) ②ポストイットを回収員に渡す	南部美智代から、「高齢者三種の神器入れ」や「乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾実物」などのグッズを披露・説明する	橋から、口頭で簡潔に共助の必要性を説明する。(阪神大震災における調査結果引用)	療育センター中川所長から説明 ①子ども：Lについて説明 ・ADHDタイプ ・ASDタイプ ・LDなど ②障害者：Dについて説明 ・身体(内部や重度含む) ・知的(重度心身含む) ・精神(てんかん含む) ・ベルホームの通所者たち
	あらかじめテーブルを指定して着席してもらう(4班を予定)		●総合ファシリテーター：南部、補助：橋 ●各班の班長(代表)を決める			2. 回収されたポストイットを倉原、橋によって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。19:06			橋からその他の要援護者について補足(高齢者)
役割	●挨拶：南部 ●補助：橋 ●受付：大西、藤本 ※総合司会役はスタート時、南部。メンバー紹介後は橋の予定	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：南部、橋	●プレゼンター：RISTEX古屋様	●プレゼンター：南部 ●補助者：倉原 ●補助者：橋	●プレゼンター：南部	●プレゼンター：橋	●プレゼンター：鈴鹿療育センター中川所長 ●補助：橋
観察	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤
記録	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本
ツール	●受付名簿 ●名札(スタッフ、参加者) ●お茶とお菓子 ●軽食		●スタッフ名札 ●参加者名札	●LODEロゴ拡大印刷模造紙 ●LODEの種別一覧表 ●育成LODEのプログラム予定表		●ポストイット大、ボールペン、模造紙	●高齢者三種の神器入れ実物 ●乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾実物	●資料：「共助の必要性」(共助の必要性を示唆する阪神大震災時の調査結果)	●資料：「要援護者の説明」
場所	鈴鹿市社会福祉センター2階会議室								

表36：鈴鹿市での育成LODEの実施手順（その2）

順番	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	作業16	作業17	作業18	
実際順番	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
所要時間	3	17	5	15	15	15	4	12	2	
時刻	19:32～19:35	19:35～19:52	19:52～19:57	19:57～20:12	20:12～20:27	20:27～20:42	20:42～20:46	20:46～20:58	20:58～21:00	
実際時刻	19:30～19:35	19:35～19:50	19:50～	～20:11	20:11～20:32	20:32～20:42	20:42～20:51	20:51～21:02	～21:05終了	
カテ	緊急的私設の福祉避難所を探す		マンションタイプの図上ワークショップ				結び			
タイトル	プレゼン：私設福祉避難所の必要性について	班別作業：私設福祉避難所候補を探す	プレゼン：仮想マンションLODE図上WS作業手順	作業：要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	作業：「図上避難シミュレーション」	作業：「5年後LODE」図上作業	本日の評価と課題	まとめと講評	アンケート	
達成すべき目標	既存施設を再指定するスタイルの福祉避難所では絶対的不足があることを理解してもらう。	指定避難所や医療・福祉施設の立地状況等を判断しながら私設福祉避難所の候補地を見つけ出す訓練を行う。	仮想マンション図を用いた育成LODEワークショップの手順に関して理解を促す。	仮想コミュニティでの学習で、参加者各自に「自分の近所にいるかもしれない要援護者」を認識してもらう。	避難シミュレーションを通して、要援護者への支援・配慮（要援護者のタイプによって求められる支援・配慮）のあり方を認識してもらう。	作業13で作成したコミュニティ図が、5年後にどのように変化するかを図上予想してもらおうことで、コミュニティの潜在的脆弱性と可能性を認識してもらう。	本日の評価と課題について、ポストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。	今回企画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の簡易なアンケート調査を行う。	
生成物	私設福祉避難所の必要性に関する参加者の理解	私設福祉避難所の設置環境条件に関する参加者の理解（中でも御園町地区班は、地区の環境条件に対する理解も）	仮想マンション図を用いたLODEワークショップの基本的手順に関する参加者の理解	参加者の要援護者情報表示・整理方法の習熟（立面戸割図）	避難シミュレーションを通して得られる、要援護者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	5年後のコミュニティにおける要援護者及び支援者候補等の情報図（立面戸割図）	参加者の本日成果と課題の共有	参加者の次回への意欲	今後の参加への意欲とアンケート結果	
作業単位	全体	テーブル別グループ（1～4班）	全体	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）	テーブル別グループ（1～4班）	全体	全体	全体	
進め方	<p>プレゼン</p> <p>産育センター中川所長から、大規模震災時に、鈴鹿市内の障害者がどのような状況に置かれるかを説明してもらう。</p> <p>そのために、指定福祉避難所の不足を補う、臨時私設の福祉避難所や、専門家を補佐し、専門家につながることでできる「地域の理解者」を要請する必要があることも説明してもらう。</p>	<p>作業：私設福祉避難所候補を探す（4班のみ）：作業：要援護者情報を収集しながら私設福祉避難所候補地を探す。</p> <p>①1～3班は、指定避難所や医療・福祉施設の立地状況について説明する。 ②要援護者等の凡例を説明する。 ③仮想コミュニティの要援護者情報を知らせる（各班記録）</p> <p>④班別にリーダーから補足説明を行うとともに、鈴鹿市の最大震度6強の説明を行う。</p> <p>⑤グループ発表を受けて、コーディネーターや講師がコメントする。</p>	<p>プレゼン</p> <p>横から</p> <p>①図上作業手順について説明する。 ②要援護者等の凡例を説明する。 ③仮想コミュニティの要援護者情報を知らせる（各班記録）</p>	<p>作業：書き留めた要援護者情報をもとに、凡例に従って要援護者シールを貼っていく</p> <p>①自宅：金の★ ②乳幼児：オレンジ丸 ③未就学児：大きい黄色丸 ④小学生：小さい黄色丸 ⑤中学生：水色丸 ⑥前期高齢者（男女別）：小さい赤丸と青丸 ⑦後期高齢者（男女別）：大きい赤丸と青丸 ⑧特に配慮や支援が必要な人：ハート</p>	<p>作業：地震発生、その後火災及び津波発生との下、図上で各自の行動負担シミュレーションを行う。</p> <p>③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう（20：23～）</p>	<p>作業：作業13の成果図を下図にして、そこにかがせたビニールシートの上から5年後の凡例シールを貼る作業</p> <p>③班別にリーダーから作業結果を報告してもらう</p>	<p>作業13の図の上にビニールシートをかぶせる。 ②5年後にタイムスリップ想定し、ビニールシートの上から「変化の想定される方」のところに凡例を貼る。 ③その上で、避難シミュレーションを再考してみる。</p>	<p>ポストイット作業：「本日の良かったところと反省点」について</p> <p>プロジェクトリーダー、プロジェクト協力者の2先生から簡単な講評を発表してもらう</p>	<p>プレゼン</p> <p>プレゼン</p> <p>南部美智代からお礼とアンケートのお願い。 2色のポストイットに、「今日の良かったところ」と「今日の課題」を記入してもらった。 協力者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼント</p>	
役割	<ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンター：南部、鈴鹿療育センター中川所長 ●補助：橋 	<ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンター：橋 	<ul style="list-style-type: none"> ●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター <p>各班1名以上（災害ボランティアや社協職員にお願い）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター <p>各班1名以上（災害ボランティアや社協職員にお願い）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター <p>各班1名以上（災害ボランティアや社協職員にお願い）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●全体コーディネーター：南部 ●補助者：橋 ●テーブルファシリテーター <p>各班1名以上（災害ボランティアや社協職員にお願い）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●講師者：延藤先生（20:55） ●講師者：JST岩瀬センター長（20:52） ●講師者：倉原先生（20:53） 	<ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンター：南部 		
観察	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	倉原、延藤	
記録	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	大西、藤本	
ツール	<ul style="list-style-type: none"> ●資料「要援護者の説明」 ●最大震度予想図（各班A3～1枚） 	<ul style="list-style-type: none"> ●1班～3班の各テーブルに「鈴鹿市の中心部神戸地区」の地図 ●4班のテーブルには「鈴鹿市御園町地区」の地図 ●凡例シール（指定避難所、医療施設、福祉施設、薬局・店舗他、当該候補地など） ●要援護者凡例シール（高齢者、障害者、小学生、未就学児他） 	<ul style="list-style-type: none"> ●凡例表シート（各棟班に複数枚） ●仮想コミュニティの要援護者情報（コーディネーター手許用戸割図） 	<ul style="list-style-type: none"> ●仮想マンション立面戸割図（4班分） ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各棟班に複数枚） 	<ul style="list-style-type: none"> ●作業13を経た仮想マンション立面戸割図（4班分） ●マジックペンセット 	<ul style="list-style-type: none"> ●作業13を経た仮想マンション立面戸割図（4班分） ●上掛けフィルムシート（4班分） ●凡例シール各種 ●凡例表シート（各棟班に複数枚） 	<ul style="list-style-type: none"> ●ラッシュンペン ●ポストイット（2色） 	<ul style="list-style-type: none"> ●ホワイトボード 	<ul style="list-style-type: none"> ●アンケート用紙 ●高齢者三種の神器入れ（人数分） ●アンケート用紙ではなくポストイットを2色 	
場所	鈴鹿市社会福祉センター2階会議室									

表37：鈴鹿市での育成LODE（6月3日）参加者の感想・意見

No	班別	良かった点	課題だと思った点
1	青1	生活環境の変化に対応が変わる。	マンションのこの仕組み大切。住民状況把握の必要性。
2	青2	マンションは横の部屋へベランダ壁を破って移動ができることを知って良かった。(町内にマンションが多いため)。	
3	青3	日頃からこのようなことを行うのは非常に大切だと思いました。	少し時間が足りませんでした。
4	青4	初めてこの企画に誘われ参加をした。いつ災難があるかわからないので、いい勉強になりました。周りの方々は知らない方ばかりでした。南部さんの話は以前聞きました。	
5	青5	防災の良い勉強になりました。	マンションの屋上は登れないのが多いと思います。
6	青6	マンション等の集合住宅では、さらに多くの課題がありそうだとわかった。自分の住まいに振り返って考えることができた。	
7	青7	以前にLODEの講義受講した時の復習にもなり、またメンバーが違うことで、いろいろな考え方があり少しわかりました。回を重ねていくうちに視野を広げ、知識を吸収したいです。	マンションのみを考えると、現在はベトナムOKなところも増えてきています。時間が短すぎる。
8	青8	様々な立場の方と、ワイワイやりながら考えることができたのは良かった。	それぞれの立場の方が思いを持って話をするので、時間が足りないと思います。事前に打ち合わせをしてポイントを絞って話をするのが大切！
9	青9	マンションでの住民の避難シミュレーションをし、またその個人属性を仮定したのが良かった。地域に生かしていきたい。	グループ内でのそれぞれの自己紹介の時間を取っても良かったのではないかな。
10	青10	発達障害のことがよくわかった。	5年後を見直すことができた。もう少し詳しく知りたい。
11	緑1	みんなで考えられたこと。個人では問題意識が持てなかった。大変参考になりました。	もう少し課題別整理できれば。
12	緑2	障害者、高齢者に対する考えが変わった。	災害マップ(シール貼り)の時間がかりすぎ。
13	緑3	マンション例にて一つの地域全体を見ることができた。仮想5年後を重ねて。	それぞれの地域の強み弱みを気づかせるヒントが欲しい。
14	緑4	一つのマンションを例に挙げての災害避難想定をしたことは、細かくて良かった(従来DIG、HUGは、場所想定であった)。	時間に追われて分かりにくかった。
15	緑5	LODEを初めて知りました。大変重要なことを考えさせられました。	なかなか、イメージがつかめず、高齢者ばかりの私たちの地域についても課題があると思いました。良かったです。
16	黄色1	近所との関係が平時より大事だと感じた。一緒に逃げるにも、平時からどこを触って持ち上げていいかわからないことの情けなさを実感できた。やっぱり、平時からの近所付き合いがめっちゃ大事やと感じた。	
17	黄色2	普段、障害者のことはあまり考える機会がなかったが、良い時間を与えていただいたと思う。また、マンション全体みた時、各家庭いろいろな家族関係があり、それをも考えていかなければいけないのだなと思いました。	
18	黄色3	いろいろな考え方の参加者がみえて、参考になりました。	回答はいくとおりもあることを再認識しました。
19	黄色4	D:障害のある子供さんに対する考え方、支援を一步深く知ることができた。	福祉避難所についてももう少し詳しくお聞きしたかった。
20	黄色5	何年も前から参加しているの知っていたつもりでしたが、忘れていたこと、新しいこと等、いろいろ学んで、やっぱり生きている間は勉強していきたいと思いました。老人会にも働きかけようと思います。	
21	黄色6	福祉避難所の問題、今まであまり考えられなかった。	私たちの住んでいるところは、津波、水害の心配もないので、勧告を受けてもどこへ行くか。
22	黄色7	今までにやっていないゲームで、大変面白かった。いろいろな新しい知識を持てたと思いますし、続けて参加して成果をあげたいと思う。	時間も関係しますが、内容が豊富すぎるので、もう少し少なくてほしい。
23	桃色1	今までこのような研修を受講したことはありませんでしたが、とても良い勉強になりました。園上の研修でしたが、冷静に行動するための課題の一つなので、これからもしっかり勉強していきたいと思っています。	
24	桃色2	5年後の姿が新しい発見でした。	マンションのイメージが湧かずに困った。
25	桃色3	皆、メンバーが良かったので、スムーズに勉強できた。いろいろな想定を考えるということ、今まで考えられなかったことが気付かされて良かった。私どもの地域でも、みんなで勉強したい。	
26	桃色4	・今までなかった体験ができて良かった。 ・多様な人が住んでいることに対応。 ・人は歳をとることの視点が良かった。	マンションの多様な方がいるのは良いが、もう少しシンプルな方が理解しやすいかも。
27	桃色5	マンションの5年後の話がためになった。	自分の地区のコミュニケーションの大切さを感じた。
28	桃色6	・マンションでのLODEは是非必要 ・団地(平面団地)でもLODEは必要	年数の経ったマンションは今後住民に勉強会必要
29	桃色7	今回は以前と違って、いろいろと体験についてお話を聞かせていただき、ありがとうございました。以後の役に立ちたいと思います。	
30	桃色8	LODEの中に、障害の方、外国人の方、ペットのことがありました。	同じ班の方の自己紹介のようなのがあったら、他の方がどんな方なのか、少しわかったかなと思う。
31	桃色9	自分の地区でもやってみたいという気になりました。頑張ります。療育センター中川所長さん、ありがとう。ためになりました。	時間短いのにも、余分な話やジョークも多かったのでは。
32	桃色10	災害発生時に備え、様々なシミュレーションを取り組み、非常に有意義であった。シールを貼る作業をした時、確かに住民関係(隣人関係)の希薄化を考慮していなかった。その意味では、また帰宅してから考えていきたい。	

出席者名簿記載37名、名簿未記載者若干名、市役所2名、社協2名、報道2名

●現場写真及び図表等



写真111 (今回の凡例では要援護障害者を「身体」、「精神や知的」、「きになる子ども」の3つに大別した)



写真112 (事前のテーブルセッティングの様子)



写真113 (受付時に軽食を用意して雰囲気をはげめる)



写真114 (ポストイットワークの整理・発表)



写真115 (療育施設の所長が障害についてわかりやすくレクチャー)



写真116 (仮想マンションコミュニティ図面による図上作業)



写真117 (延藤先生によるまとめのファシリテーショングラフィックス)

【育成LODEワークショップ：8月6日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-2】

【育成LODEワークショップ：11月13日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-4】

●参加者数と参加者層：11名（8月6日）及び17名（11月13日）

●開催時間：8月6日13時～16時、11月13日9時～12時

●実施概要と経緯

- ・ 8月6日は、主に「子どもの理解」をテーマに勉強会を開催した（メイン講師は現役小学校教員の森本が務めた）。
- ・ 11月13日は、「障害の理解」をテーマに勉強会を開催した（メイン講師は鈴鹿市療育センター所長の中川義文氏が務めた）。
- ・ これらの開催は、6月3日のワークショップにおいて、中川氏から受けた障害者・障害児に関する説明を、さらに深めたいと希望する参加者が複数いたことによる。

●具体的な実施内容

- ・ 11月13日に開催された勉強会は主に次のように進められた。
- ・ まず、中川氏から「障害児に向き合うための姿勢に関する10問クイズ」が出題され、その回答（考え方）を学ぶこととなった（表38参照）。

表38：障害児に向き合うための姿勢に関する10問クイズ
（鈴鹿市療育センター中川義文所長作）

中川所長からの「障害を理解するためのクイズ」

	質問	回答	解説
1	言葉の出ない子にアニメやドラマなどのテレビやDVDをたくさん見せると言葉が出るようになると思うか？	No	テレビやDVDでは同じ音量で一方向に出てくる。一方向的に語られる。返事してくれない。それが発達障害の原因の一つになる。脳の障害は治らない。治すのではなく寄り添うこと。
2	新しいことをたくさん経験させると言葉がたくさん出る。	No	出ない。少ない言葉なら覚えやすいし、使えるようになる可能性も高くなる。新しい言葉を大量に与えると、全く理解できない。
3	順番が守れない子には、まず座らせて、数を数えたりカードを見せると良い。	No	何歳になっても幼児のように順番がわからない子がいる。「まず座らせる」→落ち着けるか、安心できるかわからないので座らない。順番という概念が理解できない子どもは、そういう状況だということを理解してあげて欲しい。待たせるなら、「5(片手で済む)」まで数えさせる。「10(両手が必要)」までは待てない。
4	失敗を恐れずに、なんでもやらせてみて、自信をつけさせると良い。	No	初めての経験は不安。好奇心でやってみるが、失敗したら二度としなくなる。それをさせようとした支援者のところには二度と行かなくなる。失敗しそうな場合には、直ちに場面を変えてあげる。
5	集団に入れると、周りの影響で自然に力がつき、成長につながる。	No	たくさんの情報が入りすぎると混乱する。療育センターは最大数人までの少人数クラス。音に敏感な子どもだと多くの声を聞き入れられない。最初はマンツーマンから、次第に2人、3人へと増やしてみる。
6	自分の気持ちをコントロールさせるのに、我慢させたり待たせたりすると良い。	No	片手で数えるまでしか待てない子に我慢はできない。
7	発達の気になる子の診断は医師しかできない。	Yes	「診断」は医師しかできない。
8	医師から診断が出たら、保護者には早く「障害だ」ということをわからせてあげたら良い。	No	見たらわかる障害は早期の受容がしやすい。しかし発達障害は外見からはわかりにくい。受容しても、支援の方向が具体的になるだけで、治るわけではない。
9	保護者が障害の受容をいないと、支援がしにくい。	No	同上
10	偏食は親等が頑張ってお皿をすすぐように努力すると、そのうち好きになってくる。	No	無理させても嫌がるだけ。発達障害児には嗅覚・味覚が特定のものに対して鋭敏なことが多い。

- ・ 続いて、発達障害児の指導に携わっている学校法人こいみどり学園の谷口理事より「各種障害に関する概括的理解促進のための説明図」を資料にレクチャーが行われた（図13参照）。
- ・ 被災時の問題点をこの図から読み取るならば、まずは世間一般の人々からは精神障害や発達障害のような「見えない（身体的障害ではない）障害者」が相当多数存在することである。この障害者たちは、避難所へ行っても障害であることゆえの配慮を受けられない恐れがある（避難所のリーダーたちがこの種の障害に無知・無関心であった場合、その恐れがある）。その場合、避難所での扱いによっては症状（状態）が悪化する場合もあり得る。
- ・ また、精神障害者や発達障害者の中には、「手帳を交付されるレベルの障害でありながら、障害の診断を受けようとしない」者も存在する。こうした人々は、行政からも障害者として認知されていないことから、被災時に障害の状況に対応した必要な配慮を受けられない恐れがある。
- ・ さらに留意しておくべきことは、「障害と診断されるレベルにまでは達していないが、障害状態に準じた状態・傾向にある、しかも無自覚な人々」の存在である。こうした“グレーゾーン”というべき存在の方々にも、避難所生活の中で状態を悪化させるケースがある。
- ・ これらのレクチャーは、参加者に対して大きな学びとなったようである。

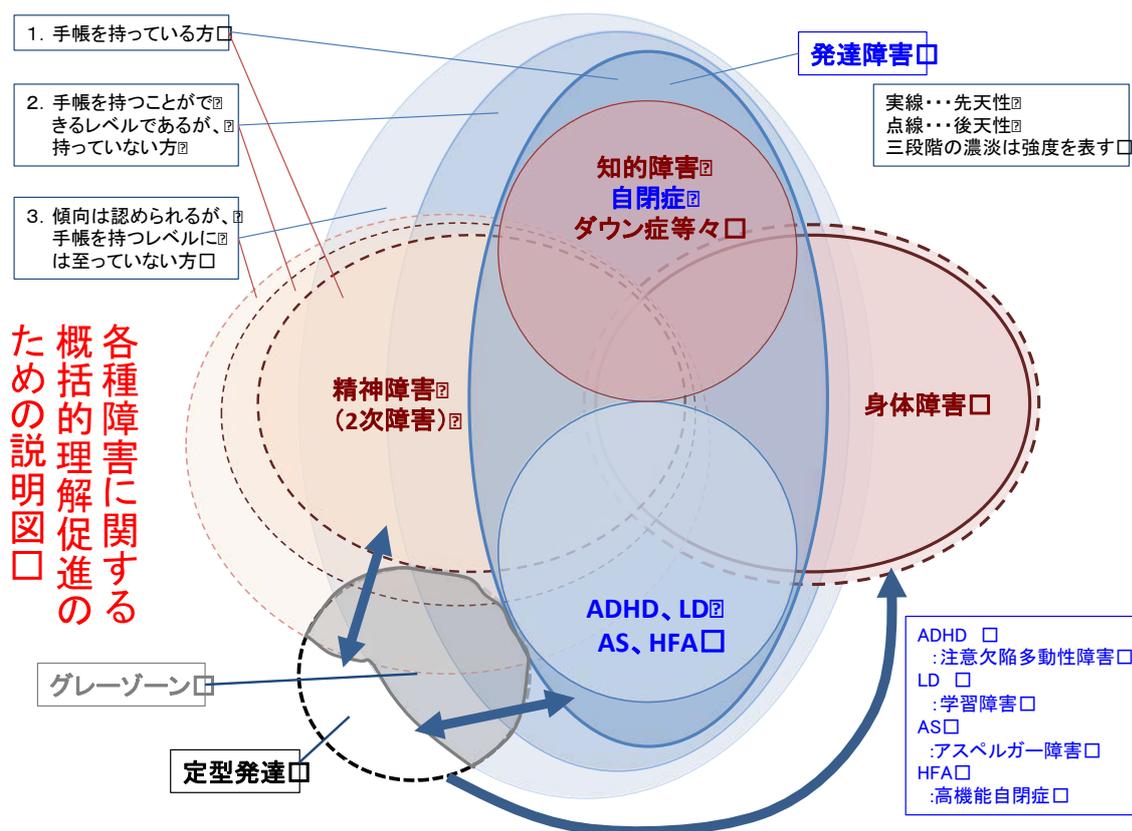


図13：各種障害に関する概括的理解促進のための説明図
 (学校法人こいみどり学園専務理事 谷口祐司作)

②大阪市福祉・まちづくり市民団体（社協職員、行政職員、民生委員等対象）

【育成LODEワークショップ：2月26日実施 ワークショップ・調査整理番号 28-12】

a) 対象コミュニティ

- ・ 主として大阪市内をはじめとする関西圏から集まった社会福祉協議会職員及び行政職員、並びに民生委員等。

b) 実施の経緯とLODE実施の狙い

- ・ 当PJ研究メンバーで社会福祉士の藤本の調整により、大阪市ボランティア・市民活動センターの記念行事における「分科会」の場で、育成LODEの研修会を実施できることとなった。
- ・ この育成LODEは、①で報告した鈴鹿市の育成LODE（災害ボランティアが主な対象）とは異なり、社会福祉協議会のコミュニティワーカーや、行政の市民向け防災担当を主な対象とした。
- ・ 社協職員等の場合、一般的な自治リーダーや災害ボランティアより要援護者に対する意識や知識が高いと思われることから、地図上に要援護者シールを貼る作業よりも、「どのようなポイントに留意・注意して地域防災・福祉活動を展開していけば良いか」に関する視点や目標、手段を一体化して整理できる『曼荼羅チャート（経営コンサルタントが使用する名称であるが、ここではLODEを推進・普及するために用いるので、今後はLODE STARチャートという）』の可能性を探ることが主な目的の研修会とした。

地区や目的に合わせた図面使用	作業班内における会話促進の工夫をする	要援護者への認識を深めるための学習をする	地域の在宅要介護高齢者情報を収集する	地域の介護予備軍高齢者の情報を収集する	高齢者が避難できる場所の調査・計画を行う	普及者候補にはLODEを他者に伝えてもらう	社協職員はコーディネータ役となる	自分たちでWSの企画と運営を行う
個人情報の管理に留意する	図面WS	コミュニティ力を養うためWSの定例化を図る	地域の在宅要支援高齢者情報を収集する	○	要援護高齢者の自主的申告を促す	説明・説得・行動力のある人材を見つける	育成	講師・ファシリテータ役をしてもらう
凡例は状況に応じて工夫する	要援護者・支援者情報収集	基本単位は単位自治会で行う	基本コミュニティ単位でLODE WSを行う	高齢者への認識・理解を深める学習をする	高齢者参加によるWSや避難訓練を行う	導入LODE予備LODE講習会から始める	普及者育成支援ツールを活用する	人材育成の核となる関係機関参画体制を作る
言葉だけでなく視覚からの伝達を心がける	子ども自身が住所や電話番号を言える	子ども会や学校単位でWSを行う	図面WS	○	育成	避難訓練の定例化を図る	歴史や被災経験から学ぶ	要援護者らの抱える困難を認識・理解させる
WSは体験・共同作業重視で行う	L	大人が子どものことを知るための努力をする	L	コミュニティの紡ぎ直し	E	必要物資を考える・準備する	E	避難行動時のリスクや困難を想像させる
WS班作業は小地区や通学路単位で行う	親や地域の大人を引き込む	様々な子どもが一同に参加する	繋ぎ協働	D	体験	私設避難所のニーズと候補を考える	エトランゼへの対応を考える	避難所生活のリスクや困難を想像させる
世代をつなぐ(大人と子ども)	WSや訓練の場で参加者同士をつなぐ	井戸端サロン型活動でつなぐ	障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う	他の世代や外国人との交流を体験してもらう	逃げること(緊急避難行動)を体験してもらう	避難所生活の模擬体験をしてもらう
エリアをつなぐ(小学校区で)	繋ぎ協働	物資備蓄や私設避難所づくりをとおしてつなぐ	地域の在宅身障者情報を収集する	D	障害者参加によるWSや避難訓練を行う	みんなの前で発言する体験をしてもらう	体験	炊出し体験(作る、食べる)をしてもらう
つなぎの軸・核となる体制を作る	要援護者と地域住民をつなぐ	地域の事業者と住民をつなぐ	障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する	防災機器等の操作・使用体験をしてもらう	防災グッズなどの共同制作体験をしてもらう	まち歩きによる共同確認作業体験をしてもらう

図14：平成27年度報告書でも提案した普及者育成支援ツール『LODE STARチャート』

c) 実際の実施内容と実施体制

- 日時：2月26日 10時～12時30分
- 場所：大阪府看護会館（ナーシングアート）
- 参加者数と参加者層：40名
- 実施内容

- ・表39・表40に示すが、今回は地図やマンション図への要援護者シール貼り作業がメインではなく、「LODESTARチャートの内容を深めるための、ワールドカフェ方式によるワークショップ」となった。
- ・ワールドカフェ方式に関する説明は省くが、今回は次のように進めた。
- ・テーブルをLODESTARチャートの中目標別に設置する。
- ・各テーブルに「中目標」と「小目標」を印刷した大判の模造紙を置く（図15参照）。
- ・ワールドカフェワークショップの各テーブルでは、参加者がその模造紙の上に、中目標や小目標の内容等に対する意見や課題を記したポストイットを貼っていく。
- ・最終的に、その模造紙上に蓄積された意見（ポストイット）の内容を、貼られた1のままエクセルファイル上で整理して、意見の傾向を分析する。
- ・各テーマ別のテーブルには、各テーマに明るい専門家が1～2名ずつテーブルマスターとして配置につき、2巡して蓄積されるテーブルでの意見（ポストイット）をまとめる役割を担ってもらう。

●結果

- ・時間の都合上、今回は2巡しかカフェを回すことができなかったが、場を観察する限り、参加者の発言は活発であった。
- ・2巡合わせた意見の集約結果（一部）を、図16及び図17に示すが、約30名の外部参加者（テーブルマスター以外の参加者）の大半が、この集約結果のメールによるデータ送付を希望したことからも、この実験的なワークショップに対する参加者の関心は低いものではなかったといえる。

障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う
地域の在宅身障者情報を収集する	D 障害者	障害者参加によるWSや避難訓練を行う
障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する

図15：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルに配置された模造紙の例（「障害者」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。当日は、このような模造紙が計8枚設置された。）

<ul style="list-style-type: none"> ●申告を促すには信頼関係が必要 ●障害者施設などの支援者が無知すぎる。抱え込んでしまう。 ●相談支援事業所が、近所づきあいまで含めた支援計画を作って調整すべき。 ●申告したくない人や、認めたくない人にはどうすれば良いのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ●自助グループを作ってみる。 ●避難行動要支援者名簿の活用と整理。 ●地域内施設職員同士の交流会を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●バリアフリーなど、そもそもの整備をする。 ●個々の障害の特性を踏まえた避難場所の設置 ●校区内の学校に受け入れを頼んでみる ●避難ろも調査・計画する。
--	--	---

<ul style="list-style-type: none"> ●近所の住民が何をしているかがわかる場所をつくる。 	<p>障害者・家族の自主的申告を促す</p>	<p>地域の重度障害者情報を収集する</p>	<p>障害者が避難できる場所の調査・計画を行う</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の防災訓練は障がい者が参加できる内容になっていない。 ●障がい者と事業所が一緒に参加してほしい。 ●地域の方、当事者以外の人の参加がのぞまれる。
	<p>地域の在宅身障者情報を収集する</p>	<p>D 障害者</p>	<p>障害者参加によるWSや避難訓練を行う</p>	
	<p>障害者への認識・理解を深める学習をする</p>	<p>地域の知・精・発各障害者情報を収集する</p>	<p>家族の理解を得られる進め方を工夫する</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ●地域で勉強会を取り入れる(現状はほとんどない) ●どう住民を巻き込むか ●障がい者を社会的にあまり認めていない人は、どう引き込めば良いのか。 ●障がい者の方も参加できる災害の講座を開催する。 ●文化祭などに障がい者の方に参加してもらい知ってもらおう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●当事者家族の交流会などで、地域も一緒につながる機会を持つ。 ●まず自分の身を守らなければならないので、助けられないことも知ってもらおう。 	<p>※知られたい人かどうか。個人情報壁。 ※収集するより知るがいいかな ※日頃からのコミュニケーション ※隣に住んでる人が「あれ？」と思ったら声をかけること。顔なじみになるからスタート。 ※「情報を収集する」というのは「収集される側」からすると怖いですねえ。 ※何のためなのか、ミッションを最初に明らかにして、そこから広げていけば不審さは拭えるかも。 ※障がいを持つ人が、しんどい人が、みんな楽しく集える場を、時を、マンション内につくっていくこと。</p>
--	--	---

図16：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルの模造紙上に残された意見の整理・集約事例
 (「障害者」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。当日は、このような模造紙が計8枚設置された。)

- 普通の人がさりげなく参加できる仕組み。
- 若い世代は集団で行動する傾向にあるので、その修正を利用する。
- 若いボランティアも増えているが、関心を持っていない人にどうPRするのか。悩ましい。
- 多世代型サロンはまだまだこれから。芽は始めている。
- 子ども食堂で、水害の歴史の先生になってもらおう。

- 専門家や先生などはメンバーに入りにくい。入るきっかけがわからない。
- 地域防災訓練に来てもらうなど、自ら行動も必要。イベントの周知も必要(情報を知らない)。

- 学校の「福祉学習」の授業を活用する。地域が先生となりWSを行う。高齢者との交流をするだけでも。

- まち発見・探検隊を高齢+子供で歩いてみる。
- 区全体の交流会。
- エリアを繋ぐことができるのは、行政、社協の役割。

- 場を作るのは行政、社協の得意とするところ。

- ふれあい喫茶など、集まりやすい場づくり。出来上がったコミュニティには入りづらい人のため。
- 役人の一人としてできていないことを反省して、今日参加させてもらっています。
- つなぐことが大切なのは誰かがわかるができない(時間がない)。きっかけづくりが大切(行政、社協、自治会、NPO、なんでもいいですが)。
- 小地域でテーマを絞って参加者を募る。

- 学校に備蓄庫が備えられていない(地べた、1階にあることが多い)→水害に弱い。

- 地域での課題、現状、未来像を語り合う懇談会の実施。
- 自主防災組織と福祉委員会が協働して役割分担しないと混乱する。

- つなぎ役のコーディネーターが必要(NW推進員がいる)。
- デイサービス、老健施設などへの地域住民の定期訪問、集団面会。
- 日頃の地域の現状、「子供と高齢者」が手を繋ぐ。
- 特殊な能力が必要とを感じる。
- 福祉教育などで「障がいの理解」などを。社協がバックアップ。

- 簡単につなぐといっても難しい。お互いの課題と強みを知る。
- 手を繋ぐ機会を作る。
- 地域のみならず、事業所の研修も必要。

世代をつなぐ (大人と子ども)	WSや訓練の場で 参加者同士をつなぐ	井戸端サロン型活動で つなぐ
エリアをつなぐ (小学校区で)	繋ぎ 協働	物資備蓄や私設避難所 づくりをとおしてつなぐ
つなぎの軸・核となる 体制を作る	要援護者と地域住民を つなぐ	地域の事業者と住民をつ なぐ

- 縦割りではなく、横串を刺せる人材の発掘。
- どうしても自分の周りのこと(県、職場、居住地)しかわからないので、今日のようなイベントはありがたい。
- 防災訓練等をゲーム化する。祭りの炊き出しがそのまま防災訓練に。
- 避難所重視の視点を変えてみる(収容不能者、行ききれない人、行かない人のため)。
- 各々のコミュニティの代表者が防災に関わらず、様々なイベントを企画してみる。→日常的な人の繋がりや顔が見えてくる。
- 地域代表の交代(女性の登用→地域における情報量が多い)
- 防災研修を受けた地域人は、防災の指導者として活躍する。
- 研修時の防災資料等はなるべく大きく、壁掛け式。
- 行政は協働と言うが、行政内では協働しない。
- 行政の協働は、他人に押し付ける為の方便になっている。
- 個人情報の取り扱い(課題)。行政や専門職以上に住民(地域リーダーそう)は過剰反応する(怖がる)。

図17：ワールドカフェ式ワークショップのテーブルの模造紙上に残された意見の整理・集約事例その2

(「繋ぎ・協働」をテーマにしたテーブルに設置されたものである。8つのテーマのうち、このテーマに一番多くの意見が寄せられた。)

表 39 : 大阪市福祉・まちづくり市民団体での育成LODEの実施手順 (その1)

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
実際順番	1	2	3	4	5	6	7	8
所要時間	5	3	8	8	3	3	20	15
時刻	10:00~10:05	10:05~10:08	10:08~10:16	10:16~10:24	10:24~10:27	10:27~10:30	10:30~10:50	10:50~11:05
実際時刻	10:07~10:12	10:12~10:16	10:16~10:25	10:25~10:31	10:31~10:38	10:38~	10:45~11:02	11:02~11:23
カテ	開始・導入		ウォーミングアップ			仮想マンションタイプの図上ワークショップ		
タイトル	挨拶 LODEとは 育成LODEとは	プロジェクトメンバー 紹介 参加者紹介	作業:「避難所マ ーク」わかりますか?	作業:あなたにとって 「自助」とは?	プレゼン:「高齢者三 種の神器」他	プレゼン:仮想マン ションLODE図上WS作業 手順	作業:要援護者の所在 を凡例シールによって 示す作業の体験	作業:「図上避難シ ミュレーション」と 発表
達成すべき目標	・LODEが重視する「要 援護者の情報と支援」 の重要性を理解してもら う。 ・普及者育成LODEの意 義を理解してもらおう。	プロジェクトメンバ ーや参加者を知り、作業 へのウォーミングアップ を行う	避難の基本として、参 加者にまず「避難所 マーク」を思い出さな がら書いてもらう。そ の結果を全体で整理 し、全員で共有する。 ともに正しいマークを 覚える。	参加者にまず「自助と は」を考えてもらう。 その結果を全体で整理 し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を 学んでもらう。 要援護者の生命の危険 やQOL低下につながる りかねない事態の一例 を学ぶ。	仮想マンション図を用 いた育成LODEワーク ショップの手順に関し て理解を促す。	仮想コミュニティでの 学習で、参加者各自に 「自分の近所にいるか もしれない要援護者」 を認識してもらおう。	避難シミュレーションを 通して、要援護者への 支援・配慮(要援護者 のタイプによって求めら れる支援・配慮)のあり 方を認識してもらおう。
生成物	・要援護者対応を重視し たLODEに対する参加者 の初期的理解	作業しやすい雰囲気	参加者たちの「避難所 マーク」の理解の現状を 記したポストイット	参加者たちの「自助」意 識の現状を記したポスト イット	要援護者支援の考え方 に関する参加住民の理 解・認識	仮想マンション図を用 いたLODEワークショップの 基本的手順に関する参 加者の理解	参加者の要援護者情報 表示・整理方法の習熟 (立面戸割図)	避難シミュレーションを 通して得られる。要援 護者のタイプによって 求められる支援・配慮 のあり方に対する参加 者の認識
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	テーブル別グループ (1~6班)	テーブル別グループ (1~6班)
進め方	プレゼン	プレゼン	ポストイット作業: 「避難所マークを覚え ていますか。思出しな がら描いて下さい。」	ポストイット作業: 「自助と聞いてあなた は何を想起するか」を	プレゼン	プレゼン	作業:与えられた要援 護者情報をもとに、凡 例に従って要援護者 シールを貼っていく	作業:地震発生、そ の後火災及び津波発 生の与件発表の下、 図上で各自行動及び 班単位での役割分担 シミュレーションを 行う。
役割	●プレゼンター:橋	●プレゼンター:橋 ●プレゼンター:南 部	●プレゼンター:南部 ●補助者:倉原 ●補助者:森本	●プレゼンター:南部 ●補助者:倉原 ●補助者:谷口	●プレゼンター:南部	●プレゼンター:橋	●全体コーディネー ター:南部 ●補助者:橋 ●テーブルファシリ テーター 各班1名以上	●全体コーディネー ター:南部 ●補助者:橋 ●テーブルファシリ テーター 各班1名以上
観察	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友
記録	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール	●LODEロゴ拡大印刷模 造紙 ●LODEの種別一覧表		●ポストイット大、ポー ルペン、模造紙	●ポストイット大、ポー ルペン、模造紙	●高齢者三種の神器入 れ実物	●凡例表シート(各棟班 に複数枚) ●仮想コミュニティの要 援護者情報(コーディ ネーター許し戸割図)	●仮想マンション立面 戸割図(6班分) ●凡例シール各種 ●凡例表シート(各棟班 に複数枚)	●作業7を経た仮想マン ション立面戸割図(6班 分) ●マジックペンセット
場所	大阪府看護会館(ナーシングアート)							

表 4 0 : 大阪市福祉・まちづくり市民団体での育成 L O D E の実施手順 (その 2)

順番	休憩	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15
実際順番	休憩	9	10	11	12		13	
所要時間	10	15	10	10	20	5	10	5
時刻		11:15~11:30	11:30~11:40	11:40~11:50	11:50~12:10	12:10~12:15	12:15~12:25	12:25~12:30
実際時刻		11:29~11:44	11:44~11:52	11:52~12:07	12:07~12:27	時間切れにより省略	12:27~12:42	時間切れにより省略
カテ		ワールドカフェ方式 曼荼羅チャート 企画ワークショップ				結び		
タイトル		LODESTARチャート (曼荼羅チャート) についての解説	ワールドカフェ 第1巡目	ワールドカフェ 第2巡目 及びまとめ作業	ワールドカフェ結果の 班別による全体発表	本日の評価と課題	まとめと講評	アンケート
達成すべき目標		当グループが考案した『LODESTARチャート』の企画ワークショップに取り組んでもらうために、チャートの基本構成や使い方をイメージ、さらにはワールドカフェワークショップスタイルについて説明し、理解してもらう。	『LODESTARチャート』を構成する8つの目標・視点である「子ども」、「高齢者」、「障害者」、「避難」、「体験」、「育成」、「つなぎ」、「図面」というテーマ別に、小目標のアイデアや課題を検討し、『LODESTARチャート』をより使いやすいものとする。		『LODESTARチャート』構成要素(中目標、小目標)に関するアイデアや課題の検討結果をまとめて発表することで、参加者の『LODESTARチャート』に対する意識・認識の向上を図る。	本日の評価と課題について、ポストイットにより、参加者の声を拾う。	参加者に、講師による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。	今回参画への感謝と今後の継続的参加を依頼するとともに、本日の評価・課題指摘の簡易なアンケート調査を行う。
生成物		『LODESTARチャート』の企画ワークショップに取り組んでもらうための参加者の基本的理解。	『LODESTARチャート』に対する参加者の認識や意見(8枚のワークショップ図面に残る)。			参加者の本日成果と課題の共有	参加者の次回への意識	今後の参加への意欲とアンケート結果
作業単位		全体	テーブル別グループ (1~6班)	テーブル別グループ (1~6班)	テーブル別グループ (1~6班)	全体	全体	全体
進め方		プレゼン コーディネーターから『LODESTARチャート』の基本構成やその内容、意味に関して、概説を行う。	ワールドカフェWS 第1巡目 1. 異なる中目標別にテーブルを設置する。 ●子ども班 ●高齢者班 ●障害者班 ●避難班 ●体験・図面班 ●育成・つなぎ班 2. 参加者はあらかじめ指定されたテーブルで、中目標を達成するための小目標や課題について、自由な意見をポストイットに記し、それを指定模造紙に貼る。	ワールドカフェWS 第2巡目 1. テーブルマスターだけが居残り、他の参加者は自分の行きたいテーマ(中目標)のテーブルに移動する。 ●子ども班 ●高齢者班 ●障害者班 ●避難班 ●体験・図面班 ●育成・つなぎ班 2. 参加者はあらかじめ指定されたテーブルで、中目標を達成するための小目標や課題について、自由な意見をポストイットに記し、それを指定模造紙に貼る。	全体発表：班別検討結果 各班の全体向け発表を行う(3分×6班)	ポストイット作業：「本日の良かったところと反省点」について ポストイットに意見を書いてもらい提出してもらう。	プレゼン プロジェクトリーダー、プロジェクト協力者の2先生から簡単な講評を発表してもらう	プレゼン 南部美智代からお礼とアンケートのお願。 協力者に「高齢者三種の神器入れ」のプレゼン
役割		●プレゼンター：橋	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・大國(子ども)、山本(高齢者)、谷口(障害)、藤本(避難)、小林(育成、つなぎ)、松下(体験、図面)	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・大國(子ども)、山本(高齢者)、谷口(障害)、藤本(避難)、小林(育成、つなぎ)、松下(体験、図面)	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・大國(子ども)、山本(高齢者)、谷口(障害)、藤本(避難)、小林(育成、つなぎ)、松下(体験、図面)	●全体コーディネーター：橋 ●各テーブルファシリテーター：森本・大國(子ども)、山本(高齢者)、谷口(障害)、藤本(避難)、小林(育成、つなぎ)、松下(体験、図面)	●講評者：南部 ●講評者：倉原	●プレゼンター：南部
観察		倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友	倉原、廣友
記録		大西	大西	大西	大西	大西	大西	大西
ツール		●LODESTARチャートのバウホ資料 ●上記を印刷したもの(1人1部ずつ配布)	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの(各テーマ1枚ずつ) ●LODESTARチャートを印刷したもの(1人2部ずつ配布) ●意見書き込み用ポストイット ●ラッシュンペン	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの(各テーマ1枚ずつ) →作業10で使用したものを引き続き使用する。 ●LODESTARチャートを印刷したもの(1人2部ずつ配布) ●意見書き込み用ポストイット ●ラッシュンペン	●LODESTARチャートの中目標・小目標部分をA全判にモノクロ印刷したもの(各テーマ1枚ずつ) →作業11で使用したものを引き続き使用する。	●ラッシュンペン ●ポストイット(2色)	●ホワイトボード ●乳幼児アタッチメント素材による防災頭巾	●アンケート用紙 ●高齢者三種の神器入れ(人数分)
場所		大阪府看護会館(ナッシングアート)						

2-3-4. 平成29年度：追加補足調査

(1) 他地方への波及に関連した追加ワークショップ調査

平成26年度～28年度、本研究開発試行調査の現場は、「南部のお膝元の三重県内」及び「南部の影響が及びにくい関西地方」が主であった。

しかしその取り組みの中から他地方へ波及する動きが見られた。愛知県である。

26年度伊丹市F地区への視察に訪れた愛知県関係者の動きは、その後27年度に愛知県公明党本部での「育成LODE」取り組みへとつながり、そして29年度、愛知県内安城市（市危機管理室）から大規模マンションでの実施を依頼されることとなった。

【安城市（安城市Pマンション：平成29年7月15日実施）】

a) 対象コミュニティ

- ・ 名鉄駅から至近の大規模マンション（5棟800戸）



写真118：駅から徒歩数分の場所の5棟800戸の大型マンション



写真119：各棟から計23名の住民が参加（自治組織班長クラスが中心）

b) 実施の経緯

- ・ 安城市危機管理室からの問い合わせ、依頼。

d) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数と参加者層：43名（マンション住民23名、市職員3名、）

●実施内容と結果

- ・ 表41・42に示す。
- ・ 若干簡略化しながらも、基本的には、27年度神戸市灘区大規模マンションにおける進め方を踏襲した。

●参加者意見による考察

- ・ 「良かったところ」と「課題点」の参加者アンケート結果を表43に示す。
- ・ これまであまりにもコミュニティでのコミュニケーションに無関心であったことを反省する声、立面模式図にシールを貼る方法がわかりやすいという声、今後への取り組み意欲などを語る声が多かった。
- ・ この他、安城市危機管理室からは、今後の当該マンションでの継続の他、他のマンションでの実施なども推進していきたいとの反応があった。

表 4 1 : 安城市PマンションでのLODEワークショップの実施手順 (その1)

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7
所要時間	3	2	5	5	5	5	
時刻	10:00~10:03	10:03~10:05	10:05~10:10	10:10~10:15	10:15~10:20	10:20~10:25	
カテ	導入		LODEの成り立ち	自助について		共助について	
タイトル	本日のLODEの取り組みにあたって	プロジェクトメンバー紹介	プレゼン：阪神大震災からDIGへ、そして今LODEへ	作業：あなたにとって「自助」とは？	プレゼン：「高齢者三種の神器」他	プレゼン：なぜ「共助」は必要か？	プレゼン：主な「支援を必要とする方々」
達成すべき目標	本日の取り組みに関する参加住民のやる気を喚起する	プロジェクトメンバーを知り、作業へのウォーミングアップを行う	防災のための図上WSの意義・意味を理解していただく	参加者にまず「自助とは」を考えてもらい、その結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を学んでいただく。要援護者の生命の危険やQOL低下につながりかねない事態の一例を学んでもらう	共助の必要性に関する参加住民の理解促進	要支援者に関する参加住民の理解促進
生成物	参加住民のやる気	作業しやすい雰囲気	参加住民のやる気と理解	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	要援護者支援の考え方に関する参加住民の理解・認識	共助の必要性に関する参加住民の理解	要支援者に関する参加住民の理解
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
進め方	プレゼン	プレゼン	プレゼン	作業：「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を	プレゼン	プレゼン	プレゼン
	地元世話役からの挨拶	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ①プロジェクト代表 倉原先生 ②鈴鹿南部	南部美智代から次のような内容の説明 ①阪神大震災後DIGを発案した経緯 ②さらにLODEを発案した経緯 ③LODEはLOVEをもって行うこと	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「自助と聞いてあなたは何を想起するか」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	南部美智代から、「高齢者三種の神器入れ」を披露・説明する	橋から、 ①パワポグラフで共助の必要性を説明する。	橋から、 ①パワポで主要要援護者のタイプについて説明する。 L：赤ちゃん、未就学児、小学生の中でとりわけ発達障害児 O：在宅の要介護・要支援及び予備軍の方々 D：在宅の身体（内部含む）・知的・精神の方々 その他外国人、虐待懸念家庭他
		挨拶の中で、RISTEXプロジェクトの概要にも触れる。		2. 回収されたポストイットを倉原によって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。			
役割	●プレゼンター：地元代表	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 南部	●コーディネーター：災害VN鈴鹿 南部 ●補助者：倉原、橋	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 南部	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋	●プレゼンター：災害VN鈴鹿 橋
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
ツール			●PPT	●ポストイット大、ボールペン、模造紙	高齢者三種の神器入れ実物	★PPT:「阪神大震災時の調査結果」	★PPT:「L、O、Dの説明」
場所	Pマンション集会室						

表 4 2 : 安城市PマンションでのLODEワークショップの実施手順 (その2)

順番	作業8	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14
所要時間	5	30	15	15	12	3	15
時刻	10:25~10:30	10:30~11:00	11:00~11:15	11:15~11:30	11:30~11:42	11:42~11:45	11:45~12:00
カテ	LODE WSの手順説明	LODEワークショップ「わがマンションの脆弱性を知る」			LODEワークショップ「発災想定による検討」		結び
タイトル	プレゼン:LODE図上WS作業手順	作業:棟別に要援護者の所在を凡例シールによって示す作業	作業:「お助けタイム」:参加者が居住棟以外の図面に対して知っている情報を提供	作業:要支援者数等の把握	作業:発災想定のもとでの行動検討	災害伝言ダイヤルの使い方	参加者感想の発表とゲストコメント
達成すべき目標	LODEワークショップの手順に関して理解を促す	参加住民に「自分の棟に居る要援護者」を認識してもらう	他棟からの参加住民の力をかりて「自分の棟に居る要援護者」情報を充実させる	参加住民に「自分の棟に居る要援護者」に加え、「マンション全体での要援護者数」を認識してもらう	図面を要援護者情報の把握だけに使用するのではなく、発災想定のもとでのワークショップにも使えることを学んでもらう	避難後に役立つ災害伝言ダイヤルの使い方を学んでもらう	本日の評価・課題指摘の簡易なアンケート調査を行う
生成物	LODEワークショップの基本的手順に関する参加住民の理解	各棟参加住民が認識する要援護者情報(立面戸割図)	今回参加者総力による要援護者情報(立面戸割図)	今回参加者総力による要援護者情報(棟別・年代別・タイプ別の要援護者人数表)	発災想定後の行動計画(各グループでの検討結果)	参加者の災害伝言ダイヤルの使い方に関する知識	今後の参加への意欲とアンケート(ポストイット)結果
作業単位	全体	棟別グループ	全体(それぞれ他の棟別テーブルに対、住民が赴いて意見を述べる)	全体(各棟別グループから全体に向けて発表)	全体(各棟別グループから全体に向けて発表)	全体	全体
進め方	<p>プレゼン</p> <p>橋から、 ①要援護者発見作業について説明する。 ・棟別に作業する ・立面模式図 ・その上にフィルムシート ・四隅を明記 ・凡例シールを貼る ・途中で棟別発表と棟同士「お助けタイム」をとる</p>	<p>作業:班員同士話し合いながら、凡例に従って要援護者シールを貼っていく</p> <p>①要援護者の居ない住戸:斜め線 ②自宅:銀の★ ③乳幼児:オレンジ丸 ④未就学児:黄色丸 ⑤小学生:水色丸 ⑥中学生:青色丸 ⑦後期高齢者:紫色丸 ⑧超高齢者:桃色丸 ⑨身体的支援が必要な人:銀色 ⑩コミュニケーション支援が必要な人:金色</p>	<p>作業:他棟住民が他のテーブルにお助け情報を提供する</p> <p>①各棟代表から作業状況を簡単に報告する(各1分)。 ②それに対して他棟からの参加者が追加情報(お助け情報):「○番館●●●号室にこんな方が住んでいる」</p>	<p>各棟別グループ毎に要支援者種別人数を全体に向けて発表</p> <p>③乳幼児:オレンジ丸 ④未就学児:黄色丸 ⑤小学生:水色丸 ⑥中学生:青色丸 ⑦後期高齢者:紫色丸 ⑧超高齢者:桃色丸 ⑨身体的支援が必要な人:銀色 ⑩コミュニケーション支援が必要な人:金色</p>	<p>作業:地震後に火災発生した時どう行動するか</p> <p>1 南部から ①地震発生(規模、日時)の与件発表 ②マンションから火災発生(部屋、火災状況)の与件発表</p>	<p>プレゼン</p> <p>市危機管理室から、災害伝言ダイヤルの使い方について説明</p>	<p>作業「本日の良かったところと課題」及びプレゼン(発表)</p> <p>1. 全員に、本日のワークショップで「良かった点」、「課題点」、それぞれを色別のポストイットに記入してもらう。</p>
				<p>ホワイトボードで整理板書し、全体での要支援者数表を作成する</p>	<p>2. テーブル別(棟別)にどう対応・行動するかの検討</p>		<p>2. ポストイットの内容を全員に一人一人全体に向けて発表してもらう。</p>
					<p>3. テーブル毎に全体に向けて検討結果発表。それをホワイトボード上に整理する。</p>		<p>3. 最後に倉原先生、及び安城市役所の方から講評をいただく</p>
役割	<p>●プレゼンター:災害VN鈴鹿 橋</p>	<p>●全体コーディネーター: 災害VN鈴鹿 南部 ●補助者:災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(住民)</p>	<p>●全体コーディネーター: 災害VN鈴鹿 南部 ●補助者:災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(住民)</p>	<p>●全体コーディネーター:災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(住民)</p>	<p>●全体コーディネーター:災害VN鈴鹿 橋 ●テーブルファシリテータ 各棟1名以上(住民) ●テーブル発表者(各棟1名)</p>	<p>●全体コーディネーター: 災害VN鈴鹿 南部 ●説明者:安城市の方</p>	<p>●全体コーディネーター: 災害VN鈴鹿 南部 ●補助者:災害VN鈴鹿 橋 ●講師:倉原、安城市役所の方 ●発表者(参加者全員)</p>
観察	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
記録	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原	倉原
ツール	<p>★PPT:「LODEワークショップ作業と凡例の説明」 ●凡例表シート(各棟班に複数枚)</p>	<p>●棟別立面戸割図(5棟分)と上掛けフィルムシート ●凡例シール各種</p>	<p>●棟別立面戸割図(5棟分)と上掛けフィルムシート ●凡例シール各種</p>	<p>●棟別立面戸割図(5棟分)と上掛けフィルムシート ●凡例シール各種 ●ホワイトボード</p>	<p>●棟別立面戸割図(5棟分)と上掛けフィルムシート ●凡例シール各種 ●ホワイトボード</p>		<p>●ポストイット(2色)人数分 ●筆記具人数分</p>
場所	Pマンション集會室						

表 4 3 : 安城市 P マンションでの L O D E ワークショップ参加者の感想・意見

No	良かった点	課題だと思った点
1	問題点、課題に気づくことができた。(住人の把握ひとつを取っても)	
2	今日の出席者の皆さんでC棟の居住者を大体把握できているので安心だと思いました。	いざという時に協力しあえる意識づくりが大切なので、普段イベントに参加していない世帯の方達と知り合いたいです。
3	どの部屋にどんな方が住んでいるのか、把握できたこと。 地震と火災があった時、何を最優先するのがわかったこと。	住んでいる人たちの情報があまりわかっていなかったこと。
4		マンションの住人マップの後の考えると、 消防、看護師、医師等もわかるようにしておくが良い。
5	年代シールがとても役立つ。支援必要性も、シールを貼ることで目でわかりやすい。	自宅避難となった場合の対処の仕方。 火災が起きた時の対処の仕方。広がり(延焼)を防ぐには？
6	たくさん気づきがあった。 ・自助の重要点(食、目、耳) ・地震時の自宅内でのイメージ(家具が動くなど) ・人の把握、年齢毎 LODEが良かった。(シール貼り、住民把握)	次のアクションをどうする？ もう少し議論したいと感じました。
7	やはり話せば(対話すれば)わかるのだと	災害に無関心でした
8	・挨拶をすると犯罪がなくなることの事例 ・117の情報	・継続できるようにする(LODEをベースにする)ためのアイデアがあったら教えて欲しい
9	具体的な活動レベルに落とし込んだ防災活動の必要性を感じたこと。 みんなも感じたであろうこと。	マンションという特殊性による活動の内容を色々で紹介して欲しい。
10	災害時、安否確認のためには、隣近所をいかに知っているか。日頃のコミュニケーションの大切さを再認識できた点。	最近の「個人情報」で情報の共有化が困難になってきている。この中でどうしていくか。 各戸どのような家族構成かわかる立面図があれば良いが(本日のシールを貼った図)
11	災害時の対応が細かく対処できること、気がつかないことが多かった ので、参考になりました。	特にありませんが、自助に対し、行動力を発動するものがあれば良いかと。
12	問題点が少し見えてきたこと(考え方や動き方が全員色々違う)	顔が見えない住民同士のコミュニケーションの取り方
13	近所の人のことをもっと知る大切さ	近所の人とコミュニケーションをとる
14	具体例を想定して対策を考えること	中身をもっと詳しくすることができなかつたか。 マンションの構造が、対策を練るようになっていくには、どうしたら良いか考える必要あり。
15	災害時、自分以外の方を守るという自覚ができた	マンションにシールを貼る時、見本があると良い

出席者名簿記載23名、市役所3名

●その他現場写真



写真 1 2 0 : 棟別に要支援者情報シールを貼る作業

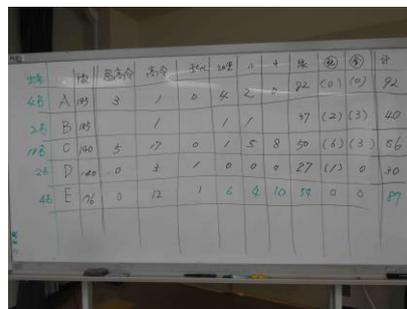


写真 1 2 1 : 棟別に要支援者情報を種別に全体報告、全体での情報数表を作成する

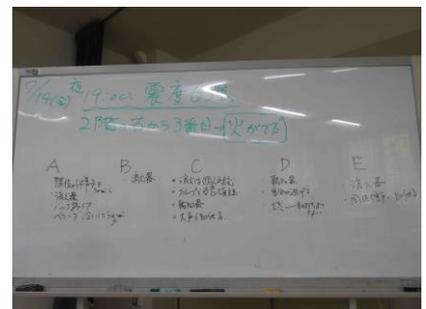


写真 1 2 2 : 火災発生想定への対処方法を棟別で検討し、その内容を板書き、全体で共有。

(2) 自立的展開へと歩みを進める伊丹市からの情報

前述(1)の安城市は、新しく“横へ広がる”タイプの普及・展開の成果といえるが、対して横ではなく“縦に深まる”事例もある。

伊丹市のH地区では、H小学校区福祉ネット会議が中心となって、学校区全体や学校区内のマンション自治会(Eマンション)でのLODEワークショップが一度ならず二度三度と継続・深化の道を辿っている。

そして、また新しく“縦に深まる”事例が育っていることが確認された。

伊丹市F地区の子ども育成団体(平成26年度3月及び27年度8月にワークショップを実施)の防災訓練実施の情報が、伊丹市におけるLODEの普及者でありコーディネーターでもある社会福祉協議会の橋倉氏より寄せられた。

残念ながら実施後(実施時期は29年1月であり、当PJチームはEマンションでのLODEワークショップと日程が重複していたことから、チームメンバーは当日参加できなかった)寄せられた情報であるが、その概要を知らされ、確実に当該地区及び当該団体が成長していることを確信した。

伊丹市社協 橋倉氏より報告のあったされた概要を記すと次のとおりである。

【伊丹市F地区(子ども育成団体:平成29年1月22日実施)】

a) 対象コミュニティ

- ・ 子ども育成団体『F地区スポーツクラブ21』

b) 実施の経緯

- ・ 平成27年3月、27年8月のLODEワークショップに続く防災訓練

d) 実際の実施内容と実施体制

●参加者数と参加者層:135名(小学生90名、高齢者15名、親などの世話役30名)

●実施内容と結果

- ・ 子どもたちが親のいない時間帯に自宅で地震被災した場合を想定し、自宅から避難所へ子どもたちがグループを組んで避難するという訓練を行った。
- ・ その際、子どもたちだけがグループを組むのではなく、近所の高齢者を誘い、高齢者と一緒に避難所の学校まで歩くという内容とした。

●実施者からの感想

- ・ 参加してくれた高齢者からは「低学年の子どもたちだけでは心もとなかったが、高学年の子どもたちが一緒にいてくれると頼もしく感じ等れた。」、「子どもたちと一緒に避難するということの良さがよくわかった。」などの声が上がった。
- ・ 民生委員さんの協力を得ることができてありがたかった(これまで当該団体は、当該地区の自治会から疎遠にされ続けてきた)。
- ・ 27年8月のLODEワークショップで、「子どもたちにまち歩きをさせて、その際街頭で大人や高齢者の方々に防災活動の説明をさせる」という活動を行なったが、それに続く成果であると考えている。

(3) 過疎の集落で継続して活動を展開するための試み

28年度(29年3月)にワークショップを実施した郡部離島地区集落モデルの鳥羽市M地区は、約600余世帯で高齢化率が50%近い過疎高齢化コミュニティである。

コミュニティ規模としては神戸市灘区大規模マンションとほぼ同じであるが、小学校も廃校になるほどのM地区では、子どもや若者の人数は灘区大規模マンションの1~2割しかいない。

また、漁業や海運などの自営業者が多く、定年退職でコミュニティ活動・防災活動に専心できる人材も多くない(若い高齢者はみんな働いている)。

こうしたある意味厳しい環境の漁村集落においても、LODE・防災活動に取り組続けられる方法を求めて、自主防災会から再度LODEワークショップの開催要請を受けた。

①鳥羽市M地区集落全体の子どもLODE2回目（平成29年8月19日実施）

a) 対象コミュニティ

- ・ 昨年度小学校が閉校になるなど、少子化が顕著で、小中学生全員でも20名に足りない。
- ・ このように超高齢化が進む島にあって、小中学生はもはや「守られる対象」ではなく、「高齢者を支援するための貢献」を求められるか、そうではなくとも「自分の身は自分で守れる子ども」であることが求められている。

b) 今回の子どもLODE実施の狙い

- ・ 3月11日のLODEワークショップを単発で終わらせないため。十数人しかいない小中学生が、欠けることなく集落の担い手に育ってもらわなければならない。
- ・ そのために自主防災会の大人たちと一緒に、1日中防災訓練に携わってもらおうと考えた。

c) 実際の実施内容

- 参加者数 子ども12名（中学生2名を含む）
- 実施内容
 - ・ 表44に8月19日研修の内容を整理する。

●現場写真



写真120：無線機の使い方を学びます



写真121：無線機を持ってまち歩き。危険箇所を探します。



写真122：橋の下に桃取名物穴地蔵のうち二人を発見

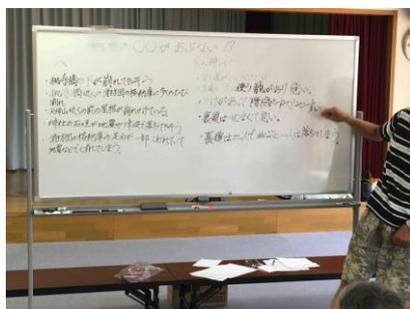


写真123：まち歩きの成果、M地区の危険箇所を整理します



写真124：鳥羽市消防局職員を講師に救急法を学びます



写真125：最後に流しそうめん夕食です

表 4 4 : 鳥羽市M地区での子ども L O D E ワークショップ (2 回目) の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5		作業6	作業7
所要時間	15	5	25	40	30	120	120	20
時刻	09:05~09:20	09:20~09:25	09:25~09:50	09:50~10:30	10:30~11:00	11:00~13:00	13:00~15:00	15:00~16:00
カテ	導入	本日のミッション説明と班分け	出発準備	フィールドワーク調査	フィールドワーク調査整理作業	休憩・昼食	救急救命訓練	終了と親睦
タイトル	挨拶 みんなで自己紹介と握手会	本日のミッション説明と班分け	トランシーバー取扱い説明	まち歩きして危険箇所を調査	まち歩きして調べた危険箇所の整理	休憩	救急救命訓練	会食会
達成すべき目標	子ども参加者と大人とのコミュニケーションを取りやすくする	子供達に本日の仕事の内容を伝え、意識させる。その実施体制を決める。	フィールドワークに使用するトランシーバーの使い方をおぼえさせる。	まち歩きしながら危険箇所の発見や観察の能力を養う。そのための気づきを体験させる。	まち歩きで発見、体験したことを整理させ、子どもたちの頭の中に定着させる。	後半の整理作業に向けて休憩をとり、集中力を回復させる。	心臓マッサージ、人工呼吸、AED操作体験、簡易担架など救命救急訓練を体験させ、子どもたちの能力と意識を高める。	流しそうめんをして、子どもと大人全員とで親睦を図る。
生成物	防災の取組みに向けて作業しやすい雰囲気	子どもたちのミッション遂行意識	子供達のトランシーバー取扱い技術	子どもたちが体験・チェックした危険箇所に関する知識・記憶	子どもたちが体験・チェックした危険箇所に関する知識・記憶をまとめた板書	子供達の集中力の回復。	子どもたちの救命救急に関する知識と経験	子どもと大人の交流体験
作業単位	全体	全体	全体	グループ別(1班~2班)	全体		全体	全体
進め方	プレゼン作業	プレゼン	プレゼン作業	フィールドワーク調査	整理作業		プレゼン体験作業	流しそうめん会食会
	1. 南部挨拶 2. メンバーを紹介 ①災害VNW鈴鹿(南部) ②県外(倉原、橘、森本) 3. 子どもと大人が一人ずつ挨拶を交わし、自己紹介しあい、握手する。これを全員が3回以上行う。	1. 本日の仕事はフィールドワーク調査 ①まち歩きして危険箇所を調べてくる。 2. 班分け作業・中学生(または小学校高学年)+小学生の4~6人体制に大人が付き添う。 ・A班は神社コース、B班は天神山コース	1. 災害VNW鈴鹿の南部ともかさんからトランシーバーの使い方を説明	1. 神社コースと天神山コースに分かれてまち歩き。 ・危険箇所を調べる。 ・お年寄りがいるところをチェックする。 2. 定期的に本部と無線で交信する。	1. 子どもたち一人ずつ「自分が危ないところ」を発表させる。 2. 次に「桃取のいいところは何？」という質問を出して一人ずつ答えさせる。 3. 発表の内容をホワイトボードに板書・整理する。			1. 大人たちが手作りの流しそうめん装置を屋外にセットする。 2. 女性陣が茹でたそうめんと、汁、食器を屋外に運ぶ。 3. 順次流しながら流しそうめんを楽しむ。
役割		●プレゼンター：南部 ●補助：橘	●プレゼンター：南部ともか ●補助者：南部美智代	●調査同行・安全確保：大人が一人ずつ	●プレゼンター：南部 ●板書：橘		●講師：鳥羽市消防局職員2名	●全員が働く
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本		倉原、森本	倉原、森本
記録	倉原、橘	倉原、橘	倉原、橘	倉原、橘	倉原、橘		倉原、橘	倉原、橘
ツール			●人数分のトランシーバー	●人数分のトランシーバー	●ホワイトボード		●AED ●人形 ●簡易担架	●流しそうめん装置 ●そうめん、汁、食器
場所	M地区コミュニティセンター							

②鳥羽市M地区集落全体の大人LODE 2回目（平成29年8月19日実施）

a) 対象コミュニティ

- ・ 鳥羽市M地区（離島集落、人口630人、高齢化率45%以上）の集落全体が対象。
- ・ 平日の日中は、集落の中に児童や学生、通勤者等が不在となり、高齢化率が著しく高くなる特徴をもつ。
- ・ コミュニティは非常に密であり、防災課題も「地震による津波」であることが住民間で共通認識となっている。

b) 実施前の状況と実施の経緯

- ・ 3月11日の東日本大震災の発災6年後の日に、集落の大人と子供を対象とした防災研修を開催し、それを契機に自主防災組織の強化を図るとともに、再度『要援護者台帳』の作成・更新に取り組んだ。
- ・ 今回の開催は、3月11日に再点火させた住民の危機感ややる気を持続させるためである。

c) 対象コミュニティのキーパーソン

- ・ 鳥羽市職員であり、自主防災組織の役員でもある居住者S氏が取りまとめ役、連絡調整役を担っている。
- ・ S氏の周りには、自主防災組織の仲間が数名いて、非常に連携も上手くとれている。

d) 今回のLODE実施の狙い

- ・ 3月11日に実施したLODEワークショップから間を置かず研修会を実施することで、住民たちの危機感ややる気を持続させることができるのではないかと考えた。
- ・ 加えて、8月19日午前中から取り組んだ子どもLODEワークショップの内容や動きを引き継ぐことも意図した（M地区の心配なところ、いいところ）。
- ・ 「防災」を防災単独ではなく、住民たちの最大関心事と結びつけておいて常に考えてもらうことを意図した。

e) 実際の実施内容

●参加者数 45名（夜の部の大人の参加者だけの数字）

●実施内容

- ・ 表45に8月19日研修の内容を整理するが、当日の内容は「防災」を含むものの、狭義の防災ではなかった。自然災害以外にも島民の心配のタネである「高齢化・過疎化」、「島の衰退」がテーマとなった。それらと一体で考えることで、防災がより現実的な課題として住民の間に継続して受け入れられるのではないかと考えた。
- ・ 今回のテーマは住民の心を引き付ける最大関心事であったと思われる。そのためか、研修会の終了（午後9時）後もコミセンから帰ろうとせず、熱心に話し込んだり語ろうとする住民の数は少なくなかった。

●現場写真

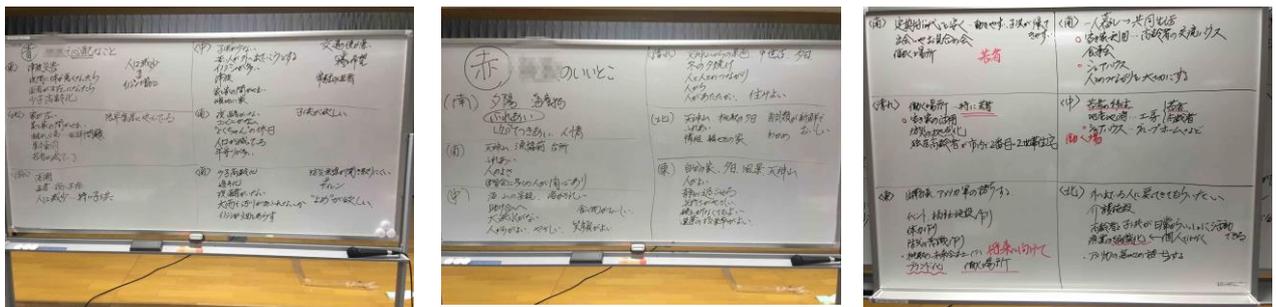


写真126・127・128：左から「M地区の心配なところは?」、「M地区のいいところは?」、「何に取り組まないとダメ?」についての住民意見をホワイトボードに整理した。

表 4 5 : 鳥羽市M地区でLODEワークショップ (大人 : 2 回目) の実施手順

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
所要時間	5	3	7	30	25	25	20	5
時刻	19:00~19:05	19:05~19:08	19:08~19:15	19:15~19:45	19:45~20:10	20:10~20:35	20:35~20:55	20:55~21:00
カテ	受付	導入			まちづくり課題と その中で「防災」の意識付け			結び
タイトル	受付・雰囲気作り	プロジェクトメンバー紹介 参加者紹介	前回のさらいと LODEの説明	作業 : 「この地区の心配な」とは?	作業 : 「この地区のいいところ」とは?	作業 : 「では、どうすればいいのか」とは?	質疑応答	まとめと講評
達成すべき目標	参加者の緊張をほぐすために参加しやすい雰囲気を出し出す。	プロジェクトメンバーや参加者を知り、作業へのウォーミングアップを行う	前回のワークショップの記憶を呼び戻し、LODEが重視する「要援護者の情報と支援」の重要性を理解してもらう。 ・普及者育成LODEの意義を理解してもらう。	防災を狭義の防災に押し込めるのではなく、まちづくり課題と関連づけておく	防災を狭義の防災に押し込めるのではなく、まちづくり課題と関連づけておく	・防災を狭義の防災に押し込めるのではなく、まちづくり課題と関連づけておく ・問題意識だけではなく、今後の行動の方向に関する意思を表明してもらう	本日の課題に関して、住民たちが本音を吐露し合う状況	参加者に、外側の目による講評を聞いていただき、次の活動のための意識づくりをおこなう。
生成物	和やかで参加しやすい雰囲気	作業しやすい雰囲気	前回のワークショップの記憶 ・要援護者対応を重視したLODEに対する参加者の初期的理解 ・普及者育成プログラムに対する参加者の理解	住民たちの「M地区の心配なところ」を記したポストイットとホワイトボード ・住民たちの「まちづくり課題意識」と、その中で位置付けられた「防災課題意識」	住民たちの「M地区の心配なところ」を記したポストイットとホワイトボード ・住民たちの「まちづくり課題意識」と、その中で位置付けられた「防災課題意識」	住民たちの「M地区の心配なところ」を記したポストイットとホワイトボード ・住民たちの「まちづくり課題意識」と、その中で位置付けられた「防災課題意識」	住民たちの本音と、お互いの本音の共有	参加者の今後への意識
作業単位	各人 (来場順)	全体	全体	全体及び 班別発表	全体及び 班別発表	全体	全体	全体
進め方	参加者の受付時に、講師側が挨拶し、一声ずつ声かけし、和やかな雰囲気を作る。	プレゼン	プレゼン	作業 : 「M地区の心配なところ」をポストイットに書いてもらう	作業 : 「M地区のいいところ」をポストイットに書いてもらう	作業 : 「では、どうすればいいのか」をポストイットに書いてもらう	プレゼン及び 議論	プレゼン
	その後、ワークショップのスタートまでに、お茶とお菓子を楽しんでもらい、参加者同士でも歓談してもらう。	LODEプロジェクトメンバーを紹介する ②プロジェクト代表倉原先生 ③研究メンバー : 橋、森本		1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「M地区の心配なことは？」を青いポストイットに3分以内に書く ②ポストイットを班長が回収する	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「M地区の心配なことは？」を青いポストイットに3分以内に書く ②ポストイットを班長が回収する	1. 南部美智代から次のような作業指示 ①「ではどうすればいいのか？」を黄色いポストイットに3分以内に書く ②ポストイットを班長が回収する 2. 順番に全員が自分のポストイットを発表する。	1. Y自治会長より、「どうすればいいの？」に関する自治会長としての考え方を述べてもらう。 2. それに対して会場参加者からの質問や意見を出してもらい、質疑応答する。	南部及び倉原先生から簡単な講評を発表してもらう
	あらかじめ班を指定して着席してもらう (世古別に6テーブル程度を予定)	●総合ファシリテーター : 南部、補助 : 橋体制を進めることを述べる ●各班の班長 (代表) を決める		2. 各班の班長が順番に班員たちのポストイット内容を読み上げる 3. 書記がホワイトボードに整理して書きとめる。	2. 各班の班長が順番に班員たちのポストイット内容を読み上げる 3. 書記がホワイトボードに整理して書きとめる。	3. 書記がホワイトボードに整理して書きとめる。 4. ポストイットを班長が回収して書記に手渡す。	3. 意見の流れに偏りなどが見られた場合は、自然な形で南部や橋から質問を出す。	
役割	●挨拶 : 南部 ●受付 : 鳥羽市S氏、自主防のS氏、S氏	●プレゼンター : 南部、S氏	●プレゼンター : 南部 ●板書 : 橋	●プレゼンター : 南部、橋 ●補助者 : 森本	●プレゼンター : 南部、橋 ●補助者 : 森本	●プレゼンター : 南部、橋 ●補助者 : 森本	●プレゼンター : Y自治会長 ●コーディネーター : 橋	●講評者 : 南部さん ●講評者 : 倉原先生
観察	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
記録	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本	倉原、森本
ツール	●6つのテーブル (島) の設置 ●高齢者用の低座面椅子の用意		※高齢者が多いのでパワーポイントなどは使わないで、南部からの口頭説明とする。	●ポストイット大、 ●ラッシュンペン、 ●ボールペン、 ●ホワイトボード	●ポストイット大、 ●ラッシュンペン、 ●ボールペン、 ●ホワイトボード	●ポストイット大、 ●ラッシュンペン、 ●ボールペン、 ●ホワイトボード	●全員に凡例表 (200枚)	
場所	M地区コミュニティセンター大広間							

3. 研究開発結果・成果

3-1. プロジェクト全体としての成果

3-1-1. プロジェクト達成目標に関する結果・成果

(1) LODEの目的・本質

LODEの目的は、「地域住民自らによる、多様性の理解と、その中での互助の喚起」である。同時にそれらの理解・認識に支えられた各人の生活者としての自覚・態度育成にある。こうした多様性またそこにある関係性に支えられた個人としての自覚・認識があってこそ真の自助が発動すると考える。

LODEは、『LODEワークショップ』と『LODESTAR（ロードスター）チャート』から成る。LODEの取り組みを進めるためのPDC Aサイクルで、P・D・Aを担うのが『LODEワークショップ』である。PDC Aサイクルで、主としてCのためのチェック項目を提案・示唆するのが『LODESTAR（ロードスター）チャート』である（これはPのための視点ともなる）。

(2) LODEの普及が期待できる手法となるためのポイント

LODEワークショップは、地域コミュニティにおける自助力（互助力）を高めるための手法である。したがって、地域コミュニティで自発性のある、あるいは自立的な展開・普及活動が期待できる手法を目指さなければならない。

当研究開発に取り組む上で、我々のチームは、次の点を意識して進めたが、結果的には概ねそれ等の要件をクリアできたと思われる。

① 地域の一般住民にもわかりやすい手法を目指す

一般住民にとってのわかりやすさに関しては、「シールによる年代や支援必要性の可視化がわかりやすい」というワークショップ参加者意見が複数の対象地（伊丹H小学校区、神戸市灘区大規模マンション、安城市Pマンション等）で得られたことから、概ね達成できているものと思われる。

② 自然な普及・展開力が期待できる手法を目指す

地域コミュニティの現場で、住民たちに使ってもらえる手法であるならば、特別な広報や啓蒙活動などがない場合にも、手法そのものが自然と評価を得て普及していく力を持つものとする。

その展開・普及可能性を見るために、当研究開発プロジェクトで実施したLODEワークショップ等のうち、南部美智代の影響が大きい三重県内の対象地や、特別な紹介等による対象地を含めずに、自然な流れで波及・普及した対象地での展開・実施状況を図18に整理した（ここでは、LODEの前身のDIG発案者でもあり、活動に影響力が大きい南部の存在をあえて抜いた上で各事例を分析検討することで、一般解としての展開・普及可能性により近づくと考える）。

平成26年度事業スタート当初には対象候補のコミュニティ（LODEワークショップ実施経験があるコミュニティ）が3都市・7対象あったが、自然な展開によってみせた（広報をせず、口コミに委ねた）拡がり（他の地域やコミュニティへの波及）や深まり（繰り返し実施して回数を重ねたり、どんどん内容を掘り下げて深めていく）の結果、平成29年9月時点では7都市・19対象（29年12月実施決定分を含む。南部の影響が大きい三重県内の対象地や、事業関係者からの紹介による神戸市灘区の対象地を含まない数である。）へと拡がりを見せている。

③ 繰り返し実施してもらえ手法を目指す

釜石東中学出身者へのヒアリングでは、「何度も何度も繰り返す」ことの効果が報告されている。一度や二度くらいの取り組みでは地域住民への浸透は覚束無いと心すべきである。

図18の中には、伊丹市Eマンションの合計5回（事業期間中は3回）、伊丹市H小学校区福祉ネット会議の4回（事業期間中は2回）、伊丹市F地区子ども育成団体の3回（いずれも事業期間中）等で、繰り返し実施の動きが見受けられる。

その結果、Eマンションでは図上ワークショップでほぼ全戸の表札名が住民によって記入されたり、要支援者の災害時避難支援計画の個別検討まで行えるようになった。また、H小学校区福祉ネット会議では、校区全域に向けて開催したLODEワークショップの後に、校区内の単位自治会や小学校でも子どもLODEワークショップを実施できるなど拡がりも見せている。さらに伊丹市F地区子ども育成団体では、3回目のワークショップ（避難訓練）で子どもが高齢者を誘って一緒に避難訓練できるまでに成長を見せている。これらの点は、先の自然な広がり持続性から生じた成果・効果として高く評価できると思う。

④ バラバラな地域の中で多様な住民層を対象にできる手法を目指す

LODEの文字に意味を込めたように、地域には多様な暮らしを営む方々が存在する。

図3からも推察できるが、各コミュニティ間の繋がりが薄い中で、今や自治会が主催する防災イベントに参加する住民は半分にも満たないと考えられる（中高年代層がほとんどである）。

よって自治会だけでなく、子どもコミュニティ（子どもや親世代）、障害を持った方々や家族等、多様な住民層にアプローチできる手法でなければならない。

この点に関して当プロジェクトでは、基本的なLODEワークショップ（自治会等を対象）に加え、より簡単で体験型メニューによる子どもLODEワークショップ（子ども会や学校など対象）を開発できた。

障害者（及びその家族）に向けた手法に関しては、その内容がさらに多岐に渡ると目されることから細部の確立には至っていないが、「障害者（及びその家族）への橋渡し役（理解者、信頼を得られる人）を介したコミュニケーション」が現実的であると判断し、今後地域でのLODEワークショップにおいて「橋渡し役・理解者となれそうな人」の凡例シールも必要になるものと考えている。

また障害者の分野ではその特性から活動普及が特に難しい面があるが、一方で多様性の理解を深めることを狙うLODEにおいて、その存在は重要な可能性を孕んでいる。すなわち障害者の状態・環境は極めて千差万別であり一括りには出来ないこと、そのことは翻ると一人ひとりを認め合う（＝多様性の理解）、異なる個性を開き高め合う地域社会形成への有効な回路となり得る可能性を持つと捉えている。

⑤ リーダー層やコーディネーターにも関心を持ってもらえ手法を目指す

展開・普及を図る上で、一般住民に理解してもらいやすいことは必要条件ではあるが、それだけでは十分ではない。展開・普及には、例えば、社協のコーディネーター（コミュニティワーカーなど）や地域の民生委員、あるいは自治会リーダー等、コーディネーター層やリーダー層に評価される必要がある。また場合によっては、自治体関係者の理解・評価が重要になることも少なくない。

当研究開発プロジェクトでは、社協職員、民生委員、自治組織リーダー、自治体関係者に、広く、深く、長く関心を持ってもらうために、次のような工夫が必要であると考えた。

● 「狭義の防災」以外に課題意識を持つリーダーが少なくない

- ・ 社協職員や民生委員はもともと「地域福祉」に関心を有している。
- ・ 自治組織リーダーの多くは、防災以外にも防犯、子育て支援、高齢者や障害者の見守り、

地域活性化、地域環境整備・保全、そしてコミュニティの足腰ともいうべき住民相隣関係構築など幅広い意味でのまちづくりに関心を持つものと思われる。

- しばらくの間、大きな災害が発生しないと住民の防災意識は低下する
 - ・ 阪神大震災の後も、東日本大震災の後も、国民・市民の多くは防災に関心を持った。しかし震災発生から時が経つにつれて、危機意識が徐々に希薄になっていく。
 - ・ これと同様、「防災」への取組みは、住民にとって当初印象の強い活動であると思われるが、何年か経つと「防災」がインパクトを発揮しづらくなると思われる。
- よって、「狭義の防災」だけでなく、「非常時の防災+平時の見守り福祉」など、その対象地に合わせた複合的な課題設定が求められる。

これらの視点を包含し、かつ「防災を、一歩退がった視点から幅広く見つめ直す」ためのチェック用ツールとして、またリーダー・コーディネーター層育成のための支援ツールとして、『LODESTAR（ロードスター）チャート』を開発することとなった。

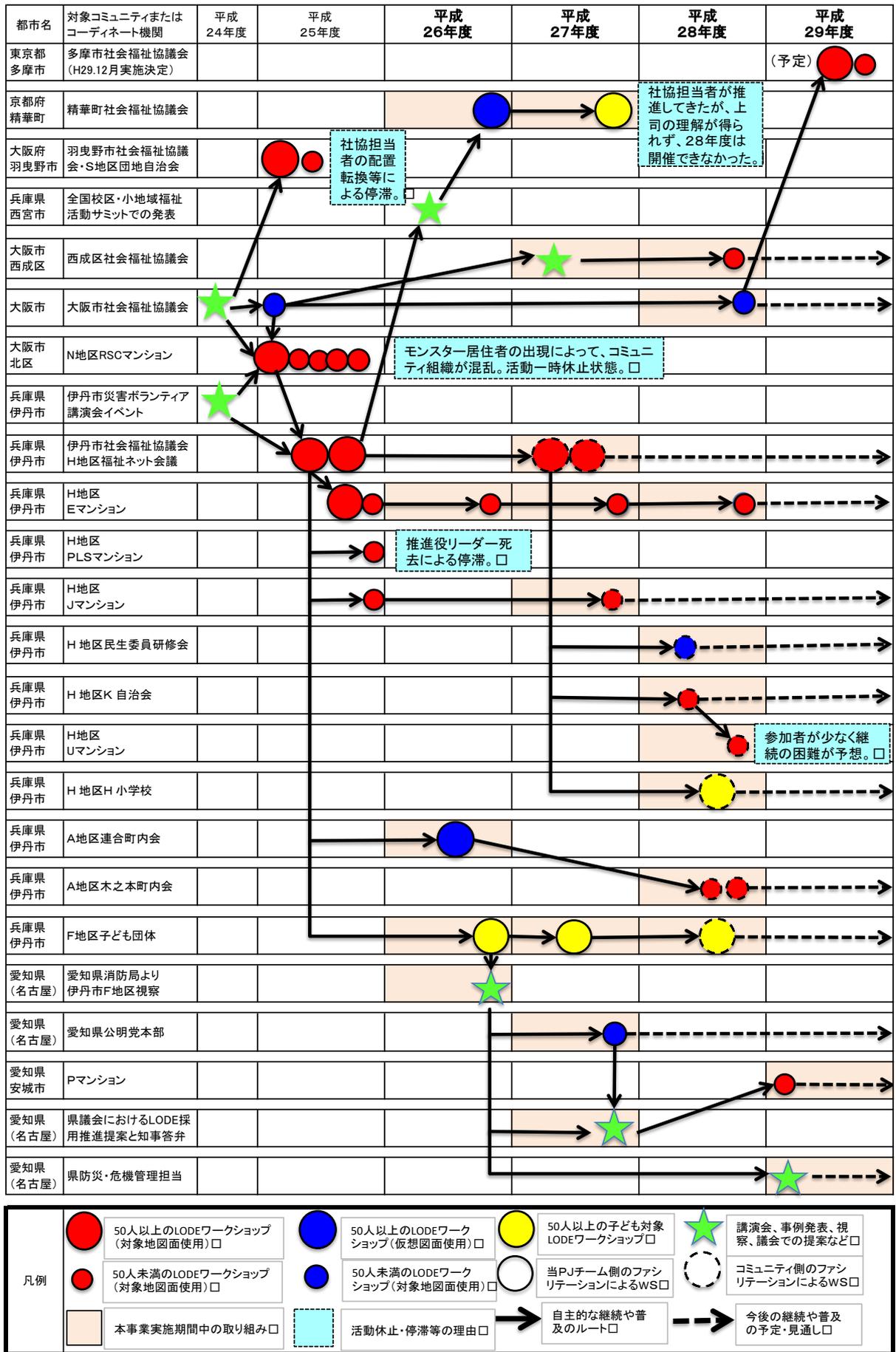


図18：本研究開発におけるLODEワークショップの自然な展開・普及の状況

(3) LODEワークショップの体系化とコミュニティタイプ別標準的実施手法の開発

これまでの研究開発の結果、LODEワークショップのコミュニティタイプ別の体系は表46の内容とするのが最も適切であると考えられる。

表47に示すのは、3年間に実施した主なLODEワークショップを、対象コミュニティ、目的、そして使用した図面や資料などを整理し、その上で、LODEワークショップの種別を検討したものである。

まず、対象者とのコミュニケーションの難しさによって、対大人、対子ども、対障害者と大別できる。子ども向けは「子どもLODEワークショップ」、障害者向けは「障害者LODEワークショップ」となるが、障害者に対しては手法の標準化が極めて難しい。

大人向けは、自分たちのコミュニティのことを考える「基本LODE」と、防災コミュニティリーダーやLODE普及者・ファシリテーターを育成する目的での「育成LODE」とに分けた。

表46：コミュニティタイプ別LODEワークショップの体系

表47：対象・目的・使用図面等から整理・分類したLODEワークショップのタイプ

LODEのタイプ		対象・エリア	狙い・内容・使用する図面など
基本LODE		単位町内会・自治会、及び班、マンションの組合等	<ul style="list-style-type: none"> ・住民一人一人の自助力を上げる。 ・共助意識醸成と要援護者情報共有。 ・将来の守り手育成意識の醸成。 ・防災訓練・避難訓練。 ・図面は、地域や町内の実際の地図や実在するマンションの戸割立面図を使用する。
補完LODE	子どもLODE	学校区や、自治会単位で	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。 ・図面を使う場合は、地域や町内の実際の地図や実在するマンションの戸割立面図を使用する。 ・図面ワークだけでなく、制作WSやフィールドワーク、大人や高齢者との交流を重視する。
	障害者LODE	様々なケースが考えられる	ケースによってアレンジが必要 現時点で標準化することは難しい
育成LODE		基本LODEや子どもLODEと同じエリアの場合	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の中でLODEファシリテーターや普及者を養成する。地域の実際のワークショップの中でOJTする。 ・地域や町内の実際の地図や実在するマンションの戸割立面図を使用する。
		参加者が広域から集まる場合	<ul style="list-style-type: none"> ・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。 ・図面は、仮想コミュニティの地図を使用する。

都市	対象コミュニティ	日程	主な対象者	目的	使用図面の種別	図面以外の資料や内容	LODEのタイプ
京都府 精華町	精華町社協	2015/3/14	コミュニティリーダー (全町)	災害リーダーの育成	全町域の地図		導入
大阪市 西成区	西成区社協	2016/6/29	地域福祉リーダー	リーダーの育成		(講演会)	導入
兵庫県 伊丹市	A地区 連合自治会	2014/10/7	コミュニティリーダー (連合町内会)	地域コミュニティリーダー による防災学習	地域の住宅地図		導入・育成
兵庫県 伊丹市	H小学校区 福祉ネット	2016/1/30	地域住民 (学校区)	地域コミュニティリーダー による防災学習	地域の住宅地図 マンション別戸割立面図		導入・育成
兵庫県 伊丹市	H小学校区 福祉ネット	2016/2/7	地域住民 (学校区)	地域コミュニティリーダー による防災学習	地域の住宅地図 マンション別戸割立面図		導入・育成
大阪市 中央区	福祉・まちづくり市民 団体	2017/2/26	社協職員等	地域コーディネーター育成	仮想マンション戸割立面図	(『LODESTARチャート (マンダラチャート)』)	育成
大阪市 西成区	西成区社協	2017/1/28	地域災害ボランティア	災害ボランティア育成	仮想マンション戸割立面図		育成
名古屋 千種区	愛知県 公明党本部	2016/3/5	県内の議員	議員の防災学習	仮想マンション戸割立面図		育成
三重県 鈴鹿市	災害ボランティア	2016/3/18	災害ボランティア等 (全市)	災害ボランティア育成	仮想マンション戸割立面図		育成
三重県 鈴鹿市	災害ボランティア	2016/6/3	災害ボランティア等 (全市)	災害ボランティア育成	仮想マンション戸割立面図		育成
大阪市東 淀川区	福祉・まちづくり市民 団体	2016/3/27	社協職員等	地域コーディネーター育成		(『LODESTARチャート (マンダラチャート)』)	育成
三重県 鈴鹿市	災害ボランティア	2016/8/6	災害ボランティア等 (全市)	災害ボランティア育成		(別途子どもに関する資料)	育成
三重県 鈴鹿市	災害ボランティア	2016/11/13	災害ボランティア等 (全市)	災害ボランティア育成		(別途子障害に関する資料)	育成
三重県 伊勢市	C地区 連合町内会	2015/1/12	地域住民 (連合町内会)	地域防災リーダーの 防災学習	地域の住宅地図		基本
三重県 鳥羽市	M地区(大人)	2017/3/11	地域住民 (集落地区)	地域住民による 防災学習	地域の住宅地図		基本
兵庫県 伊丹市	H地区 K自治会	2016/9/17	地域住民 (単位自治会)	地域住民による 防災学習	地域の住宅地図 マンション別戸割立面図		基本
兵庫県 伊丹市	Eマンション 自治会	2017/1/22	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
兵庫県 伊丹市	Eマンション 自治会	2015/2/22	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
兵庫県 伊丹市	Eマンション 自治会	2016/2/7	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
兵庫県 伊丹市	Jマンション 自治会	2016/2/13	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
愛知県 安城市	Pマンション	2017/7/15	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
神戸市 灘区	大規模マンション	2015/6/14 2015/7/5	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習	マンション戸割立面図		基本
三重県 鳥羽市	M地区(大人)	2017/8/19	地域住民 (集落地区)	地域住民による 防災学習		(ポストイット意見収集・討 論)	基本(展開型)
神戸市 灘区	大規模マンション	2015/10/18	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習		(防災訓練)	基本(展開型)
神戸市 灘区	大規模マンション	2016/11/23	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習		(防災訓練)	基本(展開型)
神戸市 灘区	大規模マンション	2016/1/17	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習		(防災イベント)	基本(展開型)
神戸市 灘区	大規模マンション	2017/1/14	地域住民 (マンション)	マンション住民による 防災学習		(防災イベント)	基本(展開型)
京都府 精華町	精華町社協 (子ども)	2016/3/12	地域の子ども (全町)	子ども防災学習	全町域の地図	(制作WS、クイズ)	子ども
大阪府 箕面市	D地区 まちづくりNPO	2015/2/7	地域の子ども (学校区)	子ども防災学習	地域の住宅地図	(フィールドワーク) (制作WS)	子ども
兵庫県 伊丹市	H小学校4年生クラ ス	2017/1/12	小学生 (学校)	子ども防災学習	地域の住宅地図	(クイズ、映像)	子ども
兵庫県 伊丹市	F地区 子ども団体	2015/3/28	地域の子ども (学校区)	子ども防災学習	地域の住宅地図	(制作WS、クイズ)	子ども
兵庫県 伊丹市	F地区 子ども団体	2015/8/22	地域の子ども	子ども防災学習	地域の住宅地図	(フィールドワーク) (制作WS、クイズ)	子ども
三重県 鳥羽市	M地区(子)	2017/3/11	地域の子ども (集落地区)	子ども防災学習	地域の住宅地図	(フィールドワーク)	子ども
広島市 安佐北区	L寺 学童教室	2017/2/11	地域の子ども (学校区)	子ども防災学習	地域の住宅地図	(制作WS、クイズ)	子ども
神戸市 灘区	大規模マンション	2015/8/23	地域の子ども (マンション)	子ども防災学習	マンション戸割立面図	(フィールドワーク)	子ども
三重県 鈴鹿市	B小学校 4年生クラス	2014/10/23	小学生 (学校)	子ども防災学習		(制作WS)	子ども
三重県 鳥羽市	M地区(子)	2017/8/19	地域の子ども (集落地区)	子ども防災学習		(フィールドワーク)	子ども
広島市 安佐北区	L寺 学童教室	2016/12/10	地域の子ども (学校区)	子ども防災学習		(制作WS、クイズ)	子ども
三重県 鈴鹿市	療育センター	2015/12/17	障害者の家族	障害者の避難に関する 調査		(別途アンケート調査)	障害者
三重県 鈴鹿市	療育センター	2016/1/25	障害者施設職員	障害者の避難に関する 調査		(別途アンケート調査)	障害者
三重県 鈴鹿市	療育センター	2016/1/26	障害者の家族	障害者の避難に関する 調査		(別途アンケート調査)	障害者

①基本LODEワークショップ

このうち、最も中心となり、基本となるのが『基本LODE』であり、この『基本LODE』の標準の実施手法を別冊『LODEに取り組んでみませんか?』に掲載した(別冊参照のこと。図19・20にその一部を示す)。ここではこれまでの各地での実施において作成してきた「実施手順表」をもとに、『基本LODEワークショップ』の手順を構造化して示す。

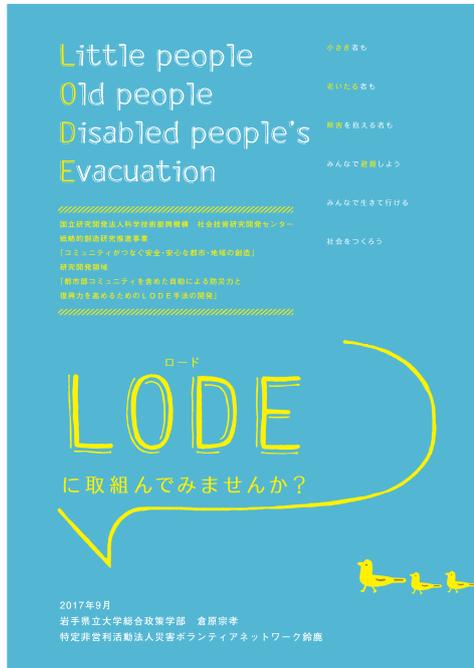


図19・20・21・22: 別冊『LODEに取り組んでみませんか?』の一部内容例

表 4 8 : 試行調査の構造化から整理した基本的な L O D E ワークショップの手順 (第 1・2 回目)

手順	カテゴリー	目的や 具体的メニュー	主な準備物
1	導入	<ul style="list-style-type: none"> ●ウォーミングアップ ・挨拶、メンバー紹介、お互いの自己紹介など ●L O D E の意味や成り立ちの説明 ●大規模災害発生時における自助や互助に関して考えてもらう、認識を持ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ◆L O D E の説明パワポ ◆共助や互助が重要であることを示す説明
2	自助や互助の認識を深める	<ul style="list-style-type: none"> ●ポストイットで「あなたが自助としてすることは？」や「あなたにとって災害発生時に必要なこと、ものとは？」等を記入してもらい、全員の回答を整理発表する。 ●東日本大震災時の避難所で高齢者たちが入歯やメガネ等を置き忘れて困っていたことを知らせる。その上で各地域や個人において大切な物への意識を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ポストイット (大) ◆ホワイトボード
3	要支援者について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ●多くの住民は要支援者について具体的な知識が少ない。子ども、高齢者、障害者等に関して説明する。(リーダー層にはヘルパー初任者研修程度知識を目指して欲しい) ●要支援者についての説明と併せて、図上作業で要支援者等の情報に対応するシールの種別を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆要支援者に関するパワーポイントなどでの説明資料 ◆凡例表
4	図上作業 (情報可視化)	<ul style="list-style-type: none"> ●地図やマンションの戸割立面図の上に該当する要支援者等情報のシールを貼っていく。(班別作業が効率的: 1 班は 5、6 名 ~ 1 0 名程度) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆凡例表 ◆各種シール ◆図面
		<ul style="list-style-type: none"> ●他の班との情報交換による補強タイム (お助けタイム) ●コミュニティ全体の状況を全員で共有するため、班別に種別毎シール数を発表、その後全体で集計してみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ホワイトボード
5	図上作業 (避難想定訓練)	<ul style="list-style-type: none"> ●仮想災害発生の与件を発表する。(災害の種別、場所、規模・程度、日時、気象条件。津波の場合は到達予想時刻と想定規模。火災の場合は場所や規模、現在の状況) ●与件のもとで、どのように班員が避難するか、あるいは避難支援 (要支援者等) するかを検討し、全員で共有するため、班のまとめを全体に向けて発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆4 で作成した図面 ◆その上にかぶせるビニールシート ◆マジックペン
6	図上作業 (5 年後 L O D E)	<ul style="list-style-type: none"> ●時間が 5 年経ったという想定で、年代シールを 5 年後のものに貼り直す (ビニールシートの上から)。 ●高齢化の進行を再認識してもらおう一方で、新たな担い手に育つ可能性を持つ子どもや若者にも注目してもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆4、5 で使用した図面 ◆凡例シール
7	要支援者避難支援計画・検討	<ul style="list-style-type: none"> ●作成した図中の要支援者を「どのように避難させるか、そのために必要な対応方法や人員は？」について、避難行動支援、避難生活支援の両面から検討してまとめ、全体発表する。【『5 年後 L O D E』とともに、第 2 回目以降となる可能性が大】 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難行動支援計画シート ◆避難生活支援計画シート

1 回目に『基本 L O D E ワークショップ』に取り組んだ後、2 回目以降どのような歩みを進めていくべきか、それは当研究開発プロジェクト試行調査対象地の中で、取組みを継続実施しているコミュニティの間でも差がある (次表 4 9 参照)。

表 49 : 基本的LODE実施後に活動継続しているコミュニティの取組みの方向

	2回目の実施内容	3回目の内容	4回目の内容
A 伊丹市Eマンション (初回は平成25年度実施)	1年後26年度実施 (本研究開発事業としては初年度) ●1回目に引き続きマンションの戸割立面図を使用する図上ワークショップ(戸割図面に世帯名は抜いてある図も用意だが、世帯名を半分も記入できなかったことから、急遽1回目と同じ世帯名入り図面を使用した)	2年後27年度実施(本研究開発事業としては2年目) ●1・2回目に引き続きマンションの戸割立面図を使用する図上ワークショップ(戸割図面に世帯名は抜いてある図しか用意せず、世帯名を記入させるという高度な作業もほぼ大半を埋めることができた)	3年後28年度実施(本研究開発事業としては3年目) ●1・2回目に引き続きマンションの戸割立面図を使用する図上ワークショップ(戸割図面に世帯名を記入させるという高度な作業もほぼ完全に埋めることができた)
B 伊丹市H小学校区福祉ネット会議 (初回は平成25年度実施)	1年後26年度実施 ● <u>まち歩きを重ねて、地域防災マップを自力で作成した。</u>	2年後27年度実施 ●25年度とほぼ同じ内容の図上ワークショップを行った。 しかし、 <u>実施企画とファシリテーター役を全て地域民生委員たちが務めた。地元企業に協力要請し、ダンボールベッドなどの避難所グッズの説明など、新しいメニューも導入した。</u>	3年後28年度実施 ● <u>学校区内の新しい現場へ、ファシリテーターとして『基本LODE』や『子どもLODE』の普及・実施に努めた。</u> ・ 小学校 ・ 自治会 ・ マンション
C 神戸市灘区大規模マンション (初回は27年6月)	同じ年度4ヶ月後実施 ● <u>自力で防災訓練を企画・実施した。200名が参加した。</u>	同じ年度7ヶ月後 ● <u>コミュニティへの浸透を図るため、震災祈念イベントを行った(当PJチームの発案、支援)</u>	2年目 ● <u>自力で第2回目の防災訓練を実施した。230名が参加した。</u>
D 鳥羽市M地区 (初回は29年3月)	2年目(5ヶ月後) ● <u>防災課題を島民が関心の高いまちづくりの課題と一緒に検討する検討会を開催した。</u>		

Aは年に1回図上ワークショップを続けているが、その内容が年々高度になってきており、明確に進歩が見られる。4年目の28年度には「要支援者個別支援計画」の検討ができるところまで到達した。内容の進歩と共に参加者の主体性、リーダーの技術力の高まりも見られる。

Bは、民生委員や社協職員たちが中心になった団体ということもあってか、いち早くファシリテーターとしての能力を持つ人材育成を成し遂げ、その活動を展開・普及させるところまで進め

ている（ただし、内容の深さはAには及ばない）。

Cコミュニティの推進役は、防災士たちが中心になっている活動体であり、どうしても「得意な方面の活動（防災訓練）」が中心になるようだ。コミュニティがまだまだ脆弱であることはある程度認識していると思われるが、住民主体型活動に関する活動の輪や裾野の広げ方に関しては、まだ経験・認識不足という課題を有している。

Dは、非常に参加率の高い郡部集落コミュニティであるが、一方で超高齢化と過疎という深刻なまちづくり課題を抱えていることから、防災テーマ単独ではなく、まちづくり課題と一体で防災に取り組むという方向を選択し始めている。

このように、4箇所それぞれが異なる方向に歩みを進めている。現時点で、どのステップが正しいのかは軽々に論じることができない。ある意味4つとも間違いではなく、地域の事情に応じてこの4つのタイプのいずれかがベターなのか、或いはこの4つのうちいずれかの複合型が正しいのか、論じるためにはもう少々時間が必要と思われる。

②子どもLODEワークショップ

子どもLODEに関しては、P68～P75（平成28年度試行調査の記録）で記しているように、1時間程度の短時間モデルと数時間まで可能な長時間モデルの2タイプを提案する。

長時間モデルは「まち歩きなどのフィールドワーク」などの屋外体験メニューを取り入れるものであり、屋内でのワークショップは1時間程度、休憩を取っても1時間半までが限界と目される。これは最近の小学生に見られる「じっとしてられない子ども、集中できない子ども、他の子にちょっかいを出す子ども」が多い（発達障害に原因があるといわれている）ということとも関係が深い可能性がある。

表50：試行調査の構造化から整理した子どもLODEワークショップの手順

手順	カテゴリー	目的・テーマ	主なメニュー
1	導入1	<ul style="list-style-type: none"> ●災害に関心を持ってもらう ●災害が起こったらどうするの？ 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 震災の映像を見せる（被災現場や避難所の様子） ◆ 震災の画像を使ったクイズ（こんな被害を抑えるために、何に気をつけなければならないの？） ◆ その他防災クイズ（身を守る知識）
2	導入2	<ul style="list-style-type: none"> ●絵や画像を使ったクイズで、さらに災害・防災への関心を持ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ◆避難所のマークはどんなのか知っている？ ◆避難所でお手伝いできることはどんなこと？
3	LODEとは	<ul style="list-style-type: none"> ●絵やイラストで要支援者の概略説明をしてお年寄りや障害者について知ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ◆災害の時に、一人では逃げられない人、困る人がいます。どんな人？（クイズ形式で） ◆災害が起こったら、あなたは何をしてあげられますか？（声かけや大人への情報提供などを誘導）
4	図上訓練1	<ul style="list-style-type: none"> ●地図の読めない子どもたちにも図上作業を通して少しでも慣れてもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分の家にシール貼れるかな？ ◆学校や避難場所にシール貼れるかな？ ◆お友達の家にもシール貼れるかな（3人まで） ◆通学路にマジックで線を描けるかな？

5	図上 訓練 2	●さらに地図上作業で地図に慣れてもらう	◆逃げる時、声かけしてあげなければならない人、協力してあげなければならない人はどこに住んでいますか？ ◆医療機関、薬局、コンビニ、スーパー、公衆電話にシール貼れるかな？ ◆災害伝言ダイヤルの掛け方覚えてね。
6	自助力 テスト	●自宅の住所や電話番号を覚えていない子どもが多い。震災迷子を予防する訓練を行う。	◆君の家の住所と家の電話番号、親の携帯番号、言えるかな？（採点は教員や親、子ども会指導者に依頼）
7	防災グ ッズ 工作	●防災グッズを製作することで、避難生活に関して想像してもらう。	◆寒い時期の体育館で役に立つ『新聞スリッパ』 ◆停電の時に灯になる、ガスがなくてもお湯が沸かせる『ほのぼの灯り』
1～7全てを行うためには1時間半程度は時間を要すると思われる。 短時間モデルの場合、7を省力するか、或いは1～7を2回に分けてやるか等が考えられる。 8は長時間モデルの際に実施する。			
8	フィー ルドワ ーク	●実際のまち歩き・観察 ●避難行動訓練 ●これらを通してお年寄りやまちの大人たちと顔見知りになったり、交流してもらう（大人の付き添いが安全確保上必要）	◆まちを歩きながら、危なそうなところ、被災後緊急避難できそうなところ、近くの医療機関やコンビニ、公衆電話などをカメラに撮影しながら、地図の上に印をつけて歩いてみよう ◆自宅周辺から避難所まで歩いてみよう ◆お年寄りのお家を訪ねて、災害時どこへ逃げるか訊いてみよう。 ◆お年寄りを誘って一緒に歩いてみよう
9	図上 整理	●フィールドワークの結果を図じょう整理することで、体験や感動の記憶の定着を促す。	◆歩いて印をつけた場所の写真を地図上に貼って整理してみよう（写真でなくとも良い）

子どもLODEに関しては、短時間モデルでは、伊丹市H小学校における子どもたち自身の感想だけでなく、開催を手伝った地域ボランティアたちからの評価も高かった。

また、長時間モデルでは、伊丹市F地区の地域子ども団体が2度の取組みの後、3度目の取組みを自力で実施しており、このメニューが実際に機能していることを裏付けている。

③育成LODEワークショップ

人材育成は、実際の地域での基本LODEワークショップや子どもLODEワークショップに身を置く中で、進め方のポイントや工夫の仕方、そして何よりも参加者とのコミュニケーション・距離の取り方などをOJTによって習熟していくことが基本になる。研修会だけで育成できるものではない。

しかし一方で、少しでも効率的な人材育成を目指すためには、HOW TOを短時間で伝え、模擬体験してもらう内容の育成LODEワークショップが必要になる。

その際、特定のコミュニティエリアを対象としづらい場合も多く、そうした場合には「仮想マンションの戸割立面図」を使用する。もちろん、仮想コミュニティの内容も設定する（図12の事例を参照）。仮想コミュニティは、高齢化率など年代別人口比率、さらに要支援や要介護高齢者

の比率、各種障害者（身体、知的、精神、加えて発達障害等）の比率、さらには地域特性（外国人が多い等）を勘案しながら設定する。こうした仮想マップは現代日本における地域社会の縮図として参加者は触れ学ぶ経験にもなる（介護ヘルパー初任者研修程度の知識レベルを目指す）。

この仮想コミュニティの設定作業ができるようになった段階で、概ね社協職員や民生委員と同等レベルの福祉知識を有することとなる。

（４）チェッリストとしてのLODESTAR（ロードスター）チャート開発

LODEへの取組みを継続・展開していく上で、LODEワークショップの実施内容を見直したり、地域の状況をチェックしたりと、PDCAサイクルで、主としてCのためのチェック項目となるのが、『LODESTAR（ロードスター）チャート』である。

『LODESTAR（ロードスター）チャート』は、「マンダラート」や「マンダラチャート」の考え方を活用したもので、活動のチェックリストとして利用できるだけでなく、今後の活動目標（中目標、小目標）設定作業にも役立つものである。

また、このチャート図は、一般住民の使用を考えたものではなく、主として地域でLODEワークショップのファシリテーターや、LODEの普及者・コーディネーター、自治会リーダー等が使用することを想定したものである（チャート図の有効性を確認する上で、これまでも各属性に対して感想を聞く機会を得てきたが、こうしたリーダー層からの評価・理解が非常に高い）。

したがって、このチャートは、チェックリストであると同時に人材育成支援ツールともなる。

地区に合わせた図面使用	作業テーブルでの会話促進	要援護者への認識を深める	在宅要介護高齢者情報収集	予備軍高齢者の情報収集	高齢者避難所の調査・計画	LODEを他者に伝える・教える	社協職員はコーディネータ役	自分たちでWSの企画と運営
情報の管理に留意	図面WS	コミュニティ力を養うWSの定例化	在宅要支援高齢者情報収集	○	要援護高齢者の自主的申告	コミュニティリーダーを鍛える	育成	講師・ファシリテーター役をする
凡例は状況に応じて工夫	要援護者・支援者情報収集	基本単位は単位自治会	基本コミュニティでのLODE WS	高齢者のことを学ぶ	高齢者参加のWSや避難訓練	導入LODE予備LODE講習会	育成ツールを活用する	関係機関参画の体制づくり
体験型作業重視のWS	子供の自助力を高める	子ども会や学校単位でWS	図面WS	○	育成	避難訓練	自他の困り事を想像させる	必要物資を考える・準備する
共同作業重視のWS	L	大人が子どものことを知る	L	LODEの標準化	E	発災時避難を想像させる	E	避難所生活を想像させる
WS作業班は小地区単位	親や地域人を引き込む	様々な子どもが一同に参加	繋ぎ協働	D	体験	私設福祉避難所の計画	被災者経験談から学ぶ	エトランゼ（外国人）への対応
子ども会とPTAの合同WS	参加者同士の会話促進	井戸端サロン型活動	障害者・家族の自主的申告	重度障害者情報収集	障害者避難所の調査・計画	障害者や外国人と会話体験	逃げる体験	避難所生活の模擬体験
小学校区での合同WS	繋ぎ協働	会食会握手会	在宅身障者情報収集	D	障害者参加のWSや避難訓練	みんなの前で発言する体験	体験	炊き出し体験
擬似家族関係の発見と構築	要援護者と地域のマッチング	物資備蓄活動での繋ぎ	障害のことを学ぶ	知・精・発（障）情報収集	家族の理解を得る進め方	防災機器操作・使用体験	共同制作作業体験	まち歩き共同確認作業体験

図 23：マンダラチャート方式によるLODE活動目標図

表51：マンダラチャート方式によるLODE活動小目標リストの一部事例
(8つの中目標のうち「子ども編」について)

	小目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など	これまでの施行調査での実施・言及・確認
L-1	子供の自助力を高める	<ul style="list-style-type: none"> ●「親の氏名・住所・電話番号」テストの実施と、結果速報の発表と表彰。震災迷子にならない能力、これは子どもの自助力の基本と考える。 ●結果を親に知らせる(「小学生の大半が住所・電話番号を覚えていない」という状況を理解できていない大人が大半である)。 	※自宅住所と電話番号を覚えていない小学生が多い。親の名前さえ書けない子がいる。震災時迷子の発生が懸念される。(2015年3月28日及び8月22日伊丹市F地区WSで確認)
L-2	親や地域の大人を引き込む	<p>自治会への参加度が低い30代～40代の世代を、地域防災活動に引き込むためには、子どもの安全安心やその活動に関心をもってもらう必要がある。そのために、次のような手立てを講じることが有効であろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●PTA(親)対象のLODEワークショップを実施してみる ●親子で一緒に共同作業できるメニューの導入(ストローハウス制作、まち歩き・頭上確認ワークショップ) 	※ストローハウス制作WSの効用に関しては2015年8月22日伊丹市F地区WSで確認 ※灯りづくりWSの効用に関しては2016年1月17日神戸市灘区大規模マンションのWSで確認
L-3	大人が子どものことを知る	<ul style="list-style-type: none"> ●要支援者(子ども)についての説明資料・説明パワポを利用する。 ●子どものWS取り組みの様子を実際に見てもらう。 	★2015年度F地区で、子どもの自助力の状況報告を親にした以外には実施できていない。
L-4	子ども会や学校単位でWS	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校区単位で取り組める地区子ども会等でのLODEワークショップを実施する。 ●学校主催での実施の場合、教員の認識・意識の不足が懸念される(横並びを意識しすぎる)が、釜石東中学校の事例もあるので有効な場合もある。 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-5	WS作業班は小地区単位	<ul style="list-style-type: none"> ●グループワークは学校区内の小地区別の班単位で行う(集団登下校の場合にも有効)。 ●図面を使用するWSの場合は、次のような情報を図示させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・自宅、学校、避難所、公衆電話、医療機関の凡例 ・交通機関や道路の図示、災害時ハザードの図示 ・通学路や避難路の図示 ・気になる人(お友達、乳幼児、高齢者、障害者) ・犬や猫 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-6	共同作業重視のWS	<p>現代の子どもたちはゲームの影響か、複数人で一緒に取り組む機会が十分ではないといえる。班単位作業を導入し、例えば次のような体験をさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地図をもとにまち歩きで確認させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・災害時危険箇所の確認 ・私設避難所候補の確認 ・友達同士の自宅場所確認 ・デジカメを持たせて即時プリントアウト ●ストローハウス制作ワークショップ 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-7	体験型作業重視のWS	<p>共同作業と同様、現代の子どもたちに不足していると思われる「体験型作業」も重視する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地図をもとにまち歩きで確認させる。 ●トランシーバーの扱い方を教えて、まち歩きで利用させる。 <ul style="list-style-type: none"> ●ほのぼの灯りづくりと灯りイベント ●新聞スリッパの制作 ●高齢者三種の神器箱制作 ●ストローハウス制作ワークショップ ●家庭へのお手紙(参加報告)を書かせる 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-8	様々な子どもが一同に参加	<ul style="list-style-type: none"> ●軽度であれば特別支援学級の発達障害や知的障害の子どもも一緒に取り組む。 ●災害時は、通常学級の子どもも特別支援学級の子どもも一緒に避難するケースが考えられる。 ●一緒に取り組むことで「自分とは少し違う存在」を認める気持ちを養う。 	※子ども団体(2014年度・2015年F地区など)では、軽度知的障害の子どもが通常の子どもの中で一緒に取り組むことができた。

これら、中目標や小目標の設定内容は、当然更新が可能なものであるが、ここでの内容は、そのほとんどがこれまで各地の試行調査現場等で直面した課題、参加者の発言等から抽出できたポイント等をまとめたものである。

29年2月26日大阪市でのフォーラムでは参加者の多くが、この内容に関するワークショップに大きな関心を寄せた。

(5) 人材の育成

①人材育成の目標モデル

3年間の研究開発を通して、育った人材のタイプを次の3つのモデルに表現することができる。人材育成にあたっては、この3つのタイプのうちどのタイプを中心目標に据えるかを念頭に置くことを勧めたい。もちろん、全てのタイプを合せ持つ人材の育成が理想的ではある。

ちなみにこの3者に共通しているのは、「防災・LODEワークショップ」だけを目指しているのではなく、防災を「地域福祉」や「地域コミュニティづくり」の重要な手がかりとして捉えているという点である。

【LODEワークショップのファシリテータータイプを目指す】

伊丹市H地区幹事民生委員のFT氏は、当PJチーム南部美智代のワークショップ運営を数回見学・記録し、そのセリフまで覚え、方言の訛り以外は南部と同じ進行ができるまでになった。伊丹市H小学校区内の各所でLODEワークショップの実施企画提案とワークショップの運営を担っている。

【LODEワークショップの企画者タイプを目指す】

伊丹市Eマンション自治会の滑川勝会長は、LODEワークショップを2度、3度と重ねるうちに、「次はどのようなLODEワークショップを企画すれば効果的だろうか」と、現場での継続・展開案を考えるようになった。ワークショップ実施に際して、現場の現状や文脈をも読み込みながら、開催時期や回数、プログラム検討を行っていく自治運営のコーディネーター的存在でもある。

【LODEのトータルコーディネータータイプを目指す】

伊丹市社会福祉協議会のコミュニティワーカー橋倉加世子氏は、地域福祉活動のきっかけづくりや活動の軸として、地域のニーズに合わせたLODEワークショップの導入提案を行ってきた。

学校区での地域福祉活動に熱心なH地区では、福祉ネット会議のFT氏たちのLODEワークショップ展開をサポートし、コミュニティづくりに熱心なEマンション自治会滑川会長にはマンションでの基本LODEワークショップを提案し、推進協力した。

また、自主自立意識の強い伊丹市A地区では、当PJチームの関与を最小限に抑え、自らが地域の相談役となって基本LODEワークショップを軸とした地域見守り福祉ネットの構築の影のサポーターとなった。

さらに、自治組織と子ども育成組織の折り合いが悪かった伊丹市F地区では、まず子ども育成組織を軸とした子どもLODEワークショップ導入を働きかけ、3年目にはそこに民生委員たちに合流してもらえるまでに活動を育んでいる。

一方では、当PJチームの研究協力者として、『LODESTAR（ロードスター）チャート』開発検討作業にも主要メンバーとして参画している。

②人材育成の方法

(3)の③育成LODEワークショップのところでもふれたように、人材育成は、実際の地域での基本LODEワークショップや子どもLODEワークショップに身を置く中で、進め方のポイントや工夫の仕方、そして何よりも参加者とのコミュニケーション・距離の取り方などをOJTによって習熟していくことが基本になる。

加えて、少しでも効率的な人材育成を目指すために、HOW TOを短時間で伝え、模擬体験してもらった内容の育成LODEワークショップへの参加も重要である。

またワークショップの時間以外でも積極的に地域の多様な人・情報に触れながら課題や思考を共有・触発していくことも有効であると思われる。

（６）自助力・互助力を測るために有効と思われる指標等

①ワークショップへの参加者数

住民の活動への関心度が一番素直に現れる数字である。ただし、人数だけでは活動状況のレベルまでは推察できない。

②情報のある住戸の比率

これまでの試行調査から、情報のある住戸の比率（有情報住戸比率）が高まり、情報のない住戸の比率が低くなるのが、当然望ましい。

これを応用した方策で、効果があると目されたのが、Eマンションで行なった「マンションの戸割立面図の各住戸のスペースに、まず住人（世帯）の姓（苗字）を記入する」という簡単な方法であった。同マンションのワークショップでは、最初（平成26年度）半分も記入できないレベルであったが、2年後の平成28年度ワークショップではほぼ完全に記入できるようになった。またそのワークショップでは「要支援者個別支援計画」の検討もできるレベルになった。

「自治会長の役割は、すべての人の顔と名前が一致すること」というのは、Eマンション滑川自治会長の言葉であるが、お互いの顔と名前がわかることが、コミュニティ・防災活動の基本であろう。

③要支援者避難支援計画検討件数の増加数

要支援者避難支援計画を検討するためには、高齢者や障害者等に関する最低限の知識が必要である。この計画検討が増えていくということは、コミュニティ構成メンバーの中に要支援者への対応に明るい人物が増えているということであると解釈できる。

よって、この検討件数の増加数は活動を測る一つの指標であるといえる。

④小学生が自宅住所・電話番号を覚えているかどうかの比率

伊丹市F地区や鈴鹿市では、小学生（4年生以上）の半数～7割程度が「自宅住所を正確に覚えていない」、「自宅の電話番号または親の電話番号を覚えていない」という状況であった。

一方、京都府精華町（学研都市）では、小学生のほとんどがこの両方を覚えていた。

地域差があると思われる指標であると思われるが、現時点で低いと思われる地域では、子どもの自助力を測る指標の一つとして用いることが可能だと思われる。

ただし、子どもの住所や電話番号などの情報が、対外的に流出するような事態を避けるよう、取り扱いには注意を払わなくてはならない。

（７）個人情報の管理

①各地の自治体や地区で行われている方法

要支援者避難支援に関する計画を策定する自治体が多くなっており、自治体と地域団体が協定等を締結した上で、その名簿情報の提供等が各地で行われている。

しかしながら、LODEワークショップの現場では、行政名簿情報より詳細な情報も収集・共有されることもある。よって、その情報管理には万全を期すべきである。

②伊丹市H小学校区福祉ネットタイプの対応法

地域の地図の上にビニールシートを被せ、その上からシールを貼る。

ワークショップが終了後は、地図とビニールシートを、自治会長など複数の役員が別々に持ち帰る。これによって要支援者情報を一般住民に常時見せるということは避けている。

この地図に頼らなくてはならないレベルではないと発災時に役に立たない。ワークショップを何度も何度も繰り返すことで、「情報が役員や住民たちの頭の中にインプットされている」状

況を作り出すことが重要である。

3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-2-1. 平成26年度：プレ試行調査時における結果・成果等

(1) LODEの目指すところの確認

調査のための研究事業に陥らないために、常にLODEが目指すところを確認しておくことが重要である。

③や④に意識が行くことは当然であるが、①や②を忘れては形骸的な取り組みに陥る危険性がある。そこを意識した研究開発が重要である。

①住民一人一人の自助力を上げる。

②とりわけ要援護者（家族含む）の自助力を上げる。

③コミュニティの互助力をあげる。そのために住民の互いが情報を提供し合い、その共有を図る。

④そのために要援護者情報（LOD情報）をあぶり出し、その共有を図る。

(2) LODEの体系化案

①基本LODE

マンションの自治会単位や住棟単位、一般住宅地区の単位町内会（場合によっては班単位）等、民生委員1人あたりの担当エリア程度を念頭に実施するLODEを「基本LODE」として位置づける。

②補完LODE

町内会や自治会、マンション管理組合等が取り組む「基本LODE」で、全ての住民の参加を得たり情報を把握することは不可能である。実際には子どもや障害者、さらには要支援・要介護高齢者、そして若い世代の住民等の参加や情報が不足しがちである。

「基本LODE」だけの実施では漏れることの多い子どもや障害者、要支援・介護高齢者等の自助力・共助力向上に向けて、「子どもLODE」、「障害者と家族のLODE」等、基本LODEを補う「補完LODE」として必要に応じて実施する。

③導入LODE

LODEを広く普及し、「基本LODE」や「補完LODE」の実施主体を掘り起こしていくために、LODEを説明し広めていく機会が重要となる。

これを「導入LODE」と位置づけ、自治体全域や学校区全域等、広いエリアを対象に、防災活動やLODEへの取り組み意欲を喚起するために実施する。

表52：平成26年度時点で検討したLODEの体系化案（概略）

LODEのタイプ		対象・エリア	狙い
導入LODE		自治体全域、学校区、 連合町内会	・基本LODEに取り組む必要性、重要性をより多くの住民にアピールする
基本LODE (今LODE及び5年後LODE)		単位町内会・自治会、 及び班、マンションの 組合等	・住民一人一人の自助力を上げる ・共助意識醸成と要援護者情報共有 ・将来の守り手育成意識の醸成
補完LODE (一部)	子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる ・親（子育て世代）の関心を惹きつける
	障害者LODE	全市・全町域、療育セ ンター・障害者センタ ー等の対象エリア	・障害者家族同士のネットワーク構築 ・私設避難所設置能力養成 ・一般住民への周知

(3) 第一次試行調査の実手法骨格案

26年度取組みの成果は、第一次試行調査のための実施手方案である。

まず最初に、全体の骨格図を示すが、この手方案の特徴は、「ワークショップの手順マニュアル」だけではなく、「LODEを開発した心、精神を伝え守る方法」、「LODEを伝え普及できる人材を育成する方法」が一体となったものを目指すところにある。

図中の各内容に関しては、①～⑥で述べる。

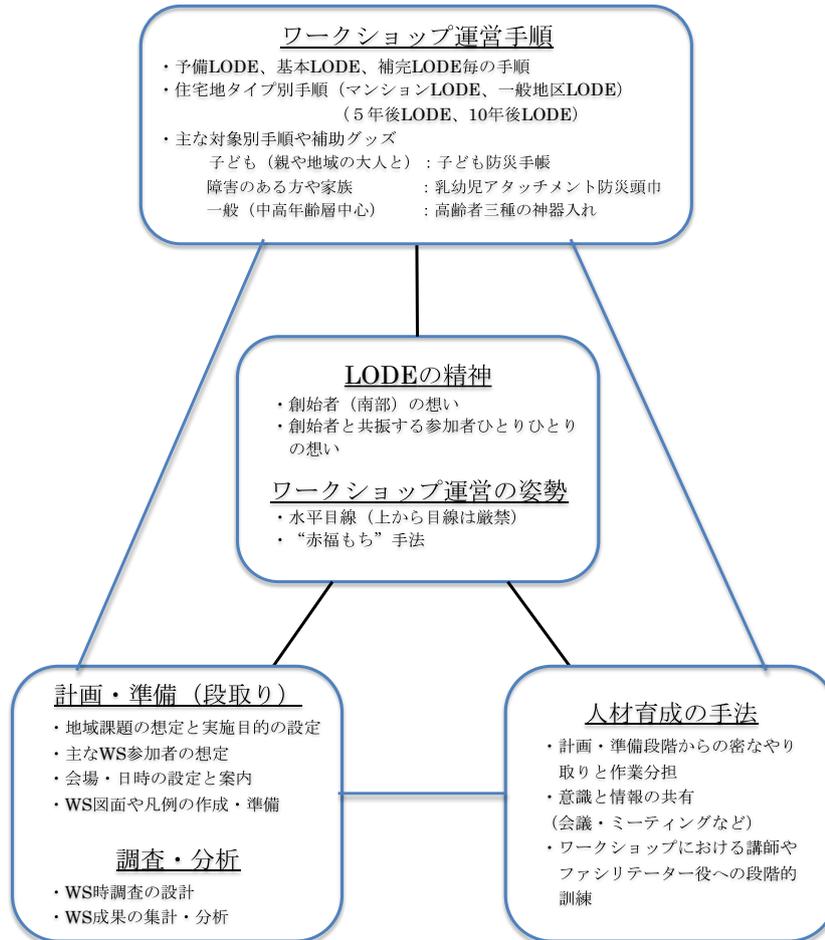


図24 : LODE 手法の骨格

① LODEの精神

LODEの精神、ミッションとは、L、O、Dの文字にこめられたように、災害時に弱者と心配される方々（子ども、高齢者、障害者等）を、地域コミュニティの中で支援すること、そして災害時だけでなく平時においてもこうした方々を見守るコミュニティをつくることといえる。

その背後には、20年前の阪神大震災後DIG（ディグ：災害図上訓練ゲーム）の原初型を発案した南部等災害ボランティアたちの思いがある。その思いを多くの市民・国民に伝えていくことがLODEの手順を普及させること以上に重要だ。

そしてそれは「愛」、普遍的な隣人愛だろう。

当プロジェクトがスタートした26年10月、特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿副理事長のS（本プロジェクトの研究メンバーではない）から、「どのようなマニュアルを作ろうが、参加者に感動を感じてもらえないものなら、それは普及しない。最大の研究開発課題は“感動してもらうためにはどうすればいいのか”だ」との意見が発せられたが、以来この言葉が当プロジェクトの最重点課題となった。

狭義の「研究開発」に逃げ込んで、市民からの手応えに無関心でいると、社会実装は覚束なくなる。地域住民の関心・感動を得られる手法を目指さなくてはならない。

事実、3月14日、精華町での現場で、質疑応答の際に参加者から次のような質問が上がった。「南部さんの思いに感動した。他の防災講座とは全く次元が違う。南部さんの思いの背景にある経験やきっかけを知りたい」と。

会場の全員の前で発言するかしないかの違いはあるが、他の現場においても同様な内容の感想と「また参加したいので一度で終わらずに是非続けて開催してください」と希望を伝える参加者は少なくなかった。当プロジェクトの中心的メンバー南部のワークショップ進行や発言が参加者に対して感動を与えていることは確かなようだ。

なお、参考資料として精華町（27年3月14日）で寄せられた参加者の事後感想を次に紹介する。

- ・ 非常に役立つ講座内容で、時間が短く感じました。
- ・ 災害が起きた際の現状を想像させるような内容でした。
- ・ 女性ならではのこまやかな心配りを感じる。または、防災に対する意識を高揚させる実務的な内容だと感じました。
- ・ 上っ面の話しではなく実践に即した内容でためになった。
- ・ メガネ・入れ歯・補聴器の話し。避難場所の確認ができた。
- ・ 非常にわかりやすく説明していただき良かった。三種の神器を地域の高齢者に進めたいと思います。
- ・ 自治会、自主防災会の活動の取り組みがどうあるべきか検討していきたいと思います。
- ・ 身近に思えてよかった。
- ・ 自分の命は自分で守るということで、まず家庭にて家族で防災を他人ごとにしなくて常日頃から頭に入れておく。
- ・ 木津川上流の高山ダムが地震等で破損した時は精華町には何分くらいで水が到着するか、その時の水量の高さを防げるのか。
- ・ 南部さんの話しは身近に役立つ防災ということでとてもよかった。毎日、毎日、今日一日何もなくて過ごせてよかったと思えるような生活をしていきたい。
- ・ ちょっとしたことでもいろんなものができるのはおもしろい。
- ・ 生活に密着した身近な事例で目からうろこでした。
- ・ 足元の取り組みの大切さがわかった。
- ・ 先生のバイタリティーに感服します。
- ・ 身近なところから防災について教えていただいてよかった。
- ・ 災害時（パニック状態時）に自分が行うこと、自分が出来る事、何をすべきか。
- ・ 素直に心にしみるお話しでした。
- ・ 一言一言当たり前と感じられながら大切、貴重でとても感激いたしました。まわりの人たちにも知らせたいと心から思っています。ありがとうございました。
- ・ 地域防災の中核を担う人たちに伝えたいことを要点を立ててその要点に基づいて、具体的な活用事例を示してほしかった。論点が分散してたように思う。
- ・ 今まででなかった講義でこの期に役立つと思われる。
- ・ 公助はあてにならない⇒再認識いたしました。
- ・ 阪神大震災でもご近所の方々に命を助けられた人は80%以上。常々のコミュニケーションが大切だと思います⇒共助
- ・ 自助は常日頃から心がける必要があります。
- ・ 日常生活密着の真摯な叫び、感謝のうちに聴いた。
- ・ 火災の場合の消火器の使用はするが、避難に対する問題を学んでほしい。

- ・ 日常の意識の大切さを知った。
 - ・ 小さな積み重ねが大きな力になることを再認識できました。
 - ・ 南部さんの実績を多く話してもらい、心が打たれました。これからも元気で頑張ってください。
 - ・ 感動の一言につきる。
 - ・ 三種の神器に感銘しました。
 - ・ 身近なものに工夫を凝らして役立つ技は磨きたいものと思った。
 - ・ すべて勉強になりました。気が付かなかった三種の神器と防災グッズの作り方などありがとうございます。
 - ・ 全国区サミットでも先生の講義を聞いて三種の神器をいただきました。
 - ・ 身近なことからというお話が大変参考になりました。各人が自分自身でよく考えることが大事だと思いました。
 - ・ 実施に災害の現場をよく知った上でのお話しは大変参考になりました。
 - ・ 何よりも熱意が伝わってきて刺激になりました。ありがとうございました。
 - ・ 持ち出すもので一番大切なもの。三点を初めて知りました。身近に置く方法を教えていただいてよかったです。
 - ・ 避難所で困った点「メガネ」「補聴器」「義歯」を持ち出せなかったという事実は大変参考になった。初めて聞いた具体的な話であった。災害発生に備えて日常的な避難訓練の繰り返しとは思うがどうしても規則的に拘束された訓練であると思う。その地域、地域に合わせた避難のし方が本来の避難なのだということがよくわかり、認識を新たにしました。
 - ・ 南部先生の講義はわかりやすく、具体的で勉強になりました。
 - ・ 自助を第1にどう取り組むかを考えました。
 - ・ 声を通らないのでせつかくのよいお話が後方ではききとりにくかった。ホワイトボードの活用もよいが、パソコンなどで図示していただければさらに良かったと思います。レジメもあればさらによく理解できたと思います。大切なお話しをありがとうございます。メガネ入れ、防災頭巾を早速用意します。
 - ・ 大変心にひびく講座に感謝します。
 - ・ 大変ためになりました。
 - ・ 南部先生のお話しは具体的な内容が多く、とてもためになるお話しでよかったです。早速忘れないうちに実行したいと思います。
 - ・ 安心安全のためには日常生活の中でも多角的に知る必要があると思いました。
 - ・ 防災を多方向から考える方法を学んで、頭の体操ができた。色々の考え方があり、日々行動に移すことが学べた。
 - ・ 目からウロコのお話が満載で、すごくためになりました。ありがとうございました。
 - ・ 帰ってから家族で実行したい。
 - ・ 工作が楽しかった。
 - ・ ある物で色々役立つグッズ作り楽しかったです。お年寄りがないと困る入れ歯、メガネ、補聴器、確かになかったら困るものをいつも気にしないといけないと思いました。
 - ・ 避難所看板をよく見てみます。
 - ・ なんでもないことが防災の第一歩を教えていただきました。
 - ・ 真珠のはまぐりのお雛様すばらしかったです。
 - ・ 身に迫るお話しで心に残りました。
 - ・ 手作り防災グッズありがとうございました。
- 27年度からは次のような課題を意識して取り組みたい。
- ・ **LODE**の精神、ミッションに加え、南部やメンバーの言葉、さらには協力者の思いをまとめ

て、試行調査参加者に配布する。

- ・ 試行調査参加者の感動の言葉を一人でも多く掬い上げ、それらをまとめて次なる参加者に伝えるべく、「感動したこと」、「誰かに伝えたいこと」、「あなたの防災活動への思い」等をアンケート調査する。
- ・ これらを蓄積、集約していくことで、『LODEの精神』をより確かなものになるようにしていく。これも手法の標準化作業のひとつとして考える。

②LODEワークショップ運営の姿勢

①で述べたLODEの精神を参加者に伝えていくためには、紙媒体にまとめたものを配布するよりも、ワークショップの現場において、言葉と態度で伝えていくことが重要である。

ここでは、どのような姿勢でワークショップの運営に当たるべきかについて、南部のワークショップ運営姿勢の分析をとおして次に整理してみる。

a) 水平目線であること

- ・ 子どもにも高齢者にも伝わる言葉と内容（「避難所の看板を描いて」、「高齢者三種の神器とは」、「自分が一番守りたいものは」等）
- ・ 決して専門家ぶることなく、生活者として言葉を出す
- ・ 恥ずかしがらずに方言を使う

b) 自分の言葉で自分自身の思いを伝えること

- ・ 悲しかったこと、感動したことを自分の言葉で伝える。
- ・ 伝聞形ではなく、「自分はこう思う」ということを素直に話す。
- ・ 自分自身の被災体験や救援活動体験などの実話を話す。

c) 手先を動かせることで参加者の緊張をほぐし、発言しやすい環境をつくる

- ・ 「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」、「ほのぼの灯」など、の工作。
- ・ 手話で各自自己紹介した後に、誕生日順に全員を整列させる。
- ・ 特定の誕生日の人に挙手させて、テーブルリーダーに指名する。

d) 協力者の人々に光を当てる

- ・ 社協など関連団体の方や民生委員、活動に協力してくれた方、行政職員などは会場で全員紹介する。

e) 緊張する場面をつくる

- ・ 予告なしに仕事を指示する（例：〇〇さん、みんなのポストイットの答えを並べてその傾向や特徴を報告してください等）
- ・ 災害がやってくるのと同じように、突然WSの指示を発表する（例：今、地震が発生しました。避難勧告が出されました。みなさん、自宅から図上で避難してください等）

f) ホットとできる場面や空気をつくる

- ・ 被災地炊き出し体験のぜんざいコーナーや焼き餅コーナーの設置
- ・ ジョークなどで笑いを誘う（例：私は飛行機に乗るときは73歳だが、いつもは37歳だ等）

g) 参加者を感動させる（共感を生み出す）

- ・ 例えば、「乳幼児アタッチメントを利用した障害者向け防災頭巾」を製作し、その意味を説明することで、障害児を持つ親はもちろん、子を持つすべての親の心を揺さぶる。

このように整理したからといって誰でもすぐに南部のような進行ができるとは限らないが、南部の表現方法を知ること、自分ならどのような表現方法を探るかを考える手がかりになるものと思われる。

また、伊丹市A地区や伊丹市Eマンションなどは、一般的な講習会などの雰囲気とは全く異なる親しみやすさ、敷居の低さを感じさせるものであった。こうした部分が『赤福もち型手法（楽しい内容と真剣で高度な内容とがセットになっていることから、甘い餡子で餅を包んでいる赤福もちになぞらえた呼称）』の餡子部分に相当するものである。

③LODEワークショップ運営の手順

当プロジェクトの達成目標は、LODEの標準的手法の開発である。そしてその技術的な中心要素のひとつとなるのはLODEワークショップの実施・運営手順である。

26年度の半年間では、子ども関連4カ所（参加者は最少15名～最大55名）、マンション1カ所（参加者25名）、一般地区2カ所（参加者45名、35名）、全町域1カ所（参加者50名）の計8カ所でプレ試行調査を実施したが、その結果をもとに検討を加え、次のa)～f)に27年度第一次試行調査に生かすべき案をまとめた。

しかし一方で、「手順」だけに意識や心血を注ぎ過ぎると硬直化に陥る危険性がある。一般住民の中で普及し息づくためには、絶対に手順の硬直化は避けるべきである。

従って、LODEとして安易に変更すべきではないところと、適宜変更して支障ないところを説明した“柔軟に活用できる標準モデル”を検討しなくてはならない。

a) 図上ワークショップの規模と会場

図上ワークショップの規模は、会場内の一体感（私たちのコミュニティなんだという実感を感じられること）を得られることが重要である。同じ団地だからといってあまりにも規模が大きいと一体感が得られにくい。団地やマンション住棟など適度な範囲を一つの単位として実施することが望ましい。

図上ワークショップでは1班（1テーブル）数名（理想は会話が班内での成り立ちやすい5～6名、最大でも10名程度まで）で、A全版の図面を囲みながら行う。班はいくつでも可能だが、ファシリテーターがコーディネートしやすい規模は数テーブル（多くとも10テーブル程度まで）だろう。

この人数やテーブル数は、スポーツのチーム規模（バスケットボール、バレーボール、ボート、野球、サッカー等）と同様、直接コミュニケーションがしやすい規模といえる。テーブル内の人と人、全体ファシリテーターと各テーブル、この間のコミュニケーションが図れる関係が重要といえる。

b) 図上ワークショップのファシリテーター

LODEワークショップでは次のように2人以上、できれば3人以上のファシリテーター体制で臨むことが好ましいと考えられる。

●メイン

- ・ LODEの目的・精神を伝える役
- ・ 全体の進行役（単なる司会ではない）

●サブ

- ・ 情報を伝える役
- ・ 情報に関して具体的な説明・解説を加える役

●記録・観察者

- ・ 録音・録画、メモ、板書等による整理
- ・ 最後のまとめ発表役

26年度のプレ試行調査においては、メインは南部、サブはプロジェクトメンバーの橘や協力者である伊丹市社協小林氏などが務めたが、参加者人数が多くなる場合にはさらに「サブのサブ」的役割の人員を各テーブルに、或いは2テーブルで一人などの割合で配置したい。

また、メインとサブがたまに漫才のような掛け合いができると、参加者の緊張をほぐし本音を

発言しやすい環境づくりが進む。

c) 手順のモデル（基本LODEのうちマンションのケース）

平成26年度のプレ試行調査における図上ワークショップは、常に南部がメインのファシリテータを務め実施してきた。

南部の場合は、当日会場で参加者の顔ぶれ（年代層、性別、雑談しているときの話題など）を眺めながらその日の進め方を考え、アレンジして行う。

しかし、LODEを全国に普及させるためには、やはり標準的な進め方を提示することが不可欠である。

標準的な進め方を提示すると、それだけが独りでに歩き出す危険性もあるが、①で述べた「LODEの精神」や②で述べた「LODE実施に求められる姿勢」を打ち出していくことで、“心のないマニュアルの暴走”には陥らないように努めたい。

当プロジェクトチームでは、LODEのモデル手順（マンションのケース）を次のように考えてきた。

【LODE（ロード）図上ワークの手順（マンションのケース）】

- ・ 先ず地区地図上で、地形やインフラ情報、避難所や公衆電話などの情報を凡例シールで貼り込む。
- ・ 次に準備したマンション戸割簡易立面図の各戸に、凡例に則してシールを貼っていく（高齢者、子ども、障害者、その他要援護者、頼れそうな人、ペット等）。
- ・ 住民情報が埋まったら、火事や地震、津波などの災害の発生をシミュレーションする（発生日時、その日の天候や気温、風向きなど、なるべく細かく想定）。マンション図面上での立面避難に加え、地区地図上での平面避難の経路をシミュレーションする。
- ・ 想定・設定された被害状況・与件のなかで、迅速かつ安全に避難できる方法をグループごとに話し合い、結果を各グループ代表者が発表する。

【続いて5年後LODE作業に着手する】

- ・ 既に住民情報の貼り込まれたマンション戸割図の上に透明なビニールシートを被せる。
- ・ ここで、「5年が経過したとして、“5年後には援護が必要な可能性がある方”と“5年後には頼れそうな人”の凡例シールを貼り込んでいく。
- ・ 出来上がった“5年後の図”をもとに、「要援護者予備軍的な住民のいる住戸の確認」、「将来に住民のお世話役にまわってもらいたい人（例えば現時点の子ども）の発見や確認」、「住民が元気そうではあるが、逆に公的な支援の目によるチェックが入りづらい住戸の発見や確認」などの作業を行う。

【作成したマップ情報の管理】

- ・ マップの情報は、コミュニティの代表（自治会長）などが保管し、安易に個人情報が流出しないように取り扱う。

これに対し、プロジェクトADからは、次のような手順の仮説を整備し、その仮説のもとに実証実験（試行調査）を行うことで、より強力に標準化に向けた取り組みとするようアドバイスがあった。

- ・ LODEワークショップを「3回シリーズ」で取り組むようにし、例えば次のようなステップで開催する。

表 5 3 27 年度の LODE の取り組み手順案（3 回シリーズ案）

想定される開催・取組みの内容	
第 1 回目WS実施	<p>【LODEのLOD(脆弱性)を評価してみる】 住棟の模式図と凡例シールをつかって「いざとなれば支援が必要な人」について情報共有を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Little : 乳幼児や子ども ・ Old : 高齢者 ・ Disabled : その他特別に配慮が必要な人たち ・ その他 (ペットなど)
第 1 回目WS成果報告	<p>第 1 回目 WS の情報を整理してご報告します。 そのもとに第 2 回目 WS の実施内容についての検討を行います。</p>
第 2 回目WS実施	<p>【LODEのEを体験してみよう】 「〇〇までみんなで避難してみよう」: 具体的な課題をとおして対策を考えてみます。とりわけ要援護者の避難行動で問題となる点なども確認していきます。この他、周辺地域との協力や対応が必要な課題も見えてくるかもしれません。</p>
第 2 回目WS成果報告	<p>第 2 回目 WS の結果を整理してご報告します。 そのもとに第 3 回目 WS の実施内容についての検討を行います。</p>
第 3 回目WS実施	<p>【5年後LODEにトライしてみよう】 第 1 回目 WS で作成したLODEマップをもとに、“5 年後を想定したLODEマップ” の作成にトライしてみます。 この狙いは、“潜在している脆弱性”、と“今後に向けて内在する可能性”を発見、認識することにあります。</p>
第 3 回目WS成果報告	<p>第 3 回目 WS の結果を整理してご報告します。 そのもとに成果報告会開催内容についての検討を行います。</p>
成果報告会(公開)	<p>マンションの全住戸に案内をして、今年度一連の取り組みの成果報告会を開催します。</p>

d) 手順のアレンジ（一般地区向け、子ども向け、障害者家族向け等）

c) での検討は「基本LODE」をマンションでの実施することを想定したものである。一般住宅地区や子どもを対象としたワークショップ、或いは障害者（障害者を抱える家族）を対象としたワークショップなどでは、それら対象に向けて必要なアレンジを施すことが求められる。

●基本LODE：一般住宅地区ワークショップの場合

- ・ 地図は地域の住宅地図だけでいいが、学校区のような広い範囲で取り組む場合には、地域全体図に加え、自治会・町内会の班程度のエリア（数十戸くらいか）を拡大した地図を用意することも必要だろう。

●補完LODE：子ども向けワークショップの場合

- ・ 大人用の凡例では複雑すぎるので、後期高齢者や前期高齢者ではなく「寝たきりの方」、「体が不自由そうな方」、「一人暮らしのお年寄り」、「赤ちゃん」、「小さな子ども」、「妊婦さん」、「外国の方」程度の分類が適していると思われる。
- ・ また、犬や猫などペットのことを詳しく尋ねることで、子どもの関心を引きつけることも試し

たい。

●補完LODE：障害者（障害者家族）向けワークショップの場合

- ・ 26年度は障害者向けのLODEワークショップは実施できなかった。しかし、障害者支援施設などでのヒアリングを重ね、次のような認識を持つに至った。
- ・ 障害の種類や程度にもよるが、東北の場合でも障害を持つもの同士が助け合うケースが多かったようだ（障害者のことは同じような障害を持つ者や家族が一番よく知っている）。
- ・ 従って、障害者LODEでは、やや広い地域を把握できる（自治体全域など）地図を用いて、いざという時の頼れる施設や仲間の存在を確認するところから始まると思われる。
- ・ その次には「公的な支援施設や避難施設がどの程度対応してくれるか、どの程度頼れるか」を具体的に話し合うこととなる。南海トラフ震災などの巨大災害などの場合には当然不足が生じるはずで、そうした場合に命をつなぐことのできる「私設避難所」をどこに確保できるか、またそのために必要な設備やマンパワーはどの程度か等を話し合うことになると思われる。
- ・ この障害者向け（障害者とその家族）の調査或いはワークショップは27年度に実施する。

e) 準備物

●地区の地図

住宅地図など地区の図面を用意する。できればA全版が好ましい。

- ・ 主要なインフラ、避難所、公衆電話、私設避難場所の候補場所、各自の自宅、要援護者と思われる方などの情報を平面レベルで整理するための図である。
- ・ DIGとの大きな差は、障害を抱える方の家族等が公的避難所の対応能力が限界になった場合の「私設避難所の候補場所」の検討に力を入れるところであろう。

【マンションタイプの立面模式図】

実施コミュニティがマンションの場合、地区地図だけでは不足である。地区地図に加えて、マンション住棟の立面模式戸割図（A全版が好ましい）を作成する。

戸割図は住戸の番号を入れただけのものと、各戸の姓まで入れたものの2種類作成することが考えられるが、住戸番号だけの図面に情報を入れられる住民は限られている。情報管理（保管）に気をつけなければならないが、姓まで入れた図面の方が住民側は情報を入れやすいものと思われる。

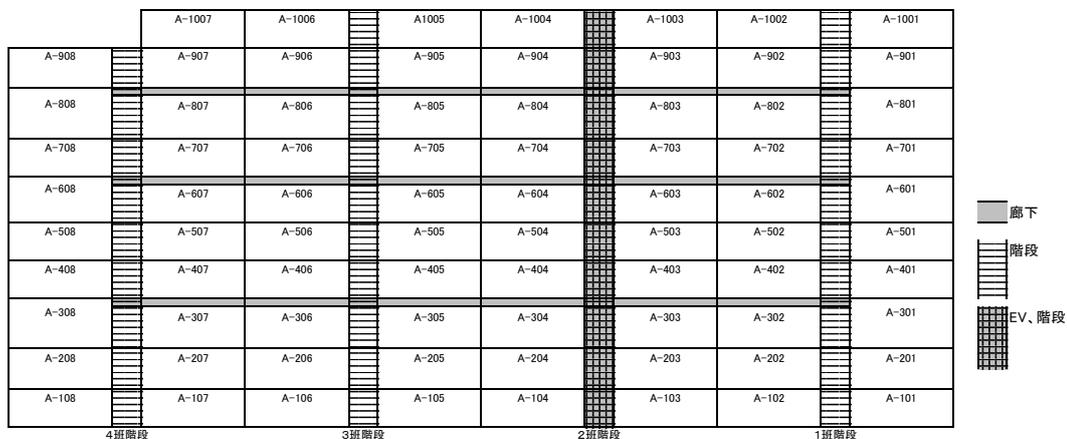


図 25： マンションの立面戸割模式図の例

【凡例シール・凡例表】

図上ワークショップで用いる凡例シールは、百円ショップなどで購入できる安価なものにすることが望まれるので、入手しやすいシールの種類を確認し、その使い方や組み合わせを工夫しながら凡例表を作成する。



図 2 6 : 凡例表の例

平成 2 6 年度の取り組みにおいて、伊丹市 E マンションでの実施結果データを集計したところ、要援護者情報のシールの合計数が「実人数を表すものか、状態別にカウントされた延べ人数を表すものなのか」が不明確なものとなった。

そこで、27年度では、次のような改善を検討したい。

- ・ まず年代・性別シールを貼る（後期高齢者男性、後期高齢者女性、前期高齢者男性、前期高齢者女性、未就学児、その他の未成年、その他の成人）
- ・ 次にその年代シールの上に部分的に重なるように状態シール（要援護と目される、頼れそう等）を貼る。

この改善によって情報の混乱はある程度防止できると考えている。

●要援護者のことを説明するパワポ資料とプロジェクター

LODE はとりわけ要援護者対応を目指す防災ワークショップ手法である。しかし、市民の多くは（場合によっては防災の専門家も）要援護者のことをよく知らない。

「平均的なコミュニティにはどの程度の人数の在宅要援護者が住んでいるのか」や「子ども、高齢者、障害者など、各々の要援護者が抱えている不安点とはどのようなところか」についてより認識を促し、図上ワークショップに向かう意識を高めることが必要である。

そのため図上ワークショップに着手する前に、要援護者に関する情報提供の時間を設けることが必要だ。

L : Little People (子ども)

- ★赤ちゃん (人口千人当たり約 8人)
- ★未就学年代の幼児 (人口千人当たり約 40人)
- ・小学生 (人口千人当たり約 50人)
- ・【参考 中学生】 (小学生の半分程度の人数)
- ★「発達障害児」という問題

ASD 自閉症スペクトラム Autistic Spectrum Disorder	★ 自閉症 ★ 知能は高いが自閉気味で対人関係やコミュニケーションに問題	●文科省調査では推定60万人(児童生徒の6.5%) ●幼児まで含めると100万人か(人口千人当たり8人) ●グレーゾーンまで含めるとさらに増加
ADHD 注意欠陥多動障害 Attention Deficit Hyperactivity Disorder	★ 注意力欠如 ★ 衝動性 ★ 多動	
学習障害 Learning Disabilities	特定分野の学習に困難を抱える	

図 2 7 : 要援護者説明資料の一例 (子ども)

O : Old People (高齢な方々)

- ★在宅で要介護の方々 (人口千人当たり約20人～)
- ★在宅で要支援の方々 (人口千人当たり約 8人～)
- ★要介護・要支援ではないが、“予備軍”だと思われる方々
→NHKによると高齢者の10人に1人は予備軍
(人口千人当たりでは20人～)
- 運動 (1年以内に転んだ、15分以上歩けない、何かにつかまらないと立てない)
- 口腔 (硬いものが食べにくい、お茶を飲んでむせる)
- 栄養 (体重が半年で2～3kg減った)
- 閉じこもり (週に1回も外出しない)、うつ
- 認知症 (認知症予備軍は相当多数に上るとされる)
認知症は避難所生活での最大の課題となる

図 28 : 要援護者説明資料の一例 (高齢者)

D : Disabled People (障害をもつ方々)

- ★身体障害 (人口千人当たり約28人が在宅)

- ・視覚
- ・聴覚・平衡機能
- ・音声・言語・咀嚼
- ・肢体不自由
- ・内部 (人工透析、人工肛門、酸素ポンプ等)

高齢者三種の神器の持つ意味!
【災害時にわか障害者を減らす!】

- ★知的障害 (人口千人当たり約 3人が在宅)

- ・ダウン症候群や自閉症なども原因のひとつ

- ★精神障害 (人口千人当たり約22人が在宅)

避難ルート上だけでなく、避難所生活が難しい。
東日本大震災では、作業所等が継続できないために居場所を失った障害者が少なくなかった。

図 29 : 要援護者説明資料の一例 (障害者)

災害時対応が求められる要援護者の一例

- ★難病 (特定疾患) (人口千人当たり約6～7人)
- ★人工透析 (内部障害) (人口千人当たり約2人～)
- ★酸素療法 (内部障害) (人口千人当たり約1～2人)
- ★てんかん (精神障害) (人口千人当たり約2人～)
てんかん患者は精神障害者保健福祉手帳の対象
避難所では発作が起これば問題にされやすい
- ★IDDM : 1型糖尿病 (20歳未満人口千人当たり約0.4人)
- ★その他慢性疾患 (医薬品確保)
- ★アレルギー性疾患への対応 (喘息の他、食事、動物等)
- ★ペットの世話
- ★外国人

図 30 : 要援護者説明資料の一例 (その他)

f) LODEの象徴的補助グッズの開発

南部が東北被災地で聴いた高齢者の声（「入れ歯を持たずに避難しても、避難所では何にも食べられない。食べられないと咀嚼しなくなる。咀嚼しないと唾液も出なくなるし、脳が衰えてくる。結局障害者や認知症高齢者ようになってしまう。」）を参考に開発したのが『高齢者三種の神器箱』である。日頃から就寝時に入れ歯、メガネ、補聴器、その他処方箋などを入れておいて、いざという時に貴重品として携行するためのものである。

この『高齢者三種の神器箱』に対する中高年代層の反応がすこぶるよかった。①の精華町の事後アンケート結果からも読み取れる。

また、南部は障害者施設ヒアリング（18p 参照）の後、障害者に対しても特別なグッズを開発した。『乳幼児アタッチメントを素材に活用した防災頭巾』である。

乳幼児アタッチメントとは、子どもが幼児の頃から使用している毛布やタオルケット、あるいは母親の馴染みの服などの匂いや感触に愛着をおぼえ、大きくなってもそれらを手放さなくなるような愛着グッズである。ぬいぐるみなどの場合も多い。こうした乳幼児アタッチメント（恋人さん等の別呼称あり）を素材にして、防災頭巾を縫うことで、重度な知的や精神障がいを抱える方が、災害に遭遇した時少しでも落ち着くことができるのではないかと、南部はそう考えた。

この考え方には、福祉関係者の多くが賛同したり、或いは感嘆するが、ワークショップの場でこの話に耳を傾けている参加者の中にも感動している方が少なくないようだ。南部の“子を想う親心”が同様に子を持つ参加者たちの心に共感と呼んでいられると思われる。

南部はこの他にもワークショップへの参加者の中に「周りの人を元気づけ、勇気づけ、感動させられる思いや経験」を持った人に着目し、こうした方々の思いを詩に表現し、和装丁を施したミニ詩本も作成している。このミニ詩本が数十冊、百冊と蓄積していくことで、「LODEの精神・心」の部分に関してより多くの市民に伝達していけるツールになるものと考えている。



写真129・130・131

：高齢者三種の神器箱（左）と乳幼児アタッチメント素材の防災頭巾（中）
参加者の思いや経験、生き様を詩で表現し和装丁したミニ本（右）

g) “赤福もち”型手法としての工夫

②でもふれたが、次のような親しみやすい（参加への敷居を下げる）メニューは是非とも取り入れたい。

参加者のタイプにもよるが、図上ワークショップの間に屋外調査や実際の避難行動体験などを挟むことも有効ではないと思われる。また、コミュニティ祭りなど地域イベントを絡めることも一考に値すると思われる。

●手先を動かせることで参加者の緊張をほぐし、発言しやすい環境をつくる

・ 「高齢者三種の神器箱」や「新聞スリッパ」、「ほのぼのの灯」など、の工作。

- ・ 手話で各自自己紹介した後に、誕生日順に全員を整列させる。
- ・ 特定の誕生日の人に挙手させて、テーブルリーダーに指名する。

●ホッとできる場面や空気をつくる

- ・ 被災地炊き出し体験のぜんざいコーナーや焼き餅コーナーの設置
- ・ ジョークなどで笑いを誘う（例：私は飛行機に乗るときは73歳だが、いつもは37歳だ等）

④LODEワークショップの計画・準備（段取り）

平成26年度の8箇所のプレ試行調査の計画・準備の進め方に関して、当プロジェクトチームと実施先団体や関連団体（社協など）との関係に注目して、タイプ別に整理した。

図31（B小学校、知多市学校教員研修会、伊勢市C地区連合町内会、箕面市D地区）のタイプは、現場団体代表者（または世話役）が発意者または窓口となり、当プロジェクトチームにLODEワークショップや防災講座の実施を依頼してきたタイプである。

図32～図35は、現場団体代表者と当プロジェクトチームとの間に社協職員などの現地コーディネーターが介在して、企画・準備段階からコーディネート役を担うタイプである。

このうち、図32（精華町）は、まだ具体的な現場活動団体中心者たちの顔が見えていない段階のもので、コーディネーターが現場団体代表者（または世話役）の役割も果たしている。対して図33～図35は、現場の活動団体（自治会、子ども団体等）の意思が明確となっている段階のもので、現場活動団体、現地コーディネーター、外部支援者（当プロジェクトチーム）の三者の役割分担が可能である。

LODEの普及を考えた場合、今後増やしていくべきタイプは図33～図35のタイプで、中でも現場活動団体と現地コーディネーターの果たす役割が大きいと思われる図34や図35のタイプの現場で試行調査を重ねていくことが、新たな担い手を育成していくためにも重要だろうと考えられる。

27年度研究開発の取組みにおいては、当プロジェクトチームと現地コーディネーター、現場活動団体役員相互間のやりとりの経過記録を残し、より詳細な分析と手法標準化に向けた整理を行う。

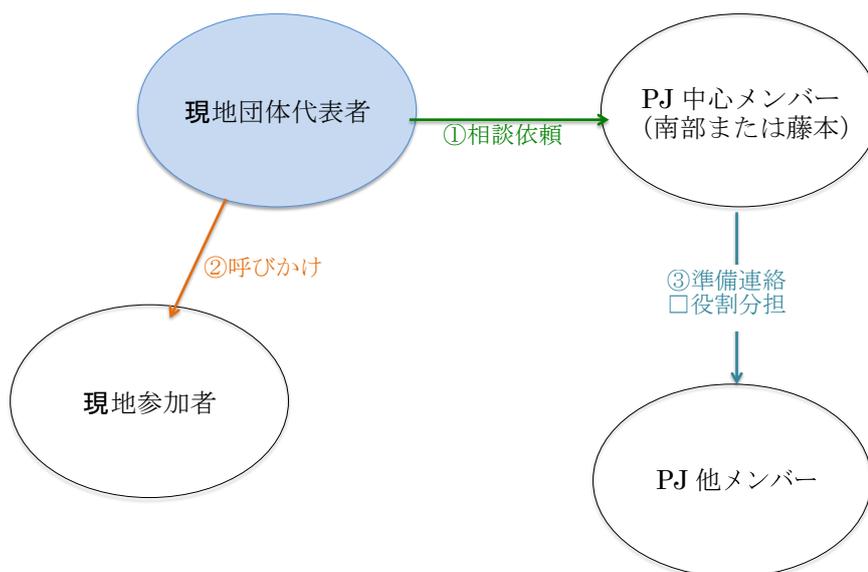


図31： B小学校・知多市学校教員研修会・伊勢市C地区、箕面市D地区タイプ

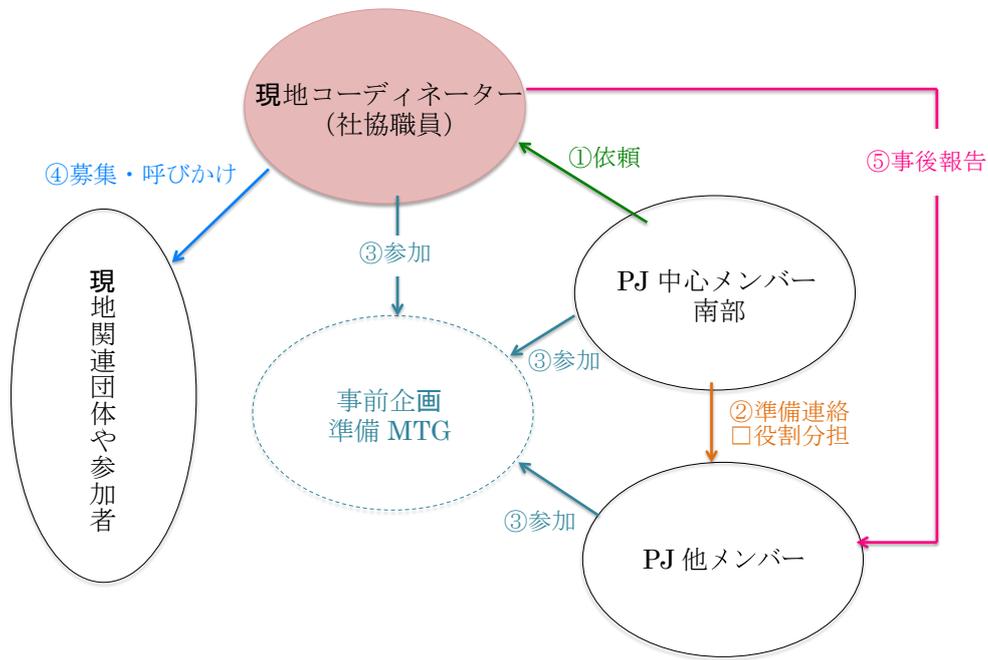


図 3 2 : 精華町タイプ

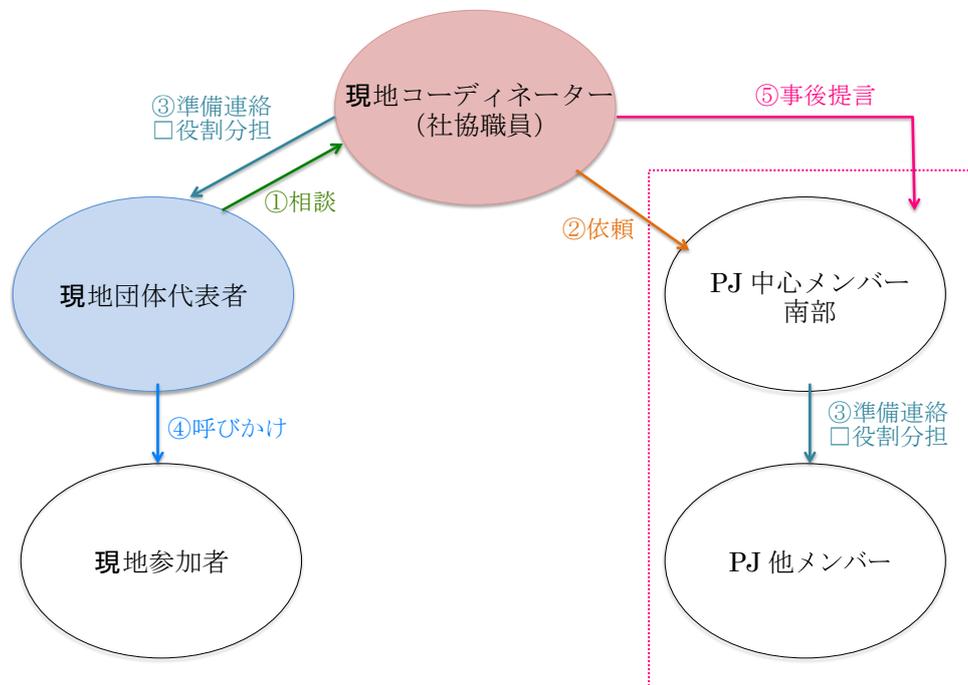


図 3 3 : 伊丹市 A 地区タイプ

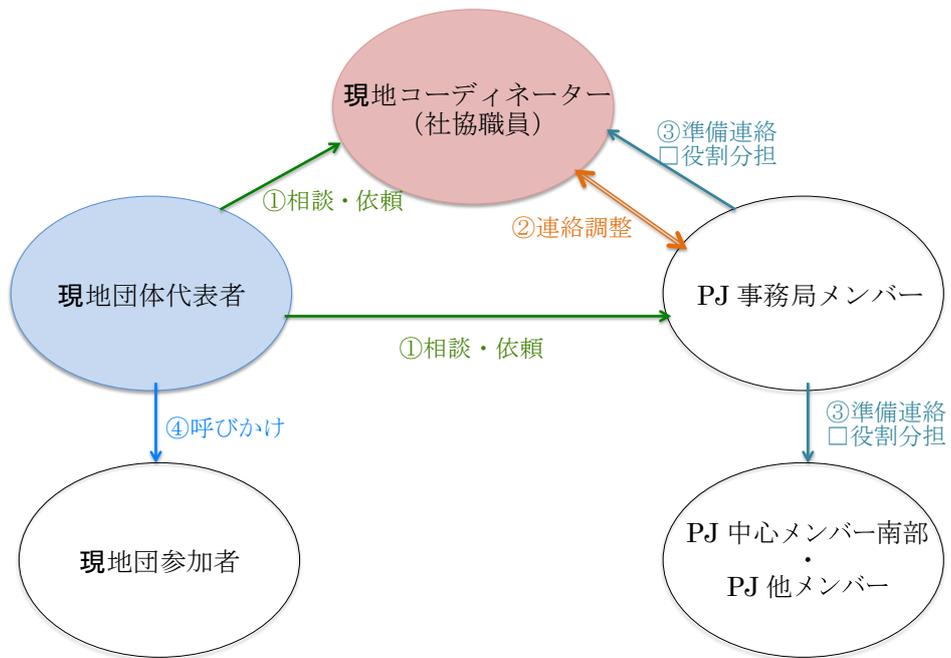


図34： 伊丹市Eマンションタイプ

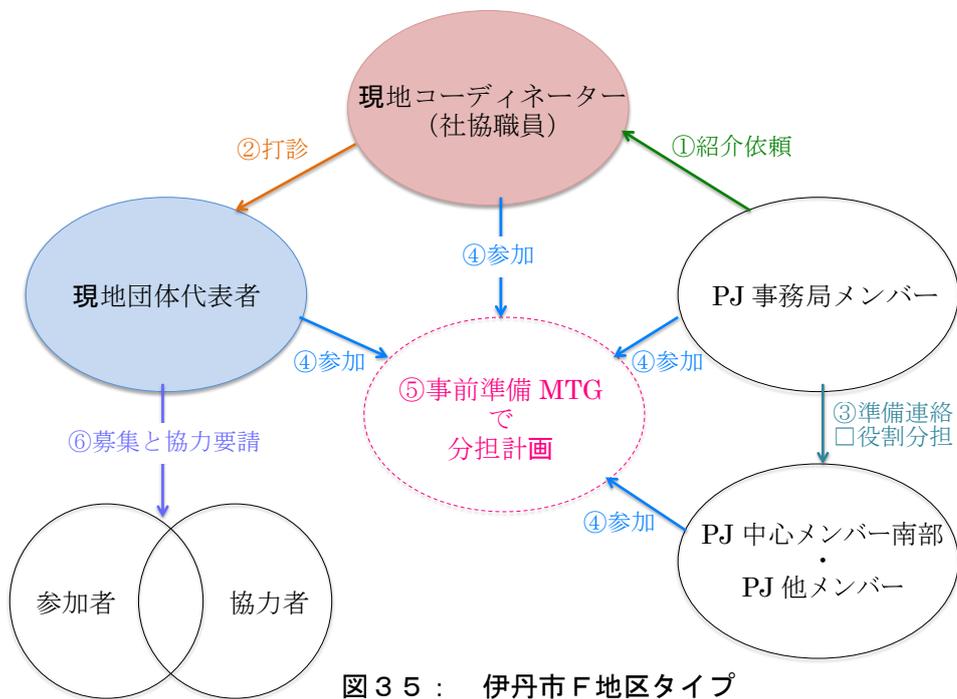


図35： 伊丹市F地区タイプ

⑤人材育成

平成26年度に実施できた「今後のLODE普及人材の育成のための取り組み」は次のとおりである。

今後各地域においてLODE普及を担ってもらえそうな人材は、以下に示すように、社協職員や現地団体リーダー計7名を確認することができた。

また、今年度の取り組みだけでは判断が難しいが、伊丹市A地区の現地団体リーダー層4名、箕面市現地住民支援NPO職員数名、伊勢市現地団体リーダー層4名に関しても、今後の仕掛け方や訓練次第では、能力的には十分可能性を有していると思われる。

- 伊丹市せつよう地区での実施に関するやりとりをとおして、コーディネート役を担った社協職員のLODEへの理解度は相当上がっている。今後この人材に関しては、図上ワークショップのコーディネート訓練を経験してもらいたい。
- 伊丹市Eマンションと伊丹市F地区のコーディネート役を担った社協職員のLODEへの理解度は相当高いものと思われる。またこの人材は、伊丹市Eマンションのワークショップ当日、パワーポイントで活動の背景や来し方を説明する役割も担った。今後この人材に関しては、図上ワークショップのコーディネートを経験してもらうことで、地域で中心的な役割を果たすLODEコーディネーターに成長する可能性を有している。
- 伊丹市Eマンションの現地団体代表者1名と伊丹市F地区の現地団体役員3名は、今回の実施をとおして相当なコーディネート力や企画力、気配り力を有しているものと感じられた。27年度には、前述の社協職員と一緒に図上ワークショップのコーディネートを経験してもらうことで、LODEコーディネーターに成長する可能性を有している。
- 精華町を企画・コーディネートした社協職員も有望な人材である。27年度はワークショップの中で説明役や図上ワークショップのコーディネート訓練を経験してもらうことで、LODEコーディネーターに成長してもらいたいと期待している。

⑥LODEワークショップにおける各種データの調査・集計・分析

26年度のプレ試行調査8箇所のうち、図上ワークショップ調査結果データを集計し、初期の分析を試みることができたのは、基本LODEマンションタイプの「伊丹市Eマンション」の現場であった。

ここでは、1年前（平成25年度）にも、原初型のLODEワークショップを今年度と同等の規模で実施していたことから、今年度の集計データと昨年度の集計データを比較してみることができた（小数点以下データが生じるのは、A棟データは2班による平均、B棟データは3班による平均データのため）。

表54：伊丹市Eマンションでの図上WSデータの集計結果

EマンションA棟（79戸）の 図上ワークショップにおける 要援護者等のデータ	（参考）H26.02.02 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数	H27.02.22 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数
後期高齢者に関する情報数（件）	24.5件	27.5件
前期高齢者に関する情報数（件）	31.5件	21.0件
子どもや障害者に関する情報数（件）	8.5件	6.5件
その他心配な居住者に関する情報数（件）	2.0件	1.5件

頼れそうな居住者に関する情報数（件）	21.0 件	24.0 件
計	87.5 件	80.5 件

E マンションB棟（91戸）の 図上ワークショップにおける 要援護者等のデータ	（参考）H26.02.02 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数	H27.02.22 図上ワークショップ における1班当たり の平均データ件数
後期高齢者に関する情報数（件）	10.0 件	16.7 件
前期高齢者に関する情報数（件）	40.3 件	46.0 件
子どもや障害者に関する情報数（件）	16.7 件	24.7 件
その他心配な居住者に関する情報数（件）	1.0 件	2.0 件
頼れそうな居住者に関する情報数（件）	34.3 件	44.3 件
計	102.3 件	133.7 件

集計データから、1年前と比べて参加住民たちの図上収集データ数からは、「住民たちが隣人たちに対して、やや関心を持ち始めたかもしれない。そして1年前（25年度）に取り組んだことが、とりわけB棟（会長在住）においては、多少なりとも住民たちの意識を啓発・喚起し始めた可能性がある」といえるかもしれない。

LODEは住民の自助・共助意識の醸成を目指し情報の共有化を図るための手法である。住民意識づくりに向けては、比較的単純なデータ整理作業を住民代表や現地コーディネータたちと共同で行うことが、LODE普及人材の育成にもつながるものと考えている。

また、地図上の要援護者に関するデータだけが研究上必要なデータではない。

例えば、伊丹市F地区においては、「小学校高学年の子どもの中には自宅の住所や電話番号を覚えていない子どもが相当数存在する」ことを確認したが、これは「子どもの自助力」という観点から深刻な問題が存在する可能性があることを示唆している。

子どもが“災害時に助力になってくれるかもしれない存在”ではなく、むしろ“震災迷子が多数発生してより大きな足手まといになるかもしれない存在”であることを物語っているからである。

こうした実状や、子どもLODEによって改善される状況等を調査・数値データ化し、世に問いかけることには大きな意味があると考えている。

子どもLODE以外でも、このように“重要な問題点やその改善状況などをクローズアップするためのモノサシ”を発見していかなければならない。

3-2-2. 平成27年度：第一次試行調査時における結果・成果等

（1）ヒアリング調査結果からの分析

LODE手法の標準化に向けて、ヒアリング調査から留意すべきポイントを抽出した。

- ・ 顔と顔が見える地域住民同士のコミュニケーションの促進。
- ・ そのため何度も何度も繰り返し実施することができる手法
- ・ 手順を標準化することは手法の硬直化を招く。「効果」の標準化を考える。
- ・ 手順（とりわけ凡例設定）に関しては、地域独自のアレンジ要望が少なくない。
- ・ 支援される側も参加できる仕掛けの必要性。

- ・各テーマコミュニティがバラバラに存在する地域の中で、情報を生かすことのできる人材や体制をつくる必要がある。
- ・地域住民の要援護者に対する認識を促す手法。
- ・地域の防災活動に対し、より総合的・俯瞰的に提案ができる手法。

(2) 試行調査実施一覧表からの分析

表7～表9（23頁～25頁）に整理した調査実施一覧表のデータから、LODE研究開発において留意すべきポイントを、次の①～⑤に抽出・整理する。

①LODEが活用される場面とLODEの体系（対象コミュニティとLODEの狙い）

- ・27年度施行調査では、単位自治会（マンション自治会）での基本LODE、子どもLODE、障害者LODE、小学校区でのつなぎのLODE、全区レベルでの導入LODE（予備LODE）、普及者育成LODEが実施されたが、今後LODEが活用される場面もこのようなジャンルであると思われる。

表55：LODEワークショップの体系化（案）

LODEのタイプ		対象・エリア	狙い
導入（予備）LODE		市区町村域、学校区、連合町内会	・LODEに取り組む必要性、重要性をより多くの住民にアピールする。
基本LODE （今LODE及び5年後LODE）		単位町内会・自治会、及び班、マンションの組合等	・住民一人一人の自助力を上げる。 ・共助意識醸成と要援護者情報共有。 ・将来の守り手育成意識の醸成。 ・防災訓練・避難訓練。
補完LODE	子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。
	障害者LODE	全市・全町域、療育センター・障害者センター等の対象エリア	・障害者家族同士のネットワーク構築。 ・私設避難所設置能力養成。 ・一般住民への周知。
つなぎLODE		学校区	・学校区内の単位自治会や子ども会、PTA、さらには障害者施設などをつなぐ。 ・災害時に同じ避難所（学校など）を利用すると思われる住民同士がコミュニケーションを図る。
普及者育成LODE（地域版）		基本LODEと同じエリア	・地域の中でLODEファシリテーターを養成する。
普及者育成LODE（仮想版）		仮想コミュニティ図を用いるので参加者のエリアは不問	・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。

②LODEワークショップの規模

27年度実施試行調査から、LODEワークショップのタイプ別に、その適切な規模について考察する。

表56：LODEワークショップ規模の検討

LODEのタイプ		27年度実施モデル	望ましいと考えられるワークショップ等の規模
導入（予備）LODE		大阪市西成区	・講演会形式であれば数百名規模でも可能
基本LODE （今LODE及び5年後LODE）		神戸市灘区大規模マンション 伊丹市Eマンション	・単位自治会レベルの100戸～数百戸に対して数%～十数%程度の参加者が望まれる。 ・避難訓練の場合は数百名の参加も可能であると考えられる。
補完LODE	子どもLODE	神戸市灘区大規模マンション 伊丹市F地区子ども団体 京都府精華町	・100名規模の参加者でも可能だが、その場合は、班をまとめる班毎の指導者が必要である。班は10名程度までが望ましいと思われる。
	障害者LODE	鈴鹿市療育センター	・ごく少数な人数でなければ実施は困難であると思われる。 ・身体障害以外の障害者には、ワークショップという言葉に左右されず、まずは対話・コミュニケーションの促進と信頼関係の構築が第一と思われる。
普及者育成LODE（地域版）		伊丹市H小学校区	・H地区の場合は100名規模で実施したが、規模としてはギリギリだと思われる。1班につき10名以内、全体で10班までが限度ではないかと思われる。全体コーディネーターの意思や声が行き届くためにはその半分程度の規模までが望ましいと考えられる。
普及者育成LODE（仮想版）		名古屋市 鈴鹿市 大阪市	育成LODE（地域版）より高度な検討を行うことが想定されるため、最大でも地域版の半分程度の規模が望まれる。20～30名程度が適当な規模であると思われる。

③LODE推進の担い手・キーパーソン

自治会長などのコミュニティリーダー、当該コミュニティ担当の民生委員、そしてサポーターとしての社協職員、この3種のキーパーソンが存在するモデルの活動が力強い。伊丹市有岡地区

(小学校区)や伊丹市Eマンション(マンション)が該当する。両モデルコミュニティはLODE Eに取り組み始めてから2年～2年半継続できていることから、この「3種のキーパーソンが存在する体制」は重要だろう。

一方、神戸市灘区大規模マンションでは、社協の関与が無い。加えてLODEへの取り組みは27年度が初めてであることも参加率が低く活動が活性化しきれない原因の一つだろう。

また、伊丹市H地区では地元企業にも参画要請し、協賛金ばかりでなくワークショップ開催時にも協力を受けている。こうした視点も重要である。

④LODEワークショップの実施回数や頻度

27年度中に最も開催回数が多かったのは神戸市灘区大規模マンションの5回(LODE図上ワークショップ、報告会、子どもLODE、防災訓練、震災記念イベント)であったが、これは開催回数の限界であったと思われる。

伊丹市H地区や伊丹市Eマンションでは25年度、26年度、27年度と取組みを重ねて活動レベルを成長させているが、毎年1～2回の開催(ワークショップや調査イベント)となっている。

これらを勘案すると、図上ワークショップは特別なケースを除いて毎年1回～2回取り組むのが適当ではないかと思われる。

⑤LODEワークショップにおいて導入される主なメニューに関する考察

●図上ワークショップのやり方

27年度は図面をテーブルに置くスタイルと壁掛け式スタイルの両方を試みたが、前者は参加者同士のコミュニケーション促進効果が後者より大きい。また後者は同じ視線から図面を眺めながら作業やコミュニケーションができるという利点がある。どちらを採用するかは現場の規模や狙いによって選択すべきであろう。

●ポストイット作業

参加者の心をほぐすウォーミングアップのメニューとして有効ではないかと思われる。参加者が記入したポストイットを集めて分類整理する作業によって、参加者に質問の内容を定着させる効果も期待できる。

●個々で取り組む制作作業

長時間にわたり参加者の意識を引きつけ、集中力を発揮させることは難しい。ほのぼのの灯り、新聞スリッパ、高齢者三種の神器箱などの制作体験は、参加者の気分転換にもつながるので、導入しやすいメニューである。

これらは一人一人が取り組むメニューであるが、避難生活で役立つものという意味があることから大人の参加者でも納得して取り組める。

●グループで取り組む共同制作作業

ストローハウス制作ワークショップや、まち歩き・観察は、図上作業以外のグループワークとして導入しやすい。ストローハウス制作は子どもと大人のコミュニケーション促進に役立ち、まち歩き・観察は事後の整理を図上作業に反映させられるため図上作業を机上情報に終わらせない効果が期待出来る。

●参加者が声を出すこと

参加者の感想や意見は、発表形式を採用することが望ましい。アンケート方式よりも、主催者と参加者という立場を越えて「ファシリテーターやスタッフも参加者も、ともに場を創るメンバーだ」という意識を与え、学んだことを定着させる効果が高いと思われる。

(3)基本LODE・マンションLODEに関する考察

表57は、平成27年度にLODEを実施した3箇所のマンションの比較データであるが、表中のデータからLODEの普及や活用に関する示唆を読み取ることが可能であると考えられる。

①有情報戸数の比率

要援護者情報、支援者候補情報の収集・認識も含め、「有情報戸数の比率」はLODEを活用する上での目安となる。

3箇所のマンションの比較表からは、BとCでは自治会班長などの住民たちがほぼ8割の住戸の情報を掴んでいるのに対し、Aのリーダー層が把握できている住戸は4割に満たない。

②ワークショップへの参加率

1世帯から1人参加すると仮定して（実際そういうケースが多い）、「参加者数÷マンションや自治会の戸数」の比率は、要援護者の情報把握や対応力につながるコミュニティの活性化状況を測る上で、ある程度目安になる数字であるといえよう。

3箇所のマンションうちBはAに比べて参加率が2.8倍以上であるが、有情報戸数の比率もBはAの2.4倍以上となっており、参加者の数がある程度情報数にも比例することを物語っている。

ちなみに、マンションでは両隣住戸と上下住戸とは比較的コミュニケーションを図りやすいと思われることからおよそ5戸に1戸（図3.6参照）、また通常の住宅地では向こう三軒両隣という言葉から6～9戸に1戸（図3.7参照）がLODE参加するならば、大半の住戸の情報は収集できるものと想定される。

LODEワークショップへの参加率も目標はそのラインで設定するのが適当であろう。

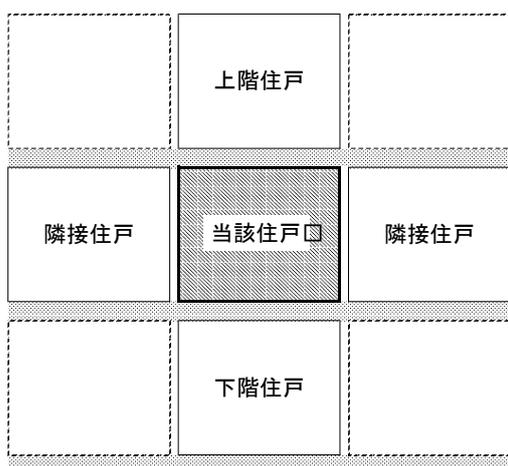


図3.6：マンション住戸の場合、コミュニケーションを図りやすいと考えられる近接住戸

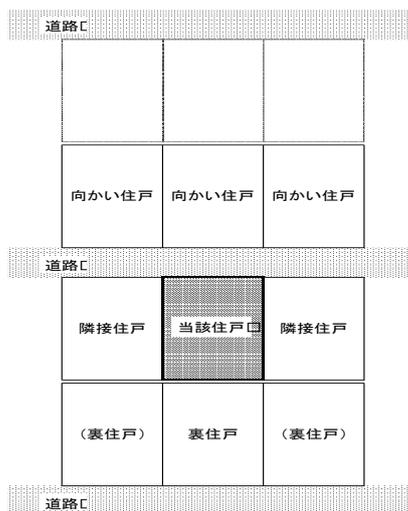


図3.7：戸建住宅地の場合、コミュニケーションを図りやすいと考えられる近接住戸

表57：27年度LODEを実施した3箇所のマンションの比較データ

	A□	B□	C□
	神戸市灘区大規模マンション□	兵庫県伊丹市Eマンション□	兵庫県伊丹市Jマンション□
1) WS 実施日□	2015年6月14日	2016年2月7日	2016年2月13日
2) WS 曜日・時間帯□	日曜日 13:30～15:40	日曜日 9:30～11:30	土曜日 9:00～11:00
3) マンション築後年数□	約13年	約34年	約34年
4) 住棟数□	5棟	2棟	3棟
5) 総住戸数□	603戸	170戸	198戸
6) 居住者数□	約1,500～1,800人	不明	不明
7) 居住者のうち中学生□	90～100人	不明	不明
8) 居住者のうち小学生□	推定180～200人	不明	不明
9) 図面作業の形式□	壁掛け式	テーブル作業	テーブル作業
10) WS 出席民生委員□	1名	1名	1名
11) WS 出席住民層□	防災委員会委員 見守りボランティア 他一般住民 中学生1名	自治会役員 自治会班長 他一般住民	自治会班長のみ
□ 12) 参加呼びかけ□	・□各住棟エントランスでのポスター ・□各住戸案内チラシ	・□各住棟エントランスでのポスター ・□班長への呼びかけ	・集会所掲示板での告知
13) WS 実施主体責任者□	防災委員会委員長T氏	自治会長N氏	自治防災会長O氏
14) WS 実施主体と管理組合との関係(実施主体責任者へのヒアリングによる)□	・□自治防災会長は元理事長 ・□管理組合は防災委員会に対してさほど協力的ではない	・□管理組合理事長もWSに出席 ・□管理組合と自治会の関係は良くも悪くも無い	・□自治防災会長は元理事長 ・□管理組合と自治防災会の関係は悪く無い
15) LODE□WSの実施経験□	無し	・2013年12月に地区全体のLODEに参加 ・2014年1月・3月と2015年2月単独実施。	・2013年12月と2016年1月に地区全体のLODEに参加。
以下、WSの結果から得られたデータ□			
16) WS：参加者□ □□□□(対全戸数比)□	33名 (5.5%)	27名 (15.9%)	17名 ※ (8.6%) ※
17) WS：有情報戸数□ □□□□(対全戸数比)□	221戸 (36.7%)	151戸 (88.8%)	150戸 (75.8%)
18) WS：うち65歳以上□ □□□□高齢者のいる住戸□ □□□□(対有情報戸数比)□	102戸 (46.2%)	95戸 (62.9%)	106戸 (70.7%)
19) WS：うち小学生以下の□ □□□□子どものいる住戸□ □□□□(対有情報戸数比)□	86戸 (38.9%)	17戸 (11.3%)	13戸 (8.7%)
20) WS：要援護者人数□ □□□□(対全戸数比)□ (対有情報戸数)□	26人 (4.3%) (11.8%)	10人 (5.9%) (6.6%)	11人 (5.6%) (7.3%)
セブールマンション	A□	B□	C□

③LODEワークショップの継続・反復実施

表57のBマンション自治会長によると、同マンションの「有情報戸数の比率」が8割を超える理由の一つとして、LODEワークショップの継続的開催があげられるとのことである。28年2月は3年目の開催であったが、毎年実施することで住民（主として班長クラスのリーダー層）が常に近隣住戸・住民のことを意識するようになってきていると感じているようだ。

なお、同自治会長によると、半年に1回の開催は自治会活動にはやや負担となり、それ以上の頻度となるとかなり難しいとのことであった。

（4）子どもLODEに関する考察

子どもLODEは、自治会ではなかなか捕捉しきれない子どもコミュニティに対して防災を仕掛ける役割があるが、加えて自治会などでの基本LODEが実施困難な地域において、子ども対象のLODEから地域の防災活動の端緒を拓くというような役割も期待し得る。

伊丹市F地区では自治会による防災活動が低調であった。また京都府精華町でも社協職員が孤軍奮闘するものなかなか周囲の理解が得られず基本LODEの実施に漕ぎ着けられない中で、子どもLODEから実施するという選択を行った。

さらに神戸市灘区大規模マンションにおいても、第1回目図上ワークショップの後になかなか参加者が増えない中で、「子どもが多い地区（団地）だから子ども活動から指導しないと、子どもや親世代が集まらない」という危機感の中で子どもLODEに取り組むこととなった。

同マンションで、子どもと大人が共同作業を行った同マンションの震災イベントでは、初めてLODE関連行事に参加した大人が5名いたが、いずれも「子どもの親」であった。子どもLODEは、子どもの親世代の住民を引き込むための手立てとしても可能性を持つといえよう。

また、伊丹市F地区で導入したストローハウス制作ワークショップには子どもと大人の壁を取り払い、共同作業環境をつくり出していく効果があると思われる。

（5）障害者LODE

LODEの中で最も取り組みが難しいのが、障害者を対象としたLODEであると考えられる。図面を用いるワークショップに取り組むまでには、相当な回数のコミュニケーション（ヒアリングやアンケート調査という理由でコミュニケーション）を重ねながら家族からの信頼を得たり、家族の理解を徐々に促していく必要がある。

また、東日本大震災時にも、先日発生した熊本地震の際にも、地域の避難所（行政から指定された避難所）に入れない障害者の存在が大きな問題となっている。従って、障害者に理解のある専門家が運営する福祉避難所の役割が期待されるが、熊本でも指摘されているように、福祉避難所のキャパシティが圧倒的に不足することは自明である。

よって、指定外の建物を臨時（私設）避難所として設営し、専門家に準じる理解力・対応力を持つ人材を地域に育成していくことが必要となるであろう。

LODEの研究開発においては、こうした在宅福祉支援人材を地域で育成していくことも重要な課題であると認識している。それが「潜在するリスクについて、コミュニティの一人一人に、より正しく認識してもらうための手法」という当PJのミッション達成にもつながるからである。

（6）人材育成の状況と成果

①小学校区での協議会体制による事例

人材育成面で平成27年度に成果を残した事例として、伊丹市H地区の取り組みを上げることができる。

この体制による育成LODE・繋ぎLODEの実施は、26年度の事例・成果より一歩先に進んだ成果として評価できる。

この取り組みを実施した体制も、次図のように、倉原PJの関与度がかなり薄くなっており、26年度事例より進歩したものといえよう。

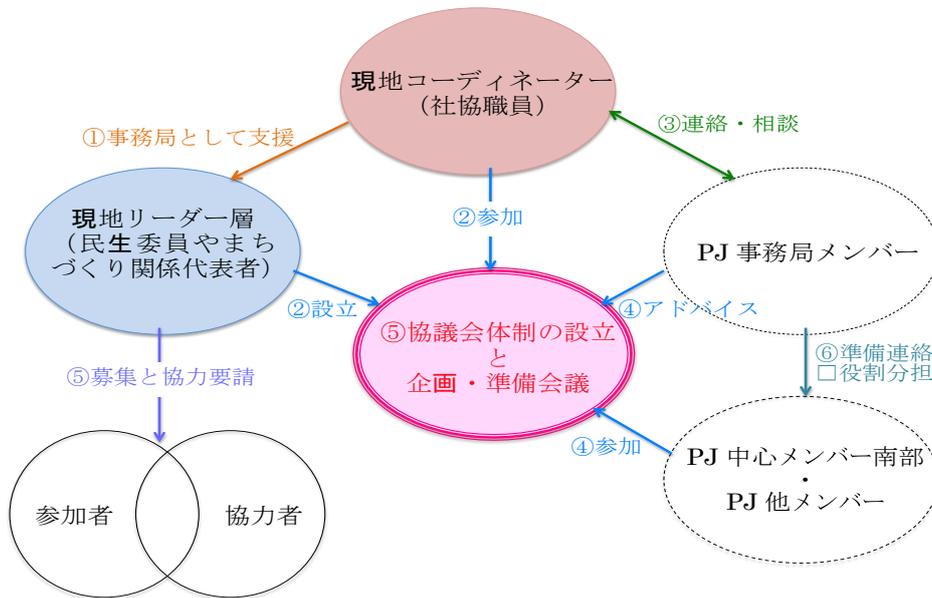


図38：伊丹市H地区における体制図

②地域を越えた育成LODEワークショップ

H地区（H小学校区）の取り組みは、地域における取り組みの中でリーダー層を育成していこうとするものであるが、一方名古屋市や鈴鹿市、大阪市で実施した「広域から集まったファシリテーター候補者にLODEの普及方法を伝えるための育成LODE」も効果があったと手応えを感じている。

この育成ワークショップでは仮想コミュニティモデルを利用することから、参加者の居住地にとらわれない。

また、シール貼りの時間を短縮することができるため、実際の地域で実施するLODEに比べ、発災後の避難行動や避難所生活における注意ポイントや、平時からの準備活動に関する検討に時間を割くことができる。

自治会長や班長レベルの人材育成は地域版によるが、社協職員や市町村域を越えてで活動する災害ボランティアなどに対しては、仮想コミュニティモデルによるワークショップが有効であると思われる。

28年度は、仮想コミュニティモデルを増やし、2～3回の研修会プログラムでファシリテーターを育成していく内容のプログラムの開発と検証に取り組む計画である。

（7）LODEファシリテーター育成支援ツール開発試案

3-2-2（1）で整理したヒアリング調査からのポイントを具体化していく検討は、LODE手法の標準化、さらには普及のために重要である。

ここでは「マンダラチャート」の考え方を活用して試案開発中である『LODEファシリテーター育成支援ツール』等について報告する。

①マンダラチャート図の活用による「目標」と「手段」の一体化

手順を標準化（固定化）してしまうと、手法の硬直化につながりやすいことは前にも述べた。そこで、当PJでは研究会を重ね、次のような大目標と中目標・小目標（手段やチェックポイント）

ト) が一体化した目標設定シート「マンダラチャート」の考え方を利用した『マンダラチャート方式によるLODE活動到達目標図・表』を試作した。

- 大目標 (1つ) : LODE手法の標準化
- 中目標 (8つ) : L (要援護者情報収集と対応・チェックポイント: 子ども編)
 : O (要援護者情報収集と対応・チェックポイント: 高齢者編)
 : D (要援護者情報収集と対応・チェックポイント: 障害者編)
 : E (避難のためのポイント: 避難編)
 : 体験 (体験を通じた定着・共有化のポイント)
 : 育成 (担い手育成のポイント)
 : 繋ぐ (住民・異種コミュニティ同士を繋ぎ協働させるためのポイント)
 : 図面WS (図面ワークショップのポイント)

地区に合わせた図面使用	作業テーブルでの会話促進	要援護者への認識を深める	在宅要介護高齢者情報収集	予備軍高齢者の情報収集	高齢者避難所の調査・計画	LODEを他者に伝える・教える	社協職員はコーディネータ役	自分たちでWSの企画と運営
情報の管理に留意	図面WS	コミュニティ力を養うWSの定例化	在宅要支援高齢者情報収集	○	要援護高齢者の自主的申告	コミュニティリーダーを鍛える	育成	講師・ファシリテータ役をする
凡例は状況に応じて工夫	要援護者・支援者情報収集	基本単位は単位自治会	基本コミュニティでのLODE WS	高齢者のことを学ぶ	高齢者参加のWSや避難訓練	導入LODE予備LODE講習会	育成ツールを活用する	関係機関参画の体制づくり
体験型作業重視のWS	子供の自助力を高める	子ども会や学校単位でWS	図面WS	○	育成	避難訓練	自他の困り事を想像させる	必要物資を考える・準備する
共同作業重視のWS	L	大人が子どものことを知る	L	LODEの標準化	E	発災時避難を想像させる	E	避難所生活を想像させる
WS作業班は小地区単位	親や地域人を引き込む	様々な子どもが一同に参加	繋ぎ協働	D	体験	私設福祉避難所の計画	被災者経験談から学ぶ	エトランゼ(外国人)への対応
子ども会とPTAの合同WS	参加者同士の会話促進	井戸端サロン型活動	障害者・家族の自主的申告	重度障害者情報収集	障害者避難所の調査・計画	障害者や外国人と会話体験	逃げる体験	避難所生活の模擬体験
小学校区での合同WS	繋ぎ協働	会食会握手会	在宅身障者情報収集	D	障害者参加のWSや避難訓練	みんなの前で発言する体験	体験	炊き出し体験
擬似家族関係の発見と構築	要援護者と地域のマッチング	物資備蓄活動での繋ぎ	障害のことを学ぶ	知・精・発(障)情報収集	家族の理解を得る進め方	防災機器操作・使用体験	共同制作作業体験	まち歩き共同確認作業体験

図23 (再掲) : マンダラチャート方式によるLODE活動目標図

表5 1 (再掲) : マンダラチャート方式によるLODE活動小目標リストの一部事例
(8つの中目標のうち「子ども編」について)

	小目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など	これまでの施行調査での実施・言及・確認
L-1	子供の自助力を高める	<ul style="list-style-type: none"> ●「親の氏名・住所・電話番号」テストの実施と、結果速報の発表と表彰。震災迷子にならない能力、これは子どもの自助力の基本と考える。 ●結果を親に知らせる(「小学生の大半が住所・電話番号を覚えていない」という状況を理解できていない大人が大半である)。 	※自宅住所と電話番号を覚えていない小学生が多い。親の名前さえ書けない子がいる。震災時迷子の発生が懸念される。(2015年3月28日及び8月22日伊丹市F地区WSで確認)
L-2	親や地域の大人を引き込む	<p>自治会への参加度が低い30代~40代の世代を、地域防災活動に引き込むためには、子どもの安全安心やその活動に関心をもってもらう必要がある。そのために、次のような手立てを講じることが有効であろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●PTA(親)対象のLODEワークショップを実施してみる ●親子で一緒に共同作業できるメニューの導入(ストローハウス制作、まち歩き・頭上確認ワークショップ) 	※ストローハウス制作WSの効用に関しては2015年8月22日伊丹市F地区WSで確認 ※灯りづくりWSの効用に関しては2016年1月17日神戸市灘区大規模マンションのWSで確認
L-3	大人が子どものことを知る	<ul style="list-style-type: none"> ●要支援者(子ども)についての説明資料・説明パワポを利用する。 ●子どものWS取り組みの様子を実際に見てもらう。 	★2015年度F地区で、子どもの自助力の状況報告を親にした以外には実施できていない。
L-4	子ども会や学校単位でWS	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校区単位で取り組める地区子ども会等でのLODEワークショップを実施する。 ●学校主催での実施の場合、教員の認識・意識の不足が懸念される(横並びを意識しすぎる)が、釜石東中学校の事例もあるので有効な場合もある。 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-5	WS作業班は小地区単位	<ul style="list-style-type: none"> ●グループワークは学校区内の小地区別の班単位で行う(集団登下校の場合にも有効)。 ●図面を使用するWSの場合は、次のような情報を図示させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・自宅、学校、避難所、公衆電話、医療機関の凡例 ・交通機関や道路の図示、災害時ハザードの図示 ・通学路や避難路の図示 ・気になる人(お友達、乳幼児、高齢者、障害者) ・犬や猫 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-6	共同作業重視のWS	<p>現代の子どもたちはゲームの影響か、複数人で一緒に取り組む機会が十分ではないといえる。班単位作業を導入し、例えば次のような体験をさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地図をもとにまち歩きで確認させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・災害時危険箇所の確認 ・私設避難所候補の確認 ・友達同士の自宅場所確認 ・デジカメを持たせて即時プリントアウト ●ストローハウス制作ワークショップ 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-7	体験型作業重視のWS	<p>共同作業と同様、現代の子どもたちに不足していると思われる「体験型作業」も重視する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地図をもとにまち歩きで確認させる。 ●トランシーバーの扱い方を教えて、まち歩きで利用させる。 <ul style="list-style-type: none"> ●ほのぼの灯りづくりと灯りイベント ●新聞スリッパの制作 ●高齢者三種の神器箱制作 ●ストローハウス制作ワークショップ ●家庭へのお手紙(参加報告)を書かせる 	※学校単位(2014年度B小学校など) ※子ども団体(2014年度・2015年F地区など) ※地区・自治会単位(2015年度灘区大規模マンション)
L-8	様々な子どもが一同に参加	<ul style="list-style-type: none"> ●軽度であれば特別支援学級の発達障害や知的障害の子どもも一緒に取り組む。 ●災害時は、通常学級の子どもも特別支援学級の子どもと一緒に避難するケースが考えられる。 ●一緒に取り組むことで「自分とは少し違う存在」を認める気持ちを養う。 	※子ども団体(2014年度・2015年F地区など)では、軽度知的障害の子どもが通常の子どもの中で一緒に取り組むことができた。

中目標及び小目標の設定に関しては、28年度の継続調査研究の中で、再度検討を重ねる必要がある。

②評価の点数化によるレーダーチャート図の活用による活動の評価・診断

8つの中目標毎に評価点数をつけて、それをレーダーチャート化することで、活動評価資料とすることも可能である。

例えば、次の図は、倉原PJの1名が27年度における神戸市灘区摩耶シーサイドプレイスでの取り組みに関して、8つの中目標毎に採点(64項目の小目標毎の採点を合計したもの)を試

みたものをレーダーチャート図化したものであるが、図面ワークショップや避難訓練、さらには子どもを対象とした取り組みや体験型の取り組みがある程度行なわれていることがわかる。

しかし一方で、高齢者や障害者の把握、それら要援護者への対応、そして情報や活動の共有化や人材育成がまだまだ遅れていることも読み取ることができる。

こうした評価・レーダーチャート作成作業を複数名で行い、それら複数の評価を比較し、差異などに関して議論を行うことで、当ツールをより有効に活用出来ることが考えられる。

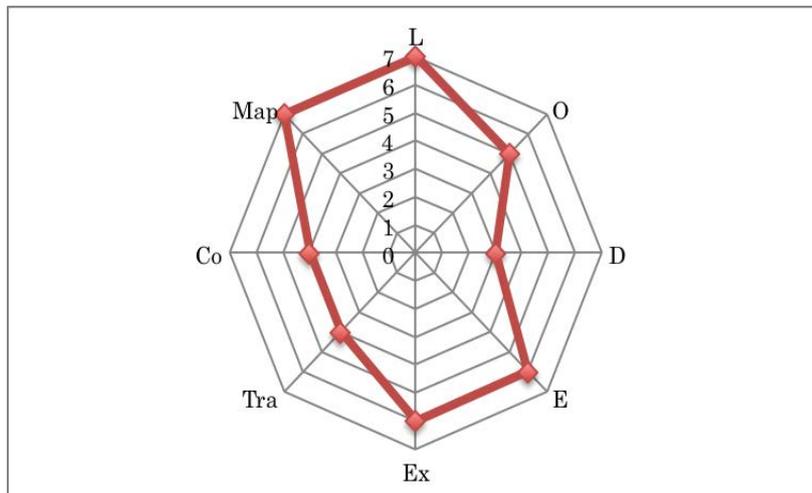


図39：レーダーチャート方式による活動評価・診断図事例

3-2-3. 平成28年度：第二次試行調査時における結果・成果等

(LODEプログラムとしては確立されてきた)

本研究で開発を目指す手法としてのLODEワークショップについては、これまで2カ年半の研究活動の中で一定のプログラムの内容・スタイル、及びその効果がある程度確立されてきたといえる。

例えば、取組み当初よりしばらくの間はLODE推進のキーマンである南部によりほとんどのWSが進行されてきたが、現時点で既に、「地域で育ったキーマン」が、自分の力で「南部から教わったLODEワークショップ」を展開していたり、あるいはLODEワークショップの企画や調整に取り組んでいる。

自律した実践コミュニティがある程度育成できているという点（ある特定の特殊な地域に限らず、また研究メンバーがいなくても出来るという点）では、LODEによる効果が発揮されているものといえる。

同時に、これらの動きは、LODEワークショップは誰でもできるプログラムとして確立されつつあるがゆえということができる。そして、このプログラムの確立は普及という点への貢献が大きい。

(継続・持続が必要・有効であること、その為の方向、ポイント)

一方でこうしたLODEワークショップを市民社会・地域社会にとって、また本研究が目指す「自助（及び互助）による防災福祉」の点からみて真に有効なものにするためには、取り組みの継続・継続が必要・必須であることも確認出来た。

これは課題でもあり、同時にこうした課題を描き出したことも本研究の成果であろう。同時にこうした課題に対して、(2)で述べるように、今回の活動の中で幾つか方向やポイントも見出されている。

このことはまちづくりの現場では当然のことであるが、「自助（及び互助）による防災」分野でもその必要性が確認されたということである。

（LODEの内包する普及課題と重要性）

先に述べた「プログラムとしての確立」と「継続・持続の必要性・有効性」には、普及に際しての注意点も内包されている。すなわち「プログラムとしての確立」による普及が、誤った形式的WSの展開に向かい兼ねないという問題を孕むことである。普及できる一定の形が整ったことは有効だが、逆にその形だけに拘るがあまり柔軟性のない硬直化し安いものとして普及してはよくない（従来類似手法においても同様な形の普及はあった）。そのための意識・注意喚起として「継続・持続させるためには何が必要か」という問いが大事な示唆を与えてくれると思われる（一定の形にはまらずある程度地域独自色を出すなど柔軟に）。

これらは決して容易いことではないが、少なくともこのことを意識・認識しておくことは重要である。またそれは経験の中で培われるものであろうし、地域の現場にはそうした人材・環境も存在するものである。

次の（１）～（５）に、平成２８年度の結果・成果を整理しておく。

（１）LODEワークショップの体系化

表５８は、昨年度報告書において整理したLODEワークショップ体系化（案）である。

平成２８年度は、さらに１カ年の取組みを経て、この体系化の案を、表５９のようによりシンプルな案へと変更・再提案したい。

その理由は次のとおりである。

- ・ 「導入LODE」は、内容が特別なものではなく、基本LODEや育成LODEの内容を必要に応じてアレンジすることで足りる。
- ・ 「障害者LODE（本人や家族の参加）」は現時点ではその実現がまだ難しいと言わざるを得ない。障害者や家族が周囲の目を気にせず、むしろ周囲の理解の中で安心して防災ワークショップに参加できる、そのような環境が実現するまでにはまだ少々乗り越えなければならないハードルが残されている。当面は、基本LODEや育成LODEのメニューの中で、「障害に対して理解を深めるための学習」要素を強化することで対応すべきと考える。
- ・ 「つなぎLODE」は、基本LODEや育成LODEと比べ参加者の広がり異なるが、実施する内容が大きく異なるわけではない。したがってこれも基本LODEや育成LODEの内容を必要に応じてアレンジすることで足りる。
- ・ 普及を考えた時、メニューは多すぎない（複雑すぎない）ことがベターであると考えられる。よって、今年度報告書では、基本LODE、育成LODE、そして「子どもLODE」３つをLODEワークショップとして普及に向かうべきと提案する。

表58：平成27年度報告書で提案したLODEワークショップ体系化（案）

LODEのタイプ□		対象・エリア□	狙い□
導入（予備）LODE□		市区町村域、学校区、連合町内会□	・LODEに取り組む必要性、重要性をより多くの住民にアピールする。□
基本LODE□ （今LODE及び5年後LODE）□		単位町内会・自治会、及び班、マンシヨンの組合等□	・住民一人一人の自助力を上げる。□ ・共助意識醸成と要援護者情報共有。□ ・将来の守り手育成意識の醸成。□ ・防災訓練・避難訓練。□
補完LODE□	子どもLODE□	学校区など□	・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。□
	障害者LODE□	全市・全町域、療育センター・障害者センター等の対象エリア□	・障害者家族同士のネットワーク構築。 ・私設避難所設置能力養成。 ・一般住民への周知。
つなぎLODE□		学校区□	・学校区内の単位自治会や子ども会、PTA、さらには障害者施設などをつなぐ。□ ・災害時に同じ避難所（学校など）を利用すると思われる住民同士がコミュニケーションを図る。□
普及者育成LODE（地域版）□		基本LODEと同じエリア□	・地域の中でLODEファシリテーターを養成する。
普及者育成LODE（仮想版）□		仮想コミュニティ図を用いるので参加者のエリアは不問□	・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。

表59：平成28年度報告で提案するLODEワークショップ体系化（案）

LODEのタイプ	対象・エリア	狙い
基本LODE （今LODE及び5年後LODE）	単位町内会・自治会、及び班、マンシヨンの組合等	・住民一人一人の自助力を上げる。 ・共助意識醸成と要援護者情報共有。 ・将来の守り手育成意識の醸成。 ・防災訓練・避難訓練。
子どもLODE	学校区など	・子ども個人個人の自助力を上げる。 ・親（子育て世代）の関心を惹きつける。
育成LODE	基本LODEや子どもLODEと同じエリア	・地域の中でLODEファシリテーターを養成する。
	仮想コミュニティ図を用いるので参加者のエリアは不問	・地域を特定せず、広くLODEを普及・指導する人材を育成する。

(2)「継続・持続」から求められる基本LODE普及者のタイプ

当プロジェクトが当初からワークショップの実践に取り組んでいる伊丹市においては、既に何名

かの「LODE普及者」が育っている。

コーディネーターとして裏方に徹し複数の地域でLODEワークショップを仕掛ける社協職員橋倉加世子氏（コミュニティワーカー）の他、H小学校区内で自治会対象のLODEや小学校での子どもLODEの講師役を担うFT氏等の民生委員や、同様にH小学校区内のEマンション自治会で3カ年に渡って毎年LODEワークショップを企画・実施する自治会長滑川勝氏等が存在する。

3-2-3.の冒頭でも述べたように、H小学校区の民生委員たちは、既に当プロジェクト（南部を中心とする事務局）の手を離れ、独自でLODEワークショップを展開し始めている。中でも中心人物であるFT氏は、「南部のコピー」ともいうべき内容でワークショップの中心的ファシリテーターを務めている。しかし、その段階はまだ“1巡目”であり、仕掛けた現場の継続・持続という課題に直面する以前の状況であると思われる。

一方、Eマンションの滑川自治会長の場合は、毎年同じマンション自治会現場でLODEワークショップを開催している。そして、自治会の活動がマンネリ化・停滞しないようにと、毎年少しずつ内容をアレンジしながらLODEワークショップを企画・開催している。自らワークショップのファシリテーターとして参加者の目の前に立つ時間は決して多くはないが、それでも毎年少しずつワークショップの現場進行役を担う時間は長くなってきている。

FT民生委員のやり方は、短期間でLODEを普及・展開させるためには重要な役割を担うが、一方で滑川自治会長のような「息の長い継続・成長ストーリーのある活動を生み出す」ための工夫・企画力も不可欠といえる。

FT型と滑川型、この両方を併せ持つ進め方が重要といえる。

（3）子どもLODEの展開方向

27年度の子どもLODEワークショップは、いずれの現場でも長時間（3時間あるいはそれ以上）であった。

28年度は長時間現場が1箇所、短時間（1時間程度）の現場が2箇所であった。

短時間の現場のうち2回（伊丹市H小学校、広島市安佐北区L寺学童教室2回目）のワークショップについては、南部が不在であったこともあって、映像メニューやクイズメニューなどの新しいメニューを企画・準備して運営に臨んだが、それが功を奏する結果となった（子どもの観察や教員、子育て関係者の反応・評価からも読み取れた）。おそらくその成功は次のような理由によるものと考えられる。

- ・ 現代の子どもは、会話でコミュニケーションする能力が昔の子どもと比べて劣ってきていると思われるので、映像や画像を使うメニューの方が伝わりやすい。
- ・ 現代の子どもは、集中力や持久力が昔の子どもと比べて劣ってきていると思われるので、時間の短いメニューをたくさん用意し、目先の変化をつけてあげる方が伝わりやすい。
- ・ 現代の子どもは、昔の子どもと比べて自己肯定感が育っていないと思われるので、叱咤する指導法よりも、まずは褒めておだてる指導の方が伝わりやすい。

一方で、今年度南部がコーディネートした鳥羽市M地区の長時間現場が失敗したかということ、そうではない。短時間型の2箇所に劣らない成功（地区住民たちからの評価の声）モデルとして評価できるかもしれない。

そこには、「フィールドワーク」を取り入れたこと、ドローンの体験など目新しいメニューがあったこと、離島の子どもたちが「大人とのコミュニケーションに慣れている」ことなどの成功要因があげられる。そして何よりも、南部がこのタイプの指導経験が豊富であることが大きな要因であろう。

今後、子どもLODEワークショップは、学校、子ども会、子育て支援現場などを中心に展開を図ることとなるだろうが、短時間タイプと長時間タイプを適切に使い分けるバランス感覚が重要である。

(4) 育成LODE

今年度、LODEワークショップは2箇所（鈴鹿市災害ボランティア、大阪市福祉・まちづくり市民団体）で実施した。

鈴鹿市の場合は、地元の災害ボランティアや民生委員などが対象であり、図上ワークショップ（地域の地図や仮想マンション図の利用）に加え、「障害者や子ども等に関する勉強会」に取り組んだ。

一方、大阪市の場合は、広く関西圏から社協のコミュニティワーカーやボランティアセンター職員を対象とし、「LODESTARチャートの内容を深めるためのワークショップ」を中心に据えた（図上で要援護者を支援するワークショップはポイントを押さえる程度）。これは対象者が災害ボランティアよりは要援護者の状況に明るく理解があると考えられるからである。

今後も育成LODEワークショップは、これら2つのタイプで展開されるだろう。

(5) 人材育成の状況

図40は、伊丹市H地区におけるLODE推進体制が平成27年から28年にかけて変化した様子を示した図である。

当初は、南部及び当プロジェクトが深く関与（指導、企画）していたが、現在ではほとんど現場だけで企画・実施が行われており、当プロジェクト側はそれを見守っているだけである。同じH地区のEマンションや、神戸市灘区大規模マンションでも、多少のスピード差や程度の差はあるが、同様の傾向をみせはじめている。

こうして現場が自律（自立）へと向かっているということは、「住民主体型」が信条であるLODEプログラムにおいては、評価できることととらえられる。

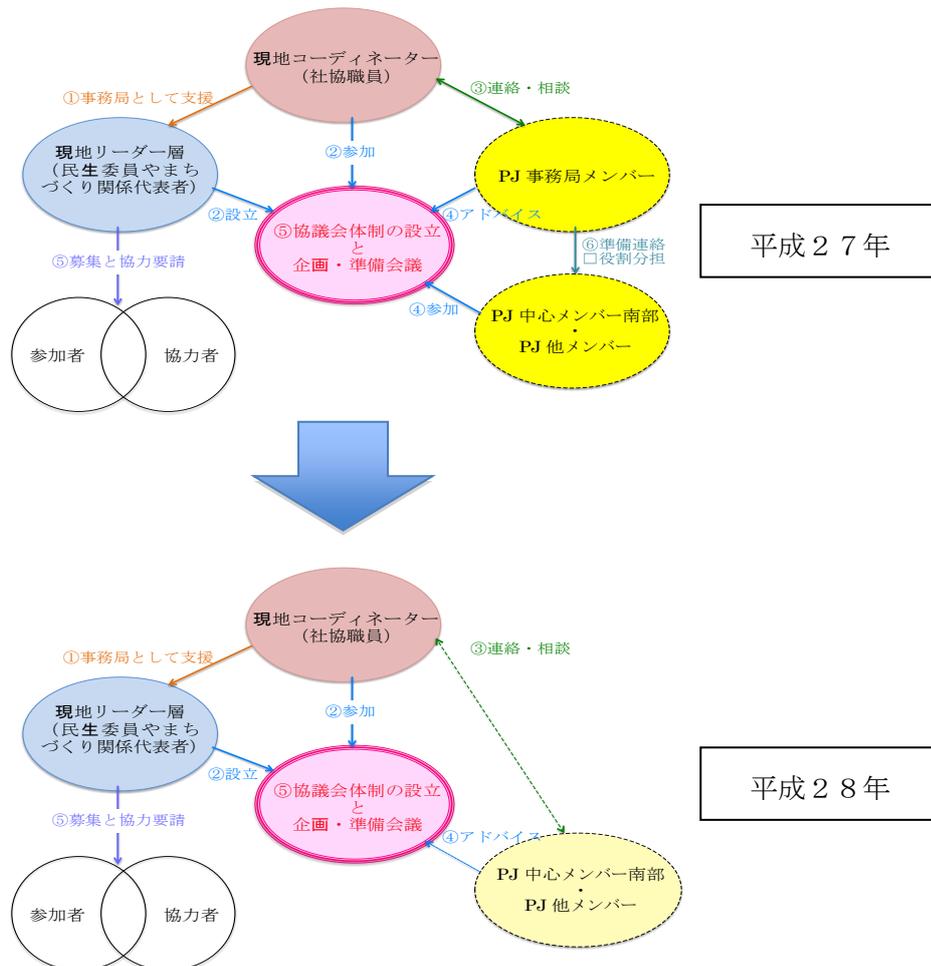


図40：伊丹市H地区におけるLODE推進体制の変化の状況（H27→H28）

3-3. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

(1) 普及・展開の可能性

図18からもわかるように、LODEが発案され（平成25年）、現在多少の拡がりの予感を得られるまで4年間が経過している（うち3年間は本研究開発プロジェクトによるものであった）。

防災であれ、まちづくりであれ、多様な住民層から成る地域コミュニティが主体的に動くまでには、通常どのような現場でも相当な年数を要する。このような中、本研究開発期間3年間を含む4年間で、複数の現場において芽が出たり茎葉が育ち始めていることが、LODEの可能性（取り組みやすさやわかりやすさ、幅広さ、奥の深さなど）を示唆しているものと考えられる。

その4年間のうち本研究開発プロジェクト期間中3年間に、南部美智代の影響の少ない関西地方からスタートした流れで、LODEワークショップを実施した現場・回数は15カ所・延22回（講演会は含まない。南部の影響がある三重県内での実施を含まない）に上る。

よって、今後関西以外の中部、関東、中四国、九州等への展開を意図することで、展開の拡大は容易に想像できる（既に現時点で愛知県内での取り組みや、多摩市社協での取り組みが予定されている）。

(2) 普及・展開の課題

今後全ての現場で、当PJチームメンバーが出向いて講師やファシリテーターを担うタイプの「直営ワークショップ」を行うにはマンパワーの限界がある。本研究開発において育った伊丹市のキーパーソンたちのような普及者人材を育成していかなければならない。

したがって、当面数年間は、伊丹市のような「ある程度自力で展開していける現場」を複数育成し、それらを成功事例として全国に発信していくというスタイルでの普及・展開を目指す必要がある。

また、そうした成功現場から南部に続き、南部に代わる新しい普及リーダーたちを育てていかなければならない。

(3) 普及・展開の体制づくり

これまで当PJチームは、「研究者サイドチーム：岩手県立大学」と「実践者サイドチーム：災害ボランティアネットワーク鈴鹿」という体制で取り組んできたが、今後の普及・展開に向けては、全国への呼びかけにふさわしい体制づくりが求められよう。

全国主要地域に、災害ボランティアネットワーク鈴鹿のような“地域の推進役”を立ち上げて（見つけて）いかなければならない。

そのための推進母体として、『（仮称）LODE JAPAN』の設立を予定している。その下に災害ボランティアネットワーク鈴鹿のような地方の推進役が複数連携・機能していける体制づくりが不可欠である。

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) 岩手県立大学グループ（リーダー氏名：倉原宗孝）

	氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
○	倉原宗孝	クラハラ ムネタカ	岩手県立大学	総合政策学部	教授
	金野万里	キンノ マリ	SAVE IWATE もりおか復興支 援センター		事務局長
	福田由美子	フクダ ユミコ	広島工業大学	建築工学科	教授
	中須正	ナカス タダシ	チュラロンコー ン大学		博士研究員・ 兼任講師
	延藤安弘	エンドウ ヤスヒロ	特定非営利活動 法人まちの縁側 育くみ隊		代表理事
	野中里菜	ノナカ リナ	岩手県庁	復興局生活再 建課	主事
	菊池のどか	キクチ ノドカ	岩手県立大学	総合政策学部	学生
	橘宜孝	タチバナ ヨシタカ	特定非営利活動 法人災害ボラン ティアネットワ ーク鈴鹿	LODE 研究・普及 チーム	担当者

(2) 特定非営利活動法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿グループ（リーダー氏名：南部美智代）

	氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
○	南部美智代	ナンブ ミチヨ	特定非営利活動 法人災害ボラン ティアネットワ ーク鈴鹿		理事長
	藤本真由	フジモト マユ	生きる力を育む 研究会		代表幹事 社会福祉士
*	橘宜孝	タチバナ ヨシタカ	特定非営利活動 法人災害ボラン ティアネットワ ーク鈴鹿	LODE 研究・普及 チーム	担当者
*	大西千佳	オオニシ	特定非営利活動	LODE 研究・普及	担当者

		チカ	法人災害ボランティアネットワーク 鈴鹿	チーム	
	延藤安弘	エンドウヤスヒロ	特定非営利活動法人まちの縁側育くみ隊		代表理事
	森本馨	モリモトカオル	神戸市立西山小学校		教諭
	山本進	ヤマモトススム	(社福) 鹿追恵愛会	特別養護老人ホームしゃくなげ荘	施設長
	倉原宗孝	クラハラムネタカ	岩手県立大学	総合政策学部	教授

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職	協力内容
窪田 新一	クボタシンイチ	市民フォーラムおおさか	代表	大阪市内でのLODE試行調査実施を推進
脇坂 博史	ワキサカヒロフミ	大阪市社会福祉協議会 大阪市ボランティア市民活動センター	副署長	大阪市内でのLODE試行調査実施を推進
大川 敏子	オオカワトシコ	大阪市西成区社会福祉協議会	地域福祉担当職員	西成区でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
橋倉 加世子	ハシクラカヨコ	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
松下 弥里	マツシタミサト	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
兼田 美紀	カネダミキ	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート(26年度)
庄治 由美子	ショウジユミコ	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート(27年度)
浜崎 優子	ハマサキユウコ	伊丹市社会福祉協議会	地域福祉担当職員	伊丹市でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート(28年度)
F T		伊丹市H地区民生委員	幹事 民生委員	伊丹市H地区でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート及びワークショップでのファシリテータ役

滑川 勝	ナメカワマサル	伊丹市Eマンション自治会	会長	伊丹市Sマンション自治会でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
谷口 祐司	タニグチュウジ	こいみどり学園	専務理事	発達障害の理解促進方法に関するアドバイスや協力
中川 義文	ナカガワヨシフミ	鈴鹿市療育センター	所長	障害者の避難に関するアドバイスや協力
下村 悦生	シモムラエツオ	鳥羽市健康福祉課	課長	鳥羽市離島地区でのLODE試行調査実施の推進・コーディネート
大國 充彦	オオクニアツヒコ	札幌学院大学経済学部	教授	平成28年度の取組みに関するアドバイス
南部 雅幸	ナンブ マサユキ	京都大学医学部付属病院	特定教授	平成26年度及び27年度の取組みに関するアドバイス
松山 雅洋	マツヤママサヒロ	神戸学院大学現代社会学部	客員教授	神戸市灘区大規模マンションでの取組みの紹介及び調整

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント（シンポジウムなど）

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
2015/06/29	西成区社会福祉協議会 LODE 講演会	大阪市西成区 西成区民センターホール	西成区全区の民生委員や地域見守りボランティア約200名を対象にLODEへの取り組みを促す講演を行った。	200
2017/02/26	大阪市ボランティア市民活動センター30周年記念事業 第9分科会	ナーシングアート大阪	社協職員や民生委員等を対象にLODEの仮想WSと曼荼羅チャート図の活用法の研修を行った。	40

5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント（ワークショップなど）

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
2014/10/07	伊丹市A地区 連合自治会 LODE 研修会	伊丹市公的集会施設	地区別の地図と、仮想マンション図を用いて図上WSを実施した。	45

			『高齢者防災三種の神器箱』の制作も行った。	
2014/10/23	鈴鹿市B小学校 4年生 子ども LODE	鈴鹿市B小学校 4年生教室	ポストイットワーク で、「あなたにとって一 番大切なものは？」を 質問。その後ストロー ハウス WS を実施。	46
2014/11/20	愛知県知多市学校教 員研修会 LODE 研修会	桑名市教育委員 会会議室	仮想図面を用いて、図 上 WS を実施した。	15
2015/01/12	伊勢C地区連合町内 会 LODE	伊勢市C地区連 合会館	連合町内会の地図を用 いて図上 WS を実施し た。	35
2015/02/07	箕面市D地区 子ども LODE	箕面市D地区集 会施設	地域の地図を使った図 上 WS や『高齢者防災 三種の神器箱』の制作 などを行った。	子ども 15 大人 5
2015/02/22	伊丹市Eマンショ ン： 26年度 LODE	マンション集会 所	当該マンション25年度 に開催された初めての LODE(本研究開発の取 組み以前)に引き続く、 LODEのWSとなった。 初めて住戸の表札名を 書いてもらったが、半 分も書けなかった。	25
2015/03/14	京都府精華町 社会福祉協議会 全町からの希望者対 象の LODE	京都府精華町 かしのき苑会議 室	各地区別にテーブルを 分けて図上 WS を行っ た。さらに『高齢者防 災三種の神器箱』の説 明をし、	50
2015/03/28	伊丹市F地区子ども 団体 子ども LODE	伊丹市F地区小 学校体育館	子供会の子どもたち に加え、地域の高齢者 も招き、校区内地区別 に図上 WS を実施した。	子ども 55 大人 45
2015/06/05	鈴鹿市T小学校	鈴鹿市T小学校 体育館	小学校5年生を対象に 図上 WS を実施した。	子ども 50
2015/06/14	神戸市灘区大規模マ ンション LODE 図上 WS	マンション集会 施設	当該マンションで初め てLODEの図上WSを 実施した。5棟のマン ションの模式図を壁面 に貼るスタイルで実施 した。	33
2015/08/22	伊丹市F地区子ども 団体	伊丹市F地区小 学校体育館	子供会の夏季キャンプ の中で、防災 WS を取	子ども 71 大人 46

	子ども LODE		り入れた。まち歩きでまちの大人たちと交流させた。ストローハウス WS も実施した。子どもたちの7～8割が自宅住所・電話番号を正確に覚えていなかった。	
2015/08/23	神戸市灘区大規模マンション 子ども LODE	マンション集会 施設他	主に小学生を対象とした防災 WS を実施し、大人たちがそのサポートを行った。	子ども 16 大人 18
2015/10/18	神戸市灘区大規模マンション 防災訓練	マンション集会 施設並びに中庭等	企画や運営は地元側が行なった。	200
2015/12/17	鈴鹿市療育センターでの「障害者災害時対応に関する調査会」(家族対象)	鈴鹿市療育センター	障害児とその親に対して、防災に取り組む事業等の説明を行った。しかし、個別に抱える事情が違うため、全体で働きかけていくことは難しいと判明した。	83
2016/01/17	神戸市灘区大規模マンション 震災祈念イベント	マンション集会 施設並びに中庭等	住民の関心を喚起する目的で、震災の祈念に、灯りの制作 WS と灯りの屋外展示イベントを行なった。	子ども 27 大人 19
2017/01/25	鈴鹿市療育センターでの「障害者災害時対応に関する調査会」(職員対象:調査員としての研修)	鈴鹿市療育センター	翌日の障害児の親に対する調査員となってもらう療育センターの職員を対象に、ポストイット作業で研修を行った。「災害発生時の対応や心配なところ」に関して意見を発表しあった。	20
2017/01/26	鈴鹿市療育センターでの「障害者災害時対応に関する調査会」(職員が家族にヒアリング・意見聴取する)	鈴鹿市療育センター	療育センターの職員たちが、障害児の親たちに対して「災害発生時の対応や心配なところ」に関して個別に意見を調査した。	73
2017/01/30	伊丹市H小学校区 地域福祉ネット会議	伊丹市H小学校 体育館	H小学校区の全自治会(マンション含む)を	109

	LODE		対象に、それぞれの地区別の図面を用いた	
2017/02/07	伊丹市H小学校区 地域福祉ネット会議 LODE	伊丹市H小学校 体育館	WSを実施した(2回開催)。ファシリテーターは、地元の民生委員等がチームで務めた。	89
2017/02/07	伊丹市Eマンション： 27年度LODE	マンション集会所	26年度同様の図上WSを行った。住戸の表札名を書いてもらったが、8割以上の住戸に名前が記入された。	29
2016/02/13	伊丹市Jマンション LODE	マンション集会所	1月30日の学校区全体でのLODEの取組に刺激され、伊丹駅前のマンション群の一つで、住民自らによるLODEのWSが実施された。	17
2016/03/05	愛知県公明党本部 育成LODE	名古屋市千種区 愛知県公明党本部	愛知県議会で公明党よりLODEの推進が県に提案された。 これを受けて公明党の国会・県議会・市議会議員たちが、LODEを学びたいと研修会を実施した。 図上WSには仮想マンション図を使用した。	40
2016/03/12	京都府精華町社協 子ども防災イベント	京都府精華町 むくのきセンター2階	全町内の子どもを対象に「自助力テスト」、「図上で自宅を見つける」、「防災紙芝居」、「ほのぼの灯制作」の4つのコーナーを巡回するタイプの防災イベントを開催した。	子ども 68 大人 39
2016/03/18	鈴鹿市災害ボランティア等 育成LODE	鈴鹿市社会福祉 協議会大会議室	鈴鹿市内の災害ボランティアを対象に、仮想マンション図面を用いたLODEのWSを実施した。	14
2016/03/27	大阪市福祉・まちづくり市民団体研修会	大阪市民交流センター東淀川	『曼荼羅チャート』の試作版をもとに意見交換を行った。市民活動メンバーからは非常に	10

			好評であった。	
2016/06/03	鈴鹿市災害ボランティア等 育成LODE 1回目	鈴鹿市社会福祉 協議会大会議室	仮想マンション図面を用いたLODE図上WSを実施した。参加者からは「障害」に関してもっと学びたいという手応えがあった。	43
2016/08/06	鈴鹿市災害ボランティア等 育成LODE 2回目	三重県消防学校	「子ども」に関する理解を深めるための研修会を開催した。	11
2017/09/17	伊丹市H地区 K自治会LODE	伊丹市くすのき 会館	湊町（中高層混在地区）のLODEを実際の図面で行なった。ファシリテーターは地元側が担当した。	30
2016/11/13	鈴鹿市 災害ボランティア等 育成LODE 3回目	鈴鹿市療育センター	障害についての学びと理解を深める目的で、療育センターの所長を講師に研修会を実施した。参加者の認識は確実に深まったという手応えがあった。	17
2016/11/23	神戸市灘区大規模マンション 防災訓練	マンション集会 施設並びに中庭等	昨年とほぼ同じような内容での防災訓練を実施した。企画や運営は地元側が行なった。寒く荒れた気候であったが昨年以上の参加者があった。	234
2016/12/10	広島市安佐北区L寺 学童教室 LODE 1回目	広島市安佐北区 L寺	画像を利用した防災クイズや高齢者にプレゼントする「防災三種の神器箱」制作を行なった。	子ども 15 大人 5
2017/01/14	神戸市灘区大規模マンション 震災祈念イベント	マンション集会 施設並びに中庭等	昨年度に引き続き、震災の祈念に、灯りの制作WSと灯りの屋外展示イベントを行なった。	子ども 18 大人 15
2017/01/12	伊丹市H小学校4年生：子どもLODE	伊丹市H小学校 ホール	映像や画像を使って過去の災害を知ってもらい、地図で学校と自宅、避難路等を確認した。クイズとインタビュー	子ども 120

			形式が好評だった。 ファシリテーターは地元側が行なった。	
2017/01/22	伊丹市Eマンション： 28年度LODE	マンション集会所	マンションのLODEを実施したが、ほとんどの住戸の居住者名を記載できた。 要援護者支援の内容について班別検討を初めて実施できた。	35
2017/01/28	西成区社協災害ボランティア対象LODE	大阪市西成区社会福祉協議会はぎの里別館	西成区各地区の災害ボランティア対象に仮想のマンション図を使ったLODEのWSを実施した。	30
2017/02/11	広島市安佐北区L寺学童教室 子どもLODE2回目	広島市安佐北区L寺	1回目に引き続き画像を利用した防災クイズと、地図による図上WSを行なった。	子ども 15 大人 5
2017/02/26	大阪市福祉・まちづくり市民団体 ：育成LODE	ナーシングアート大阪	社協職員や民生委員等を対象にLODEの仮想WSと曼荼羅チャート図のWSを実施した。	40
2017/03/11	鳥羽市M地区自主防災会 子どもLODE1回目	M地区コミュニティセンター	高齢者宅を訪問し、避難場所などを質問して歩いた。	子ども 14 大人 5
2017/03/11	鳥羽市M地区自主防災会 LODE1回目	M地区コミュニティセンター	集落の要援護者、避難場所などを図上作業で拾い出した。	100
2017/07/15	安城市Pマンション 新安城LODE	マンション集会施設	マンション側は継続したいという声が大半。 市は他地区でも推進したいとの反応。	26
2017/08/19	鳥羽市M地区自主防災会 子どもLODE2回目	M地区コミュニティセンター	無線機を使いまち歩きで危険箇所の確認などを行った。	子ども 12 大人 10
2017/08/19	鳥羽市M地区自主防災会 LODE2回目	M地区コミュニティセンター	自然災害だけでなく平時の危機について意識を高める内容とした。	45

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの
なし

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

LODE JAPAN & LODESTAR 設立ホームページ、
URL : <https://lodestar-jp.jimdo.com>、立ち上げ年月：2017年3月

5-1-5. 学会以外 (5-3. 参照) のシンポジウムなどでの招へい講演 など

- (1) RISTEX 第4回公開シンポジウム、コミュニティレジリエンスを高める社会技術～防災・減災を目指す地域の「参画」と「我がこと意識」～、2016年3月3日、東京大学福武ホール

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き (1 件)

- (1) 倉原宗孝、防災と福祉を結ぶ市民まちづくり学習としての「LODE」の提起と考察、掲載誌 (日本建築学会技術報告集, 第22巻、第51号, pp.761-766, 2016.6.)

5-2-2. 査読なし (0 件)

- (1) 著者、発表論文名、掲載誌 (誌名、巻、号、発行年、公開 URL (あれば))

5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

5-3-1. 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

- (1) 発表者 (所属)、タイトル、学会名、場所、年月日

5-3-2. 口頭発表 (国内会議 3 件、国際会議 0 件)

- (1) 倉原宗孝 (岩手県立大学)、防災と福祉を結んだ市民参加の安全安心まちづくりに関する考察—『LODE』という手法と思想の実践から—、日本建築学会大会 (関東)、東海大学、2015年9月5日
- (2) 野中里菜・倉原宗孝 (岩手県立大学)、復興まちづくりにおける女性の視点に関する考察—東日本大震災からの復旧復興期における「復興 girls」の活動を通じて—、日本建築学会大会 (関東)、東海大学、2015年9月6日
- (3) 倉原宗孝 (岩手県立大学)、市民まちづくりにおける<逃げる>視座からの試論—防災と福祉を結ぶ市民参加学習『LODE』の実践から—、日本建築学会大会 (中国)、広島工業大学、2017年8月31日

5-3-3. ポスター発表 (国内会議 件、国際会議 件)

- (1) 発表者 (所属)、タイトル、学会名、場所、年月日

5-4. 新聞報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞報道・投稿

- (1) 毎日新聞2014年11月7日全国版社会面:「凶上訓練 絆も強く」、「マンション 災害弱者守る」という見出しで、1/3ページ程度のボリュームの掲載となった。当プロジェクトチームの研究開発協力・連携団体『生きる力を育む研究会』とその共同代表で

もある南部美智代（災害ボランティアネットワーク鈴鹿理事長）が取材を受けた。

- (2) 中日新聞 2016年3月3日 中日新聞愛知県版：県議会一般質問で、公明党岡県議から県の取り組みに LODE を入れるように質問があり、防災局長からは「県の防災講座で紹介したい」、知事からは「県の訓練に取り入れる」と答弁されたことが掲載された。
- (3) 2016年6月8日 地方版：6月3日に鈴鹿市内で開催した LODE 研修会の様子の記事が掲載された。
- (4) 毎日新聞 2017年2月12日 全国版：熊本地震被災地に贈呈する『シェル難』に関する記事が掲載された。

5-4-2. 受賞

なし

5-4-3. その他

- (1) 平成29年9月、愛知県防災局から「LODE 研修会」の実施に関して、その講師受諾可否や、所要経費などに関して問い合わせがあった。これは 5-4-1 (2) の新聞報道の件に関連する動きである。

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（ 0 件）

- (1) 発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号

5-5-2. 海外出願（ 0 件）

- (1) 発明の名称、発明者、出願人、出願日、出願番号

6. その他（任意）